浦添市文化財調査報告書第９集

浦添城跡発掘調査報告書

１９８５年３月

沖縄県浦添市教育委員会

序

浦添城は首里王府以前の居城として栄えたと云われていることもありこれまで学術的な解明が待ち望まれていました。

そうしたなか，昭和57年度から昭和59年度の３ヶ年度にわたり国・県の補助と指導の下に範囲確認調査及び遺構確認調査を無事終えることができました。

発掘調査は昭和57年度の第１次調査に範囲確認，昭和58年度の第２次調査には遺構保存状況の確認，昭和59年度の第３次調査は第１・２次調査の補足調査及び発掘報告といった実施計画のもとに市民の発掘参加，約2,500人を越す見学者と本城跡に対する関心の高まりを示しました。

今回の調査を契機に浦添城跡が浦添市民のよりどころと成ることを願うとともに，本報告が今後の保存活用に役立てば幸いです。

末筆になりましたが，本報告書の作成にあたり御指導御鞭撻を賜りました大川清氏，森郁夫氏，高橋章氏，川島由次氏，故佐野一氏，知念盛俊氏の諸先生ならびに発掘調査・報告書作成を担当して頂きました県教育庁文化課の当真嗣一主任専門員，上原静専門員，岸本義彦専門員，関係者各位の方々に厚くお礼申しあげます。

尚，本市教育委員会では今回の発掘調査を踏まえ浦添城跡の史跡指定・環境整備事業への移行に向けて努力していく所存であります。今後とも諸先生・関係者各位の御指導御鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

昭和60年３月

浦添市教育委員会

教育長　**西　原　正　次**

例　　言

1．本報告書は，昭和57年度6月から9月の第1次調査，昭和58年度6月から9月の第2次調査および昭和59年度6・7月の第3次調査をまとめた報告である。

2．本遺跡の発掘調査は文化庁の補助（80%）と，沖縄県の補助（10%）により実施したものである。

3．調査は浦添市教育委員会が調査主体となり，沖縄県教育庁文化課埋蔵文化財の専門員が担当して行った。

4．瓦については，大川清氏（国士館大学教授），森郁夫氏（平城宮跡発掘調査研究所考古第二調査室長）より御教示を賜わった。

5．瓦の図面作成方法，分類方法（観察方法）については，高橋章氏（九州歴史資料館）と小渡清孝氏に御指導を頂いた。

6．獣類骨については川島由次氏（琉球大学農学部畜産学科助教授）より玉稿を賜わった。

7．貝類の同定は，知念盛俊氏（那覇高校教諭）より御協力を賜わった。

8．人骨の同定は故佐野一氏（琉球大学医学部保健学科教授）の御協力を賜わった。

9．古銭は紙面のつごうから写真・拓影とも省略した。

目　　次

第Ⅰ章　はじめに…… 1
第１節　調査に至る経緯…… 1
第２節　調査の経過…… 1
第３節　発堀調査及び整理の体制…… 1

第Ⅱ章　位置と環境…… 7
第１節　位置と環境…… 7
第２節　歴史的展開…… 7

第Ⅲ章　調査の成果 …… 10
１．種類別の分類 …… 10
２．第一次調査 …… 13
３．第二次調査 …… 91
４．第三次調査…… 106
５．その他の遺物…… 120

第Ⅳ章　まとめ…… 158

第Ⅰ章　はじめに

第1節　調査に至る経緯

浦添城跡は戦前より多くの研究者，諸関係機関等によって表面踏査や一部の試掘調査が行なわれ広く学界にも知られた城跡であるが，去る大戦で地形的変更を著しくこうむったのち，採石工事，墓地造成工事，公園整備事業等によって幾度となく部分的な破壊を受け今日にいたっている。この様な状況の下で，近年当城跡を含む地域の都市公園事業が計画されるにいたって，城跡の破壊をこれ以上増幅させないためのてだてが必要になり，浦添市教育委員会は城跡の範囲，遺構及び遺物等の保存状態を確認し，行政的保存処置を講ずる目的で発掘調査を実施することにした。

本城跡は東西380m，南北60～80mの規模の大きい城跡であるため，調査地域の区分から継続事業として計画され，昭和57年度には第一次調査，昭和58年度に第二次調査，昭和59年度には第三次調査が実施された。

第一次調査は主として城郭の規模，城壁の広がり等の外郭を確認することが主たる目的であり，第二次調査はそれを受けて城郭内の建物遺構等の状況を調べるために行なわれた。さらに第三次調査は前回の調査の補足調査として実施された。

第2節　調査の経過

発掘調査は昭和57年6月から9月（第1次），昭和58年6月から9月（第2次），昭和59年6月，7月（第3次）までの通算約9ヶ月間行われ，調査の前半は遺跡の範囲確認，後半は遺構検出を主として行なった。

調査地区は第3図に示す様に発掘区では最も東側に位置するコーグスク地区，前記のコーグスク地区と後述の地区の間に鉄滓を多量に出土するカンジャー地区とＳＦ０１地区，城内の中央に位置する広場からその南側地域（現展望台の西側広場から遊歩道をこえた南側部分），城内の西側に広がる松林内（現愛国知祖之塔の東側一帯），城内中央広場より南方向の一段低くなった縁端部地域（一次の発掘調査で城壁及び埋葬人骨が検出された東側一帯）の六つの区からなる。

遺構は各区で検出されたが，当初よりその遺構の一部が地上に露出しているものもあり全体にその表土の被覆はあさかった。なお，露出した遺構下の状況を確認するため，地点を選び試掘した結果，下層にも包含層が広がることが確かめられた。しかし今回検出された遺構群は主として上層に属するものであることをあらかじめおことわりしておきたい。

なお，発掘の総面積は第1次800㎡，第2次700㎡，第3次400㎡である。

第3節　発掘調査及び整理の体制

調査主体　　浦添市教育委員会

事務担当　　前津政廣（浦添市教育委員会文化財係）第1・2次

事務担当　　下地安広（浦添市教育委員会文化財係）第３次
調査担当　　当真嗣一（沖縄県教育庁文化課主任専門員）第１・２次
〃　　岸本義彦（沖縄県教育庁文化課専門員）第１次
〃　　上原　静（　　〃　　）第２・３次
〃　　下地安広（浦添市教育委員会文化財係）第３次
調査補助員　前津政廣（浦添市教育委員会文化財係）第３次
〃　　下地安広（浦添市教育委員会文化課臨時職員）第１・２次
（現・浦添市教育委員会文化課・文化財係）
〃　　宮里博志（浦添市教育委員会臨時職員）第３次

発掘作業員

第１次調査　宮城茂一，西原安一，宮里　亀，宮里正三郎，宮城ミネ，諸見里ユキ
宮城トシ，新城シズ，翁長シズエ，粟国不二子，宮城シズ，与那城チヨ
（浦添市民）

第２次調査　宮城茂一，又吉武盛，石川信夫，宮里正三郎，銘苅三郎，諸見里ユキ
宮城トミ，新城シズ，翁長シズエ，宮城トミ子，与那城チヨ（浦添市民）

第３次調査　翁長シズエ，宮城トミ子，宮城ミネ，石川千代，石川ハル，石川ヨシ
富本祐仕，棚原安良（浦添市民）

現場実測作業員

第１次調査　比嘉春美，大城明子，伊波寿賀子，玉城朝健，島袋　洋，松川　章（沖縄県教育委員会臨時職員）与那城真栄，当間秀雄，金城豊二，岸本明，名護朝彦，棚原盛次（以上浦添市教育委員会文化課職員）

第２次調査　比喜典子，島袋千賀子，島尻秀美，湧川真由美，住友千恵子（以上浦添市民）

整理作業員

第１次調査　砂川和美，幸地純子

第２次調査　比嘉典子，湧川真由美，島尻秀美，住友千恵子，親川清美，嘉数喜久子
与那原めぐみ（以上浦添市民）

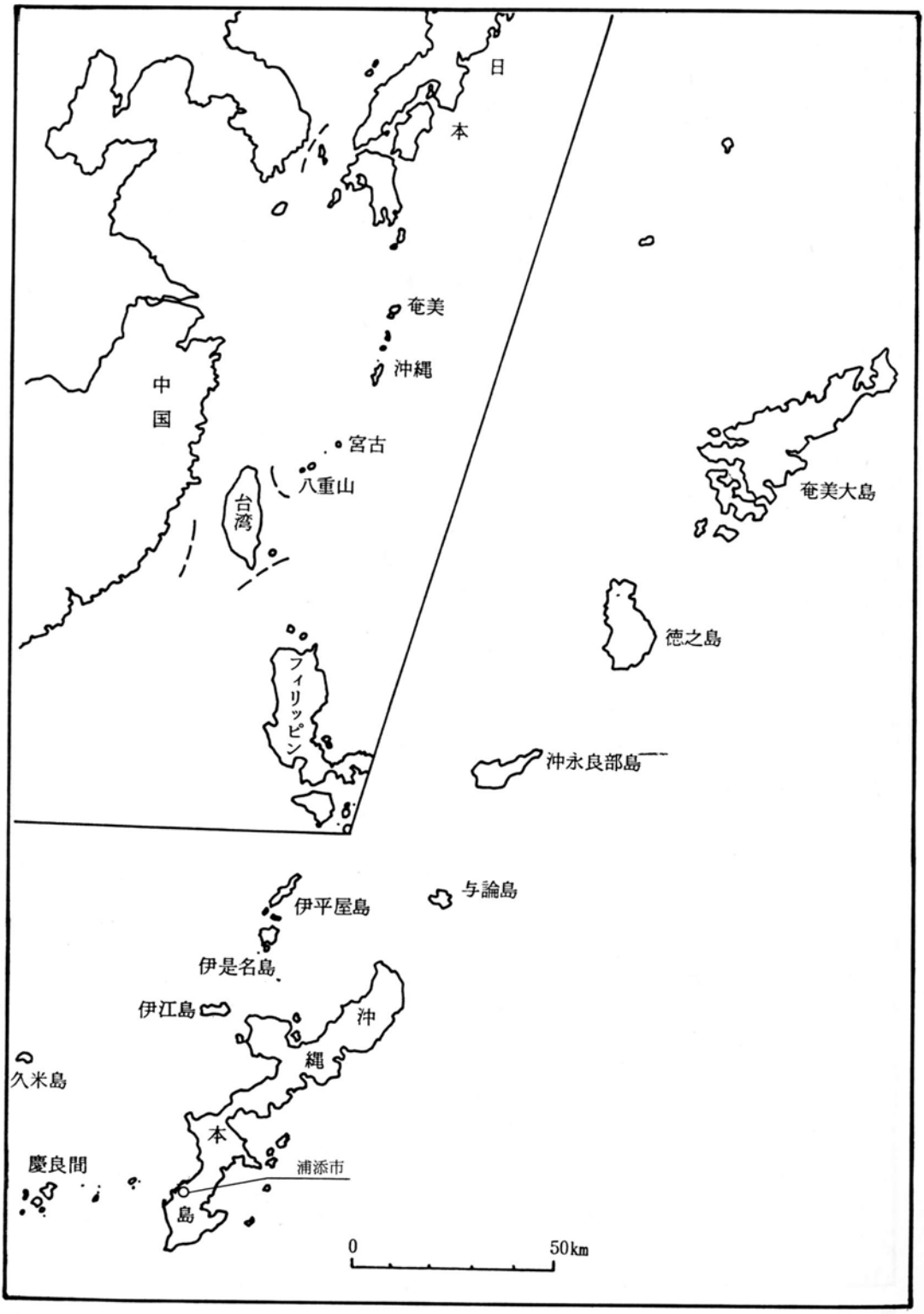
第３次調査　比嘉典子，伊良波真由美，宮里博志，比嘉まゆみ，下地常子，上江洲君代
武田えり子（以上浦添市民）

執筆担当

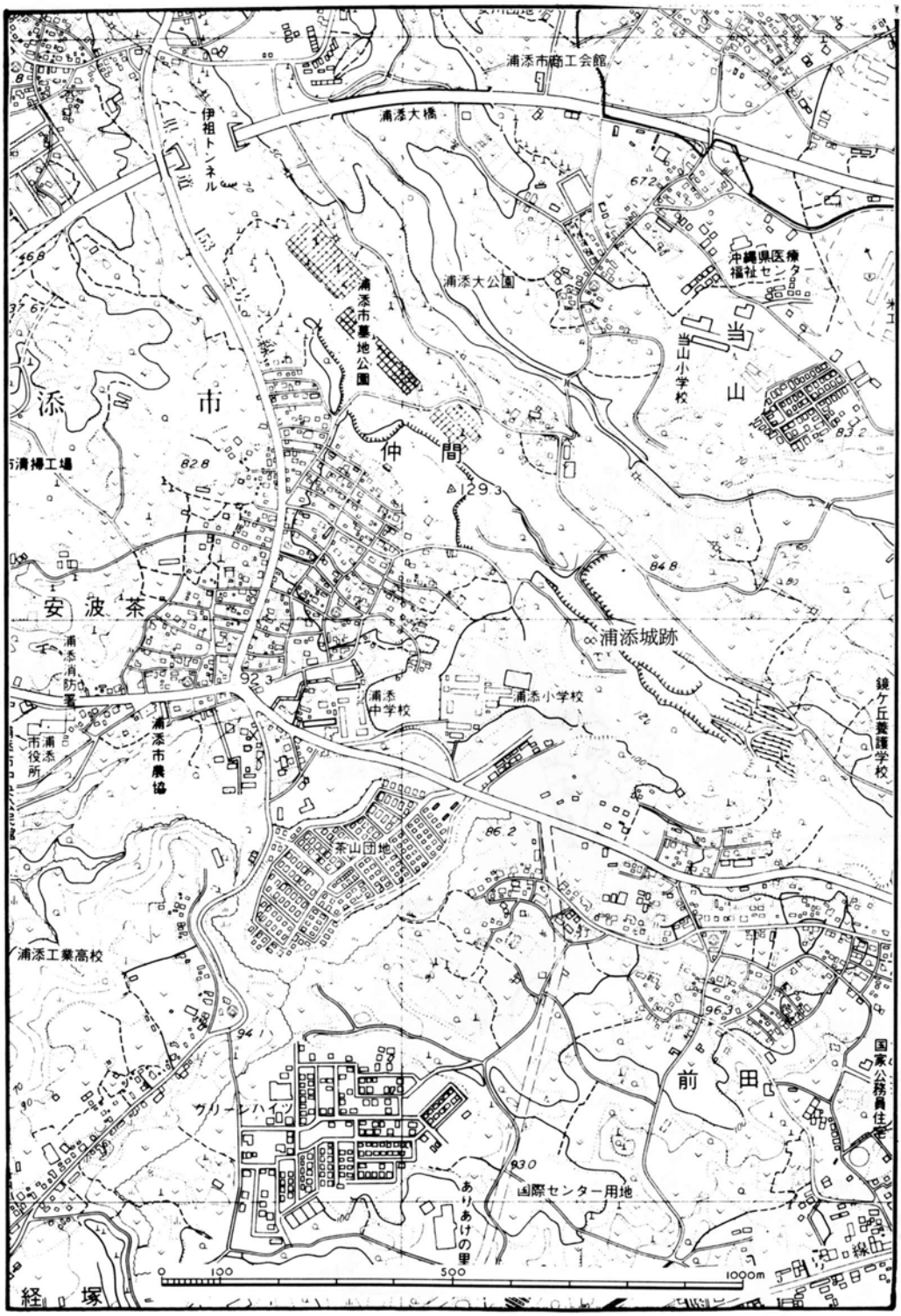
本報告書の執筆は下記のとおり分担してあり，編集は下地が行った。

当真嗣一　　まとめ
上原　静　　第Ⅲ章の各地区遺構
前津政廣　　第Ⅰ章第１節・第２節　　第Ⅱ章第１節・第２節
下地安広　　第Ⅰ章第３節、第Ⅲ章（鉄製・青銅製品・骨製品を除く）各地区の遺物
照屋　孝　　鉄製品及び骨製品，青銅品

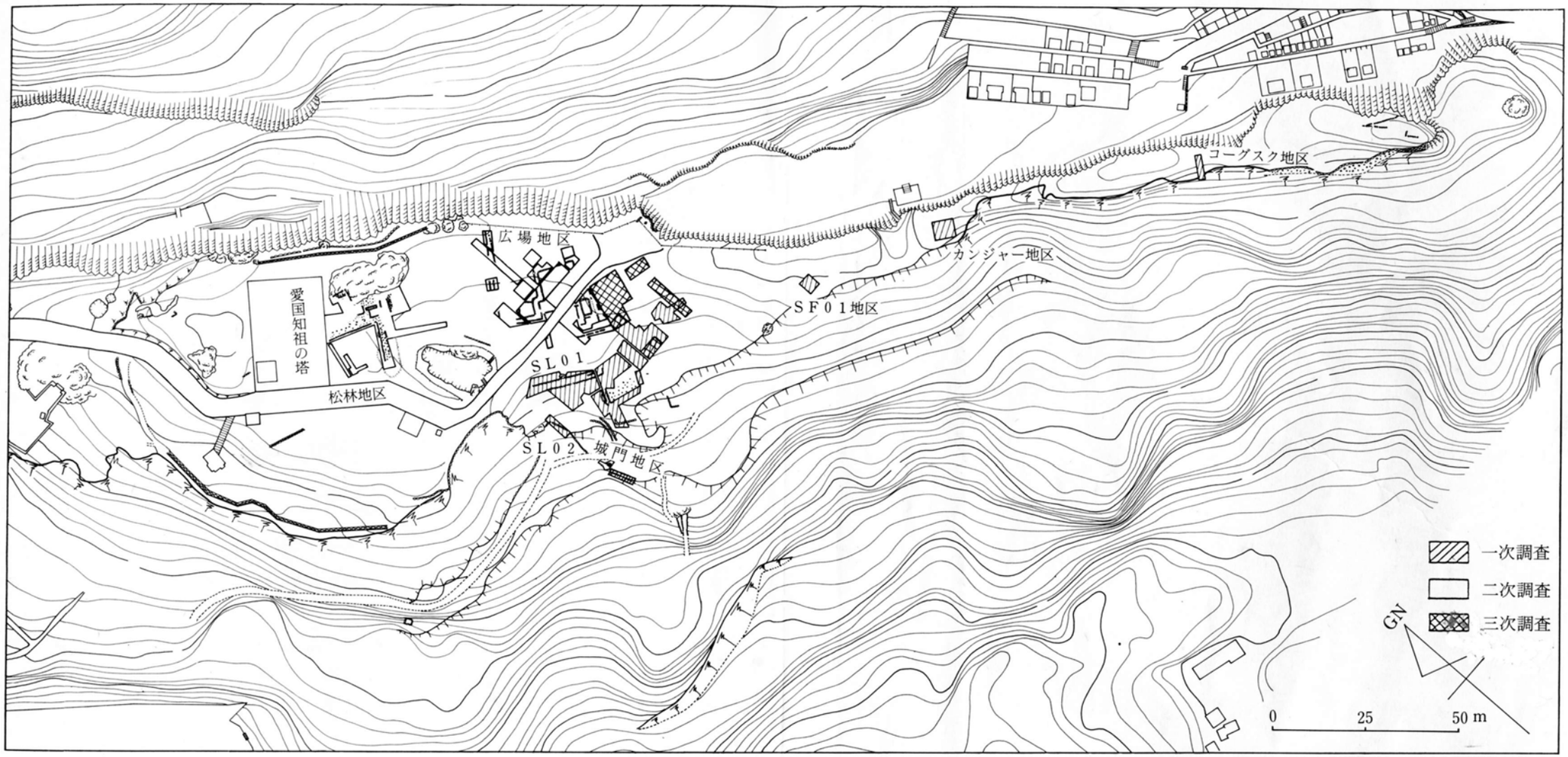
写真撮影は長嶺均，下地が担当した。


日
本
奄美
沖縄
中
国
宮古
八重山
台
湾
フィリッピン
奄美大島
徳之島
沖永良部島
与論島
伊平屋島
伊是名島
伊江島
沖
縄
久米島
本
慶良間
浦添市
島
0
50km

第１図　浦添市の位置



第２図　浦添市城跡の位置



第3図　発掘調査区とグリッド設定位置図

第II章　位置と環境

第1節　位置と環境

浦添城跡は沖縄本島中部南，浦添市字仲間の小字城原にある。市の中央よりやや北側，字仲間から牧港を通る琉球石灰岩の丘陵が延びる東側の先端部に位置する。

標高130～140mを測る要害の地に築かれた城である。本城が立地するこの石灰岩の丘陵は，南北に1.7kmと細長く発達しており，北側が断層の発達により断崖面を形成しているのに対し，南側は比較的ゆるやかな斜面をなしている。

丘陵の北側崖下には，英祖王（1260～1299年）と尚寧王（1589～1620年）が葬られているというようどれがあり，西側には仲間部落，南側には前田部落が展開している。東側には為朝岩（ワカレ瀬），城内には大城，小城(ナンジャムイ，クガニムイ)，浦添城内の殿，城跡の近くには「テーラガー」，「アザナガー」，「カカンガー」，「カーラウカー」，「ユムチガー」等の井泉が点在している。

又，丘陵の西側，本城より約1.5kmには英祖王の父祖代々の居城といわれている伊祖グスクが立地している。

グスクからの眺望はよく，眼下に貿易港として栄えた牧港を，北の方には広く中部一円を望み，南側には慶良間諸島や首里・那覇をはじめ，南部のグスクが数多く立地する丘陵地帯が展望できる景勝地となっている。

第2節　歴史的展開

浦添城跡は，舜天王（浦添按司1187～1237年）の居城として記されているが確証はない。記録によれば，舜天王統に続く英祖王統や察度王統はいずれも浦添の出であるとされており，これらの三王統のうち，いずれかの時代に築城されたことはほぼ間違いない。

浦添城は，首里遷都とともに廃墟と化していくが，その後浦添城のことが記録ではっきりするのは16世紀に入ってからである。第二尚氏尚真王の長子尚維衡が父王の不興をかい，浦添城に遷されている。その時，城郭は荒廃し住居に耐えられなかったので，那覇の我那覇家の邸宅が移建されたという。

又，「喜安日記」によれば慶長14年（1609年）島津侵攻の際，城下の龍福寺と浦添城が戦火にあったと記録されている。その時炎上した建物がそれと考えられる。

慶長14年（1609年）に島津にとらわれの身となった国王尚寧は二年後帰国するが，これより6年後の万暦45年（1617年）の冬，浦添城を改修し隠居したと『宣姓松嶺親雲上家譜』は伝えている。

浦添城に関するその後の記録は無く現在に至っているが，古老の話によると，城内にはごく近い頃まで番所が存在していたという。

第1表　出　土　一　覧

地区及グリット＼遺物		青磁	白磁	染付	褐釉陶器	黒釉陶器	陶器	陶質土器	瓦質土器	土器	象嵌青磁	緑釉陶器	三彩陶器
第一次発掘調査	殿地区	222	20	6	415	40	1	9	2	761	1		
	SH01試掘	800	52	8	877	50	8	9	6	1,271	1		
	SG 01	589	38	43	2 679	54	13	32	3	1,411	1	1	
	SX 03	20	3	2	20	1		8		497			
	SL 01	237	14	12	392	25	5	11	5	258	3		
	SL 02	176	22	8	326	16	5	34	1	1,865	1		
	ガンジャー地区	452	21	3	70	21	12	12		241			
	SF 01	1,026	54	13	422	37	5	8	1	633			
	コーグスク	570	42		258	45	8	24	6	219			
	北側崖下	12	8	12	2	1		1		5			
	Jh地区	349	49	2	271	9	4	42	2	3,384			
第二次発掘調査	広場地区	578	29	45	2,802	111	35	7	1	412	2		
	溜め井地区	104	4	19	555	6	4	3	2	52	1		
	石垣地区	95	9	5	111	7		3		109			
	森林地区	481	53	26	442	20	50	11	5	244			
第三次発掘調査	溜め井東地区	731	50	114	1,314	100	11	8	1	219	1	3	1
	JIVi10j1	150	13	7	24	1	5	1		147			
	城門地区	96	9	1	274	4	1			230			
表採		53	4	7	22	21	1	20		84	1		
計		6,741	494	333	11,276	569	168	243	35	12,042	12	4	1

※注　銅滓については，銅特有の青サビの認められる固りの為銅滓とした。しかし、まだ専門家の

鉄絵	サウンカローク	赤絵	翡翠釉	瑠璃釉	古銭	鉄製品	青銅製品	鉄滓	銅滓	石製品	瓦質製品	土製品	ガン首	円形状製品	玉	貝製品	骨製品	計
	1			1	14	20		1		1				7				1,522
					62	72	10	8		2			1	9				3,246
					11	149	4	8		2	1			16	2	1		5,058
						2				1				2				556
					2	29	1							7				1,001
					3	6				1		1		3				2,468
				2	2	59		757			1		9					1,662
					5	81	3	8		4	2			3	1		1	2,307
					3	19	4			1	1	1					2	1,203
			1		1					1	1	1						46
					2	19	2	2		2	1	1					9	4,150
				1	30	112	3	18					2	11	2			4,201
				3	7	113		6		1		1		2				882
		1		1		1								4	1			348
1				1	1	13	2	2		1				4				1,357
	2			4	30	4,053	12	5	2	2				7		1	2	6,673
1	1							3		1		1					1	356
					11		1											627
1					2	1	3	1		2				4				227
3	4	1	1	13	186	4,749	45	819	2	22	7	6	12	79	6	2	15	37,890

同定を得てないので今後名称が変わることもある。

第Ⅲ章　調査の成果

発掘調査は前の章で略記したよう3ケ年に渡って実施し，発掘調査の概報として第一次調査概報『今姿を見せる古琉球の浦添城跡』（註1），『浦添城跡第二次調査概報』（註2），で概略を紹介した。そこで，本報告では紙面の都合もあって未だ調査の報告が不十分な第一次発掘調査と第三次発掘調査を中心に第一・二次概報に補足するかたちで成果をまとめることにする。

成果の報告については発掘調査区が広範囲で各地区の層の状況が異なることから各地区及び遺構に遺物を対応させる方法を取ることにした。しかし，対応させる遺物は各地区，遺構の年代を推察する上で欠くことのできない青磁，白磁，染付，黒釉陶器，褐釉陶器，瓦質土器，陶質土器，土器，古銭を選び，他の遺物は種類別にまとめて略記し検出地区を付した。各地区・遺構別の出土一覧は第一表に示した。

尚，各地区・各遺構に対応させた遺物の中で染付，陶質土器を除く資料は分類を試み後述した。以下，各地区・遺構別に概述するが，各地区で扱う陶磁器及び土器は口縁部と底部を対象にしたため，第1表と各地区の個数に誤差があるが，この誤差は胴部破片になるものである。

1．種類別の分類

(1) 青　磁

碗

口縁部

Ⅰ．蓮弁文を外体部に配する直口口縁のもの，この中には器形が㋐逆ハの字状に開くものと㋑底部から外湾して口縁部はほぼ垂直になるものがある。文様は前者㋐に㋑鎬蓮弁文と㋺又状の施文具で描いたと思われる蓮弁文が認められる。

Ⅱ．蓮弁文を外体部に配し，口縁端部が外反するもの。

Ⅲ．外体部は無文で口縁部を僅かに肥厚させるもの。口縁部は小さい玉縁状を呈する。

Ⅳ．外体部無文で口縁端部分が外反するもの，釉を厚く施釉するものを㋐，一般的なものを㋑とした。

Ⅴ．その他のもの

底　部

Ⅰ．高台断面が方形状を呈するもので，釉は高台外面まで施釉する。中には畳付まで釉がかかるものもあるが，この場合には掻き取る。体部は高台部分から横に開くように外湾する。内面に圏線，内底には印花文を配するものが認められる。

Ⅱ．高台を竹節状にするが雑なもので，高台から外側へ開くように外湾する。釉は高台外側まで施釉する。内底には圏線・印花文が認められるものがある。

Ⅲ．バランスの良い竹節高台をつくるもので，体部は高台から外湾して立ち上がる。釉は高台の内側まで施釉するものも認められる。内底部には印花文を配するものもある。

Ⅳ．釉を高台の内面根元まで厚く施釉するもので，高台畳付部分は円味を呈する。外底部は

輪状の露胎にする。内底には圏線と草花文を配するものが認められる。中には，内体部に浮文を配するものや内底を露胎にするものも認められた。

V．前述のいづれにも属さないものをここにまとめた。

盤

口縁部

I．口縁部を直角状に折り曲げるもので，内体部の文様から3つに細分した。ⓐ蓮弁文1本の幅が3～5㎜前後の線彫りのもので3～5本を単位とする。ⓑ蓮弁文1本の幅が1cm前後を測るもの。ⓒ蓮弁文1本の幅が1.5～2cmの箆彫りのもの。

II．口縁部を折り曲げて鍔状にするもので，縁を稜花状にするものⓐとそうでないものⓑがある。

III．口縁部が直口のもので，端部が波状を呈するものⓐとそうでないⓑがある。

底　部

I．碁笥底状のもの。

II．低い高台をつくるもので，高台の幅が約1cm前後のもの。

III．前者IIとほぼ同じ高さの高台をつくるが，高台の幅が半分ほどのもの。

皿

Iⓐ．口折タイプのもので，体部には2本線の蓮弁文を描く。釉は薄く施釉する。

Iⓑ．口折部分の幅が前者ⓐよりやや狭く，釉をやや厚く施釉するもの。文様は外面体部に箆彫りの蓮弁文を配する。蓮弁にはいくつかの種類が認められる。

II．直口口縁で口縁が玉縁状に小さく肥厚するものⓐと端部が僅かに外反するⓑがある。高台は断面方形状のものと角を取るものが認められる。釉は前者の場合高台の内側まで，後者の場合は高台外側まで施釉するものが多いように思われる。

III．前記IIを全体に小さくしたもので，内面には丸彫りの蓮弁文を配する。

IV．腰から口縁が反りかえるように外反するもので，口縁を花弁状にするⓐと平口縁ⓑがある。文様も有文と無文がある。

V．底部から直線的に立ち上がるもので，内底にはくし描き文を配する。一般に同安窯系皿と呼ばれているものである。

VI．その他のもの。

(2) 白　磁

碗

I．玉縁口縁のもので，外底部は露胎,高台は幅広く成形する。

II．口縁外面に凹面をつくり端部が外反するもので，内底に花文を配し外底部は露胎にする。

III．前者IIと底部の特徴は類似するが，口縁部を舌状に成形するものである。

IV．器壁が薄く丁寧なつくりのもので，口縁端部は外反する。

皿

Ⅰ．口禿皿と一般的に呼ばれるもので，底部から直線的に立ち上がる。

Ⅱ．腰部分で折曲し口縁が僅かに外反するもので，外底部を露胎，内底部は輪状の露胎にする。

Ⅲ．腰部から僅かに外湾して口縁が立ち上がり端部が僅かに外反する。

Ⅳ．体部下方から直線的に開く小皿で，高台を4・5箇所孤状に削る。

Ⅴ．平底から直線的に開くもので，釉は主に内面に施釉する。

(3) 黒釉陶器

Ⅰ．底部から口縁部にかけてほぼ直線的に開く器形が想定されるもので，頸部で二重に折曲し断面S字状を呈する。

Ⅱ．底部からほぼ直線的に開き，肩部で折曲し端反状の口縁になるもの。

Ⅲ．前記Ⅰが張びた状態の口縁形態を呈するもので，底部からほぼ直線的に開く。

底　部

底部は内底の釉が厚いものⅠとそうでないⅡに大別される。

(4) 褐釉陶器

Ⅰ．口縁断面が概ね方形状を呈し肩が張る器形が推察されるものである。胴部には輪積みの痕と思われる幾つかの稜が走る。釉は黒褐色及び茶褐色に発色する。本タイプはやや大ぶりのものが多いように思える。

Ⅱ．口縁部を小さい鍔状にするもので，口縁から胴上部にかけて次第に開く頸部，胴上部から底部にかけすぼまる器形が想定される。頸部に耳を貼り付けする。釉はオリーブ褐色を呈するが，口唇部は露胎にする。

Ⅲ．口縁部が断面直角三角形状に肥厚するもので，器形は前記Ⅱに近似すると思われる。本タイプには全体に一まわり小さくなる小型のタイプもある。

Ⅳ．口縁部がカマボコ状に肥厚するもので，釉はチョコレート色に発色したものが多い。器形は底部から僅かに内湾して胴上部が張り，頸部で締って口縁部が僅かに外反する。本タイプも頸部に耳を貼付けする。

Ⅴ．口縁が著しく外反し，端部を上方につまみ上げるもの。大形のものと小形のものがある。

(5) 瓦質土器

瓦質土器も完形品は得られなかったが図上復元可能なもの1点（第34図1）と口縁部破片が主に得られた。口縁部及び胴部の文様から下記のとおり細分した。

Ⅰ．口縁部外面に菊花のスタンプ文を配するもの。浅鉢形が想定される。

Ⅱ．口縁部内面が凸状を呈し，口唇部を幅広く成形するもの。胴部には縄目状の横走凸帯やボタン状のスタンプ文を配する。鉢形に近い器形が推察される。

Ⅲ．内面に縦走する6・7条の凹線が認められるもので擂鉢が想定される。

(6) 土　器

土器は口縁の形態から壺3種，鉢2種に大別された。壺形としたものは器形が楕円状の平底と思われるものである。本城跡で器形を復元できるものは得られないが，我謝遺跡（註3）・久米島下地原洞穴遺跡（註4）出土の壺形が参考になると考える。前記,壺形は口縁部の変化から3つに別けた。

壺形

Ⅰ．頸を著しく折り曲げるもので口縁部を垂直あるいは「く」の字状にする。このタイプの場合，後述の2者に比べ丁寧な作りが多い。

Ⅱ．口縁部を前記Ⅰ同様「く」の字状に折り曲げるもので，頸部が短いものである。

Ⅲ．前記Ⅰ・Ⅱを頸部で切ったような器形のもの。

鉢形

器形は低い樽状を呈するもので底部は平底になると思われるものである。口縁の形から下記のとおり細分した。本タイプの典型的な資料は佐敷グスク（註5）などに見られる。

口縁部

Ⅰ．口縁を「く」の字状に折り曲げるもの。

Ⅱ．口縁がゆるく内傾するもので，口唇が舌状を呈するⓐと口唇部を平坦に成形するⓑ，口縁部の内側を斜位に成形するⓒに別けられた。

尚，ⓑには瘤を貼り付けするものも認められた。

Ⅲ．口縁部はⅡに近似し，器形が直線的に開くものである。作りは丁寧である。あるいは碗形の可能性も考えられる。

底　部

Ⅰ．底部が僅かにくびれるもの。

Ⅱ．底部から角度をもって立ち上がるもので，底の縁部分に角をつくる。器厚は底の部分と胴部でほぼ同じである。

Ⅲ．底部の立ち上がりがやや開き気味のもので，底の縁部は円味を呈するものが多い。器厚は胴下部で厚く，底の部分でやや薄いものが多い。

Ⅳ．平底で外湾して立ち上がるもの。

Ⅴ．その他のもの

以下，一次調査から順に略記する。

2.　第一次調査

一次調査は，ほぼ東西方向に位置する城郭の中央部南側地域と，それより以東の地域が対象になった。調査の方法は，対象地域が広いため地形，遺物の散布状況，及び伝承等を勘案して6つのカ所に分けてグリットを設定して実施した。その結果，多様の遺構，遺物が検出され，説明の

便宜上，地区名を付すことにした。南側から殿地区，南城門地区，コーグスク地区，ＳＬ０３地区，カンジャー地区，北側崖下地区がある。以下各地区ごとに検出された種々の遺構を記号化し，それぞれ遺構に伴う遺物を分け説明することにする。

A　殿地区

城内のほぼ中央南側地域で，中央広場（展望台広場地区）より，一段低いレベルにあるフラットな面を呈するところである。通称，殿（トウン）（拝所）と呼ばれ，地域住民の年中行事に使われている。

発掘調査の結果，当地区は層厚はいずれも薄いが４枚の層が確認され，柱穴，基壇様の石列二条（ＳＴ０１，ＳＴ０２）が検出された（第４図）。

＜層＞

第Ｉ層　ニービ土（砂岩風化土）の客土である。層厚が８～16cmを測るが，北側で傾斜し南側へ移行するにつれ厚く水平に堆積している。

第II層　茶褐色混礫土層。層中に２～３cm大の石灰岩礫を多く混入した層で，北側の傾斜面側が約30cmと最も厚く，南側へ漸次薄くなりその末端部で６cmを測る。なお，北側面では当該層下に石灰岩塊層が存在する。これら岩塊には，殿地区南へ広がらぬよう，縁石のごとき石列（ＳＴ０１，S･T０２）が南側を向け存在する。当遺構は殿地区の北側に発展しているため，三次調査の「溜め井戸東地区」と重複し，詳細については，後項の「溜め井戸東地区」で記した。

第III層　赤褐色土層，本層は調査区の東側のみに堆積するものである。層厚４～12cmを呈する。

第IV層　黄褐色土層，当該層に柱穴が掘り込まれている。調査グリットが小範囲でしかも数回の立直しのため，建物のプランがおさえがたい。しかし，本地区に，何らかの機能をもつ掘立柱の建物の存在が確認された。

遺　物

(1)　青　磁

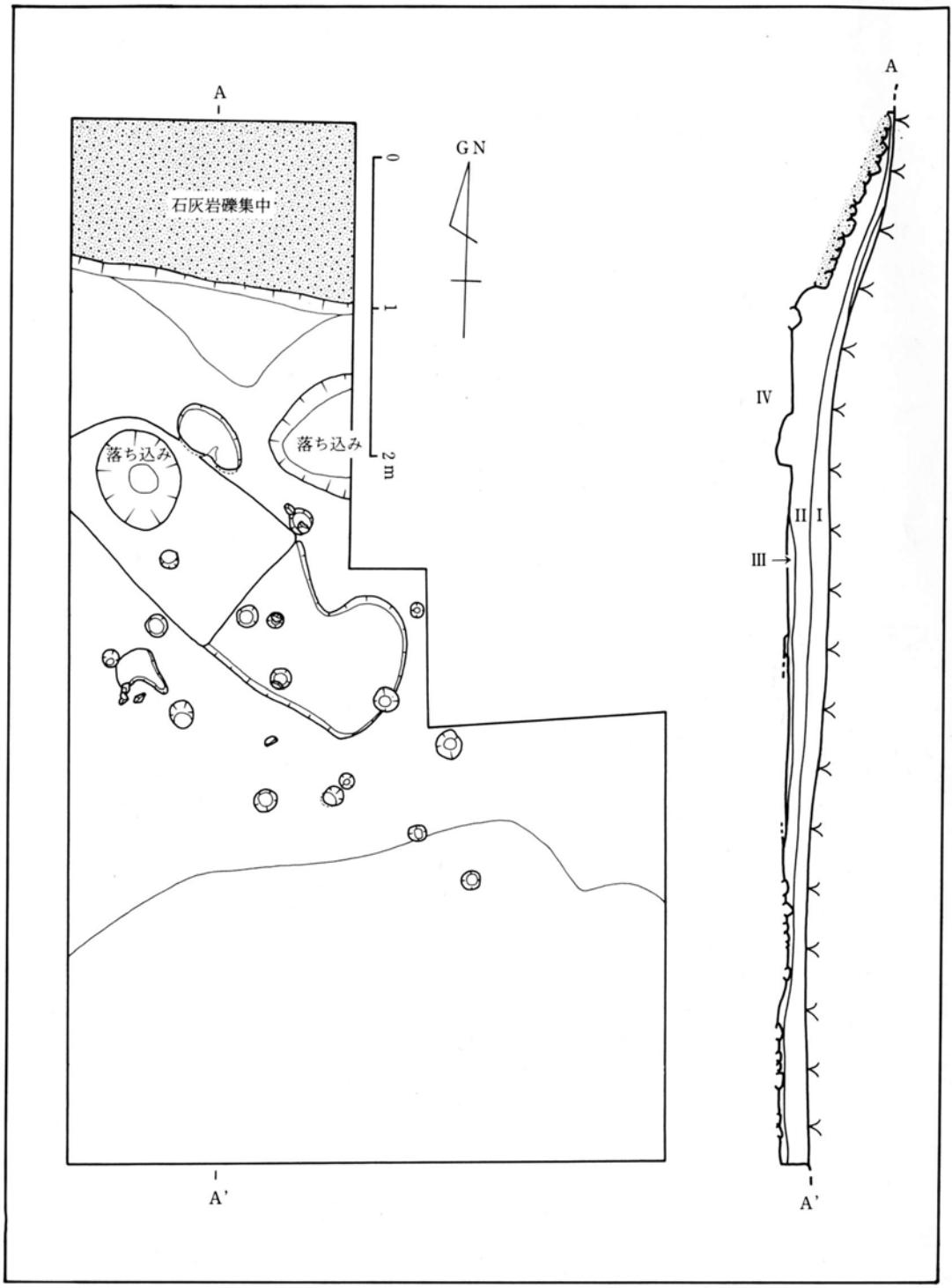
青磁は76点得られた。これを器種別に見ると碗19点，盤３点，皿５点，その他の器種１点，不明48点の出土であった。以下，器種別に略記する。

碗

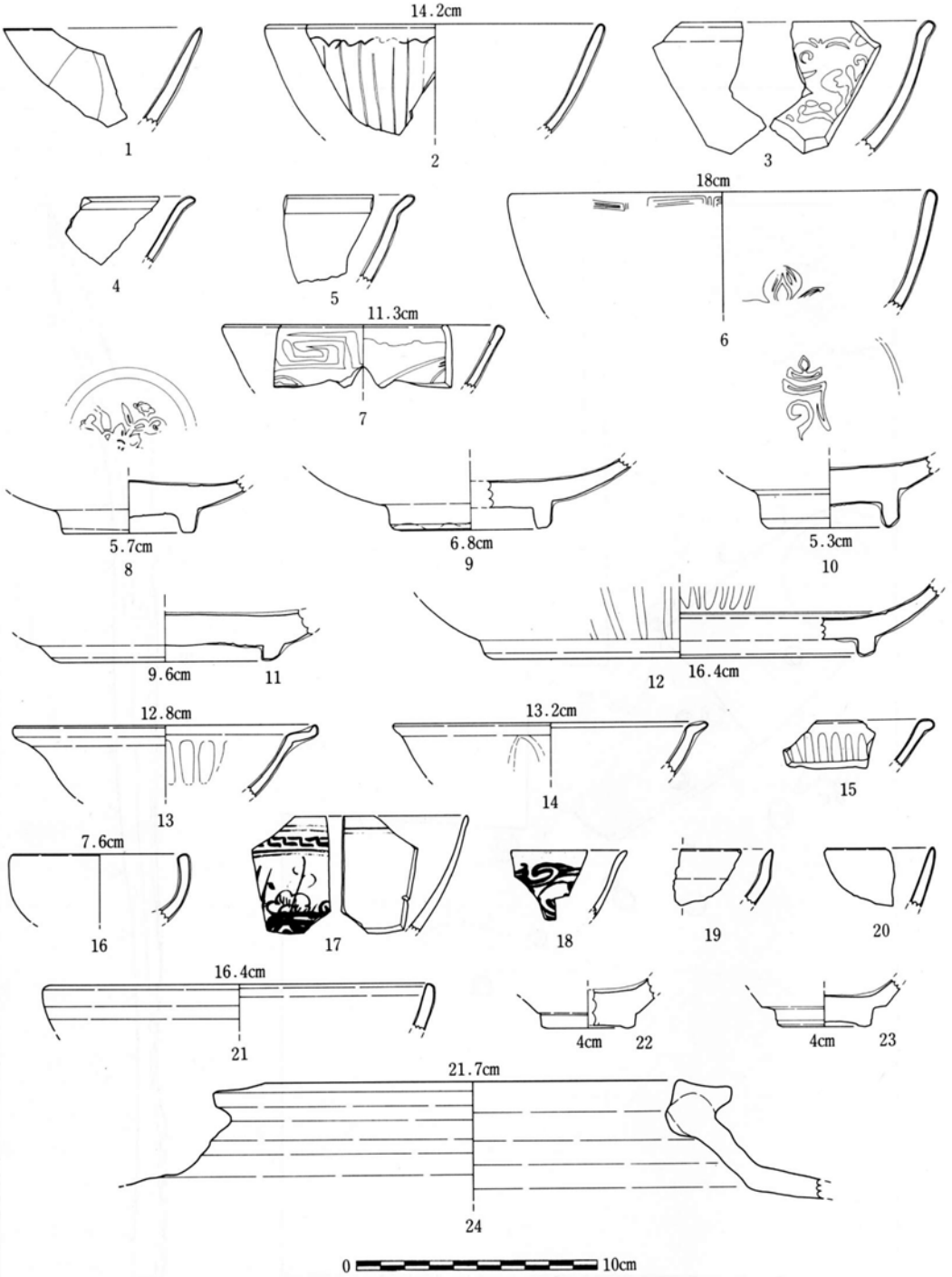
碗に属するものは口縁部破片13点，底部破片６点が得られた。

第５図１は口縁部の破片で分類Ｉ ⓐに属すると思われるものである。外体部には箆彫りの蓮弁文を配する。釉は透明感のあるオリーブ褐色で口唇部は舌状を呈する。その他，このタイプの個体数には入れなかったが同類似とみなし得る破片３点も得られた。

分類Ｉ ⓑに属すると思われるものは２点得られた。同図２はこれに属するもので線彫りの蓮弁文を体部に配する。蓮弁文は頭と胴部を別々に描き単位としての蓮弁文の意識は薄れている。釉



第4図　殿地区平面図及び層序



第５図　青磁（１～16）、染付（17、18）、黒釉陶器（19～23）、褐釉陶器（24）

色は透明感のある薄いオリーブ色である。口径は推算14.2cmを測る。

同図3は分類IIIに属する3点の中の1点で，口縁部は僅かに肥厚し内体部に浮文を配する。釉は淡い若草色を呈する。

同図4・5は口縁端部が外反する分類IVに属するもので4は淡い緑色を呈する。5は前者4と諸特徴がほぼ一致するが釉色は透明感のある薄い緑色を呈するものである。

同図6・7はその他としたものである。6は口縁部外面に雷文帯，内体部下方には花文が認められるもので，さらに内外の体部には篦彫りを配する。釉は淡い若草色である。

底部は6点検出された。分類別に見るとI－1点，II－3点，III－2点に分けられた。第5図8は分類Iに属するもので内底には花文を配する。釉は透明感のある薄い緑色で底径は推算5.7cmを測る。同図9は分類IIに属するもので，やや透明なオリーブ色の釉を高台外側まで施釉する。底径は推算5.8cmを測る。同図10は分類IIIとして扱ったもので内底に「司」のスタンプと圏線を配する。釉は光沢のあるオリーブ色で外底まで施釉する。底径は推算5.8cmを測る。

盤

盤に属するものは3点検出されたが，いずれも底部の資料であった。分類別に見るとI－1点，II－2点に大別された。第5図11は分類I，同図12は分類IIとして扱ったものである。以下，詳細は省略する。

皿

皿は口縁部破片のみ5点が得られた。分類別の出土状況はI ⓐ－1点，I ⓑ－1点，II－1点，III－2点であった。第5図13は広義にI ⓐとして扱ったもので鍔縁部をつまみあげる。内体部には幅のやや広い丸彫り蓮弁文を描く。釉は光沢のある薄い緑色を呈する。口径は推算12.3cmを測る。本標品に類似するものは今帰仁城跡出土に認められる。同図14はI ⓐに属するもので篦彫りを蓮弁文を外体部に配する。釉は淡いオリーブ色を呈する。口径は推算13.2cmを測る。同図15はIIIとして扱ったが，現資料からするとあるいは小ぶりの盤形になる可能性も考えられるものである。内体部には丸彫り蓮弁文を配し，釉はやや透明なオリーブ色を呈する。

杯

杯として明確におさえられるものは第5図16に示した1点が得られた。器形は底部から外湾して口縁は直口状を呈するが，底の部分を欠損するため全形は判然としない。しかし，類例からすると碁笥底が想定される。釉は淡い薄緑色を呈する。

前記の破片以外に器種の判然としない口縁部破片38点，底部の破片10点が得られた。

(2) 白　磁

白磁は3点検出された。いずれも碗形に属するもので分類I－2点，分類II－1点に大別された。しかし，図・詳細については省略する。

(3) 染付

染付は口縁部破片10点，胴部破片３点，底部破片４点が得られた。

第５図17は口縁部破片で外面口縁に二条界線にはさまれた雷文帯文，体部には花樹文，内面口縁に二条の界線を描くものである。

同図18はやや小型の碗が想定される口縁部破片である。外面に淡い呉須の花文状の文様が認められるが小破片のため構図は判然としない。

(4) 黒釉陶器

黒釉陶器は口縁部破片13点，底部破片３点が得られた。口縁部は分類II－５点，III－１点，その他１点，不明６点，底部は分類Ⅰ－２点，II－１点に大別された。

第５図19は分類II，同図20は分類III，同図21はその他とした口縁部の破片である。前記３点の中でも21は器形がやや異質なもので，口径は推算16.3cmを測る。

同22・23は底部の資料で前者22は分類Ⅰ，後者23は分類IIとして扱った。

(5) 褐釉陶器

褐釉陶器は口縁部破片18点，底部15点が得られた。口縁部破片を器種別に大別すると壺形15点，器種不明４点と壺形が圧倒的に多かった。壺形口縁を分類別に分けるとⅠ－７点，II－４点，III ⓐ－１点，IV－３点であった。

第５図24は壺Ⅰ，第６図１は壺Ⅰの小型，同図２は壺II，同図３は壺IIIにそれぞれ属するものである。同図５はその他として扱ったもので頸部は折曲し口縁を直口にする。

同図６は器種不明としたが，甕形が想定されるものである。外面は露胎で内面には自然釉が認められる。口径は約29.3cmを測る。

同図７～９の３点は底部の資料で壺形の底に属すると推察される。

(6) 瓦質土器

瓦質土器は２点得られたが，２点とも分類から外れるものであった。

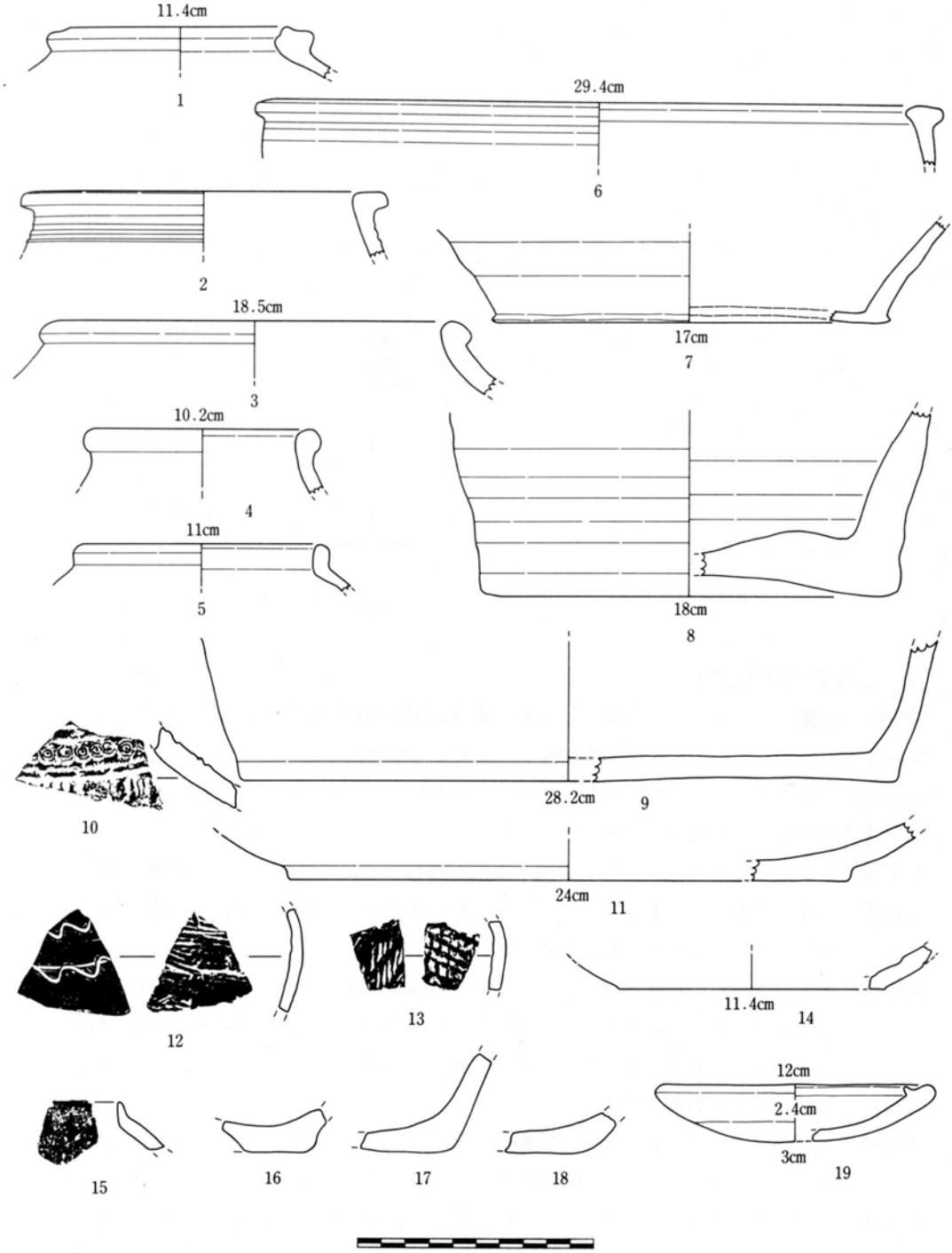
第６図10は甕形が想定される頸部の破片で外面に渦巻線状のスタンプ文と篦状施文具による押捺刻文が認められた。胎土，焼成の諸特徴から沖縄以外でつくられた可能性が強いと思われる。同図11も胎土・焼成の諸特徴から沖縄以外でつくったと思われる底部の破片で底径は推算24cmを測った。

(7) 陶質土器

陶質土器は16点得られた。内訳は底部破片１点，他は胴部破片であった。

第６図12・13は胴部破片で前者12は波状沈線文，後者13は外面に有軸羽状叩き，内面に格子目叩きが認められるものである。

同図14は底部の破片で立ち上がりからすると胴下半部が張る器形が推察される。底径は推算11.3cmを測った。尚，他の資料は小破片のため省略した。



第６図　褐釉陶器（１～９）、瓦質土器（10、11）、陶質土器（12、13）土器（14～19）

⑻ 土　器

土器は口縁部破片11点，底部破片12点，蓋１点が検出された。分類別の出土状況は壺II－１点，鉢II⒜－３点，鉢II⒝－１点，不明６点，底部は分類Ⅰ－２点，II－５点，III－３点，不明２点であった。

第６図15は壺II，同図16は底部分類Ⅰ，同図17は底部II，同図18は底部IIIに属すると思われる資料である。

尚，前述以外の胴部破片では胎土に滑石を混入するもの１点が認められた。

層＼銭名	通開寶元	通洪寶武	通建寶炎	元照寶寧	通永寶楽	不明	計
表土層	1	2	1			4	8
第２層				1	1	1	3
3						1	1
計	1	2	1	1	1	6	12

イ．ＳＨ０１試堀グリッド

殿地区の南側端に設定された試掘グリットである。当地には石灰岩を野面積にした石塁状遺構が東西方向に展開していて，その性格を明らかにするため断割したものである。調査の結果野面積の石垣の性格はもとより，本城郭の古い時期の様相を知る手がかりが得られた。石積面から最下部まで２ｍをはかり堆積層は12層に区分された。

第Ⅰ層　ニービ土の客土，グリットの東から南へ移行するにつれ薄くなり，端部で消える。

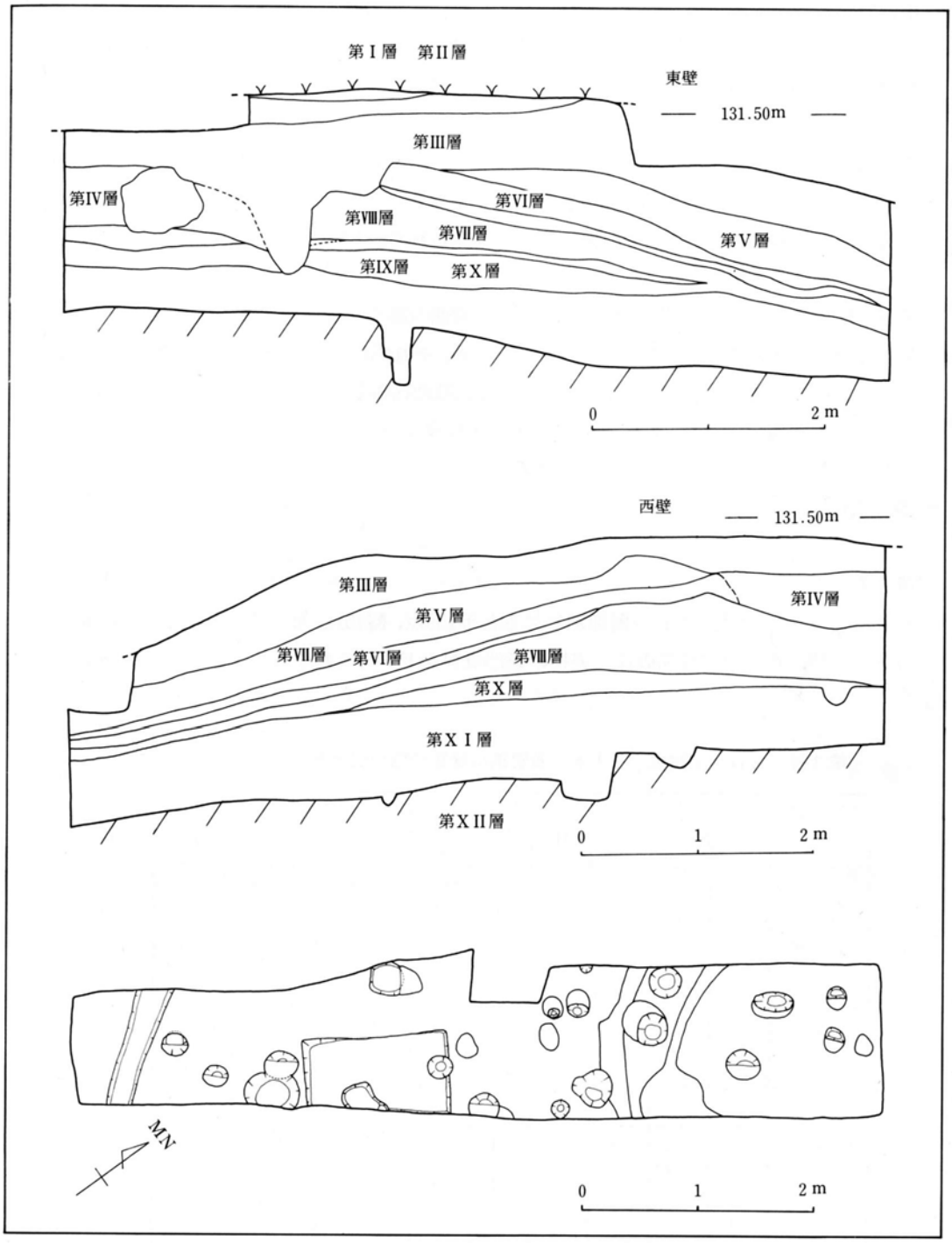
第II層　暗褐色土層。２～３cm大の石灰岩礫をわずかに含む。本層は旧表土に相当し，瓦，青磁器と共に今次大戦の戦争遺物が出土する。

第III層　茶褐色土混りの石灰岩礫層。先述した野面積の石積で，大きさが25～30cm大の石灰岩で構成される。なおグリットの南側では10～15cm大の小礫が多くみられる。石灰岩礫中には切り石も多く混在している。本層の機能は殿広場の土の面を安定させるために築かれた土留石積である。

第IV層　赤褐色混礫土層。１～３cm大の礫を含んだコーラル層で，グリットの北側に部分的に存在する。最上位のコーラル層である。

第Ⅴ層　赤色土層。茶褐色をおびた土がマダラ状に一部みられる。当該赤色土層は北側で15cm，南側で30cmを測るが，グリットの中央あたりから南側へ傾斜するため厚くなっている。

第VI層　黒色混礫土層。グリット北側で第III層に切られるようにある。同層は直上層と同様に南傾するが，北側で20cm，南側で６cmと逆に薄くなっている。土層中の礫は１cm前後のものと５cm大のものがある。出土遺物の量は堆積土層の中で最も多く，獣魚骨等の自然遺物も多出している。



第７図　ＳＨＯ１試掘グリッド層序及び柱穴群平面図

第Ⅶ層　茶褐色混礫土層。小礫を多量に混入したいわゆるコーラル層で，南傾している。礫質は北側で細かく密にあり，南へ漸次粗くなっている。

第Ⅷ層　赤褐色土層。グリット北西壁側で層厚が72cmと最も厚く，南側へ著しく薄くなり南壁にいたらず消えている。

第Ⅸ層　黄褐色混礫土層。小礫を多量に混ぜたコーラル層。グリット中央にレンズ状に堆積。最も厚いところで約10cmを測る。

第Ⅹ層　赤褐色土層。グリットの東壁側にのみ見られる。土層中には下位に移行するにつれ黒褐色土が所々に混入している。

第XI層　黒褐色土層。層厚約40cmをはかり，南側へ緩やかに傾斜する。

第XII層　地山。グリット中央まで水平になるが，それ以南から緩やかに傾斜をみせる本層を掘り込むので柱穴跡が19基検出され，当該地区の最下層にも何らかの建物があったことが確認された。なお，建物の配置・規模については小試掘のため明らかではない。

遺　物

(1)青　磁

総数224点が得られた。これを器種別に見ると碗139点，盤46点，皿39点，壺の蓋や口縁部破片，べっ甲口の杯，香炉の口縁部破片，袋物の底部資料などが得られた。以下，器種別に略記する。

第３表　ＳＨ０１試掘グリッド　青磁碗口縁部分類別出土表

分類 / 層位	I ⓐ イ	I ⓐ ロ	I ⓑ	II	III	IV ⓐ	IV ⓑ	V	不明	計
表　採					3	2		4		9
第３層			2					4		6
4					4			2		6
5			1	1	6	2	2	9		21
6			2		8			5		15
7					5	9	1	12	3	30
8					1	1		1		3
9				1	1	1				3
10	1							2		3
11	4	1	1		1	1		10		18
計	5	1	6	2	29	16	3	49	3	114

注：第１，２層は層が薄く遺物も皆無に近いため省略した（本グリッドの以後の表も同様）

碗

碗は142点検出されたが完形もしくは全形を推察できるものは得られなかったので，口縁部と底部に分けて略記することにし，前記分類別の出土状況を第3・4表に示した。以下，分類別に記述する。

口縁部

第8図1～4の4点はⅠ ⓐ イに属するもので，稜を有する蓮弁文を配する。1は弁の縁を二重に描くもので，外側は幅広く彫り，内側は線状に彫っている。釉色は薄緑で貫入は認められない。第10層の出土。2・3は小破片で稜を有する蓮弁を配するもので，2点とも第11層の出土である。4は線彫りより幅広い丸頭蓮弁文を配するもので，釉色は透明感のあるオリーブ色を呈する。

同図5はⅠ ⓐ ロに属するもので，口縁の外面に6条の圏線，その下方には2重の孤を描く文様が認められる。内面体部にも孤を1本の線が認められる。釉色は透明観のある薄い緑色を呈する。第11層の出土である。

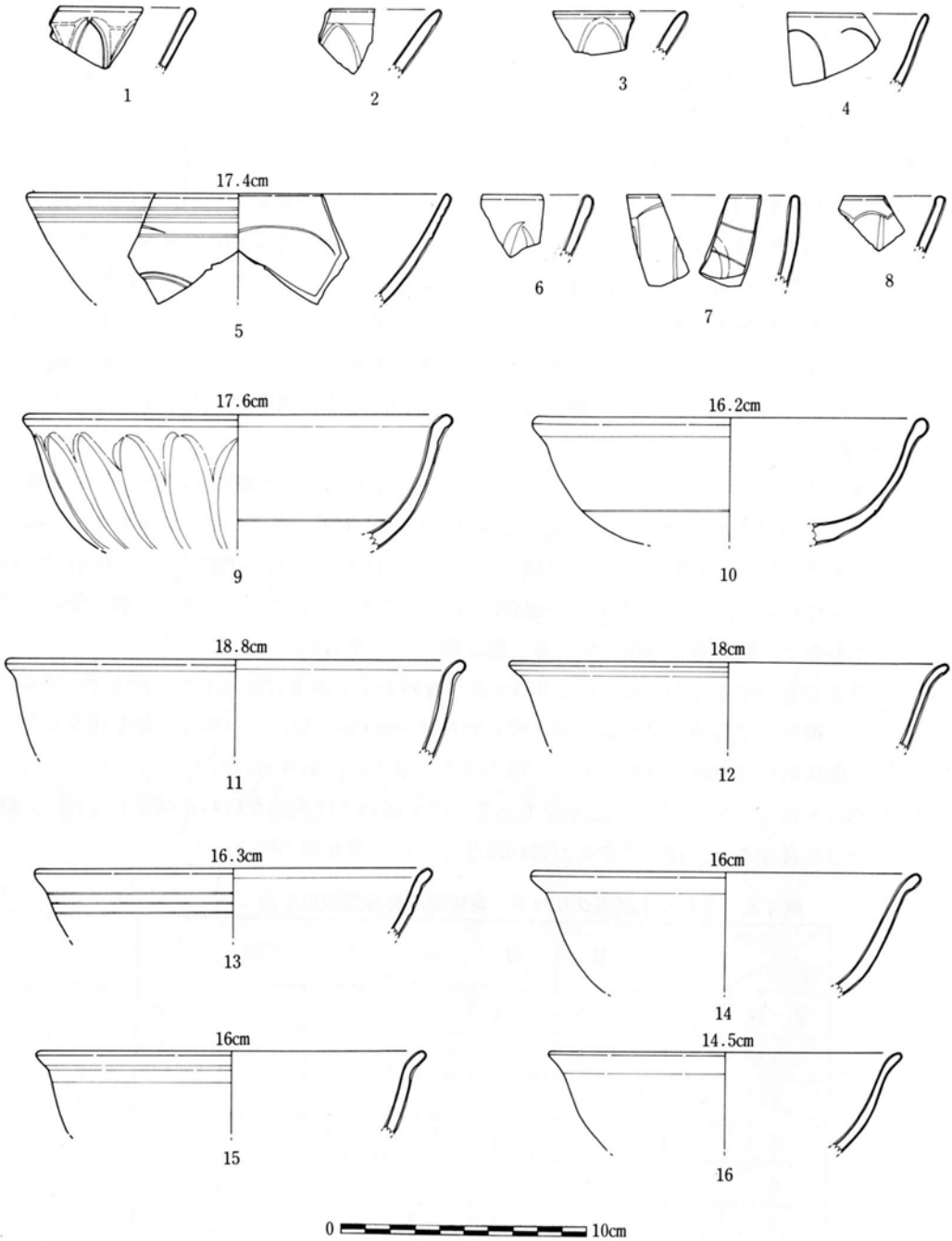
Ⅰ ⓑに属するものは6点得られた。この中には片切り彫りによる弁幅の広い蓮弁文㋑と細刻蓮弁文㋺に大別された。同図6は㋑に属すると思われる口縁部小破片で釉は若草色を呈する。第4層の出土である。同図7・8は㋺に属するもので7は後者に比べ弁幅が広く，内面にも篦彫りが認められるもの，8は弁の側面と丸頭部分を別々に連続して描くため蓮弁の頭と側面がややくずれるもので，釉は薄い緑色を呈する。第3層の出土である。

Ⅱ類に属するものは2点得られ、その中の大きい資料を第8図9に図示した。9は片切彫りで幅広く僅かに瞭を有する蓮弁文を描くが，個々の弁は弁幅・弁の形などが異なり雑な施文になっている。内面体部には圏線が認められる。釉め緑色を呈する。第9層の出土。

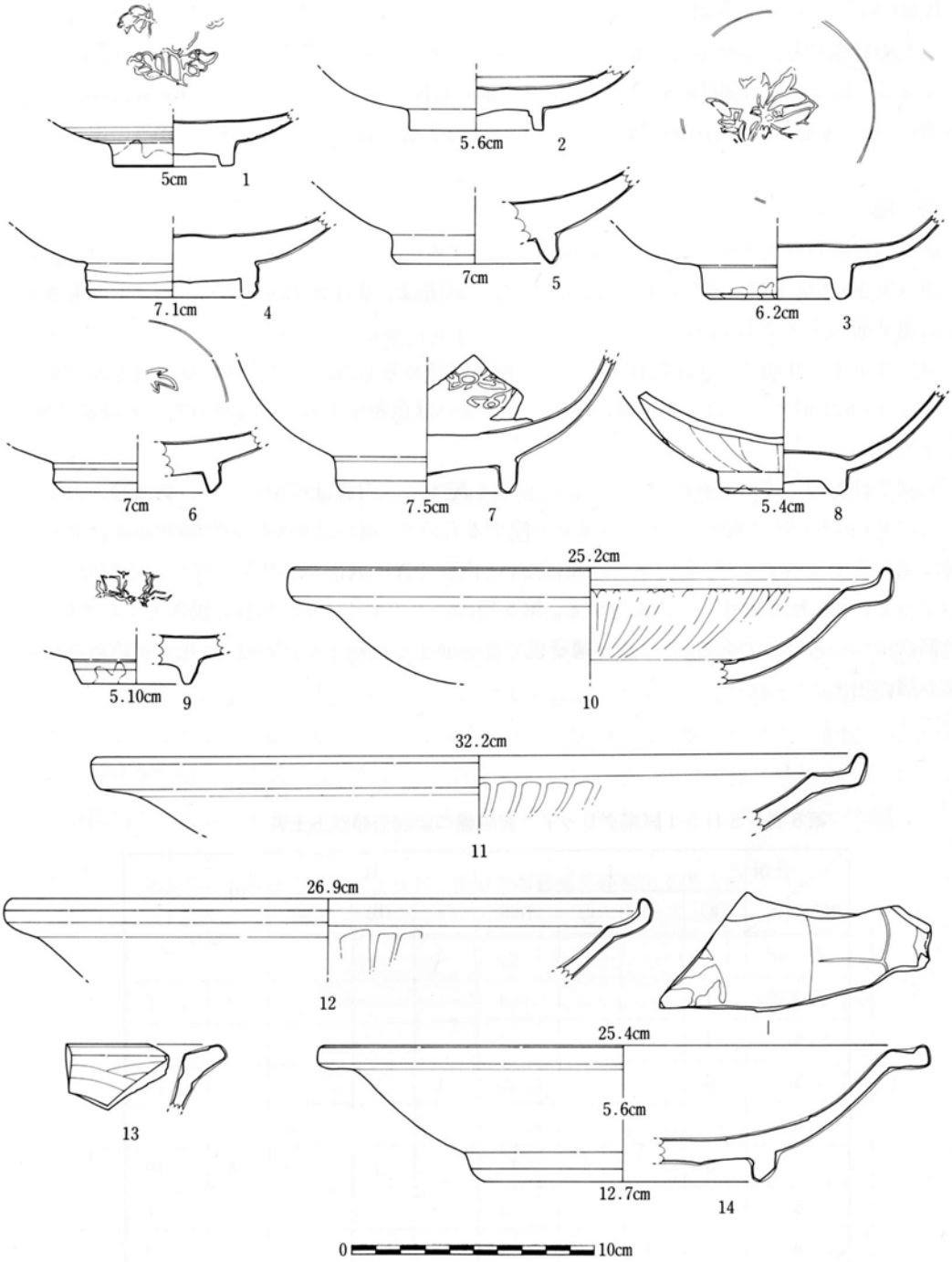
Ⅲ類は29点と後述のⅣ ⓑ に次ぐ出土量である。第8図10に代表的な資料を図示したが，口縁の肥厚部分は数種類ある。釉はくすんだ薄い緑色である。第6層の出土。

第4表　ＳＨ０１試掘グリッド　青磁碗底部分類別出土表

分類／層位	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	不明	計
表　採		1	1				2
第3層	1	1	1	2	1		6
4							
5	1	1	1		2	2	7
6							
7		4	1	1	2		8
8							
9	1		1				2
10							
11	1	1	1				3
計	4	8	6	3	5	2	28


1
2
3
4
17.4cm
5
6
7
8
17.6cm
9
16.2cm
10
18.8cm
11
18cm
12
16.3cm
13
16cm
14
16cm
15
14.5cm
16
0
10cm

第8図　青　　磁


5cm
1
5.6cm
2
7.1cm
4
7cm
5
6.2cm
3
7cm
6
7.5cm
7
5.4cm
8
5.10cm
9
25.2cm
10
32.2cm
11
26.9cm
12
13
25.4cm
5.6cm
12.7cm
14
0
10cm

第9図　青　　磁

IV類は61点が得られ，ⓐ21点，ⓑ40点に大別された。第８図11・12はⓐに属するもので，11は端反りの疑似肥厚口縁状を呈する。口径は推算18.8cmで釉色は淡い若草色を呈する。第５層の出土である。12は全体の器壁がやや薄く，口縁端部の外反が著しいものである。釉色は若草色で第８層の出土。同図13～16はⓑに属する。13・14は第７層，15は第３層，16は第10層の出土。

底　部

碗底部は28点検出された。以下，各種別に図示する。

第９図１・２はＩ類に属するもので，１は内底に印花文，２は圏線が認められる。１は第３層，２は第９層の出土である。

同図３・４はII類で，３は内底に印花文と圏線が認めるもの，４は全体に厚手のものである。

同図５・６はIII類で釉色は５が薄い緑色，６は淡い緑色を呈する。５は第11層，６は第８層の出土である。

同図７はIV類に属するもので，内体部に浮文を配する。内底は箆胎である。第５層の出土。

同図８・９はＶ類に属する。８は鎬蓮弁を配するもので，高台はやや低い竹節状の高台である。釉は高台まで施釉するが，畳付までは及ばない。内面では内底部から体部に移行する部分に角をつくっている。釉はオリーブ色を呈する。第５層の出土である。９は高台の根本近くから削って竹節状につくるものである。釉は淡い薄緑色で高台面まで施釉する。内底には花文が認められる。第５層の出土。

第５表　ＳＨ０１試掘グリッド　青磁盤口縁部分類別出土表

分類 / 層位	I				II			III	計
	ⓐ	ⓑ	ⓒ	不明	ⓐ	ⓑ	不明		
表　採									
第３層	1			1					2
4	1			1					2
5	6			10	1				17
6									
7	5		1	11		1		1	19
8				1					1
9		1		1					2
10	1								1
11				1			1		2
計	14	1	1	26	1	1	1		46

盤

盤は全形を推察できるものは第９図14に図示した１点で口縁を折り曲げ稜花状にし，内体部には幅広の箆彫り蓮弁文を配する。高台は竹節状を呈し幅は約１cmを測る。釉色は青緑状を呈する。第７層の出土。前記分類でするとII口縁部，底部IIに属する。以下，口縁部と底部に分けて略記する。

口縁部

口縁部は，第５表に示したようにI－42点，II－３点，III－１点の合計46点が得られた。

第９図10はI ⓐ，同図11はI ⓑ，同図12はI ⓒ，同図13はII ⓑに属する。IIIについては，小破片のため省略した。

底　部

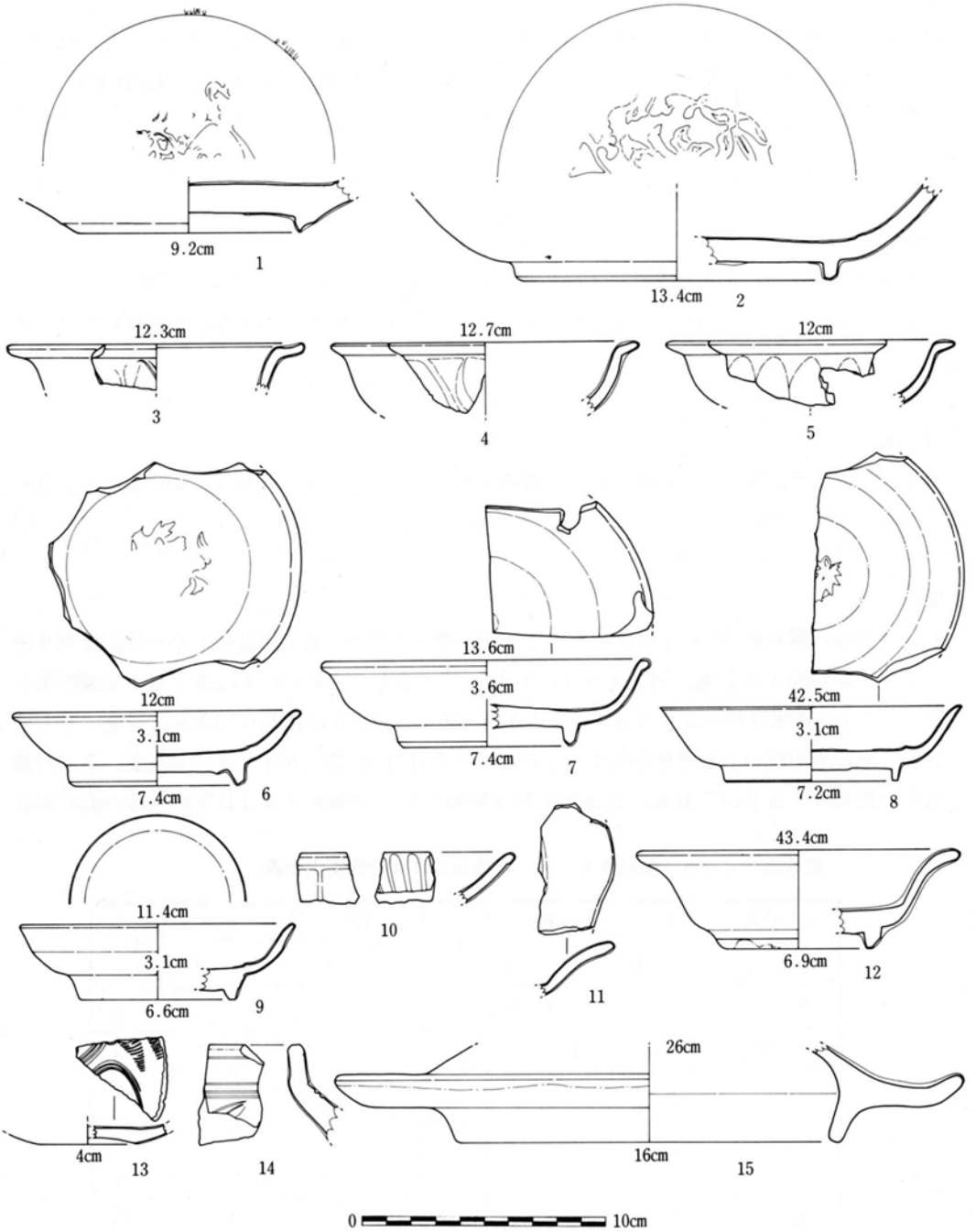
底部はI－８点，II－２点，III－１点が得られた。第10図１はI，同図２はIIIに属する。IIの資料は前に図示した。

皿

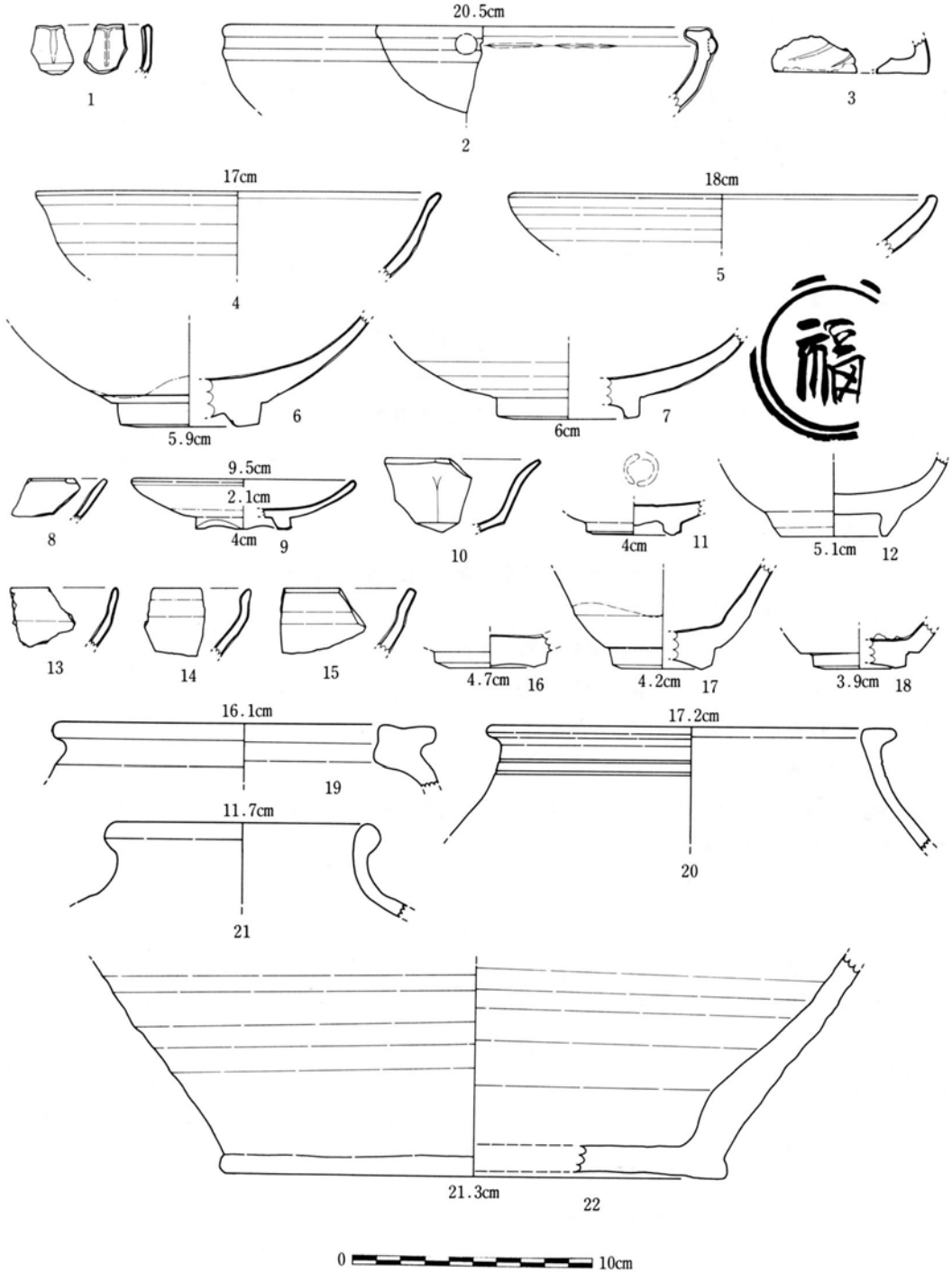
皿は総数39点得られ，うち４点は図上復元が可能なものであった。種類別の出土状況は第６表に示した。第10図３はI ⓐ，同図４・５はI ⓑに属するものである。４は稜を有する蓮弁文を配するもので，釉色は淡い緑色を呈する。第５層の出土。同図５は箆彫りの蓮弁文を配するものである。釉は透明観のある緑色を呈する。同図６・７はII ⓐで，６は内底に印花文，７は内底を輪状の露胎にするものである。２点とも第５層の出土。同図８・９はII ⓑで８は内底に印花

第６表　ＳＨ０１試掘グリッド　青磁皿口縁部分類別出土表

分類 / 層位	I		II		III	IV		V	不明	計
	ⓐ	ⓑ	ⓐ	ⓑ		ⓐ	ⓑ			
表　採				2						2
第３層		2	1						1	4
4										
5		2	3	3	1		2			11
6					1		2	1		4
7	2	1	3	7	1		1			15
8							1			1
9										
10										
11			1			1				2
計	2	5	8	12	3	1	6	1	1	39


9.2cm
1
13.4cm
2
12.3cm
3
12.7cm
4
12cm
5
12cm
13.6cm
3.6cm
42.5cm
3.1cm
7.4cm
6
7.4cm
7
3.1cm
7.2cm
8
11.4cm
10
43.4cm
3.1cm
6.6cm
9
11
6.9cm
12
26cm
4cm
13
14
16cm
15
0
10cm

第10図　青　　磁



第11図　青磁（1～3）・白磁（4～11）・染付（12）・黒釉陶器（13～18）・褐釉陶器（19～22）

文を配し輪状の露胎にするものである。第5層の出土。9も内底を露胎にするが，中央部を欠いた輪状を呈するか否かは不明。第5層の出土である。同図8はIII，同図11はIVⓐ，同図12はIVⓑ，同図13はVに属する。10は第6層，11は第11層，12は第5層，13は第6層の出土。

その他に底部の資料11点が検出された。その中には内底部が露胎のもの5点，内底が露胎で花文を配するもの1点，内底に花文を配するもの1点，内底に丸彫りを施すもの1点が認められた。以下，詳細は省略する。

その他の器種

これに属するものは酒会壺の口縁部破片（第10図14）及び蓋（同図15），べっ甲口の杯と思われるもの（第11図1），香炉の口縁部破片（同図2），袋物の底部（同図3）が得られた。出土層位は第10図14が第7層，同図15は第5層，第11図1は第3層，同図2は第7層，同図3は第5層の出土である。

(2) 白　磁

白磁は23点検出された。これを器種別に見ると碗9点，皿8点，盃2点，器種不明4点に大別される。以下，器種別に略記する。

碗は口縁部分類II－4点，III－2点と底部が3点得られた。第11図4は前記分類のII，同図5はIIIに属するものである。同図6は幅広の畳付の底部資料で外底部を露胎にする。釉・磁胎とも乳灰色で磁胎は細かい。底径は推算6cmを測る。同図7は畳付幅が前記3の半分ほどのものである。底径は推算6cmを測る。

皿は前記分類I－3点，III－5点（1点は底部）が検出された。Iのうち2点は第11層，IIIは2・3層から主に検出された。同図8は前者I，同図9は後者IIIに属するものである。

盃は口縁部破片1点，底部破片1点が検出された。しかし，釉・磁胎の特徴からすると同一個体と思われる。口縁部破片は八角盃に属すると思われるものである。2点とも第7層の出土。口縁部破片を同図10，底部を同図11に図示した。

その他，器種の判然としない小破片が4点検出された。

(3) 染　付

染付は7点が得られた。第11図12は釉を掻き分ける資料で外面に青磁の釉，内底には二重の界線と「福」を描くものである。中国産よりも肥前産の可能性が考えられる（註6）。他の資料は小破片のため実測図および詳細は省略する。

(4) 黒釉陶器

黒釉陶器は口縁部破片8点，底部破片5点が得られた。口縁部は分類Iが3点，IIは5点，底部はI－3点，II－2点に大別された。

第11図13～15は口縁部破片で同図13は前記分類のI，同図14・15はIIに属する。13は第5層，14は第6層，15は第9層の出土である。同図16～18は底部破片で16はI，17・18はIIに属する。

17は体部下方がやや張るもの，18は内底に粗土の付着が認められる。

第７表　ＳＨ０１試掘グリッド　黒釉陶器口縁・底部分類別出土表

分類 / 層位	口縁部				底部			計
	I	II	III	その他	I	II	その他	
表　採								
第３層	1					1		2
4								
5		1						1
6		1						1
7	2	1				3		6
8		1						1
9								
10								
11		1				1		2
計	3	5				5		13

(5)　褐釉陶器

褐釉陶器は口縁部破片18点，底部15点が得られた。口縁部の分類別出土状況は第８表に示したとおりで分類IIが多く第３層～第６層と第９層で主に検出された。

第11図19はＩ，同図20はII，同図21はIVに属するもので，同図22はＩの底部，第12図１はIIの底部と思われるものである。

第８表　ＳＨ０１試掘グリッド　褐釉陶器口縁部分類出土表

分類 / 層位	I	II	III	IV	V	VI	不明	計
表　採	2						1	3
第３層	1			2				3
4								
5		2	1	1				4
6		2						2
7		2						2
8		1		1				2
9								
10								
11		3						3
計	3	10	1	4			1	19

(6) 陶質土器

陶質土器は8点得られ，その内訳は口縁部3点，胴部4点，底部1点であった。器種が判るものは第12図2の1点無頸壺のみで他は判然としない。同図2は肩部に波状曲線が5条認められるもので，第5層の出土である。

同図3は鉢あるいは甕型が想定される口縁部の資料で第11層の出土である。

底部は同図4に図示した1点が得られた。立ち上がりは僅かに外湾するもので外面は篦削り様の成形で器面は光沢を有する。第11層の出土。同図5は胴部破片で波状沈線文が認められる。

(7) 瓦質土器

第12図6の底部1点が得られた。底に楕円状の足を貼り付けるもので先部分は溝状の凹面をつくる。器色は灰色を呈する。

(8) 土　器

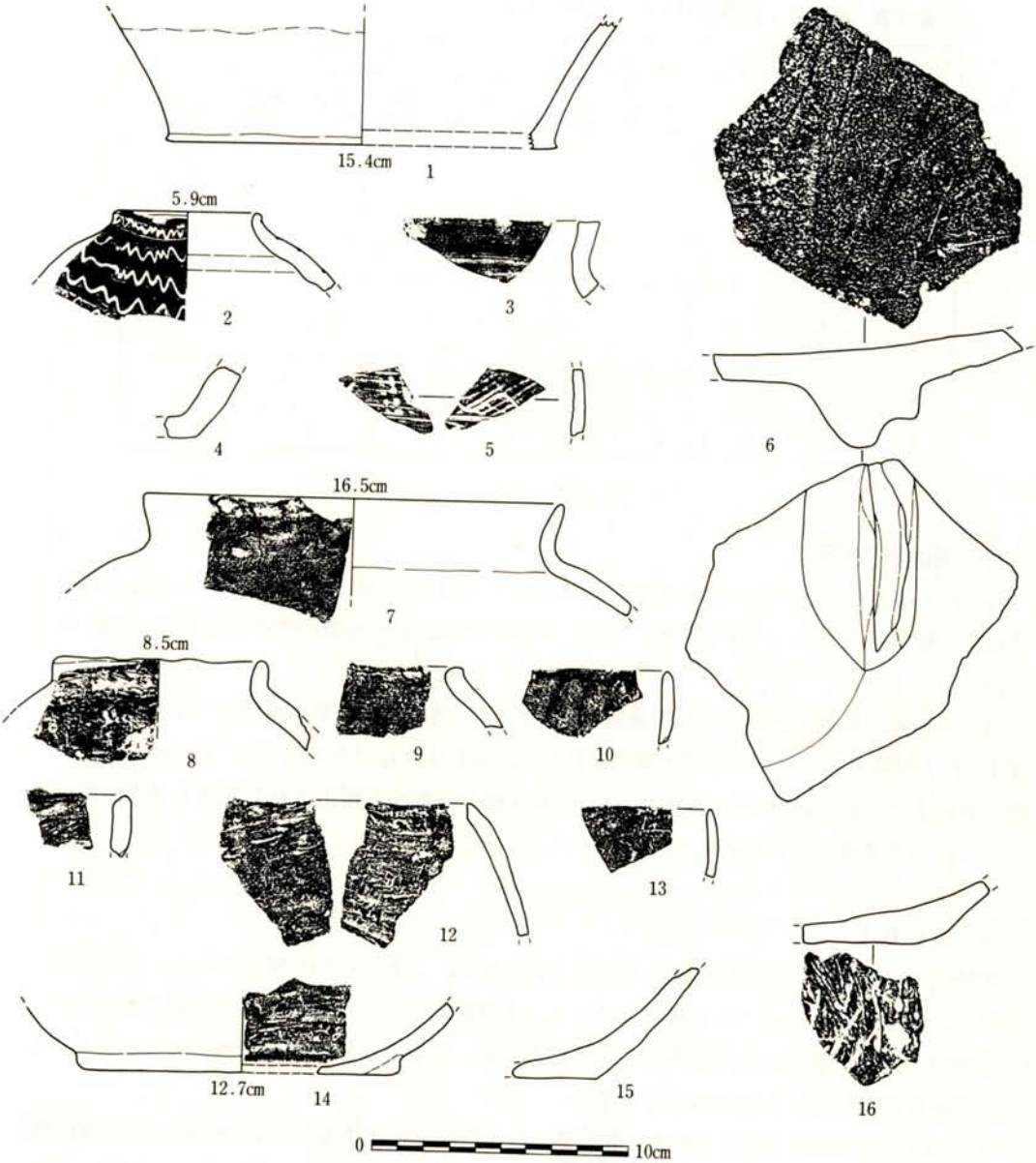
土器は口縁部破片63点，底部破片33点が得られた。口縁部の分類別出土状況は第9表に示したとおりで，底部はⅠ－3点，Ⅱ－9点，Ⅲ－16点，不明5点に大別された。

第12図7～13に図示したものは口縁部破片で同図7は壺Ⅰ，同図9は壺Ⅱ，同図8は壺Ⅲ，同図10は鉢Ⅱⓐ，同図11は鉢Ⅱⓑ，同図12は鉢Ⅱⓒ，同図13は鉢Ⅲに属する。

同図14～16は底部の資料で，14はⅠ，15はⅢに属する。14は内底部にこげつき，15は立ち上がり部分に削り，16は外底に葉痕が認められる。

第9表　ＳＨ０１試掘グリッド　土器口縁部分類別出土表

分類 / 層位	壺			鉢					不明	蓋	計
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ ⓐ	Ⅱ ⓑ	Ⅱ ⓒ	Ⅱ			
表　採					1		1				2
第3層	2				6		1			3	12
4				1					1		2
5									1		1
6					2						2
7				1					4		5
8											
9					1				1		2
10											
11	3	2	2		13	4		2	11		37
計	5	2	2	2	23	4	2	2	18	3	63



第12図　褐釉陶器（1）、瓦質土器（2）、陶質土器（3～6）、土器（7～16）

第10表　ＳＨ０１試掘グリッド　古銭出土状況

層＼銭名	開元通寶	至道元寶	咸平元寶	元聖元寶	皇宋通寶	照寧元寶	元豊通寶	元裕通寶	洪武通寶	永楽通寶	洪武通寶	隆武通寶	嘉照通寶	康照通寶	洪武通寶	照武通寶	不明	計
表土層			1				1			1							3	6
第４層		1						1	1				1				8	12
5		1		1	1	1	4		1		1				1		24	35
6							1										4	5
7	1																	1
11							1	1									1	3
計	1	2	1	1	1	1	7	2	2	1	1		1		1		40	62

Ｂ　南城門地区

殿地区の西側で約10×10mの小範囲の地域を示す。当地区の北側は若干レベルの高い展望台広場地区と接し斜面をもって区切られ，一方，南側も同様，レベル差の大きい傾斜で一応区分されている。

調査の結果，当地区北側で石列及階段（ＳＬ０１），当地から南側へ通ずる一帯の整地面（ＳＧ０１）および通用路に相当する両石積（ＳＦ０１，ＳＬ０３），（ＳＸ０３），又，当地区を西から南へ囲むように築かれた城壁（ＳＷ０１），当該城壁の内部から検出された埋葬人骨等が検出されている。以下遺構ごとに記述をおこなう。

イ.ＳＬ０１

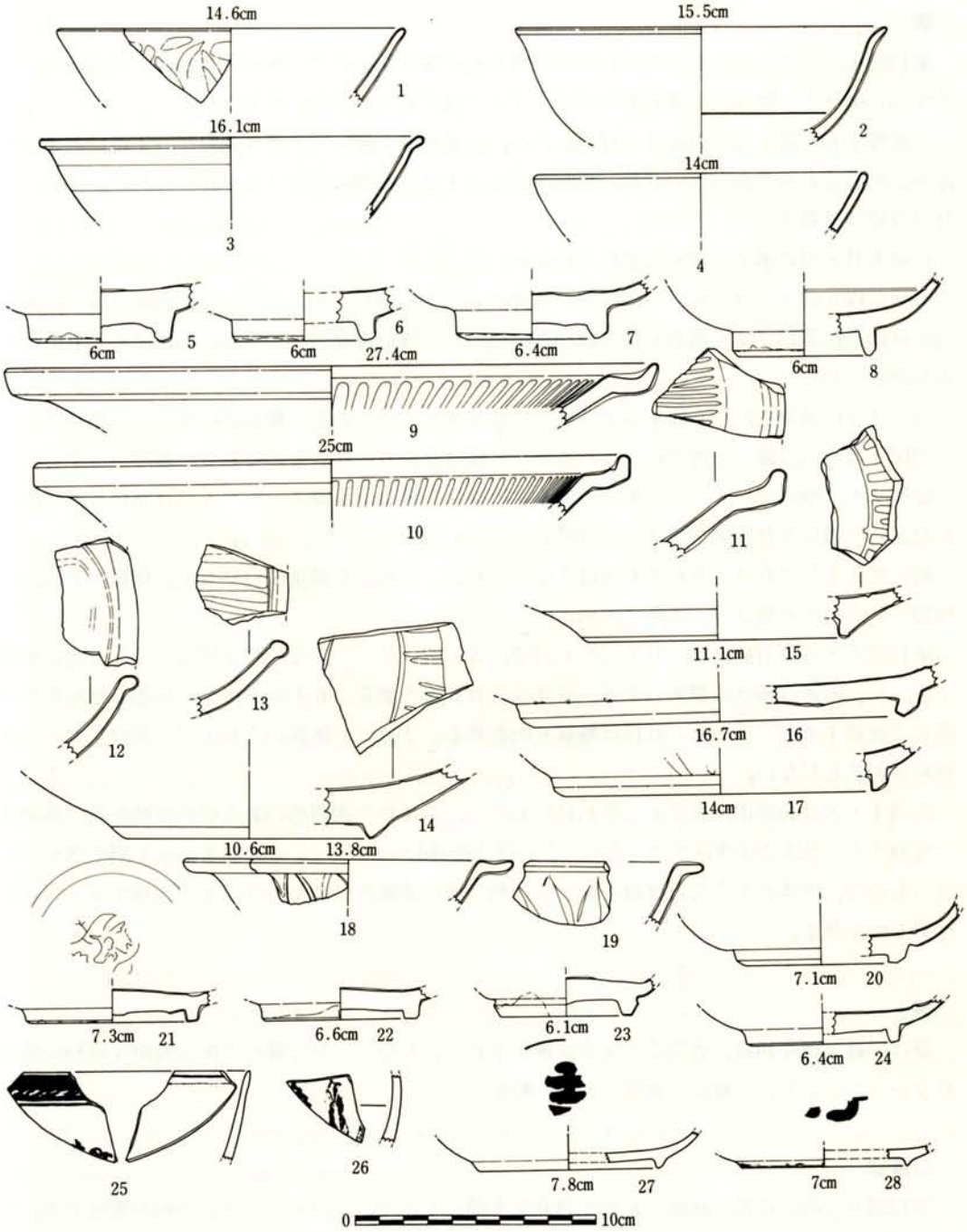
本地区と北側の展望台平場地区とを区切る斜面地で，二条の石列が検出された。石列は切り石を用い，段状に配されいずれも南面している。上段部の石列は両側間の自然の岩で留めおさえ，下段部の石列は，西側は上段部石列と同様にあるが，東端部は広場地区北側に向けるようにＬ字状に組み留めている。約21cmの長さを測る。

なお当石列の西端には，若干崩壊が進んでいるが石段が存在する。横幅約80cm 小規模のもので，平行する耳石と推定四段の段石からなる。全体の配置からすると展望台平場地区の石塁，井戸，及び周辺の石列等と軸線を同一にしている。出土遺物の状況からも考え合わせ，北側広場地区へのひとつの導線になっていたものである。

遺　物

(1)　青　磁

青磁は総数88点検出された。それを器種別に分けると碗18点，皿12点，盤14点，その他の器種２点，器種不明42点に大別される。以下，器種別に略記する。



第13図　青磁（1～23）、白磁（24）、染付（25～28）

碗

第13図１に図示したものは碗の口縁部分類Ⅰ ⓐに属するもので，鎬を有する篦彫りの蓮弁文を外体部に配する。釉はやや透明感のあるオリーブ色である。１点のみ得られた。

口縁部Ⅰ ⓑに属するものは３点得られたが，いずれも小破片で２点は剣頭状，１点は丸頭状の蓮弁文を描くものであった。前記，剣頭蓮弁文の１点は内面に篦彫り文が認められた。以下，図及び詳細は省略する。

口縁部Ⅱ・Ⅲに属する資料は認められなかった。

口縁部Ⅳ ⓐは９点得られ，口縁端部の外反にいくつかのヴァリエィションが認められた。第13図２は口径推算15.5cmを測るもので釉は透明感のある薄い青緑色を呈する。内体部の下方には圏線が認められる。

同図３は口縁端部が折り曲がるようにして外反するものである。釉は淡いオリーブ色である。

同図４は直口口縁で（圏線は見られるが）文様は認められないものである。器形からするとⅠ ⓑに属する。釉は淡いオリーブ褐色である。口径は推算14cmを測る。同タイプは他に２点検出されたが，小破片のため図・詳細とも省略した。

碗の底部としておさえられるものは７点得られた。これを分類別に分けると分類Ⅱ－３点，分類Ⅲ－２点，その他２点，不明に大別された。

第13図５・６は前記分類のⅡとしたもので，５は淡いオリーブ色の釉を畳付まで部分的に施釉する。又，内底は輪状の露胎にする。底径は推算６cmを測る。６も淡いオリーブ色の釉を高台外側まで施釉するものである。底径は推算６cmを測る。２点とも体部の立ち上がり部分を欠くため器形は判然としない。

同図７・８は分類Ⅲに属すると思われるもので，７はやや透明感のある緑色の釉を高台外側まで施釉する。内底には圏線が認められる。底径は推算6.5cmを測る。８は前者よりも胴下部がやや張るもので，内体部下方には圏線を配する。釉は淡い薄緑色で高台の外側まで施釉する。底径は推算６cmを測る。

盤

盤は口縁部破片10点，底部破片４点が検出された。しかし，全て破片で復元可能な資料は得られなかった。以下，口縁部と底部に分けて略記する。

口縁部

第13図９は内面に約５㎜幅の丸彫り蓮弁文を描くもので，淡いオリーブ色の釉を施釉する。口径は推算27.5cmを測る。同図10は２・３㎜幅の丸彫り蓮弁文を内面に配するもので，オリーブ褐色の釉を施釉する。口径は約25cmを測る。同図11は細彫りの蓮弁を内面に描くものである。釉は淡いオリーブ褐色である。前記３点は盤口縁のⅠに属する。

同図12・13は盤口縁のⅢに属するもので，直口口縁で端部は僅かに肥厚する。12は篦彫りの曲線が内面に認められるもので，釉は淡い緑色を呈する。13は内面に丸彫りの蓮弁文を描くもので，釉はやや透明観のあるオリーブ色を呈する。他の資料については図・詳細とも省略する。

底　部

盤の底部は4点検出された。分類別に分けるとⅠ－2点，Ⅱ－1点，Ⅲ－1点に大別された。以下，特徴的なものについて略記する。

第13図14・15は分類Ⅰに属するもので，14は線彫りの蓮弁文と凸の圏線が認められる。釉は若草色で外底中途まで施釉する。底径は推算10.3cmを測る。15は丸彫りの蓮弁文と圏線を内面に配するもので，底径は推算11cmを測る。

同図16は分類Ⅱに属するものである。釉は外底まで施釉するが，釉色は乳白色に変色しているため本来の色は不明である。底径は推算16.8cmを測る。

同図17は分類Ⅲに属するもので外体部下方に箆彫り蓮弁文の端部が認められる。釉は若草色である。畳付部分には砂粒の付着が認められる。底径は推算14cmを測る。

前記分類Ⅱ・Ⅲは口縁部の前記12・13の底部に属する可能性が強いと思われる。

皿

皿に属するものは口縁部6点，底部6点が得られたが，何れも破片で完形は得られなかった。以下，口縁部と底部に分けて略記する。

口縁部

口縁部は分類Ⅰⓐ－1点，Ⅰⓑ－3点，Ⅳ－2点に大別された。第13図18はⅠⓐに属するもので体部に稜を有する蓮弁文を配する。釉は光沢のある若草色である。口径は推算14.7cmを測る。

同図19はⅠⓑに属するもので外体部に箆彫りの蓮弁文を描く。釉は淡いオリーブ色を呈する。

分類Ⅳに属するものは前述のように2点検出されたが，2点とも小さい破片である。以下，図および詳細は省略する。

底　部

底部は6点得られた。第13図20は透明感のある薄いオリーブ色の釉を高台の外側まで施釉するもので，内底には凸の圏線を配する。同図21も高台の断面が方形状を呈するもので薄い若草色の釉を畳付まで施釉する。内底にはシャープな細彫りの花文を配する。底径は推算7.3cmを測る。この種の資料は他に1点検出された。

同図22は高台の外側を竹節状に僅かに削るもので、やや透明観のあるオリーブ色の釉を高台外側まで施釉する。底径は推算6.6cmを測る。

同図23は竹節状の高台にするもので，淡いオリーブ色の釉を外面体部下方まで施釉する。しかし，内底では幅の広い輪状露胎部分が認められる。底径は推算6cmを測る。

その他，前記20に近似するものが他に1点，23に近似するものが他に2点認められた。

その他の器種

その他の器種は大型壺の底部破片と蓋の鍔部分の破片が検出された。しかし，いずれも小破片のため図・詳細とも省略する。その他，器種の判然としない口縁部破片39点，底部

破片３点が得られた。

(2) 白　磁

白磁は５点検出された。これを器種別に見ると碗４点，皿１点に大別される。前記，碗の内訳は口縁部破片２点，底部破片２点でその中の３点は分類Ⅰ・Ⅱに属するものであった。残りの１点（第13図24）は体部下端まで施釉するものである。しかし，高台及び外底は露胎にする。器形，高台のつくりからすると前記分類Ⅰ・Ⅱと性格を異にするように思われる。底径は推算７cmを測る。

皿の１点はⅢ類に属すると思われる口縁部の小さい破片であった。以下，図と詳細については省略する。

(3) 染　付

染付は12点検出され，いずれも碗あるいは皿に属すると思われるものである。第13図25・26は前者の器形が想定されるもので，25は口縁部外面に波濤文帯，内面には界線が認められる。26は胴下半部の破片で外面に芭蕉文が認められる。

同図27・28は皿の底部と思われるもので，27は内底に「喜」と思われる吉祥字，28は瑞獣の足と思われる文様が認められる。

(4) 黒釉陶器

黒釉陶器は口縁部破片４点，底部破片２点が得られた。口縁部破片は４点のうち３点は分類Ⅱに属するもので，第14図１に１点を図示した。分類Ⅱから外れる１点については小破片のため分類は判然としない。

底部は分類Ⅰ－１点，Ⅱ－１点に大別され，前者を同図２，後者を同図３に図示した。

(5) 褐釉陶器

褐釉陶器は壺形が想定されるものを主に口縁部破片７点，底部破片８点が得られた。壺形口縁部を分類別に分けるとⅠ－３点，Ⅱ－３点，Ⅳ－１点に大別される。

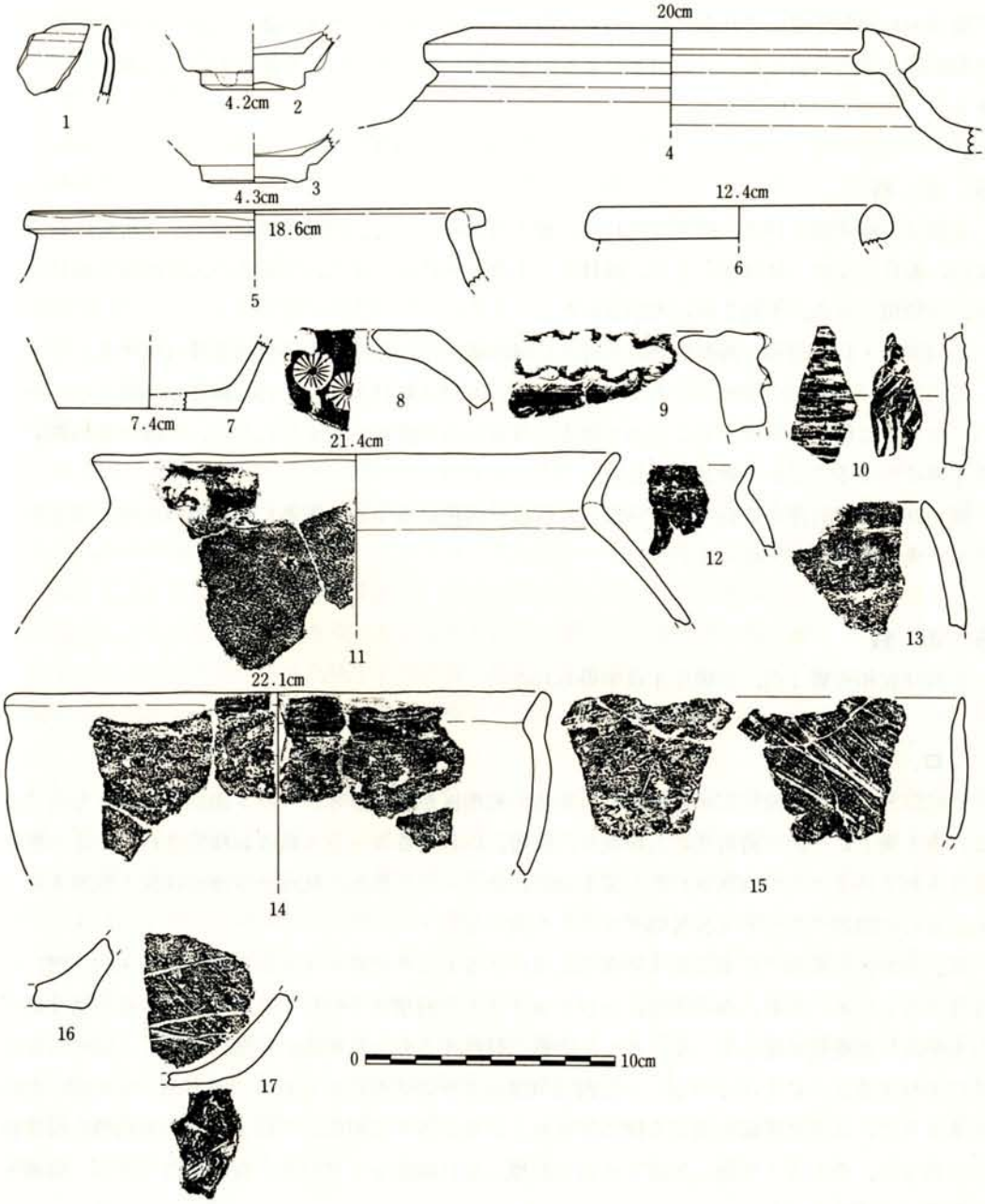
第14図４は分類Ⅰ，同図５は分類Ⅱ，同図６は分類Ⅳ，同図７は小型壺の底部と思われるものである。

(6) 瓦質土器

瓦質土器は分類Ⅰ－１点，Ⅱ－５点が検出された。第14図８はⅠに属すると思われる口縁部破片で口縁外面に17弁の菊花スタンプ文を配する。前記，分類Ⅱに属するものは口縁部破片３点，胴部破片１点が得られた。同図９は分類Ⅱに属すると思われる口縁部破片である。

(7) 陶質土器

陶質土器は20点得られた。うちわけは底部の破片２点，他は胴部破片であった。



第14図　黒釉陶器（1～3）、褐釉陶器(4～7)、瓦質土器(8、9)、陶質土器(10)、土器(11～17)

第14図10は胴部破片で外面に粗目の平行叩き，内面に羽状の叩きが認められるものである。他の胴部破片は内外面ともロクロ引きにより叩きを消している。特に外面においては調整も丁寧である。

(8) 土　器

土器は口縁部破片10点，底部破片12点，蓋１点が得られた。口縁部の分類別出土状況は壺Ｉ－２点，壺II－１点，鉢II ⓐ－１点，鉢II ⓑ－１点，鉢II ⓒ－２点，不明３点，底部は分類II－４点，分類III－６点，不明２点に大別された。

第14図11・12は壺形の器形が想定される口縁部破片で，11は壺Ｉ，12は壺IIに属する。

同図13～15は鉢形の器形になると思われるもので13は鉢II ⓐ，14・15は鉢II ⓒに属する。前記14については僅かに外反することから鉢Ｉに含まれる可能性も考えられたが，口縁内側傾斜部分を丁寧につくることから鉢II ⓒとした。

同図16・17は底部の資料で16は分類II，17は分類IIIに属する。後者17は分類IIIの中では立ち上がりが角度を有する方に入る。

(9) 古　銭

古銭は宜和通寶１点，小破片１点が得られた。

ロ，ＳＧＯＩ

前述のＳＬ０１の南に広がる地域で、東側の殿地区からのびるフラット面につながるものである。表土層下に一面に黄褐色の石粉混りの礫層，いわゆるコーラル敷面が検出され、一定の整地がなされていることが確認された。又本地区にはコーラル整地の状況や下層の状況を観察するため，ＳＧ01試掘グリッドとＳＸ03グリッドを設けた。

又、当地区の南側では南にある斜面部に移行するところで両サイドに石積をした入口（門）が発見されている。なお，南北方向にのびる両サイドの石積は平行して存在しない。東石積は切り石を使用し直線状に配している。そして南側に移行するにつれ地山の斜面に沿って，切り石を段状に平行するように下げている。一方西石積は小ぶりの切り石をもちい，南方向へは東側へ内湾するように，まさに道幅を減じる様に配されている。さらに斜面部では、前述の東石積の段状積とは異なり，そのまま斜面に配置する様に石積上面は傾斜をしている。なおこのことは、構築層にも違いが認められた。

東石積は当該地区に広がるコーラル整地面上に積み上げられているのに対し，西石積はコーラル敷面を割ってはめこむ様に造られて，時間差が明瞭に存在する。なお，東石積ではコーラル敷面の上に赤土が薄くかぶり，さらにその上にコーラル敷が認められ，当地で数回の修改築をおこなっている。

当石積遺構のさらに南方向，延長線上において，城門入口の石積が存在する。このことについては二次調査で説明する。

遺　物

(1) 青　磁

青磁は205点検出された。これを器種別に見ると碗81点，盤36点，皿15点，その他３点，器種不明70点であった。以下，特徴的なものを器種別に図示して略述する。

碗

碗は前述したように81点検出されたが，完形あるいは全体を図上復元できるものが得られなかったので口縁部，底部に大別して略述する。

口縁部

口縁部破片は前記分類のⅠⓐに属するもの１点，Ⅰⓑ－10点，Ⅲ－10点，Ⅳ－38点が得られた。

第15図１はⅠ－ⓐに属するもので薄い青緑の釉を施釉する。貫入は見られない。Ⅰ－ⓑに属するものは４点を同図２～５に図示した。２は凸文の蓮弁，３は篦彫りの剣頭蓮弁を描くものである。釉は２点ともオリーブ色を呈するが，前者はやや淡く粗い貫入も走る。

同図３・４は丸頭の蓮弁文を描くものである。３は個々の弁を丁寧に描くが，４は個々の弁が崩れている。釉は両者とも灰色味をおびた薄い緑色を呈する。

同図５は前記４の文様に類似するもので復元を試みた。口径は約14.5cm，器高は約18.4cm，底径約5.7cmを測る。第１層の出土。

同図６～８に図示した３点は器形からするとⅠⓑに属するが，文様が異なるもので外体部に篦刻文，内体部には草花文と思われる篦彫りが認められる。７・８は雷文帯が認められるもので，７は外体部に篦刻文，８は内面にも雷文帯になると思われる文様が認められる。釉は両者とも薄緑色を呈する。尚，口縁部外面に雷文帯の認められる資料は他にも２点得られた。

同図10・11はⅣⓐ，同図９はⅣⓑに属するもので，10・11は釉が淡いオリーブ色に発色する。11の釉は若草色で厚い。口径９は約17.5cm10で約12.5cm，11は約18cm，を測った。

同図12は口縁端部が著しく外反するもので体部に篦刻文を配する。前記Ⅱに含めることも考えたが，その他に属するものとした。釉は透明感のある薄い緑色である。

同図13は無文の直口口縁のもので，体部には削りの瞭線が認められる。釉は淡いオリーブ色を呈する。口径は推算14cmを測る。

底　部

底部は22点得られた。前記分類別に観察するとⅡ－３点，Ⅲ－４点，Ⅳ－４点，その他１点，不明９点に大別された。以下，各種の特徴的なものを図示して略述する。

第15図14はⅡに属するもので透明感のある薄いオリーブ色の釉を高台の外側まで施釉する。内底には印花文を配するが，文様の大半を欠くため構図は判然としない。底径は推算5.8cmを測る。

同図15・16はⅢに属するものである。15は高台のつくりが雑なもので外体部に細刻蓮弁文，内底には印花文が認められる。釉は淡い若草色で高台の裏側まで施釉する。底径は推算5.5cmを測る。

16はやや小ぶりの器形が推察されるもので，薄い褐色をおびたオリーブ色の釉を高台の外側まで施釉する。しかし，内底は円形状に露胎にしている。畳付には別の個体のものと思われる磁胎の付着が認められる。底径は約5cmを測る。

第16図1はIVに属するものでオリーブ褐色の釉を外底まで施釉するが，外底で輪状に釉を掻き取る。底径は推算7.5cmを測る。

同図2は一見分類IVに属するように見えるが畳付及び高台の内側に施釉しないことからその他としたものである。体部には篦彫り蓮弁文の下端，内底には花文が認められる。釉色は前者1と同じオリーブ褐色を呈するが，釉に粗い貫入と多くの気泡が見られる。底径は約5.5cmを測る。

不明とした資料には篦彫り蓮弁文が認められるもの2点とラマ式蓮弁文に類似する第16図3の1点が認められた。以下，詳細は省略する。

盤

この器種に属するものは28点得られた。これを前記分類別に見るとI－18点，II－6点，III－3点，その他1点に大別される。

Iに属するものは内面に細い蓮弁文を描くもの3点，丸彫りで蓮弁を描くもの3点，蓮弁の幅が1cm前後のもの2点が認められた。その他には文様が認められないもの2点，不明9点が認められた。第16図4～7に図示した。

IIに属するものは同図8に示した。内体部に1cm前後の弁幅を有する蓮弁文を篦彫りで描くもので，鍔にも縁に沿って篦彫り文を配する。

IIIに属するものを同図9に示した。口唇に快りを入れ波状にするもので内体部に蓮弁文，外体部には凸の蓮弁を意識したと思われる文様を配する。

同図10はその他としたもので断面図からすると分類のIに近い。しかし，器厚・内面の文様から別に扱った。

底　部

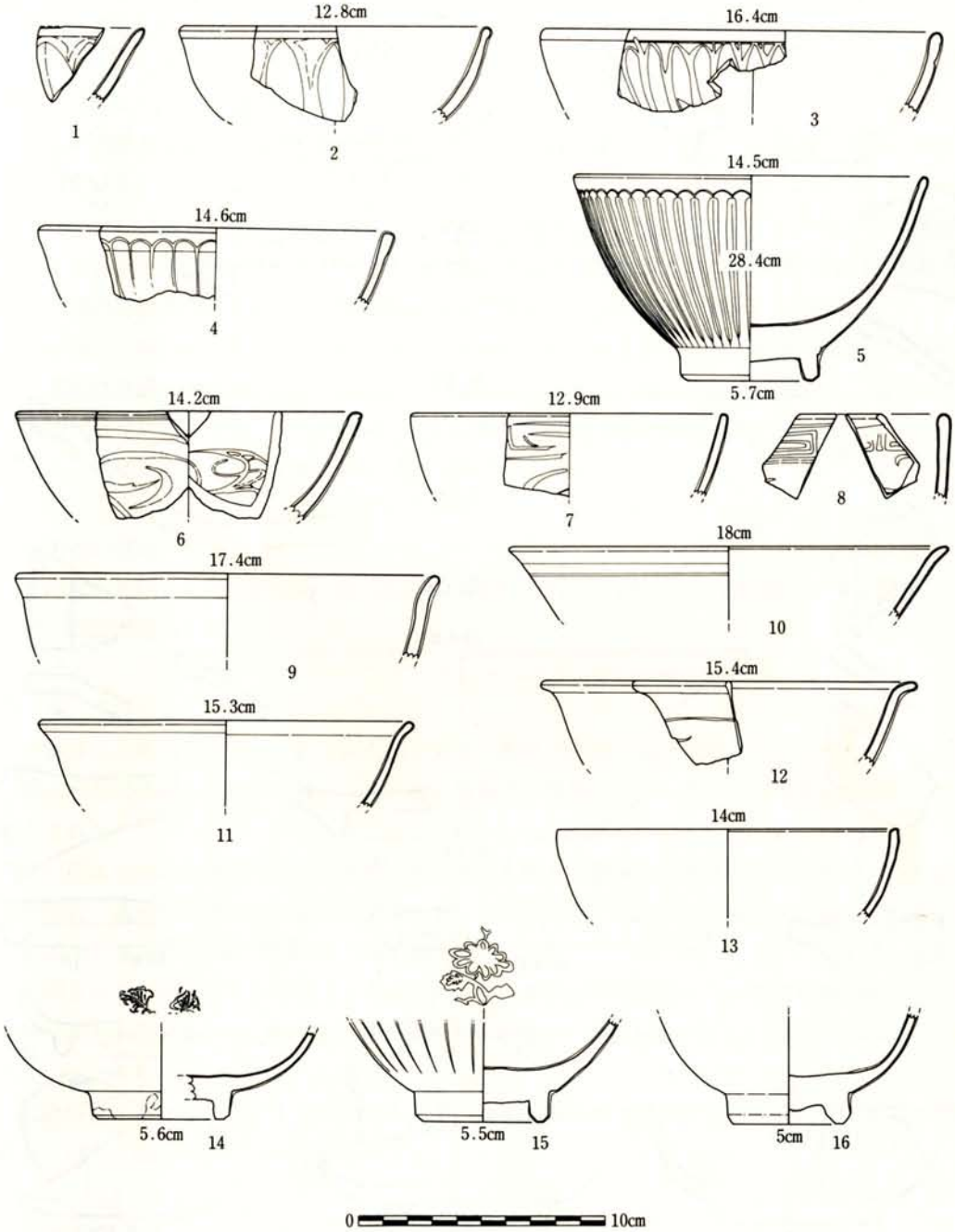
底部は8点得られた。前記分類からするとI－5点，II－7点，III－2点に大別された。第16図11～13に各種1点を図示した。11はI，12はII，13はIIIにそれぞれ属する。以下，詳細は省略する。

皿

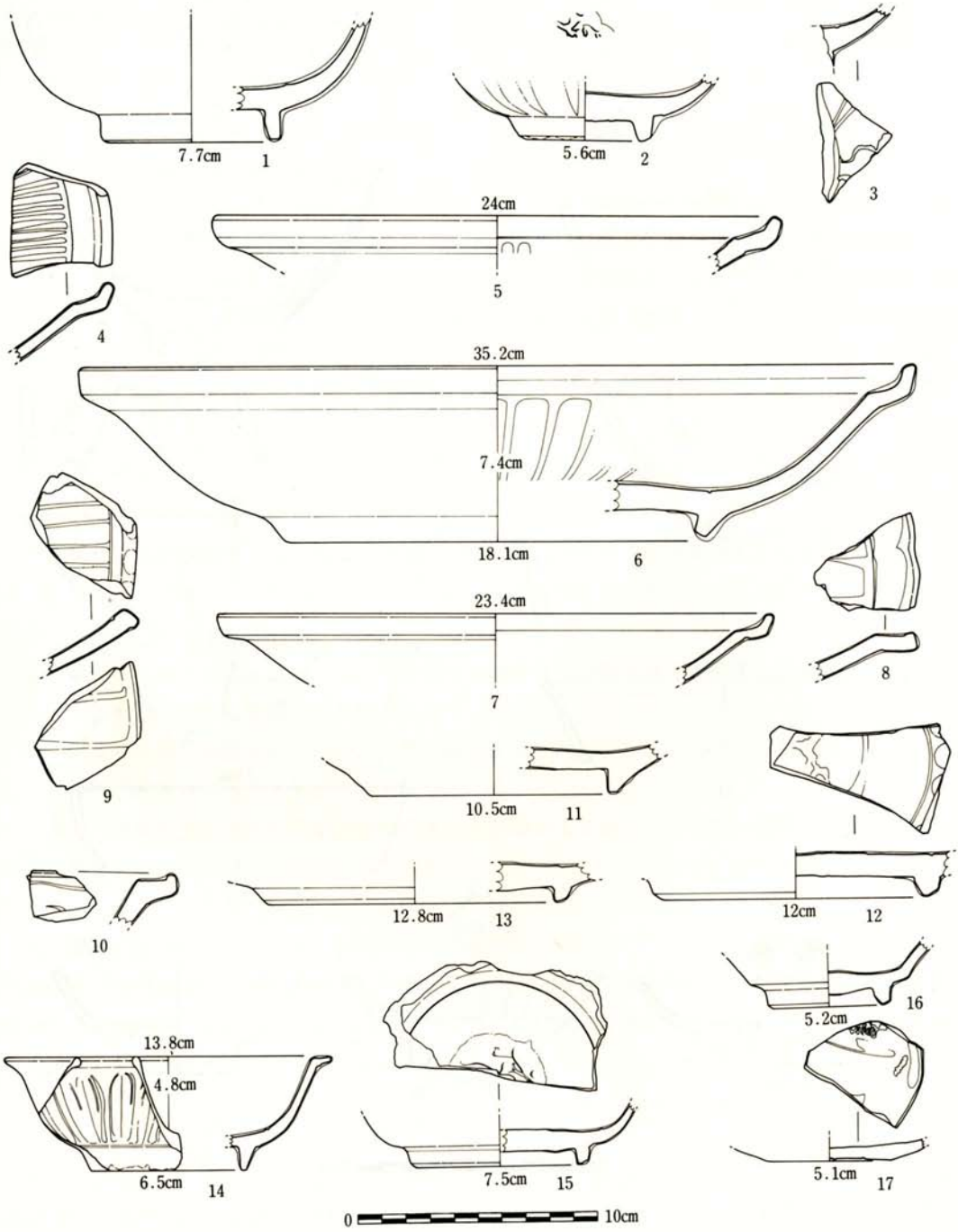
皿は口縁部破片9点，底部破片6点が検出された。分類別に見てみるとIⓑ－3点，IIⓐ－1点，IIⓑ－3点，IV－1点に大別された。以下，特徴的なものを図示して略記する。

口縁部

第16図14はIⓑに属するもので図上復元を試みた。外体部に凸文の蓮弁，内底には凸の圏線を配する。釉色は青緑色で外底部まで施釉する。しかし，畳付部分では掻き取っている。口径は約14.8cm，底径は約8.6cm，器高は約4.8cmを測る。


12.8cm
16.4cm
1
2
3
14.5cm
14.6cm
28.4cm
4
5
5.7cm
14.2cm
12.9cm
6
7
8
18cm
17.4cm
9
10
15.4cm
15.3cm
12
11
14cm
13
5.6cm
14
5.5cm
15
5cm
16
0
10cm

第15図　青　　磁


7.7cm
1
5.6cm
2
3
24cm
5
4
35.2cm
7.4cm
18.1cm
6
23.4cm
7
8
9
10.5cm
11
10
12.8cm
13
12cm
12
16
5.2cm
13.8cm
4.8cm
6.5cm
14
7.5cm
15
5.1cm
17
0
10cm

第16図　青　　磁

その他のものについては特徴的な資料が認められないので詳細を省略する。

底　部

底部は口縁部分類IIの底と思われるもの4点，口縁IVに属するもの1点，口縁V 2点，不明1点が得られた。

第16図15は口縁IIの底部と思われるもので内底に線彫りの文様を配する。しかし，文様構図は大半を欠くため判然としない。釉はオリーブ色で外底まで施釉するが，内外底は円状の露胎にする。内底の露胎部分には粗土の付着が僅かながら認められる。底径は推算7.5cmを測る。

同図16は口縁IVに属すると思われる底部である。釉は淡いオリーブ色で高台の裏側まで施釉する。底径は推算5cmを測る。

同図17はVに属するもので二次的に火を受け釉は半分以上剝がれている。釉は淡いオリーブを呈する。本地区試掘グリッド最下層（黒色土）の出土である。

その他の器種

その他の器種としたものは碗・盤・皿以外の器形が想定されるもので第17図1～3に図示した。以下，詳細は省略する。

(2) 白　磁

白磁は13点検出された。これを器種別に見ると碗8点，皿5点に大別された。

碗は前記分類のI－6点，II－1点，IIIに近似する器形のものが1点と分類Iが圧倒的に多く検出された。

第17図4は碗の分類IIIに近似するが，外体部に丸彫りの圏線と花文を配するもので，内外面とも白化粧し透明釉を高台の裏側まで施釉する。内底には小さな円の針り痕が二つ認められる。底径約20cm，底径約8.3cm，器高約7.7cmを測る。

同図5は青白磁に属する可能性も考えられるが一様白磁の項で扱った。器種が判然としないが皿的な器形が想定される。釉は畳付まで施釉するが畳付では釉を掻き取る。底径は推算8.5cmを測る。

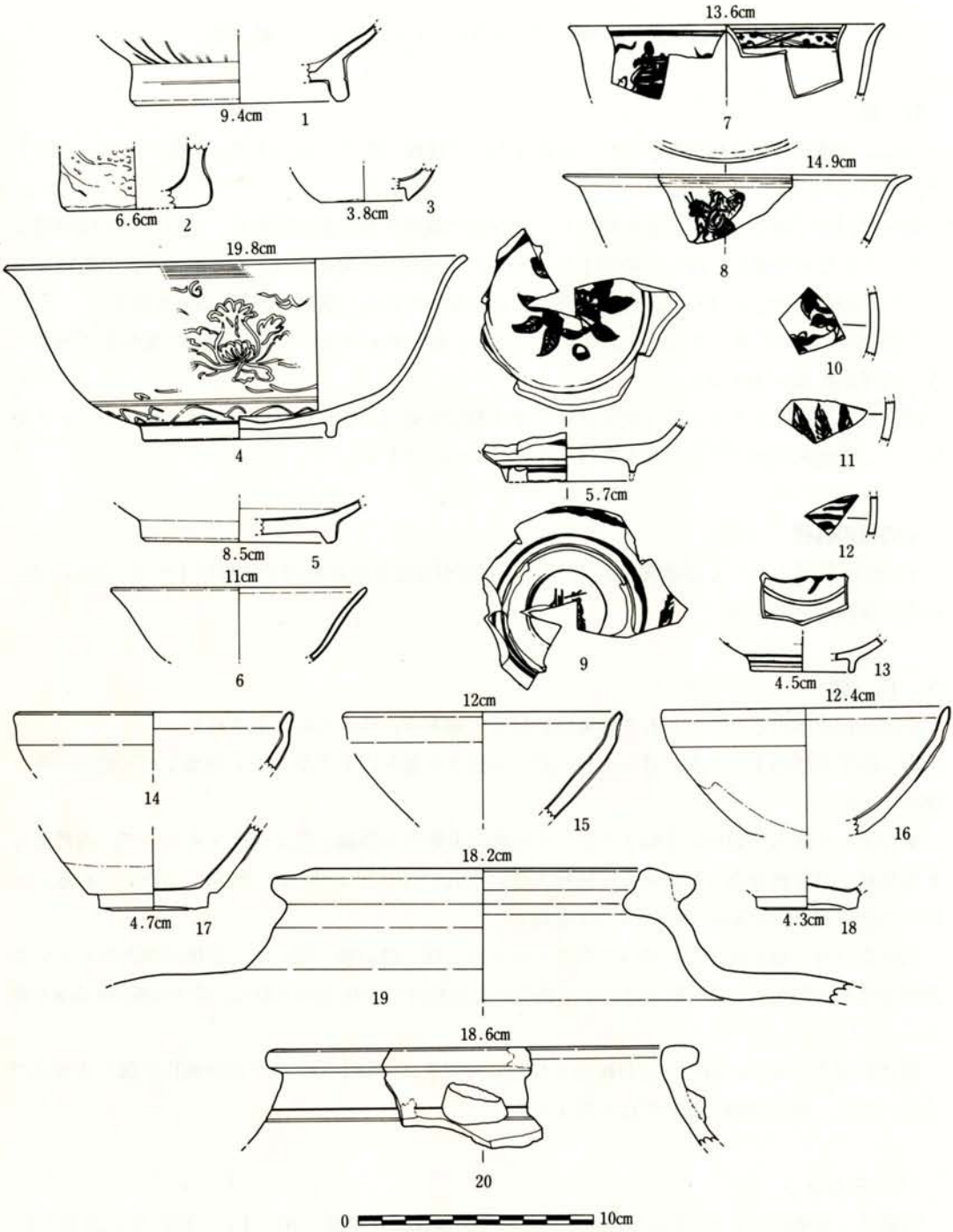
皿は分類I－4点，III－1点が検出された。同図6は分類I，同図7は分類IIIに属するものである。以下，皿の詳細については省略する。

ハ，ＳＸ０３

白磁は2点検出された。2点とも碗と思われる口縁部破片で碗分類のIに口縁形態は近似する。以上，図及び詳細は省略する。

(3) 染　付

染付は39点得られ，全て第1・2層の出土であった。器種を判別できる資料は少なく，判るものは碗のみであった。



第17図　青磁（1～3）、白磁（4～6）、染付（7～13）、黒釉陶器（14～18）、褐釉陶器（19、20）

第17図７は端反りの口縁部破片で，文様は外面口縁部に界線，体部には船形文，内面口縁部に四方襷文を描く。同図８も端反りの口縁部破片で口縁部内外面に２条の界線，外体部には馬士が認められる。

同図９は碗の底部と思われる資料で内底と外体部下方，高台部分に界線，内底に花弁，外底には「萬福攸同」状の文字が認められる。底径は推算5.2cmを測る。

同図10～13の４点は器種が判然としないもので，10は唐草文，11は芭蕉葉文，12はシャープ線とダミ技法の文様が認められる胴部破片，13は内外面に界線が認められる底部破片である。

(4) 黒釉陶器

黒釉陶器は口縁部破片５点，底部破片３点が得られた。口縁部は分類のⅠ－１点，Ⅱ－３点，Ⅲ－１点に大別され，底部は分類Ⅱのみ２点が得られた。

第17図14～16は口縁部の資料で14・15は分類Ⅱ，16は分類Ⅲに属する。同図17・18は底部の資料で17は二種の釉を施釉する。前記15・16は本地区試掘グリッドの出土である。

(5) 褐釉陶器

褐釉陶器は口縁部破片46点，底部破片33点が得られた。器種は口縁部破片で見るかぎり全て壺形であった。これを口縁分類別に分けるとⅠ－30点，Ⅱ－６点，Ⅲⓐ－３点，Ⅳⓐ－１点，Ⅳⓑ－４点，Ⅴ－２点に大別された。

第17図19は分類Ⅰ，同図20は分類Ⅱ，第18図１は分類Ⅲⓐ，同図２は分類Ⅳⓐ，同図３はⅣⓑ，同図４は分類Ⅴにそれぞれ属する。前記20には縦位に貼り付けたと思われる取っての根本が頸部に認められ，口唇部には白粘土の付着が認められた。

同図５～７の３点は底部の資料で５は分類Ⅰ，６は分類Ⅱに属すると思われる。７は分類のいずれに属するか判然としないが，可能性としては分類ⅢあるいはⅣに近似する。

褐釉陶器は壺形の頸部破片１点が得られた。図・詳細については省略する。

(6) 瓦質土器

瓦質土器は口縁部破片２点，底部破片１点が得られた。第18図８は15弁の菊花文をスタンプする口縁部破片で口唇部を幅広く成形する。分類Ⅰに属する。

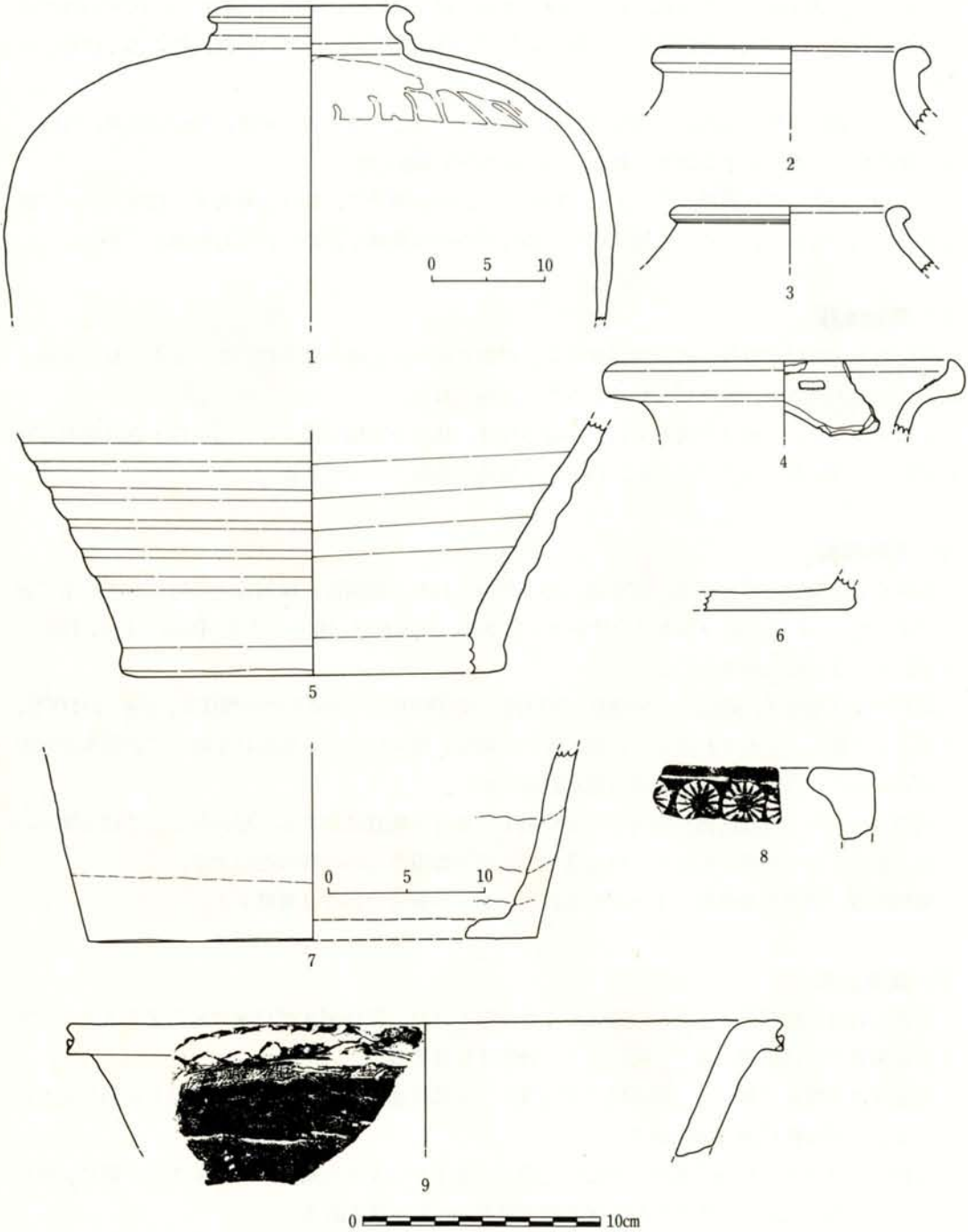
同図９は分類Ⅱに属する口縁部破片で口縁を「状に折曲し，縁部を１定間隔ごとにねじるものである。口径は推算30.3cmを測る。

第19図１は平底の資料で底径は約22cmを測る。胎土からすると前記９に近似する。底には成作時に設けた穴が認められることから保水用ではなかったと思われる。

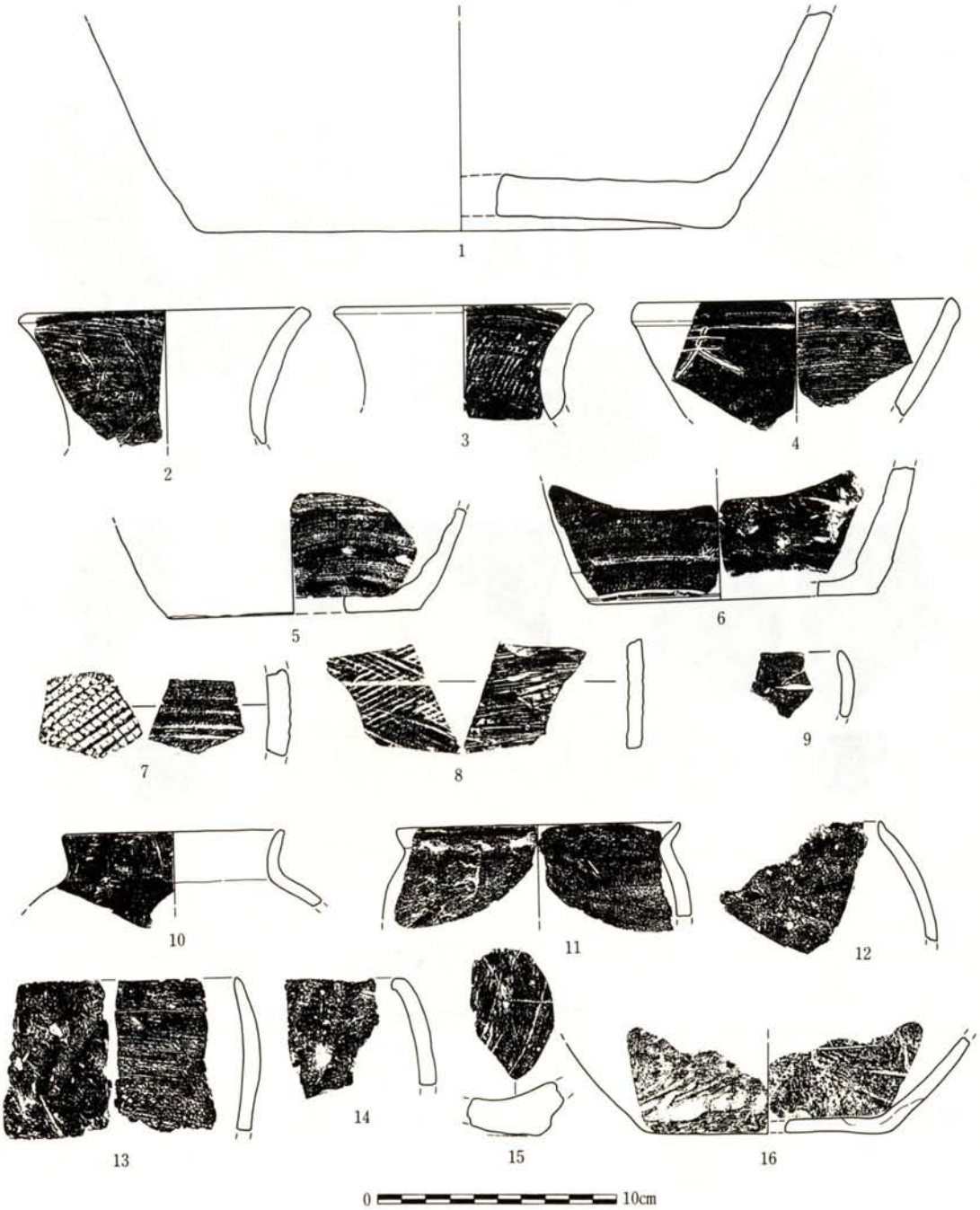
(7) 陶質土器

総数25点の陶質土器が得られた。口縁部の破片で見ると器種は壺形３点，碗形１点，器種不明に大別され，底部はⅠ・Ⅱとも各２点が得られた。以下，特徴的な資料について略記する。

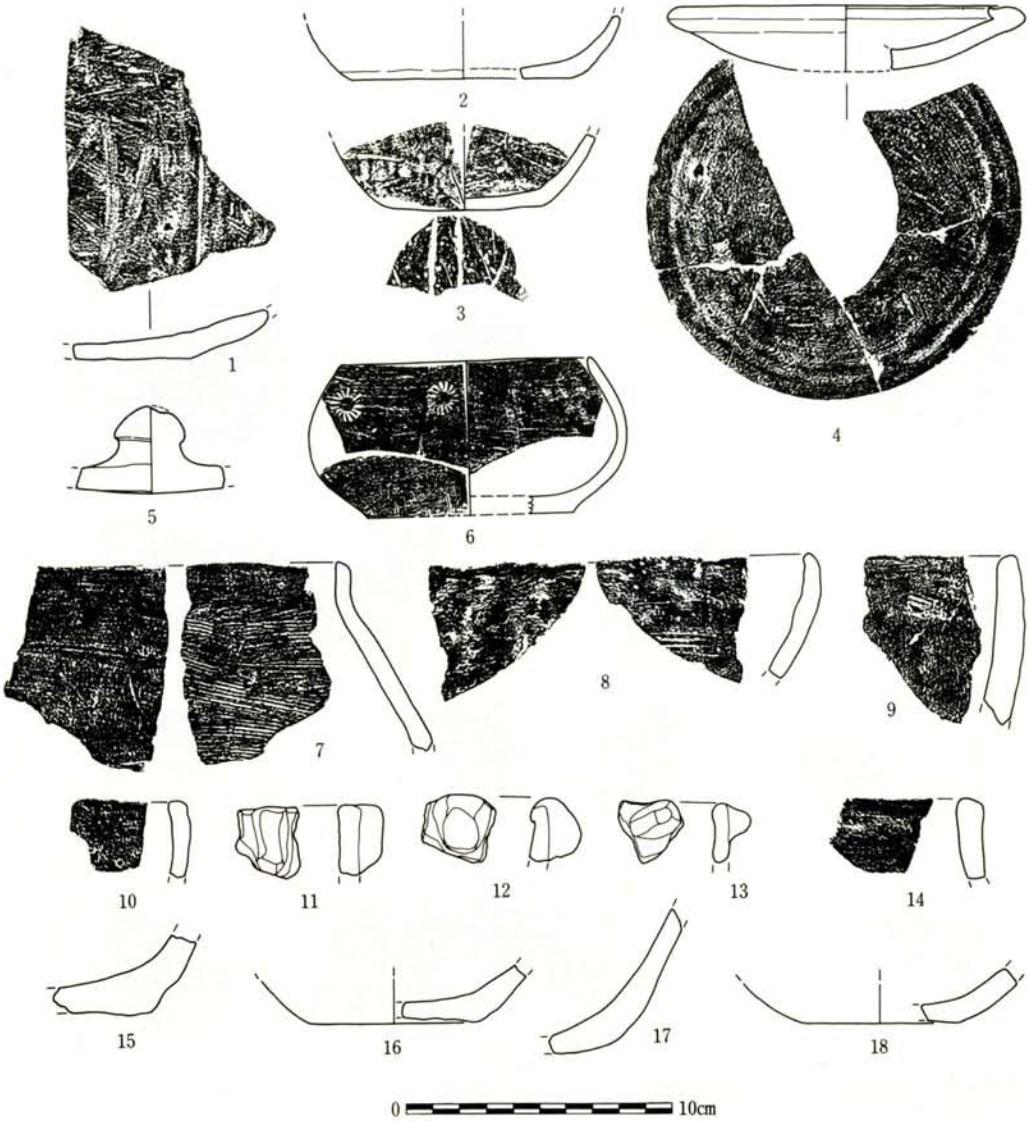
第19図２・３は壺型の口縁部破片で外反する。前者は口唇が方形状，後者は前者に比較して丸



第18図　褐釉陶器（1～7）、瓦質土器（8、9）



第19図　瓦質土器（1）、陶質土器（2～9）、土器（10～16）



第20図　土　　器

味を呈する。

同図4は碗形が想定される口縁部破片で口縁は断面三角形の玉縁状口縁を呈する。又，口縁外面には「夫」状の線彫りが認められる。本地区試掘グリッド最下層の出土（黒色土層）である。

同図5・6は底部の資料で5は立ち上がりがやや外湾するもの，6はほぼ垂直に立ち上がるものである。器面には成形痕が認められるが，外面では格子目状痕，数本の斜位凹線，叩きを撫で消すものの3種が認められた。内面は大半がロクロ引き等により消され判然としないが，6～9本を単位とする斜位凹短線の資料が3点認められた。色調は薄い灰青色から灰青色の範疇であるが，断面で観察すると中で赤褐色，内外面では灰青色のサンドヴィッチ状を呈する。出土状況はサンドヴィッチ状を呈するもの15点，灰青色一色のもの10点に大別された。

同図9は諸特徴から陶質土器とした口縁部破片である。口縁部は舌状を呈し，僅かに内傾する。外面には横位及び弓状の線彫りが認められる。

(8) 土　器

土器は口縁部破片30点，底部破片31点が得られた。口縁部の分類別出土状況は壺Ⅰ－7点，壺Ⅲ－2点，鉢Ⅱⓐ－8点，鉢Ⅱⓑ－3点，鉢Ⅱⓒ－1点，不明7点に大別された。

底部は分類Ⅱ－7点，Ⅲ－7点，不明17点に大別された。尚，詳細と図については省略した。

ニ，ＳＧ０１試掘グリッド

土器は口縁部破片59点，底部破片92点が得られた。

第19図10～12は壺形に属するもので，同図10は分類の壺Ⅰ，同図11は壺Ⅱ，同図12は壺Ⅲ，同図13・14は鉢形で前者は鉢Ⅱⓐ，後者はⅡⓑに属する。

同図15～19は底部の資料で，同図15は分類Ⅰ，同図16は分類Ⅱ，第20図1・2は分類Ⅲ，同図13はⅣ類に属するものである。前記2は小型の器形が想定されるもの，前記3は底部に二条平行の沈線文が認められる。

同図4・5は蓋の資料で，4は身の部分，5はつまみ部分の資料と思われるものである。胎土は他の土器と特徴を異にし胎土は細かく，焼成は良く堅緻である。

同図6は沖縄産の土器と胎土・文様・器形等，性格を異にする浅い碗形土器である。側面観は樽状で平底・平口縁である。口縁外面には菊花のスタンプ文を約4cm間隔で施文する。底部にはススの付着が著しい。口径は約9.5cm，底径は7.8cm,器高は約5.8cmを測る。コーラル整地層下位の黒色土より出土。

ホ，ＳＸ０３試掘グリッド

土器は口縁部破片24点，底部破片17点が得られた。分類別の出土状況は口縁部が壺Ⅰ－3点，鉢Ⅱⓐ－9点，鉢Ⅱⓑ－3点，鉢Ⅱⓓ－3点，不明5点，底部は分類Ⅰ－2点，分類Ⅱ－7点，分類Ⅲ－1点，不明7点に大別された。

第20図7は壺Ⅰに属すると思われるもので，内面体部には刷目状の器面調整痕が認められる。同図8～10は鉢Ⅱが想定されるもので，8・9はⅡⓐ，4はⅡⓑに細分される。前記9は中でも

特徴をやや異にするもので器壁は厚く，口唇部は丸味を呈する。

同図11～13は鉢IIⓓに属するもので瘤の形は11が方形，12は丸形，13は楕円とそれぞれ異なる。

同図14は器種が判然としない口縁部破片で口唇部は平坦に成形する。胎土に滑石を混入する。

同図15は底部分類Iとしたものでつくりは雑である。同図16・17は底部IIに属するもので，16は典型的な資料である。17は底の縁部が丸味を呈するものである。

同図18は底部IIIに属するもので胎土に滑石を混入する。

尚，底部の中で不明としたものに滑石を胎土に混入するもの2点が認められた。

第11表　ＳＧ０１（城門）古銭出土状況

層＼銭名	照寧元寶	元裕通寶	隆興元寶	嘉祐通寶	不明	計
表　土　層					4	4
第　2　層				1	1	2
第　3　層					1	1
第　5　層	1					1
西側第１層		1	1			2
ＳＧＯ１試掘黒色土層					1	1
計	1	1	1	1	7	11

へ，ＳＬ０２

南側城門地区の西端部で，外郭の自然の崖が西から南へめぐって一端おさまるところである。当初，伝承で城門が存在していたといわれた箇所であったが，発掘調査の結果，自然岩によくなじませる様に積み上げた切り石積の城壁が確認された。石積はやや布積に近く四方形の面をもつ石が主体に使用されている。本城壁の南に展開するが根石は急傾斜で下って検出されレベルの差が著しく，かつて城壁が高かったことが予想される。

遺　物

(1) 青　磁

青磁は122点検出された。これを器種別に分けると碗30点，盤24点，皿19点，その他の器種6点，器種不明43点に大別される。以下，碗から順に略記する。

碗

碗は口縁部破片23点，底部破片7点が得られた。口縁部の分類別の出土状況はⅠⓐ－1点，Ⅰⓑイ－2点，Ⅰⓑロ－2点，Ⅳⓐ－16点，Ⅳⓐ－2点に大別された。又，前記分類以外に輪花碗

の口縁部破片と思われる資料が1点検出された。以下、特徴的なものについて略記する。

第21図1は分類Ⅰⓑロに属する直口口縁の資料で雷文帯文を外面，内面には篦彫りを配する。釉は透明感のある薄緑色を呈する。

同図2・3は分類Ⅳⓐに属するもので端部は外反する。しかし，後者3は2に比較すると外反は弱く，釉は淡いオリーブ色を呈する。前者2の釉色は薄い緑色を呈する。

同図4・5は分類Ⅳⓑとしたもので大ぶりの碗が推察される。4は口縁部が著しく外反し，釉は淡い緑色を呈する。5は前者4よりも外反が弱いもので，釉は若草色を呈する。

同図6は輪花碗口縁部破片と思われるもので分類Ⅴに属する。釉は光沢のある薄い緑色を呈する。

底部は前述したように7点が得られた。これを分類別に見ると分類Ⅱ－4点，Ⅲ－1点，Ⅴ－2点に大別された。

第21図7は分類Ⅱに属するもので，内底部に菊の花と思われる花文を配する。釉は透明感のある薄緑色で高台外側まで施釉する。高台の削りは雑である。底径は推算6.7cmを削る。

同図8は分類Ⅲとしたもので，淡いオリーブ色の釉を高台内側の中途まで施釉する。底径は推算8.7cmを測る。

盤

これに属するものは口縁部破片18点，底部破片6点が得られた。その中の口縁部破片1点は図上復元が可能なものであった。分類別に口縁部を見ると分類Ⅰ－12点，Ⅱイ－1点，Ⅱロ－2点，Ⅲ－3点に大別された。

第21図9は分類Ⅰに属すると思われるもので，内体部にやや幅広の丸彫りと細刻を交互に描くものである。釉はオリーブ褐色を呈する。同図10は丸彫りの蓮弁文を内体部に描くもので，若草色の釉を施釉する。

同図11は分類Ⅱイ，同図12は分類Ⅱロに属すると思われるものである。12は稜を有する蓮弁文を外体部，内体部には外体部とは異なる稜をもつ蓮弁文を描く。鍔には縁に沿って篦彫りの文様を配する。釉は光沢のある若草色である。

同図13は分類Ⅲに属するもので図上復元を試みた。体部下方から外湾し口縁端部は僅かに外反する。釉は淡いオリーブ褐色で外底まで施釉する。しかし，外底では一部露胎部分も認められる。

底部破片は6点検出された。これを分類別に分けると分類Ⅰ－2点，Ⅱ－2点，Ⅲ－1点，その他1点に大別された。以下，その他とした第21図14の1点についてのみ略記する。

同図14は径の小さい高台をつくるもので，内外面に瞭を有する蓮弁文を描く。器面は小さく波状を呈する。釉はオリーブ褐色で外底まで施釉する。しかし，畳付部分では掻き取る。

皿

皿は総数19点得られた。その内訳は口縁部破片14点，底部破片5点で分類別状況は口縁部がⅠⓐ－1点（第21図15），Ⅰⓑ－3点（うち1点を同図16に図示），Ⅱ－1点（同図17），Ⅳ－6点（1点は瞭花皿）（うち1点を第21図17に図示した）であった。

底部は特徴的なものについて略記する。同図18は畳付外側の角を削るもので内底には印花文を配する。釉は淡い薄緑色で外底の中途まで施釉する。

同図19は底径推算4.9cmとやや小さな底部のもので高台は竹節状の高台をつくる。釉は薄緑で高台の外側まで施釉するが，内底は円状の露胎にする。尚，本標品は皿以外の器種になることも考えられる。

同図20は高台の畳付部分を円味に成形するもので，光沢のある薄緑の釉を畳付まで施釉する。底径は推算6.6cmを測る。

その他の器種

その他の器種は酒会壺の口縁部破片２点，蓋鍔部分の破片３点，蓋のつまみ部分と思われるもの１点が得られた。

第21図21に図示したものは底径が約３cmと小さい底部破片で，薄いオリーブ色の釉を外底まで施釉する。しかし，畳付部分は釉を掻き取り，内底では露胎にしている。盃あるいは壺・瓶の底部が推察される。

(2) 白　磁

白磁は12点検出された。これを器種別に見ると碗５点，皿３点，盃１点，器種不明３点に大別される。以下，器種別に略記する。

碗は分類IIに属すると思われる口縁部小破片，分類ＩあるいはIIに属すると思われる底部３点が検出された。第21図22・23は分類ＩあるいはIIに属すると思われる底部破片で前者22は幅広の高台をつくり外底を露胎にする。後者23は器形が一般的なものと異なり丸味を呈するもので，外底を露胎にする。又，内底も輪状の露胎にする。

皿は分類Ｉ－２点，IIIに属すると思われる口縁部破片１点が検出された。図及び詳細については省略する。

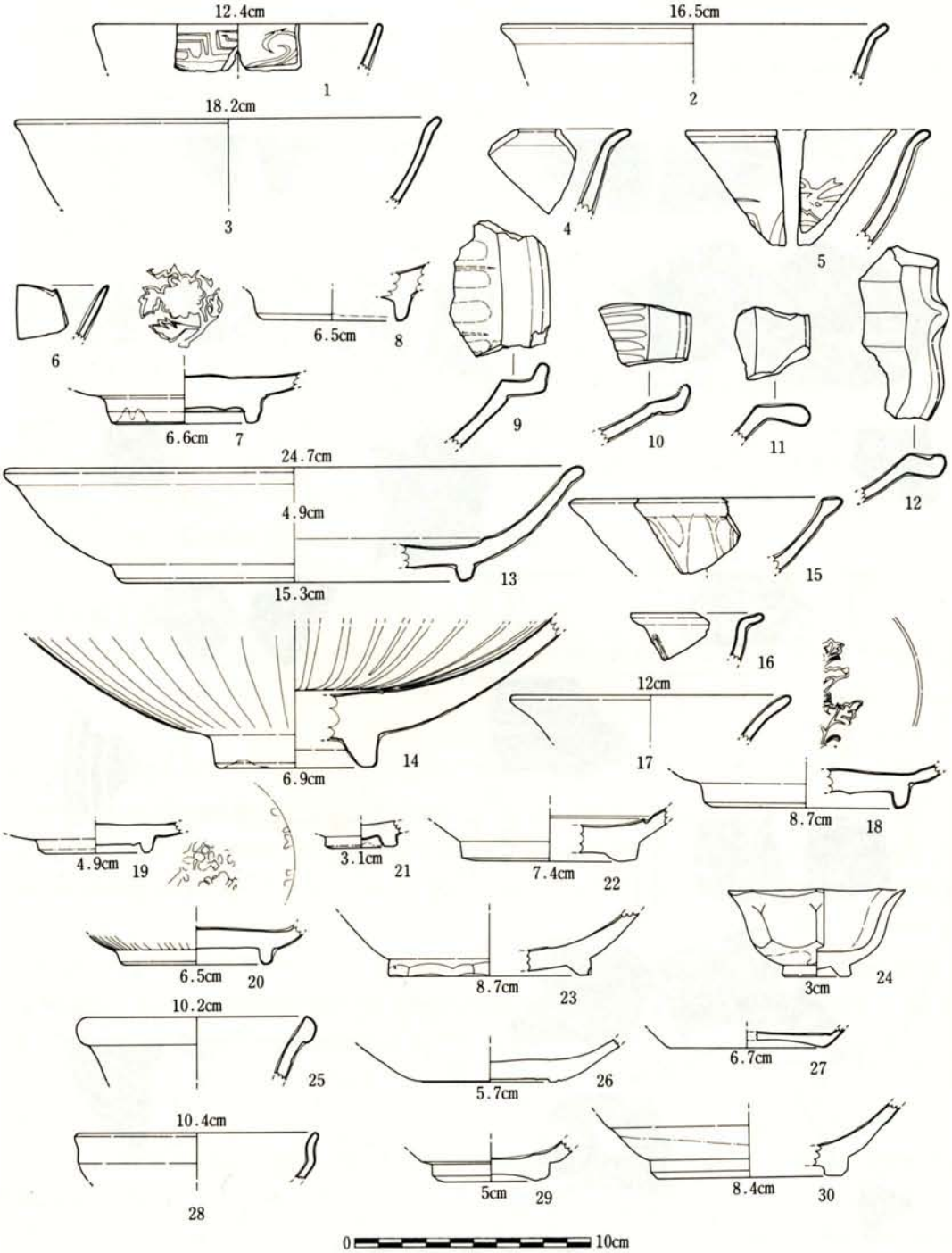
盃は八角盃が１点（第21図24）検出された。本標品は本遺跡の三次に渡る発掘調査の中の唯一の陶磁器完形資料で城壁の外側から検出された。口径は7.5cm，底径は３cm，器高は3.7cmを測る。

器種の判然としない破片は３点検出された。いずれも底部の資料で第21図26と同図27に図示した。26は碁笥状を呈するもので外底は露胎にする。底径は推算5.7cmを測る。27は平底であるが，中央にかけて弧を描く上げ底状を呈するものである。底径は推算6.6cmを測る。前記２点とも皿に近い器形が想定される。尚，後者については口禿皿の底に近似するようにも見える。

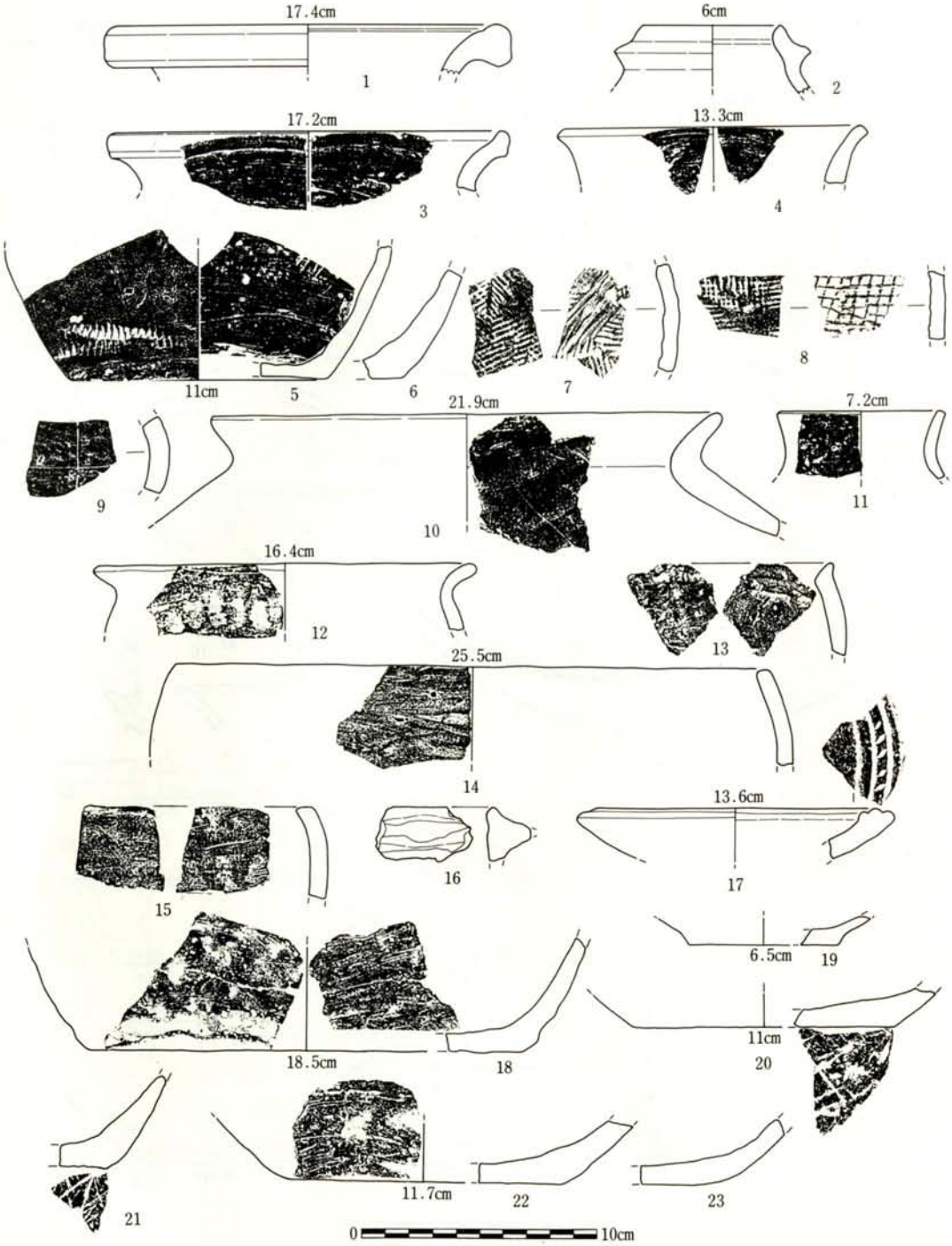
(3) 染　付

染付は破片のみ６点が得られた。いずれも小破片のため器種・文様構図は１点を除き判然としないが，部位で見ると口縁部破片２点，胴部破片２点，底部破片２点に大別された。

前記，器種をある程度推察できるものは碁筒底で芭蕉葉文を描く皿と思われるものであった。図及び詳細については省略する。



第21図　青磁（1～21）、白磁（22～27）、黒釉陶器（28～30）



第22図　瓦質土器（1、2）、陶質土器（3～9）、土器（10～23）

(4) 黒釉陶器

黒釉陶器は口縁部破片１点，底部破片４点が得られた。これを分類別に見ると口縁部II－１点，底部II－３点，その他１点に大別される。

第21図28は口縁部破片で分類II，同図29・30は底部破片で29は分類II，30はその他としたものである。30は碗底状の高台をつくり，内底には方形状の重ね焼の付着痕が認められる。底径は推算8.4cmを測る。

(5) 褐釉陶器

褐釉陶器は壺形の口縁部破片６点と底部破片４点，器種が判然としない口縁部破片１点の計11点が検出された。これを口縁分類で分けると分類Ⅰ－３点，II－１点，III－１点，Ⅴ－２点に大別された。

第22図１は分類Ⅴに属するものと考えるが，口縁端部のつまみ上げは弱く円味を呈する。

同図２は器種不明としたものであるが，口縁が内傾する点から壺形に属すると思われるもので口縁直下は鍔状の凸帯にする。口径は推算６cmを測る。

(6) 瓦質土器

瓦質土器は分類IIに属すると思われるものが１点のみ得られた。しかし，小破片のため図及び詳細については省略する。

(7) 陶質土器

陶質土器は27点得られ，部位の内訳は口縁部２点，胴部22点，底部３点であった。

第22図３・４は壺形が想定される口縁部破片で３は口縁が逆「く」の字状に折曲するもの，４はやや長頸壺が想定されるもので口縁は外反する。口径は前者が約17.2cm，後者は約13.3cmを測る。

同図５・６は底部の資料で立ち上がりが外湾する平底である。前者５の底径は約11cmを測る。

同図７～９の３点は胴部破片で７は内外面に有軸羽状叩き，８は内面に格子目状叩き，９は外面にクロスするシャープな沈線が認められる。

(8) 土　器

土器は口縁部破片88点，底部破片101点が得られた。器種は口縁部で観察する範囲では壺と鉢，蓋の資料が得られた。

口縁部破片の分類別出土状況は壺Ⅰ－16点，壺II－16点，壺III－２点，鉢II ⓐ－37点，鉢II ⓑ－18点，鉢II ⓓ－１点であった。第22図10・11は壺Ⅰとしたもので，11は小型で作りは丁寧である。同図12は壺II，13は壺IIIとして扱った。

同図14～16は鉢形としたもので14は鉢II ⓐ，15は鉢II ⓑ，16は鉢III ⓓにそれぞれ属すると思われる。後者16は外耳あるいは鍔状凸帯が想定されるもので凸帯の下方は黒味を呈する。

同図８は蓋と思われる資料である。今帰仁城跡の出土例からすると皿状の器形で凹面につまみ

が付くと推察される。

底部は分類Ⅰ－7点，Ⅱ－22点，Ⅲ－45点，不明27点が得られた。同図18・19は分類Ⅰ，同図20・21は分類Ⅱ，同図22・23は分類Ⅲとして扱ったものである。その中でも19は形態がやや異なるもので，底径は約6.5cmを測る。底径を推算できるものは他に3点あり，18は約18.5cm，20は約11.2cm，22は約11.8cmを測った。

(9) 古　銭

古銭は城壁の上にかぶさった土より寛永通寶1点と文字の判読困難な破片が2点得られた。

ト，埋葬人骨と堆積層

人骨は前述のＳＷ０１城壁普請の様子を確認するため，城壁裏（内）側に試掘を入れた結果検出されたものである。その位置は壁側から3ｍ，地表下約3ｍを測り，堆積層は埋葬人骨まで8枚をかぞえる。

以下埋葬人骨までの堆積層を記し，つづいて出土状況について説明する。

第Ⅰ層　ニービ土層(客土)。北の広場地域に厚くみられるものであるが，本調査地までおよび広い分布がある。ただ当グリット地区では末端にあたり層厚は薄くグリット南の傾斜面側では残っていない。近年になって客土されたものである。

第Ⅱ層　石灰岩礫混り土層。第Ⅰ層の客土以前は，当層が表土をなしていたものである。旧表土層である。

第Ⅲ層　黒褐色土層，層厚約60cmを測る。南方向に傾斜して堆積している。

第Ⅳ層　石灰岩礫層。層の厚さが約2ｍ，層中の礫の状態から三つに細分層される。

ⓐ層　石灰岩礫混り粉石土層（コーラル）で北側壁で90cmと最も厚く，南側へ傾斜をする。ただ南壁側まではおよんでいない。

ⓑ層　拳大の石灰岩礫層である。本層は水平堆積し安定しているが，南側壁のみに下部に厚くみられる。

ⓒ層　石灰岩塊層。人頭大の石灰岩を中心とし礫間に間隔が存する。層厚平均60cm。層は若干南側に傾斜している。なお東壁のみにコーラルが薄く部分的に認められたが本層に含まれた。

第Ⅴ層　黄色粘土層，2.30m×1.70mの範囲にレンズ状に堆積している。人骨の上位に位置し覆うようにみられるが，正確には若干，当該層が南側へずれたかたちになっている。

第Ⅴ層　黒色土層。地形に沿う様に，北東側が60cmと厚く，対する南西側が10cmと薄くなる。人骨は当層を掘り込んで埋葬している。

第Ⅵ層　赤色土，地山面はほぼ水平に位置している。

埋葬人骨

埋葬人骨は，人骨底面からの観察によって土壙の大きさが，人骨ぎりぎりのかたちで掘り込ま

れていることが知られた。人骨の下部には3～15cm台の石灰岩礫を密に敷きつめてあるが，特に人骨の頭部付近は親指丈の小さな礫を敷いた状態にあった。又人骨の周囲は，拳大の石灰岩礫が配されている。覆土は土壙と同じ黒色土でなされ，さらにその上に，第Ⅴ層とした黄褐色の粘土で封土されている。

人骨の遺存状態は良好で，右大腿骨は確認されなかったがほぼ完全体で検出されている。人骨の葬位はN60° W，仰臥屈葬で，顔は横向きである。特徴的なのは，人骨が両腕，両脚を胴体に密着するまで強く折り曲げられている点である。副葬品は認められなかった。佐野一教授の所見では①骨格のしっかりした20歳前後の女性で，身長が150cm程である。②この状態はひとつに死後硬直開始前に緊迫した可能性が考えられることを述べておられる。

チ，Ｊｈ試掘グリッド

ＳＬ01の前にあるフラット面の層の状況を観察するため設定した試掘グリッドで，ＳＬ01の中央より西側に位置するところの石段の下方から南側に約1.5m幅で設定した。尚，本グリッドの下層南端では野面積みの石灰岩が検出されたが，それが人工的なものになるかは判然としなかった。

遺　物

(1) 青　磁

青磁は89点検出された。これを器種ごとの出土状況で大別すると碗51点，盤8点，9点，その他の器種1点，器種不明20点に分けられた。以下，器種別に略記する。

第12表　Ｊｈ試掘 Grid グリッド　青磁碗口縁部分類別出土表

分類 / 層位	I ⓐ	I ⓑ	II	III	IV	不明	計
第　1　層	5				13	4	22
2				1	8		9
3	4				10	1	15
4	1						1
計	10			1	31	5	47

碗

碗は口縁部破片47点，底部破片4点が得られた。口縁部破片の分類別出土状況は第12表に示したとおりである。

第23図1・2は分類Ⅰⓐに属する資料で，1は弱い稜を有する蓮弁文を外面体部に配し口縁端部が僅かに内傾する。2も稜を有する蓮弁文を描くもので，釉は薄い緑色を呈する。

同図3・4はやや小ぶりの碗形が想定されるもので篦彫りの蓮弁文を描く。釉は透明感のある

淡いオリーブで諸特徴も一致することから同一個体と思われる。分類Ⅰⓑとして扱った。

同図5は分類Ⅲとしたもので口縁部は僅かに肥厚する。釉は淡いオリーブ色を呈する。

分類Ⅳに属するものは31点得られたが，うち3点を同図6～8に図示した。

底部は4点得られた。それを分類別に見ると分類Ⅰに属すると思われるもの1点，分類Ⅱに属するもの3点に分けられた。

同図9に図示したものは分類Ⅰに属すると思われるもので，オリーブ褐色の釉を高台外側まで施釉する。底径は推算5.3cmを測る。第3層の出土である。

同図10は分類Ⅱに属するもので，若草色の釉を高台外側まで施釉する。底径は推算6.5cmを測る。第3層の出土。

同図11も一様，分類Ⅱとして扱ったものである。底径は約4.9cmと径がやや小さく，胴下部が張るように外湾する。釉は透明感のある薄い緑色で高台外側まで施釉する。内底には指先ほどの凹が認められる。底径は推算4.9cmを測る。第3層の出土。

盤

盤は口縁部破片7点，底部破片1点が得られた。口縁部の分類別出土状況はⅠ－4点，Ⅱⓐ－1点，Ⅱⓑ－2点に大別された。

第23図12・13は分類Ⅰとしたもので，12は篦彫りの蓮弁文を内部に描く。釉はオリーブ褐色を呈する。第1層の出土。13は丸彫りの蓮弁文を内体部に描くもので，釉はオリーブ褐色を呈する。

同図14は碁筒底で内体部に蓮弁文を描くもので分類Ⅰに属する。釉は淡い若草色で外底の内側まで施釉する。底径は推算11.3cmを測る。第3層の出土。

分類Ⅱⓐ，Ⅱⓑに属する資料については鍔部分の小破片のため記述，実測図とも省略した。

皿

これに属するものは口縁部破片4点，底部破片5点が得られた。以下，特徴的なものについて略記する。

第23図15は分類Ⅰⓑに属すると思われるもので，外体部に凸文の蓮弁を配する。釉はやや透明感のあるオリーブ色である。口径は推算12.2cmを測る。

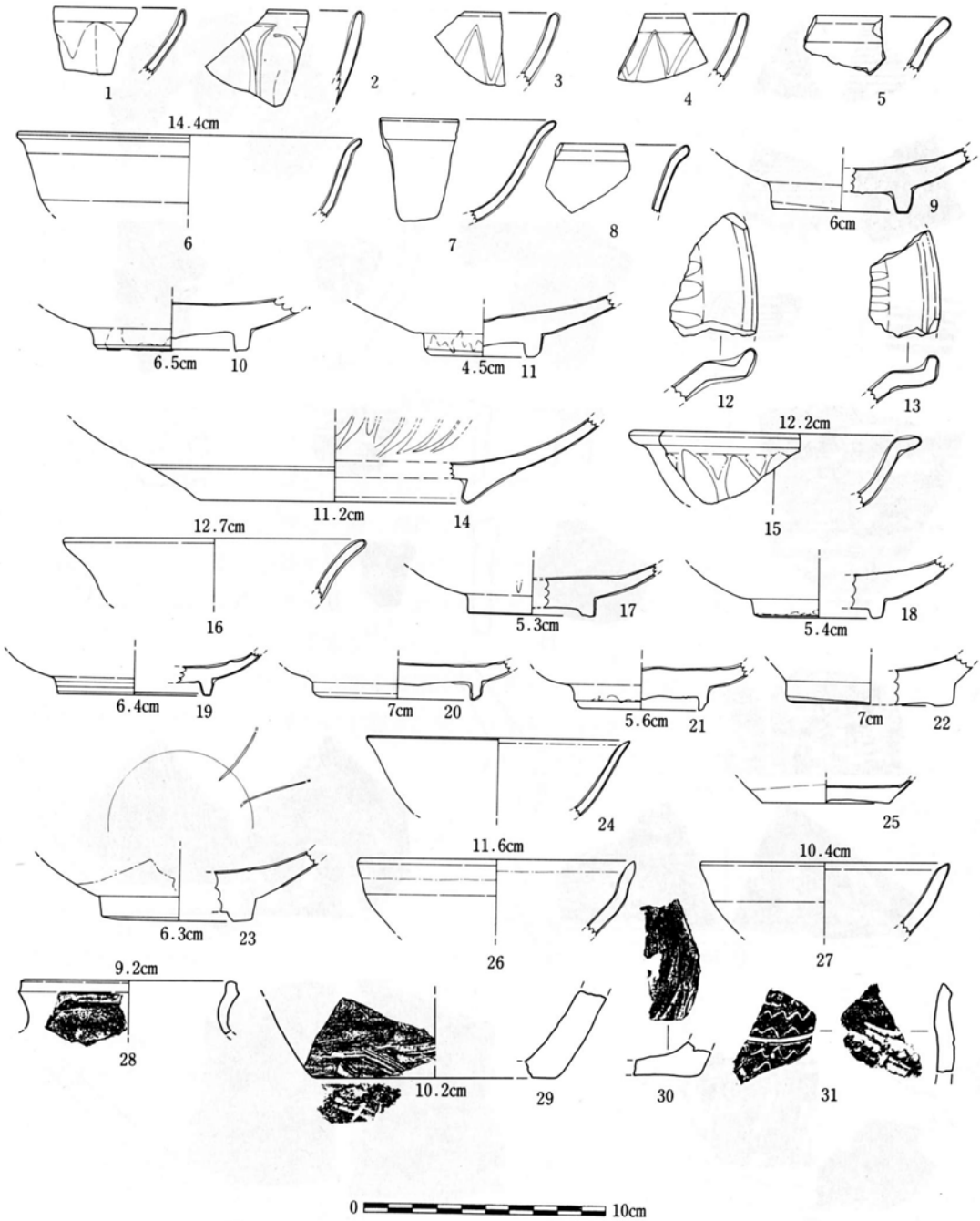
同図16は分類Ⅳに属する2点の中の1点で，釉は淡いオリーブ色を呈する。口径は推算12.6cmを測る。

尚，分類Ⅱⓑと Ⅲ類に属する資料については小破片のため図・詳細とも省略した。

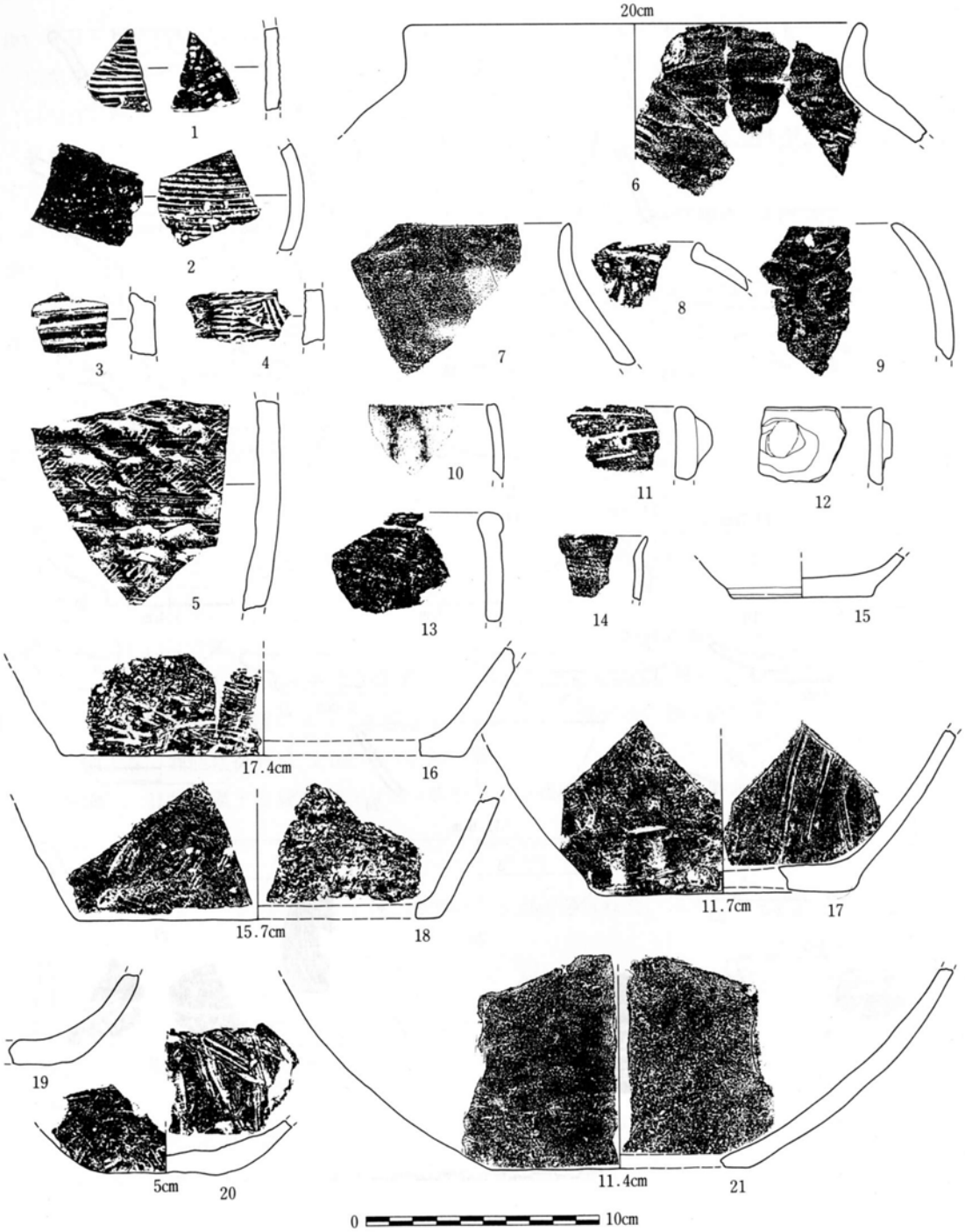
底部は高台の断面が方形状を呈するもの3点，畳付外側の角を削るもの3点，竹節状にするもの2点に大別された。

第23図17・18は高台内側の削り出しが浅いもので，17は淡いオリーブ色の釉を高台の外側まで施釉する。しかし，内底は輪状の露胎にする。第3層の出土である。18は透明感のあるオリーブ褐色の釉を高台外側まで施釉するもので，底径は約6.5cmを測る。

同図19は高台の断面が方形状を呈するもので，透明感のある薄い緑色の釉を高台の内側まで施釉する。内底には凸の圏線を配する。底径は推算6cmで第1層の出土である。以上の3点は前記



第23図　青磁（1～21）、白磁（22～25）、黒釉陶器（26、27）、陶質土器（28～31）



第24図　陶質土器（1～5）、土器（6～21）

17のように高台断面が方形状を呈するものであった。

同図20は高台畳付の外側を削るもので，淡いオリーブ色の釉を外底まで施釉する。しかし，外底中央部分では掻き取る。底径は推算5.6cmを測る。

同図21は高台を竹節状にするが部分的に崩れているものである。体部下方には篦彫りで描いたと思われる蓮弁文の下端部が認められる。内底には凸の圏線も認められる。底径は推算7cmを測る。第3層の出土。

その他の器種は壺の蓋の鍔部分の破片と思われるものが1点検出された。

(2) 白　磁

白磁は28点得られ，これを器種に分けると碗の口縁部破片17点，底部破片2点，皿の口縁部破片5点，器種不明の口縁部破片1点，底部破片3点に大別された。

碗の口縁部は分類Ⅰ－12点，Ⅱ－5点が得られ，底部は2点とも体部下方を露胎にするものであった。第23図21は底径約7cmを測るもので，やや幅広い高台をつくる。しかし，外底部の削りは非常に浅い。この種の底部は玉縁口縁碗に多いように思われるが判然としない。同図22は内底に放斜状に広がる線彫りが認められるもので，底径は推算6.3cmを測る。

皿は分類Ⅰ－4点，Ⅲに属すると思われる口縁部小破片1点に大別された。第23図23は分類1の口禿皿に属する4点の1点である。

器種不明とした3点の底部は分類Ⅰに属すると思われる底部の資料で1点を第23図24に図示した。底は外底の中央部分が僅かに上がり，底径は推算5.3cmを測った。

(3) 黒釉陶器

黒釉陶器は口縁部破片のみ8点が得られた。分類別に見るとⅠ－1点，Ⅱ－2点，不明4点に大別された。

第23図25・26は分類Ⅱに属すると思われるものである。しかし，分類Ⅰについては小破片のため図・詳細とも省略した。

(4) 褐釉陶器

褐釉陶器は口縁部破片2点，底部破片2点が得られた。いずれも壺形に属すると思われるもので口縁部は分類Ⅰ－1点，Ⅲ－1点に大別された。出土層位は第3層以上で第3層で1点，第2層で2点，第1層で1点であった。図と詳細については省略する。

(5) 瓦質土器

瓦質土器は分類Ⅱに属すると思われる口縁部小破片1点が得られた。器色は内側とも橙褐色である。尚，図と詳細は省略する。

(6) 陶質土器

陶質土器は39点が得られた。その内訳は口縁部1点，胴部34点，底部4点であった。

第23図27は壺形と思われる口縁部破片で口縁は逆「く」の字状に折曲する。同図28・29は底部の資料で，28は立ち上がり外湾するもの。29は底の部分を僅かに上げるものである。立ち上がりについては判然としない。

同図30は波状沈線文が認められる胴部破片で内面には格子目叩きが認められる。この種の胴部片は他にも２点得られた。第24図１～５の５点も胴部破片で５は外面にほぼ平行凹線の叩き，６は内外面に細かいロクロ引き痕，７は横走する凹線，８は扇形状の凹線痕，９は楕円形の中に斜位沈線のあて貝痕（？）が認められる。

(7) 土　器

土器は口縁部124点，底部183点が得られた。分類別の出土状況を第13表と第14表に示した。

第24図６・７は壺Ⅰとしたもので，後者７は頸部の折り曲げが弱く，なで肩状を呈する。同図８は壺Ⅲに属すると思われるものである。壺Ⅱに属すると思われる資料については小破片のため図・詳細とも省略した。

同図９～14は鉢形が想定されるもので，９は分類Ⅱⓐ，10～13はⅡⓑ，14はⅡⓒに属すると思われるものである。前記11・12は瘤の貼り付けが認められるもの，13は出土例が少ないもので口縁の内側が肥厚する。

第13表　Ｊｈ試掘グリッド　土器口縁部器種・分類別出土表

器種 / 分類 / 層位	壺			鉢						不明	蓋	計
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ				Ⅲ			
					ⓐ	ⓑ	ⓒ	ⓓ				
第　1　層					1							1
2					2					2		4
3	11	7	3		40	12	2	2		32	1	110
4	2		1		2	1				3		9
5	1	2			5	2		2		2		14
計	14	9	4		50	15	2	4		39	1	138

底部は15～21に図示した。15・16は分類Ⅰに属すると思われるもので丁寧な作りの15とやや雑な仕上げの16を図示した。同図17・18は分類Ⅱに属するものである。２点とも胎土に石灰岩砂と貝片が多量に認められる。同図19・20は分類Ⅲに属すると思われるもので後者20は底計推算６cmとやや小さい。同図21は分類Ⅳに属すると思われるもので胴下半部は丸座に張る。底計は推算11.2cmを測る。

蓋は縁の部分が得られたが，小破片のため省略した。

第14表　Jh試 Grid 土器底部分類別出土表

分類 / 層位	I	II	III	IV	不　明	計
第　1　層			1		1	2
2			2		1	3
3	13	29	53		76	171
4		1	6	1	2	10
5		1	2		3	6
計	13	31	64	1	83	192

C，ＳＦ０１地区

イ，ＳＦ０１

カンジャー地区より西へ約35mの場所で，南側の縁端部あたりにグリットが設定された。発掘の結果，崖縁に沿った石塁遺構が検出されている。(本地区の北側地はかつて採石により大きく抉り取られたところである。)

植樹等による破壊もみられるが，当城郭内遺構としては保存が良いものである。当遺構は石灰岩粉石混り土層（コーラル）面に比較的扁平の石灰岩を積み上げたもので，石垣の幅は，1.20m～1.40mを測る。石垣の内側面は自然面を有するもので構成され，外側面は切り石面をもってなされている。やや布積に近い面をもつ部分もあるが主として雑面をなしている。

出土遺物に瓦類も多く認められ，それらが使用された遺構が存在していたことが十分推定されるところである。

遺　物

(1)　青　磁

青磁は292点検出された。これを器種ごとに大別すると碗167点，盤51点，皿30点，その他の器種34点に分けて略記する。

碗

碗は完形及び図上復元可能な資料は得られなかったので，口縁部と底部に分けて略記する。

口縁部破片は145点検出され，これを分類別に分けると分類Ⅰ ⓐに属する資料は６点，Ⅰ ⓑ－４点，Ⅱ－３点，Ⅲ－32点，Ⅳ－99点に大別された。第26図１・２は分類Ⅰ ⓑに属すると思われるもので前者１は篦彫りの蓮弁文，後者２は細蓮弁文が認められる。釉色は前者の場合，透明感のある薄い緑色，後者は淡い緑色を呈する。同図３・４は分類Ⅱに属するが口縁の外反は弱いもので，３は篦彫りの蓮弁文を配する。釉色は薄い緑色，口径は推算19.7cmを測った。４は篦描き

の蓮弁文を配するもので，釉は淡い薄い緑色，口径は推算15.7cmを測った。分類IIIに属するものは肥厚形態の異なる2点を図示した。同図5は口縁部がカマボコ状に肥厚するもので，釉色は淡い薄緑色を呈する。同図6はスムーズに肥厚するもので肥厚の具合は前者より僅かに見える。本標品は裏面にのみ篦彫り文が認められるが構図は判然としない。釉はやや青味を呈する緑色である。同図8～11の4点は分類IVに属するもので，8は口縁端部が著しく外反する。釉色は淡く薄いオリーブ色を呈する。口径は約15cmを測った。9は前者に比べ外反が弱いもので，口径は約15cmを測る。10は口縁が外反するものである。口径は約17.8cm，釉色は淡い緑色である。11は口縁を僅かに外反させるもので，口径は約15.3cmを測った。釉色は淡い緑色を呈する。

同図12～15は分類Vとしたものである。12・13・14は口縁端部が外反するもので12は内外面に草花文？を篦彫りで描く。釉色は淡いオリーブ色，口径は約16.3cmを測った。13は内面に草花文？が認められるもので，釉は青緑色を呈する。口径は約16cmを測る。14は外面に篦彫りの草花文？が認められるものである。釉色は薄い青緑色，口径は約17cmを測った。15は浅い碗形が想定されるもので，透明感のある薄い緑色の釉を外体部中途まで施釉する。本標品は釉・磁胎とも他の資料と特徴を異にする。

底部破片は22点得られた。これを分類別に出土状況で見ると分類II－3点，III－6点，IV－8点，V－5点に大別される。以下，特徴的なものを図示した。

第26図15は分類II，同図16は分類III，同図17，第27図1は分類IV，同図2～5は分類Vに属するものである。

盤

盤は51点検出された。その中で全形を推察できるものは第27図6に図示した1点で分類Iⓐに属する。6は内体部に3本をセットとする蓮弁文，内底に篦彫りの花文と圏線を配するもので碁笥底の資料である。釉は薄緑色で外底まで施釉する。しかし，外底では釉を輪状に掻き取り露胎にする。口径は約26.8cm，器高は約5.5cm，底径は約10.8cmを測った。このタイプは他に8点，Iⓑは2点，Iⓒは7点が得られた。同図7・8はIⓐの中のヴァリエイションである。

同図9は分類IIに属するもので内体部に弁の幅が約1cm凹蓮弁文，外体部には凸の蓮弁文を描く。又，口縁は瞭花状にする。釉は緑褐色を呈する。

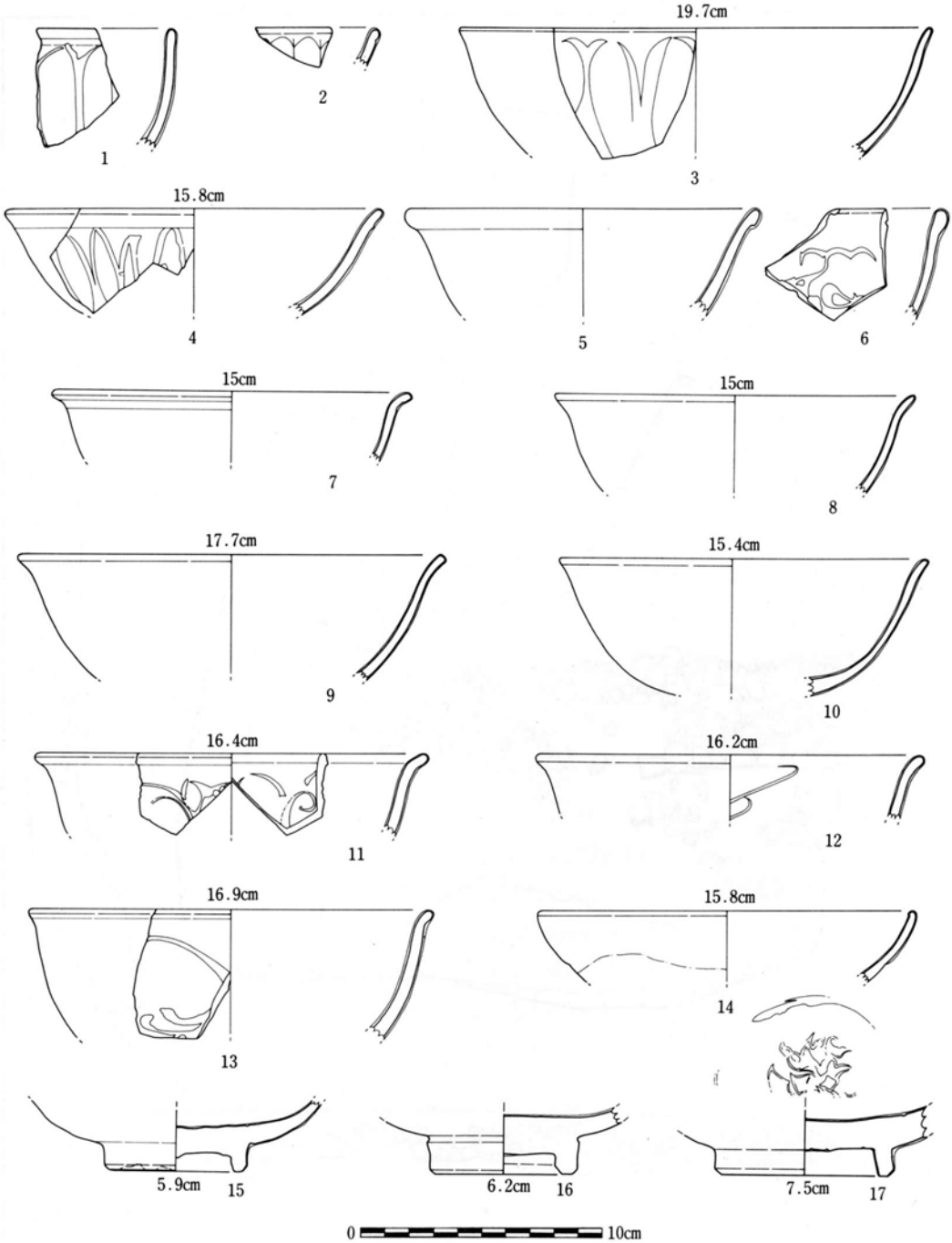
同図10～12は分類IIIに属するもので口縁部のつくりが異なる3点を図示した。10は平口縁，11は口唇部に刻みを施すもの，12は口縁が波状を呈するものである。尚，内外面の文様は11は内面に丸彫り，12は内体部に丸彫りと線彫りを交互にする蓮弁文，外面は凸文の蓮弁を描く。

同図13は口縁を折り曲げ鍔部分をつくる点は分類IIに近似するが性格が異なるものである。口縁の鍔部分には草花文が認められる。

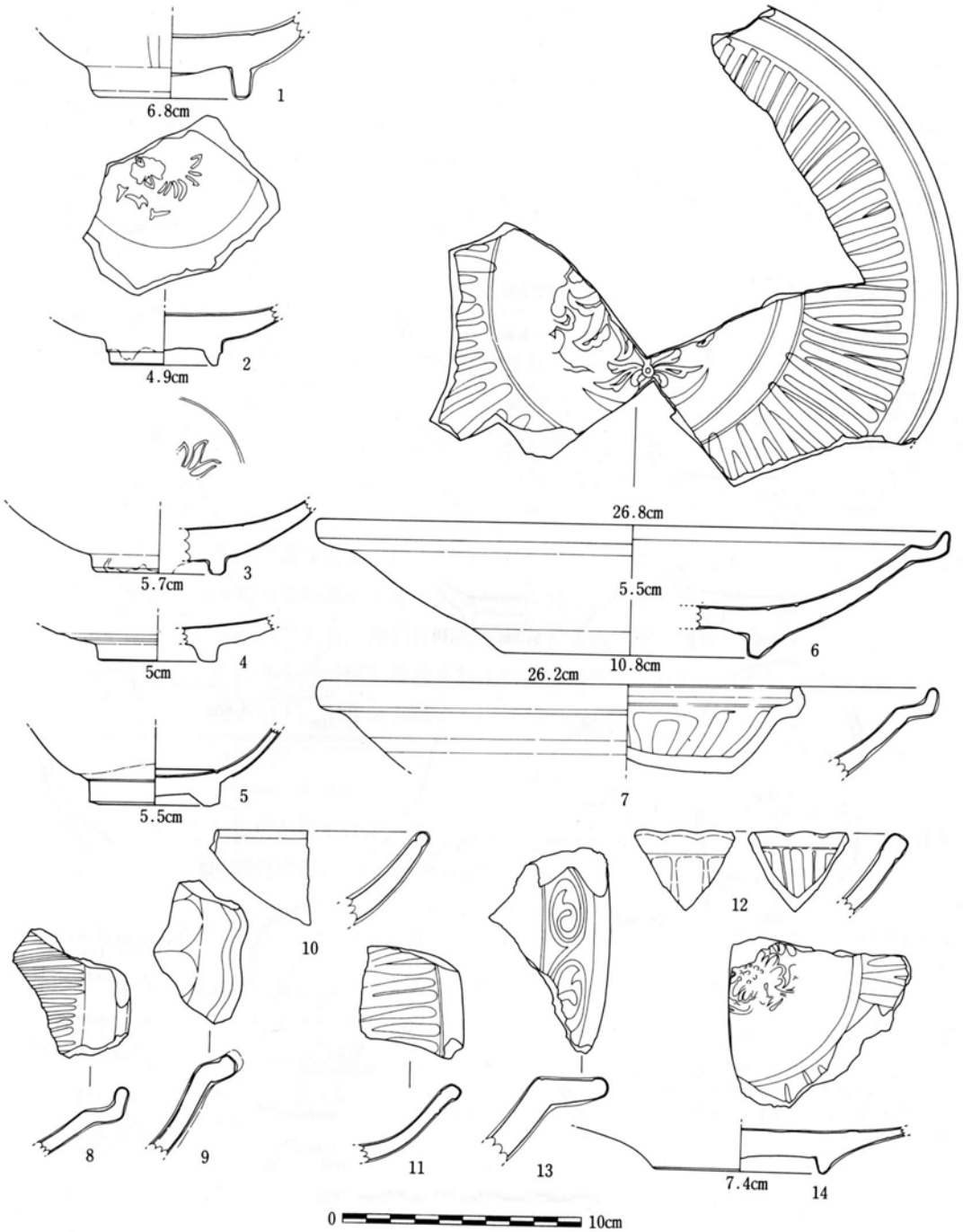
底部の破片は9点検出され，分類I－4点，II－4点，III－1点に大別された。以下，各種1点を図示する。

同図14は分類Iに属する碁笥底で内底に花文，内体部には丸彫りの蓮弁文が認められる。底径は約7.3cmを測った。第28図1は分類IIに属するもので内体部に蓮弁文，内体部には凸の圏線が認められる。底径は推算16cmを測る。同図2は分類IIIに属するもので，前者同様の文様を内面に配

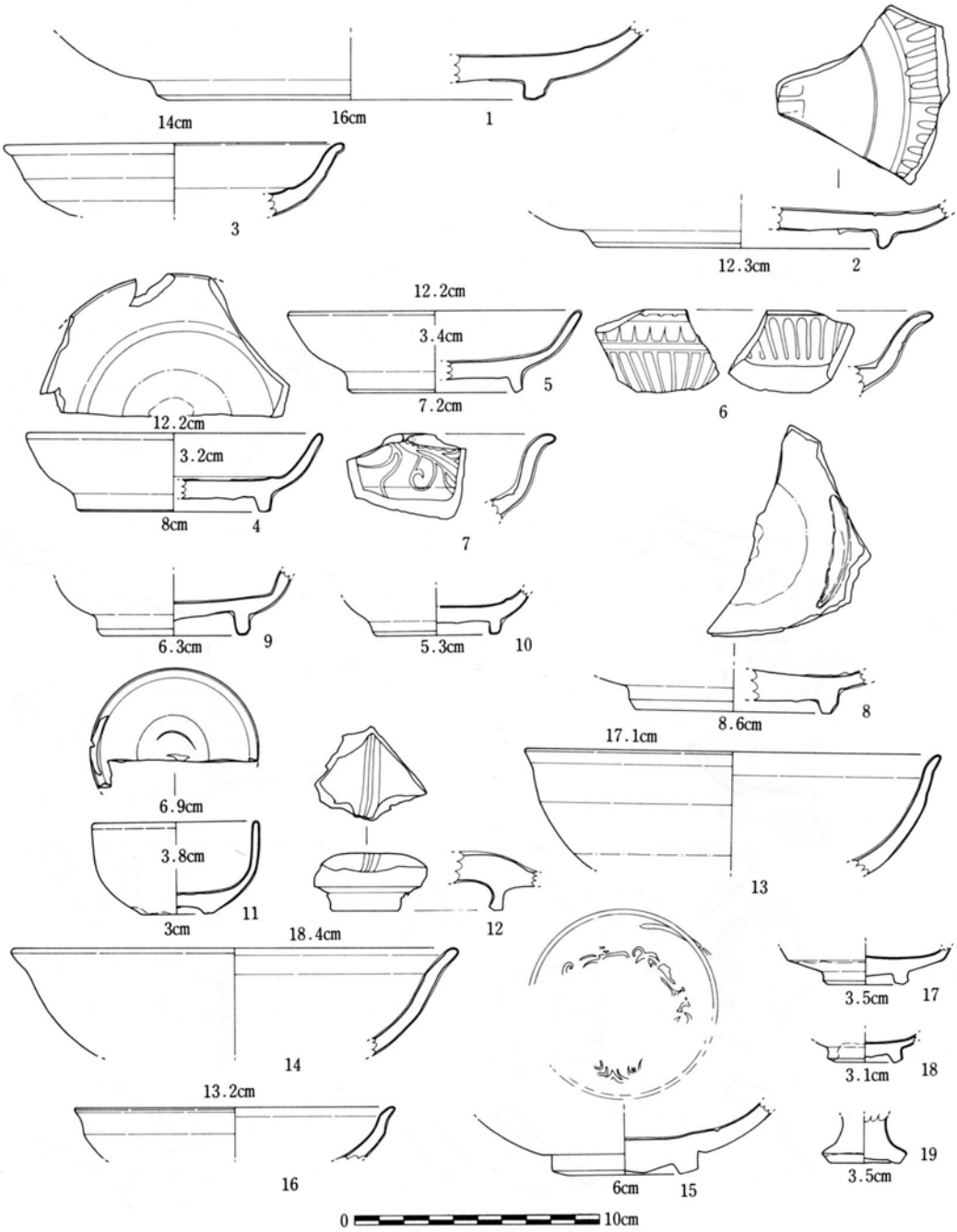
第25図　ＳＦＯ１（石墨）


19.7cm
1
2
3
15.8cm
4
5
6
15cm
7
15cm
8
17.7cm
9
15.4cm
10
16.4cm
11
16.2cm
12
16.9cm
13
15.8cm
14
5.9cm
15
6.2cm
16
7.5cm
17
0
10cm

第26図　青　　磁


6.8cm
1
4.9cm
2
26.8cm
5.7cm
3
5.5cm
6
5cm
4
10.8cm
26.2cm
5
5.5cm
7
10
12
8
9
11
13
7.4cm
14
0
10cm

第27図　青　　磁



第28図　青磁（1～12）、白磁（13～19）

する。底径は約12.2cmを測った。

皿

この器種に属するものは30点検出され，その中に図上復元可能なものは２点あった。分類別の出土状況はⅠⓐ－２点，Ⅰⓑ－９点，Ⅱⓐ－３点，Ⅱⓑ－４点，Ⅲⓑ－４点，Ⅴ－１点，不明７点であった。以下各種の特徴的なものを図示して略述する。尚，分類Ⅰⓐ，Ⅰⓑと Ⅴに属するものは小破片のため省略した。

第28図３は口縁部が疑似肥厚状を呈するもので分類Ⅱⓐに属する。内面には凸の圏線が認められる。釉は灰緑色，口径は約14cmを測った。

同図４・５は分類Ⅱⓑに属する。前者４は薄い灰緑色の釉を高台の外側まで施釉するが，内底で輪状に釉を掻き取り露胎にするものである。内底には凸の圏線が認められる。口径は約12cm，器高は約3.3cm，底径は約８cmを測る。後者５は釉色が薄い褐色を呈するもので高台の外側まで施釉する。内底には僅かに凸文の圏線が認められる。口径は約12cm，器高は約3.4cm，底径は約7.2cmを測った。

同図６・７は分類Ⅳⓑに属するもので，口縁は著しく外反する。６は外体部に二段にわたり縦位線彫りの蓮弁，内体部及び内底に丸彫りの蓮弁文を描く。口唇には刻目文を施す。７は内体部に唐草文が認められるものである。釉色は前記６とも若草色で厚く施釉する。

皿の底部とおさえられるものは図上復元を試みたもの以外に７点検出された。その中の３点を同図８～10に図示した。以下，記述は省略する。

杯

第28図11に図示した１点が得られた。碁笥底の杯でオリーブ色の釉を外底部を除く部分に施釉する。口径は約７cm，器高は約3.8cm，底径は約３cmを測った。

その他の器種

その他の器種は酒会壺の蓋と思われるものと瓶の蓋と思われるものなどが得られた。第28図12は後者に属するもので，外面には２本で対になる縦位細線をセンターから縁へ描いている。釉は透明感のある濃いオリーブ色で外面から内面のずれ止め凸部分内側まで施釉する。以上，前述したもの以外に香炉の足と思われるもの１点，器種が判然としない口縁部破片12点と底部の破片29点が得られた。

(2) 白　磁

白磁は25点検出された。これを器種別に分けると碗13点，皿６点，杯２点，盃の付きと思われるもの１点，器種不明４点に大別された。以下，碗から順に略記する。

碗は口縁部端部が僅かに外反する分類Ⅱのタイプのみ12点が検出された。しかし，これを釉の特徴からすると乳白色を呈するものと乳灰色を呈するものが認められた。

第28図13は釉色が前者に属するもので釉を体部下方まで施釉する。外体部下方及び外底は露胎

にする。口径は約17cmを測った。同図14は釉色が後者に属するもので，口径は推算18.5cmを測る。

底部は第28図15に図示した1点が得られた。分類IIあるいはIIIの底部と思われるもので内底に篦彫り文と圏線が認められる。外体部及び外底は露胎である。底径は推算6cmを測った。

皿

皿は口縁部破片3点，底部破片3点が検出された。口縁部の分類別出土状況は分類I－1点，II－1点，III－1点に大別された。

第28図16は分類IIとしたもので，釉色は乳灰色を呈する。口径は推算13.1cmを測る。典型的な本タイプとは性格を異にするが，便宜上ここに含めた。

他の口縁部破片2点と底部の資料については省略する。

杯

杯は底部の破片2点が得られた。第28図17・18がこれに属するもので前者は体部下方から外底を露胎，後者は高台外面まで施釉する。底径は前者が約3.5cm，後者は約3cmを測った。尚，前述の資料以外に杯の付き部分と思われる底部の資料が1点検出されたので同図19に図示した。

その他，器種の判然としない口縁部破片3点と底部破片1点が検出された。

(3) 染　付

染付は12点検出された。この中で器種が判明するものは5点で碗のみであった。以下，特徴的なものについて略記する。

第29図1は碗が想定される口縁部破片で外体部に草花文，内面口縁には波濤文帯を描く。呉須は全体に薄目である。同図2は唐草文，同図3はシャープな線とダミル技法で描いた鳥の尾状の文様が認められる。同図4は底部の資料で外体部にアラベスク文，内底には十字花文状の文様と二条の界線が認められる。

(4) 黒釉陶器

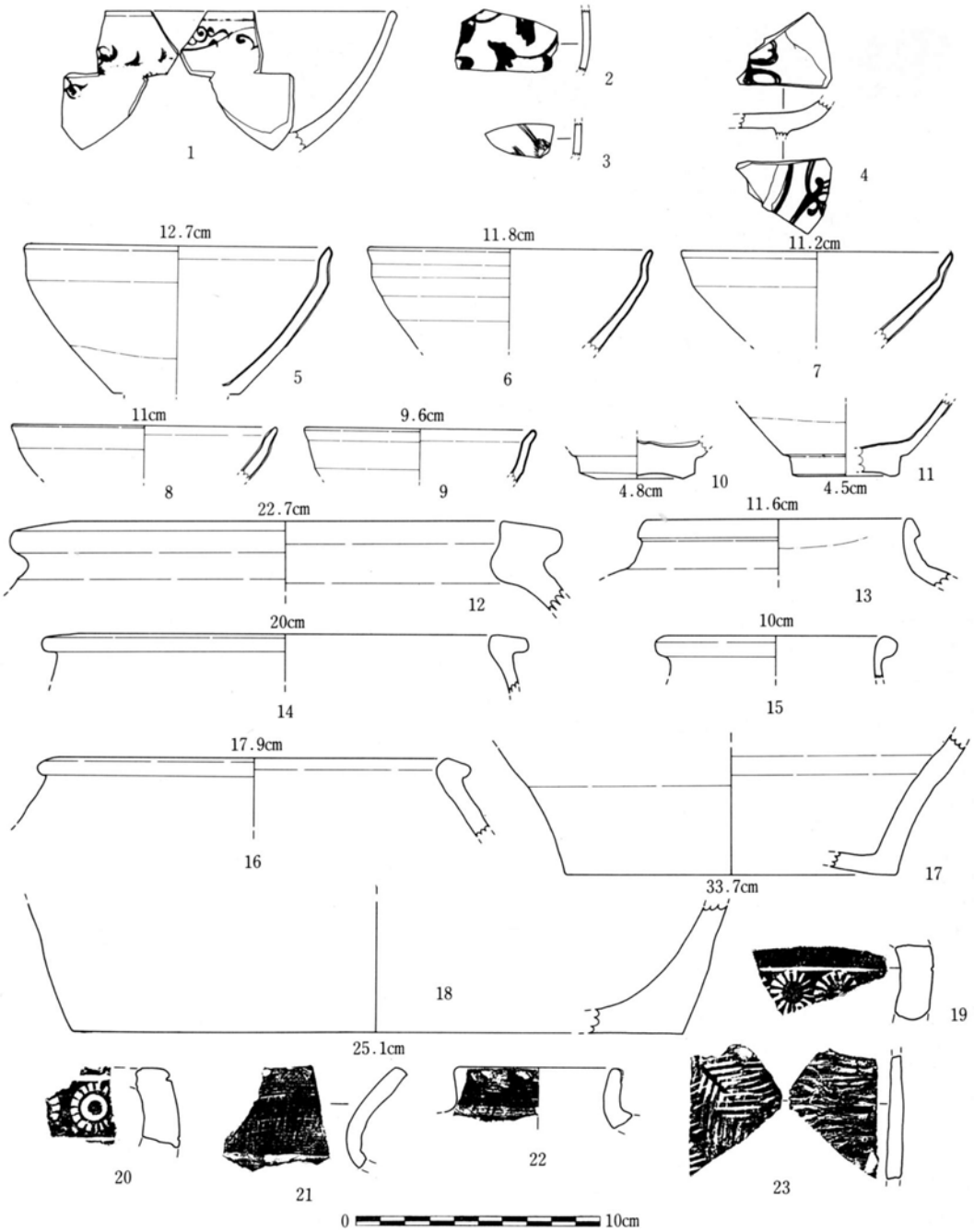
黒釉陶器は口縁部破片17点，底部破片5点が得られた。口縁部を分類別に見るとI－5点，II－6点，III－6点，その他1点に大別された。（以下，大型の破片を図示する。）第29図5・6は分類I，同図7は分類II，同図8は分類III，同図9はその他に属するもので，口径推算は5が約12.7cm，6は約11.8cm，7は約11.2cm，8は約11cm，9は約9.7cmを測った。

同図10・11は底部の資料で10は分類I，11は分類IIに属する。底径は前者で約4.8cm，後者は4.4cmを測る。

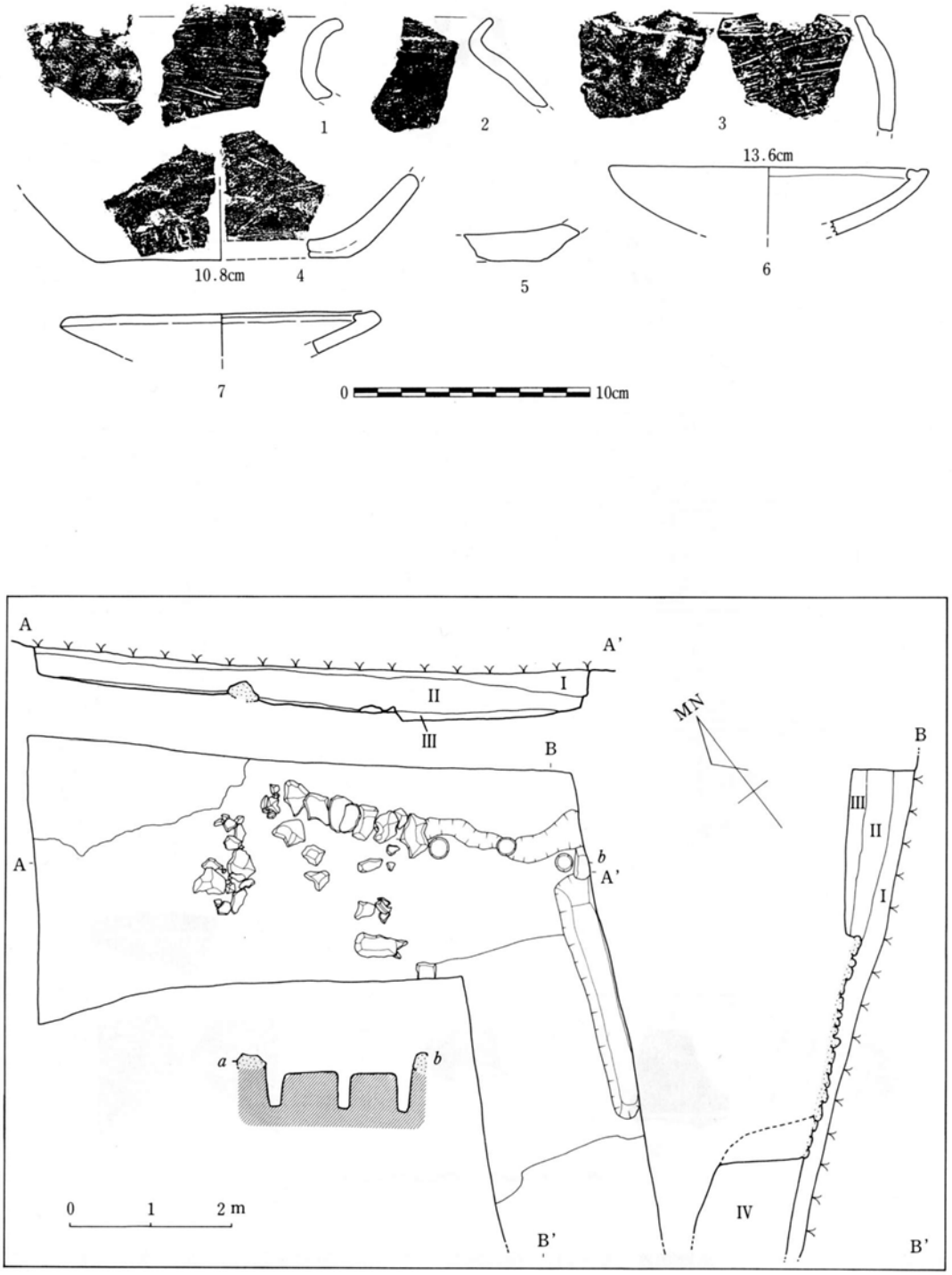
(5) 褐釉陶器

褐釉陶器は15点検出された。これらは全て壺形に属すると思われるもので，分類別に分けるとI－2点，II－4点，II ⓐ－1点，III ⓑ－4点，IV－2点，底部2点に大別される。

第29図12は分類I，同図13は分類II，同図14は分類III ⓐ，同図15は分類III ⓑ，同図16は分類IV



第29図　染付（1～4）、黒釉陶器（5～11）、褐釉陶器（12～18）、瓦質土器(19～20)、陶質土器(21～23)



第30図　土器（1～7）・下図はコーグスク地区平面図及ビ層序

に属するもの，同図17・18は底部の資料である。

(6) 瓦質土器

瓦質土器は分類Ⅰ－2点，Ⅱ－1点が得られた。第29図19・20は分類Ⅰに属するもので，19は外面に16弁の菊花文，20は中央に中房がある花文状のスタンプ文が認められる。器色は前者が灰色，後者は面で橙色，中で灰色のサンドウッチ状を呈する。分類Ⅱの資料については図・詳細とも省略する。

(7) 陶質土器

陶質土器は8点得られた。その内訳は口縁部破片3点，胴部破片4点，底部1点であった。

第29図21・22は口縁部破片で壺形に属すると思われるもの，同図23は胴部破片で外面に有軸羽状叩きが認められるものである。

尚，その他の資料については小破片のため省略する。

(8) 土　器

土器は口縁部破片14点，底部破片8点，蓋の破片4点が得られた。分類別の出土状況は口縁部で壺Ⅰ－1点，壺Ⅱ－2点，鉢Ⅱⓐ－5点，不明3点，底部は分類Ⅱ－3点，Ⅱ－2点，不明3点に大別された。以下，特徴的な資料を図示する。

第30図1は壺1，同図2は壺Ⅱ，同図3は鉢Ⅱⓐに属するもの，同図4は底部分類Ⅱに属するものである。同図5は底部の資料で不明として扱ったが，僅かにくびれが認められる。

同図6・7は蓋の資料で口径は両者とも約16cmを測った。

第15表　ＳＦ０１古銭出土状況

層＼銭名	政和通寶	嘉照重寶	宣和通寶	不　明	計
表　土　層		1		1	2
表土層下部	1	1	1	1	4
計	1	2	1	2	6

D，コーグスク地区

城郭内の最東部地区にあたり，城郭で最も標高が高く，面的には最も狭い地域である。伝承でコーグスクと称され，西の広い地域のミーグスクに対比されている。

調査はＬ字状グリットを設けてなされた。調査の結果，性格は不明であるが，石灰岩礫の堆積層，石灰岩石列，柱穴が明らかにされ，一時期生活面を有していたことが確認された。

第Ⅰ層　茶褐色混礫Ⅰ層。地形に沿って北側から南側へ傾斜をみせる。約20cmの層厚をなし攪乱を受けている。

第Ⅱ層　石灰岩礫層。幅2.5mの帯状に東西にひろがる。礫は25～35cm大の石灰岩からなり，層の厚さはなく，それらが面として広がる状態である。本層上面は第Ⅰ層同様に北から南へゆるやかに傾斜をみせる。

第Ⅲ層　黒色土層。グスク時期の包含層である。第Ⅱ層の石灰岩礫の北側つまり，城内側に堆積する。なお石灰岩礫層をはさんで南側には存在しない。本層は40～60cmの厚さをなす。下層で30～40cm大の石灰岩塊を並べた石列を検出したが，部分的なもので全体の状況は明らかではない。又，深さ40cmの柱穴痕も基礎記も検出されたが，上述の石列同様にその性格は不明である。

第Ⅳ層　コーラル層。第Ⅱ層と称した石灰岩礫層の南側地域のみに堆積する。当該層上面は第Ⅱ層面と同じくゆるやかに南方向へ傾斜をする。土質はしまりがなく，層厚1mをはかった。

遺　物

(1) 青　磁

青磁は碗76点，盤24点，皿32点，器種不明85点が得られた。以下，器種別に略記する。

碗

碗は口縁部破片66点，底部破片10点が得られたが，完形及び図上復元可能なものは得られなかった。以下，分類別に口縁部と底部に分けて略述する。

口縁部

口縁部はⅠⓐ－7点，Ⅰⓑ－5点，Ⅱ－3点，Ⅲ－1点，Ⅳ－5点，が検出された。

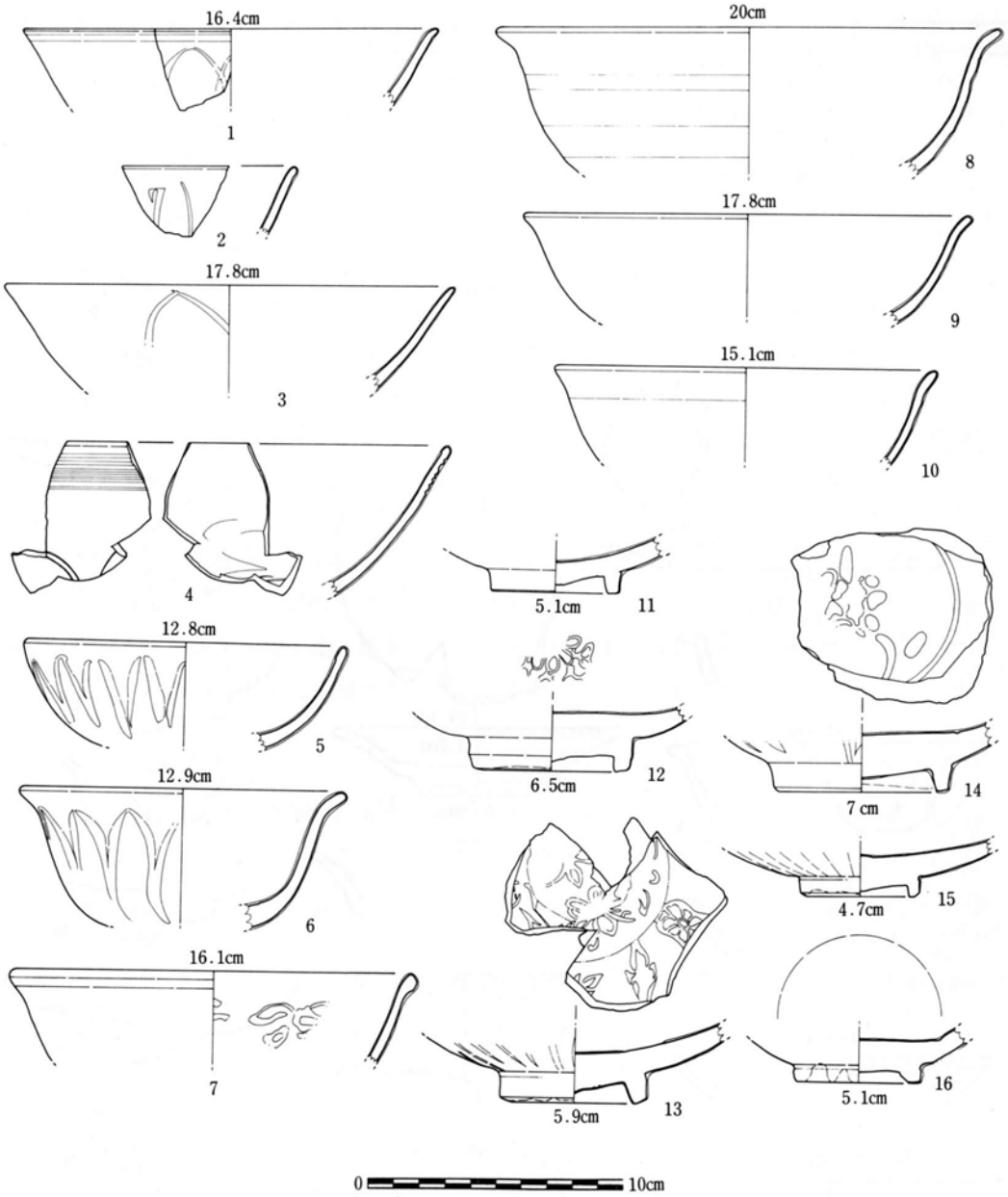
第31図1～4はⅠⓐに含まれるもので，1は鎬蓮弁文，2は叉状篦彫り蓮弁文，3は弁幅の広い蓮弁文を描くものである。同図4は口縁に沿う数本の圏線と体部に対の曲線文，裏面にも曲線文を描くものである。釉は透明感のある薄い緑色で粗い貫入が見られる。

同図5は器形がⅠⓐに近いがⅠⓑに属するもので，外体部に篦彫りの蓮弁文を配する。

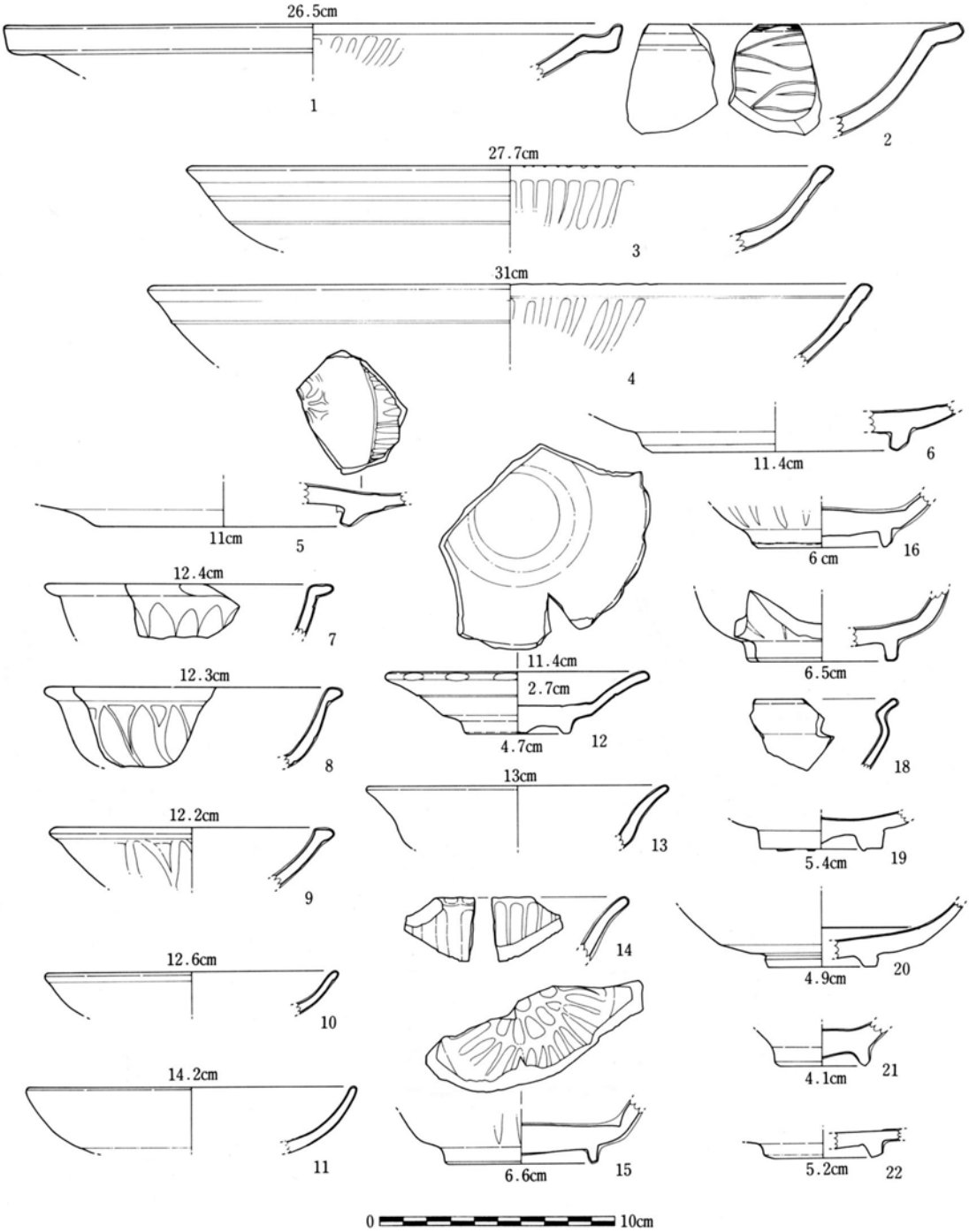
同図6はⅡに属するもので篦彫りの蓮弁文を外体部に配する。釉は淡い緑色に発色し，厚く施釉している。貫入は認められない。口径は推算13cmを測る。

同図7はⅢに属するもので口縁部は玉縁状に肥厚する。内面には浮文が認められる。釉は淡い緑色で粗い貫入が走る。

同図8～10の3点は本地区で最も多く検出されたⅣに含まれるものである。口縁部の外反に幾つかのヴァリエイションが認められたが，細分化は困難なため特徴的なもの3点を図示した。8は口縁が強く外反するもので口径は推算20cmを測る。9は口縁が外反するもので口径約18cmを測る。10は口縁が僅かに外反するもので口径は推算15cmである。釉は3点とも少々異なるが，概ね


16.4cm
1
2
17.8cm
3
4
12.8cm
5
12.9cm
6
16.1cm
7
20cm
8
17.8cm
9
15.1cm
10
5.1cm
11
6.5cm
12
5.9cm
13
7 cm
14
4.7cm
15
5.1cm
16
0
10cm

第31図　青　　磁


26.5cm
1
2
27.7cm
3
31cm
4
11.4cm
6
11cm
5
6 cm
16
12.4cm
7
11.4cm
6.5cm
12.3cm
2.7cm
4.7cm
12
8
18
13cm
12.2cm
13
5.4cm
19
9
14
4.9cm
20
12.6cm
10
4.1cm
21
14.2cm
6.6cm
15
5.2cm
22
11
0
10cm

第32図　青　　磁

薄い灰緑色を呈する。貫入は認められない。

その他，ここに含めたものの中には釉をやや厚く施釉するもの5点も認められた。

底　部

底部破片は10点検出された。これを分類別に見るとⅠ－点，Ⅱ－3点，Ⅳ－2点，Ⅴ－2点，不明2点であった。以下，特徴的なものについて略記する。

第31図11は高台が断面方形状を呈するⅠに属するもので透明感のある薄い青緑色の釉を高台外側まで施釉する。底径は推算5cmを測る。

同図12は高台の外側を雑に削るものでⅡに属する。釉はやや透明感のある薄い緑色で高台の外側まで施釉する。内底には花文が認められるが，構図は判然としない。底径は約6cmを測る。

同図13・14は釉を厚目に施釉するもので，高台の畳付部分は円味を呈する。2点とも外体部に篦彫り蓮弁文の下端部と文様，内底には浮文が認められる。底径は13が約6cm，14は約17cmを測る。

同図15・16は分類Ⅴとしたもので，底径は前者が約4cm，後者は約5cmとやや小さめで高台は低い。前者は雑な竹節状の高台をつくるもので体部下方には瞭を有する蓮弁文下端部分が認められる。釉は淡い薄緑色を呈する。後者は高台の内側を傾位に削るもので内底部には体部との境に角をつくる。釉は淡い青緑色を呈する。

盤

盤は口縁部破片19点，底部破片6点が得られた。以下，口縁部と底部に分けて略記する。

口縁部

口縁部は分類Ⅰ－13点，Ⅱ－2点，Ⅲ－4点に大別された。第32図1はⅠに属するもので内面に蓮弁文を描く。しかし，蓮弁文が何本の細線を単位としたかは破片のため不明である。釉に薄緑色を呈する。口径は推算26.5cmを測る。

同図2は分類Ⅱに含まれるもので内面には青海波文を篦彫りで描く。釉は若草色で細かい貫入が走る。

同図3・4は分類Ⅲとしたものである。口縁部は方形状に僅かに肥厚する。又，口縁外面には口縁に沿って凸の圏線，口唇部には刻文を配する。釉は3が薄い緑色，4は淡い緑色を呈する。

底　部

底部は破片のみ6点が得られた。これを分類別に分けるとⅠ－5点，Ⅱ－1点に大別された。前述のⅠに属する5点のうち4点の内体部には篦彫りの蓮弁文が認められた。残りの1点（第32図5）は破片のため文様の有無が判然としないものである。第32図6は分類Ⅱに属するもので内体部下方に凸の圏線が認められる。

皿

皿は32点が検出された。第32図12の１点は図上復元が可能であったが，他は破片であった。以下，口縁部と底部に分けて略記する。

口縁部

口縁部の破片は26点得られ，Ⅰⓐ－１点，Ⅰⓑ－８点，Ⅱⓐ－１点，Ⅱⓑ－２点，Ⅲ－１点，Ⅳⓐ－１点，Ⅳⓑ－11点に大別された。以下，特徴的な資料及び大きい破片を図示し概述するが，Ⅰⓐと Ⅲの各１点は小破片のため図・文とも省略した。

第32図７～９はⅠⓑに属するものである。口縁の形態，外体部の文様ともそれぞれ異なるものである。口径は７が推算12.5cm，８は推算13cm，９は推算12cmを測る。

同図10はⅡⓐ，同図11はⅡⓑに属するもので，外面体部下方を露胎にする。口径は約14cmを測る。

同図12は一般的に瞭花皿と云われているものでⅣⓐに属する。釉は淡い緑色で高台の外側まで施釉する。内底部分は露胎にしている。高台は断面方形状を呈する。つくりは雑である。口径は約11.5cm，器高約2.6cm，底径約4.6cmを測る。

同図13・14はⅣⓑに属するもので，13は文様が認められないもの，14は内外体部に丸彫りの蓮弁文を配するものである。口唇部には刻目文も認められる。口径は前者のみ可能で推算13cmを測った。

底　部

底部は６点検出され，うち３点は内底に丸彫りの蓮弁文を描くものであった。第　図15は前記３点の中の１点で淡い緑色の釉を外底部まで施釉するが，外底部は輪状に掻き取り露胎にする。底径は推算6.5cmを測る。

同図16は緑色の釉を高台外側まで施釉するもので，高台は竹節状を呈する。底径は推算６cmを測る。同図17は外体部に凸文の蓮弁を配するものである。釉は淡い薄緑色で高台内側の中途まで施釉する。底径は約6.5cmを測った。

器種不明

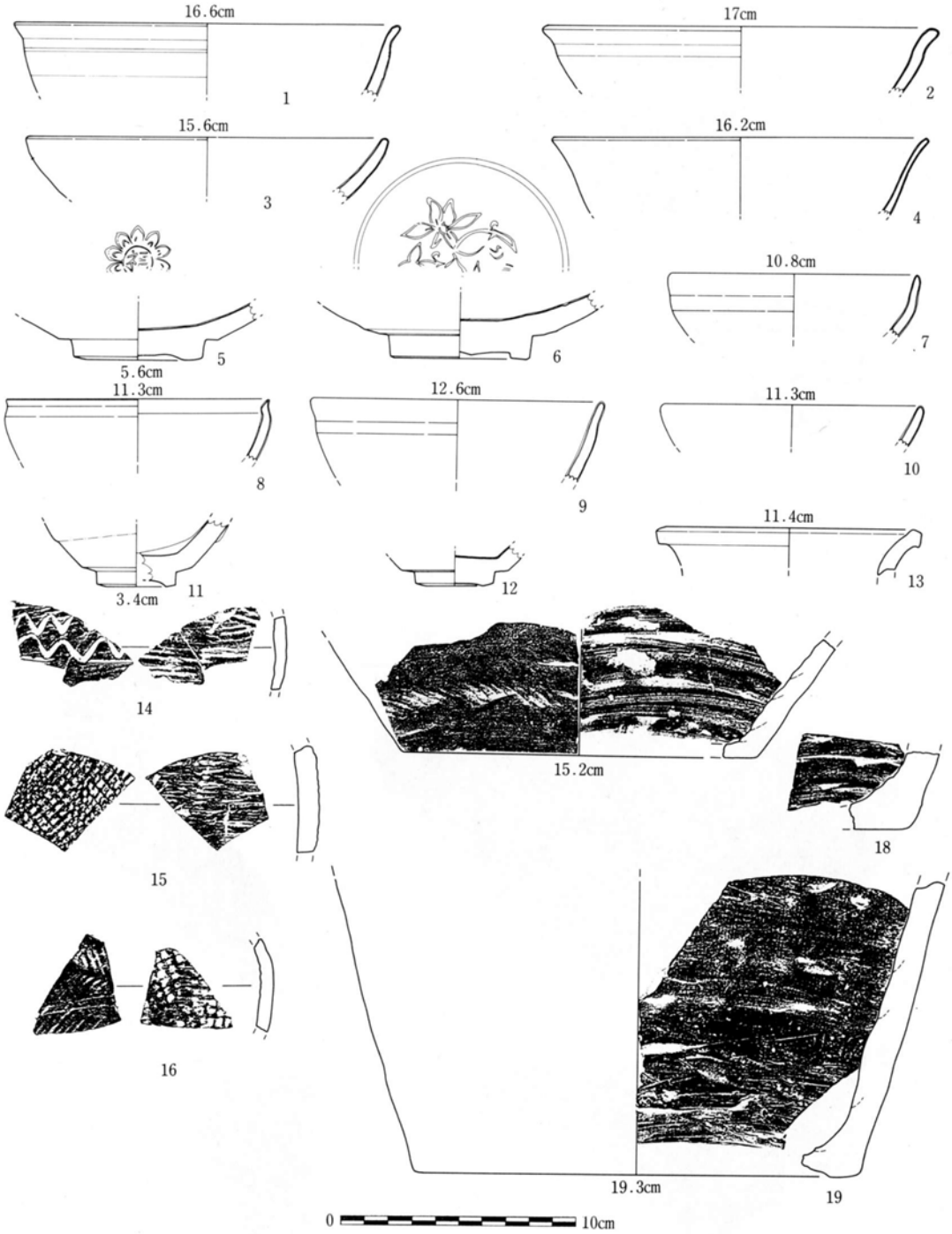
小破片のため器種が判らないもので口縁部破片65点，底部破片20点が検出された。

第32図18は頸部が「く」の字状に折曲するもので釉は淡い薄緑色を呈する。他の口縁部破片は図・文とも省略するが，そのほとんどは碗あるいは皿に属する可能性が強いと思われる。

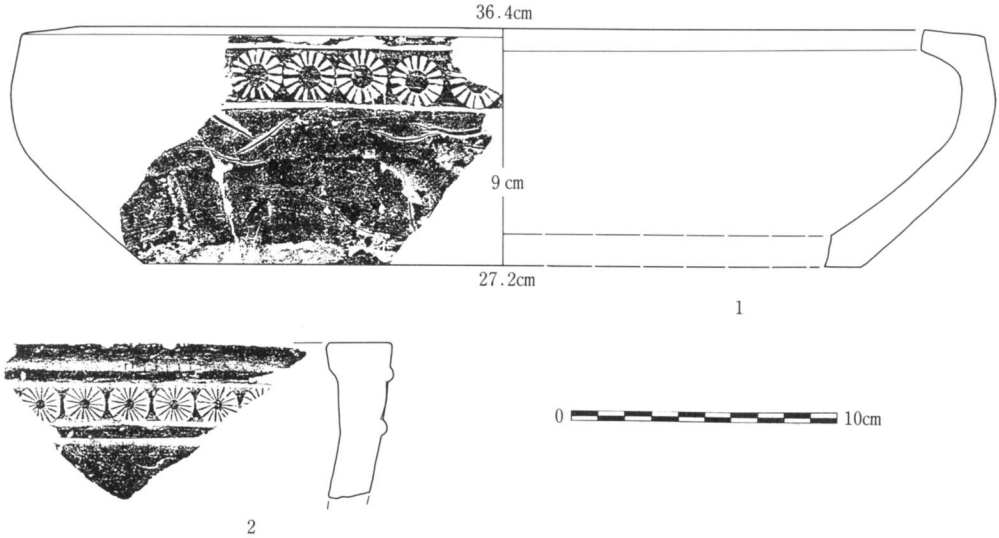
同図19・20は外体部下方を露胎にするもので，19は高台畳付部分を幅広くつくる。底径は約６cmを測る。20は高台を断面方形状にするもので底径は約５cmを測る。２点とも釉は淡いオリーブ色を呈する。碗になる可能性が強いと思われる。

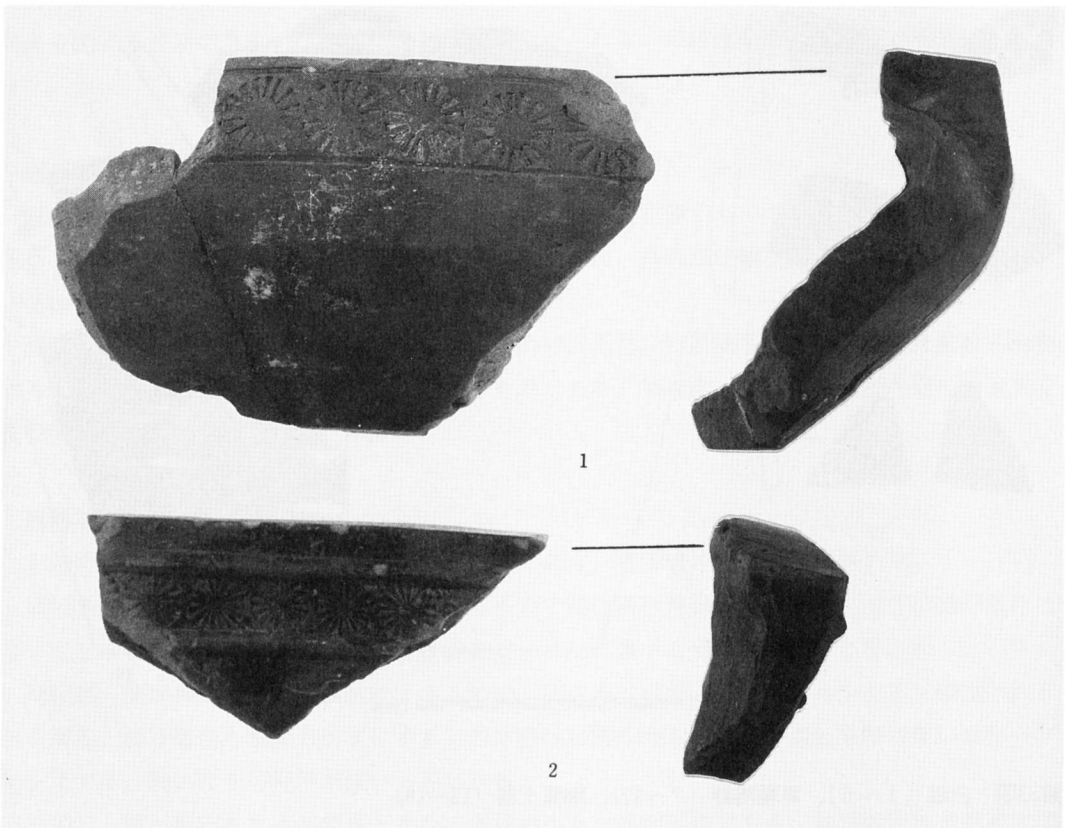
同図21も碗が想定されるが判然としない底径の小さな底部破片である。釉は若草色で外底まで施釉する。しかし，尖状を呈する畳付部分では釉を掻き取る。底径は推算４cmを測る。

同図22は高台を低くつくるもので皿に近い器形が想定される。釉は透明感のあるオリーブ色の



第33図　白磁（1～6）、黒釉陶器（7～12）、陶質土器（13～19）





第34図　瓦質土器

釉を高台外側まで施釉するが，内底は露胎にする。底径は約5cmを測る。

他の資料については記述・実測図とも省略する。

(2) 白　磁

白磁は総数20点が検出された。器種推察可能なものは全て碗に属するものばかりで，前記碗分類別の出土状況はⅠ－12点，Ⅱ－2点，Ⅲ－2点であった。第33図1・2はⅠ，同図3はⅡ，同図4はⅢに属するものである。

底部は4点検出された。いずれもやや幅広い高台をつくり外底部を露胎にするものであった。同図5は内底に「福」の文字を中央に花文を描くもので釉は乳灰色を呈する。底径は推算5.5cmを測る。同図6は内底に花文と圏線を配するもので，釉は黄味を帯びた薄い灰色を呈する。底径は推算6cmを測る。

(3) 黒釉陶器

黒釉陶器は口縁部15点，底部3点が得られた。口縁部を分類別に見るとⅠ－3点，Ⅱ－2点，Ⅲ－10点に大別された。

第33図7～10は口縁部破片で，7はⅠ，8はⅡ，9・10はⅢに属する。しかし，10はⅢとしたものの中でも器面に変化が少ないものである。

底部はⅠ－1点，Ⅱ－2点に分けられた。同図11はⅠ，同図12はⅡ類に属する。底径は2点とも推算3.4cmを測る。

(4) 褐釉陶器

褐釉陶器は口縁部1点，底部3点と出土量は少ない。口縁部破片は壺形Ⅱに属するが，底部3点は小破片のため器種は判然としない。なお，図と詳細については資料が小さいことから省略した。

(5) 陶質土器

陶質土器は21点得られた。その内訳は口縁部1点，胴部16点，底部4点であった。以下，代表的なものについて略記する。

第33図13は壺形が想定される口縁部破片で口縁部は外反し端部を垂直につまみ上げる。口唇部を平坦に成形する。

同図14～16は胴部破片で，14は波状沈線文，15は外面に格子目の叩き，16は外面に有軸羽状叩き，内面には格子目叩きが認められる。

第33図19～21は底部の資料で，19は立ち上がり部分が外湾する。20・21は垂直に近い立ち上がりである。

尚，波状沈線は前記16の胴部破片以外にも3点検出された。

(6) 瓦質土器

瓦質土器は前述分類のⅠ１－点，Ⅱ－１点，Ⅲ－１点の計３点が得られた。

第34図１は分類Ⅰに属する口縁部破片で口縁外面に16弁の菊花スタンプを配する。口唇部は幅広く成形する。口径は約36cm，底径は約27cm，器高は約９cmを測る。

同図２も分類Ⅰに属するもので外面を入念にナデ成形する。器形は方形が想定される。

(7) 土　器

土器は口縁部破片８点，底部破片８点が得られた。口縁部の分類別出土状況は壺Ⅰ－２点，壺Ⅱ－１点，鉢Ⅱⓐ－１点，鉢Ⅱⓑ－１点，不明３点，底部はⅡ－５点，Ⅲ－３点，不明１点に大別された。底部Ⅲには葉痕の認められるもの１点があった。

以下，図・詳細については省略する。

第16表　コーグスク古銭出土状況

層＼銭名	元豊通寶	大觀通寶？	不　明	計
１層下部			1	1
１層拡張		1		1
コーラル層下	1			1
計	1	1	1	3

Ｅ.カンジャー地区

城郭内の東部にあり，現況で，郭が最も細くくびれるようになった地域で，多量の炭化物，鉄滓が検出された所である。比較的平坦な面を有するところで，６ｍ×６ｍのグリットを設定し調査をおこなった。

基盤の岩盤まで層厚30～70cmの堆積土があり，基本的に黒色土混りの石灰岩礫層からなる。

遺構は確認されなかったが下層部にいくにつれ焼土混じりの灰層が部分的な広がりをみせ，かって鉄関連の遺構があったことを窺うことができた。

遺　物

(1) 青　磁

青磁は総数122点検出された。これを器種別に分けると碗63点，盤10点，皿16点，その他の器種４点，器種不明29点であった。以下，器種別に略述する。

碗

碗は口縁部破片60点，底部破片３点が得られた。口縁部破片は分類Ⅰⓑ－２点，Ⅲ－13点，Ⅳ－34点，Ⅴ－６点に大別された。

第35図１はⅠⓑに属するもので篦彫りの蓮弁文を外体部に描く。釉はやや透明な緑色を呈する。口径は推算15cmを測る。同図２～４の３点は分類Ⅲに属するもので釉色は薄い緑色を呈する。４は口縁が僅かに肥厚するもので，釉は透明なオリーブ色を呈する。内面には小さな二重弧の浮文が認められる。

同図５～７は分類Ⅳに属するもので口縁端部は外反する。しかし，３点とも外反の具合は少々異なる。釉・諸特徴は３点とも近似し，釉は淡い緑色を呈する。文様は認められない。

同図８は分類Ⅴのその他としたもので直口口縁である。釉は薄い緑色を呈する。文様は認められない。同図９は器形的には分類Ⅰⓑに近似するが，口縁部に簡略化した雷文と思われる文様が認められるものである。釉は淡いオリーブ色を呈する。

底部は３点得られたが，その中の２点は底径の４分の１に満たないもの，１点は径の半分ほどの資料であった。

同図10は径の半分に満たない資料で高台の外側角を削る。分類Ⅱに属すると思われる資料で内底にはスタンプの花文を配する。釉色はやや透明な薄緑色で高台の外側まで施釉する。底径は推算5.6cmを測る。

他の２点は分類Ⅱ，分類Ⅲの小破片であった。図・詳細については省略する。

盤

これに含まれるものは口縁部破片５点，底部破片５点が得られた。口縁部は分類Ⅰ－４点，分類Ⅲ－１点に大別され，第35図11・12に分類Ⅰに属するもの，同図13には分類Ⅲに属するものを図示した。11は内体部にやや幅広い蓮弁文を描くもので釉は薄緑色を呈する。口径は約22.6cmを測る。12は内体部に丸彫りの蓮弁文を描くものである。13は内体部に丸彫りの蓮弁文，体部下方には凸の圏線を描くもので口径は推算24.6cm，器高は推算4.7cm，底径は約14cmを測る。釉は淡い緑色を呈する。

底部は分類Ⅰ－３点，Ⅲ－２点に大別され，前者１に属するものを第35図14，後者Ⅱに属するものを同図15に図示した。以下，詳細は省略する。

皿

これに属するものは口縁部破片11点，底部破片５点が得られた。口縁部の分類別出土状況はⅠⓑ－６点，Ⅱⓑ－２点，Ⅳⓑ－３点で第35図16～18はⅠⓑに属するもの，同図19にⅡⓑ，同図20にはⅣⓑに属するものを図示した。同図16は凸文の蓮弁，同図17・18は篦彫りの蓮弁文を描くものである。釉は16・17が薄い緑色，18はオリーブ褐色を呈する。

底部は５点得られた。同図21は高台を断面方形状にするもので，緑色の釉を外底まで施釉する。しかし，外底は輪状の露胎にする。内底には線彫りの文様と凸の圏線を配する。底径は推算７cmを測る。同図22は高台畳付の外側角を削る２点の中の１点である。釉は淡いオリーブ色で高台の

外側まで施釉するが，内底は円形状の露胎にする。内底露胎部分には線彫りの文様が認められるが構図は判然としない。底径は推算5.8cmを測る。同図23は畳付部分がやや円味を呈するもので，薄い緑色の釉を外底まで施釉する。しかし，外底では輪状に掻き取る。内底には凸の圏線が認められる。底径は推算7.2cmを測る。同図24は畳付に移行するにつれ高台がすぼまり丸味を呈するもので，淡いオリーブ色の釉を外底まで施釉する。しかし，中心部分では円状に掻き取る。内底には凸の圏線を配する。底径は推算7.7cmを測った。

その他の器種

その他の器種として酒会壺の底部破片１点（第36図１）や蓋の破片３点が得られた。その他，器種すら判らない口縁部破片15点，底部破片14点も検出された。

(2) 白　磁

白磁は９点検出された。これを器種別に見ると碗８点，皿１点で碗は分類Ｉ－７点，II－１点，皿の１点は分類Ｉ，すなわち口禿皿の口縁部破片であった。しかし，図については省略する。

(3) 黒釉陶器

黒釉陶器は口縁部の小破片５点が得られた。これを分類別に見ると分類Ｉ－１点，II－２点，III－２点に大別された。しかし，分類IIIとして扱った２点の中の１点は小破片のため多少，無理をした。尚，図については小破片のため省略した。

(4) 褐釉陶器

褐釉陶器は口縁部破片のみ２点が得られた。その中の１点は壺形分類IVに属すると思われるものであった。図は省略する。

(5) 瓦質土器

瓦質土器は分類IIIに属する口縁部破片２点と底部破片１点が得られた。第36図２は口縁部破片，同図３は底部の資料である。

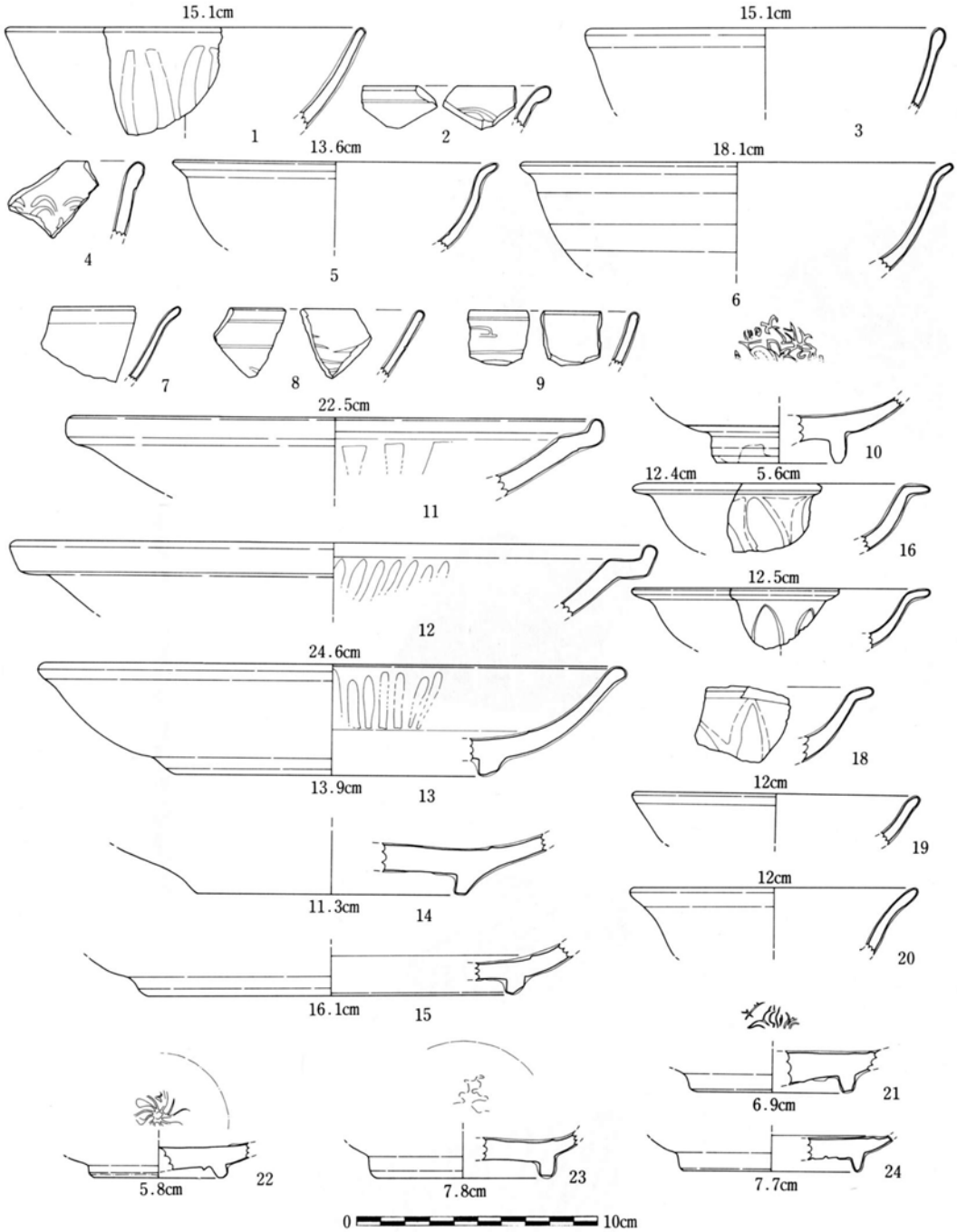
(6) 陶質土器

陶質土器は14点検出された。その内訳は胴部破片12点，底部の破片２点であった。第37図４・５は胴部破片で４は外面に平行叩き，５はロクロ引きが認められるものである。

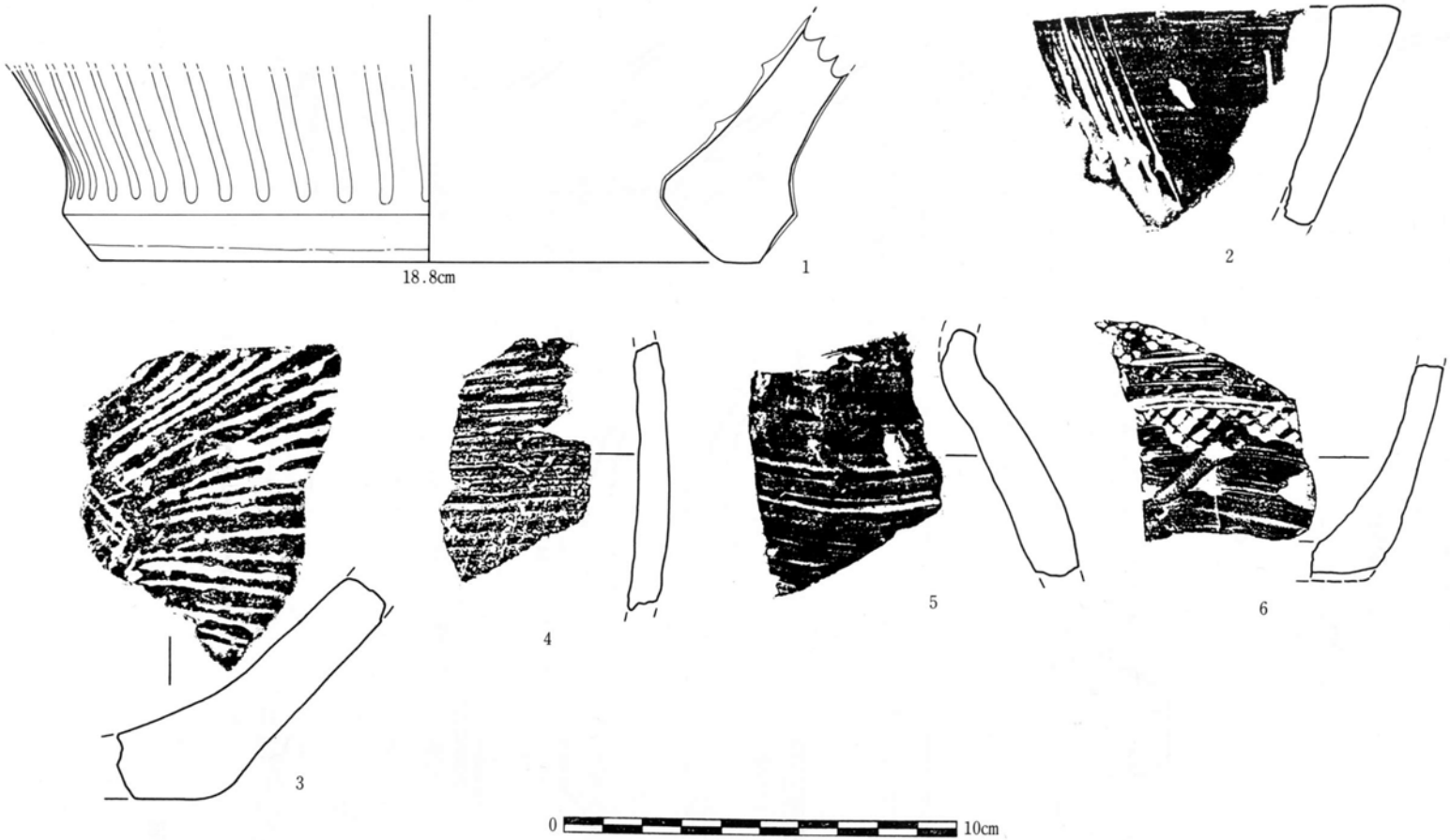
同図６は底部の資料であるが，底の部分の大半を欠くため形態については判然としない。内面には格子目の叩き痕が認められる。

(7) 土　器

土器は口縁部破片９点，底部破片９点が検出された。分類別に見ると口縁部は壺II－１点，鉢II ⓐ－２点，不明６点，底部は分類II－１点，III－１点，不明４点に大別された。尚，図と詳細


15.1cm
1
2
15.1cm
3
13.6cm
4
5
18.1cm
6
7
8
9
22.5cm
11
10
12.4cm
5.6cm
16
12
12.5cm
24.6cm
13.9cm
13
18
12cm
19
11.3cm
14
12cm
20
16.1cm
15
21
6.9cm
5.8cm
22
7.8cm
23
7.7cm
24
0
10cm

第35図　青　　磁



第36図　青磁（1）、瓦質土器（2、3）、陶質土器（4～6）

については資料が小さいため省略した。

第17表　カンジャー地区古銭出土状況

層＼銭名	洪武通寶	不　明	計
第　1　層	1	1	2

F，北側崖下試掘グリッド

本グリッドは本城跡の中心部から投棄された遺物の実態を摑むために設けたもので，本城跡のほぼ中央に位置する展望台北側崖下に位置する。層位はそのほとんどが2次堆積であった。下層は石灰岩の転石層，上層は灰色瓦を主にした遺物の廃棄層であった。ここで問題になるのは廃棄の年代と思われる。以下，上層から得られた陶磁器を中心に略記する。

遺　物

(1)　青　磁

青磁は7点検出されたが，いずれも破片で器形を復元できるものは得られなかった。器種別の出土状況は碗4点，盤1点，皿2点である。以下，碗から順に略記する。

碗

これに属するものは口縁部破片2点，底部破片2点に大別されるが，口縁部の2点は口縁端部が外反する分類IVに属するものである。第37図1は口縁部破片2点の中の1点で口唇部の内側には粗土の付着が認められる。釉は淡い薄緑色を呈する。

底部2点は高台の外側角を雑に削るもので内底には花文を配する。釉は淡い薄緑色で高台の外側まで施釉する。第37図2・3に図示した。

盤

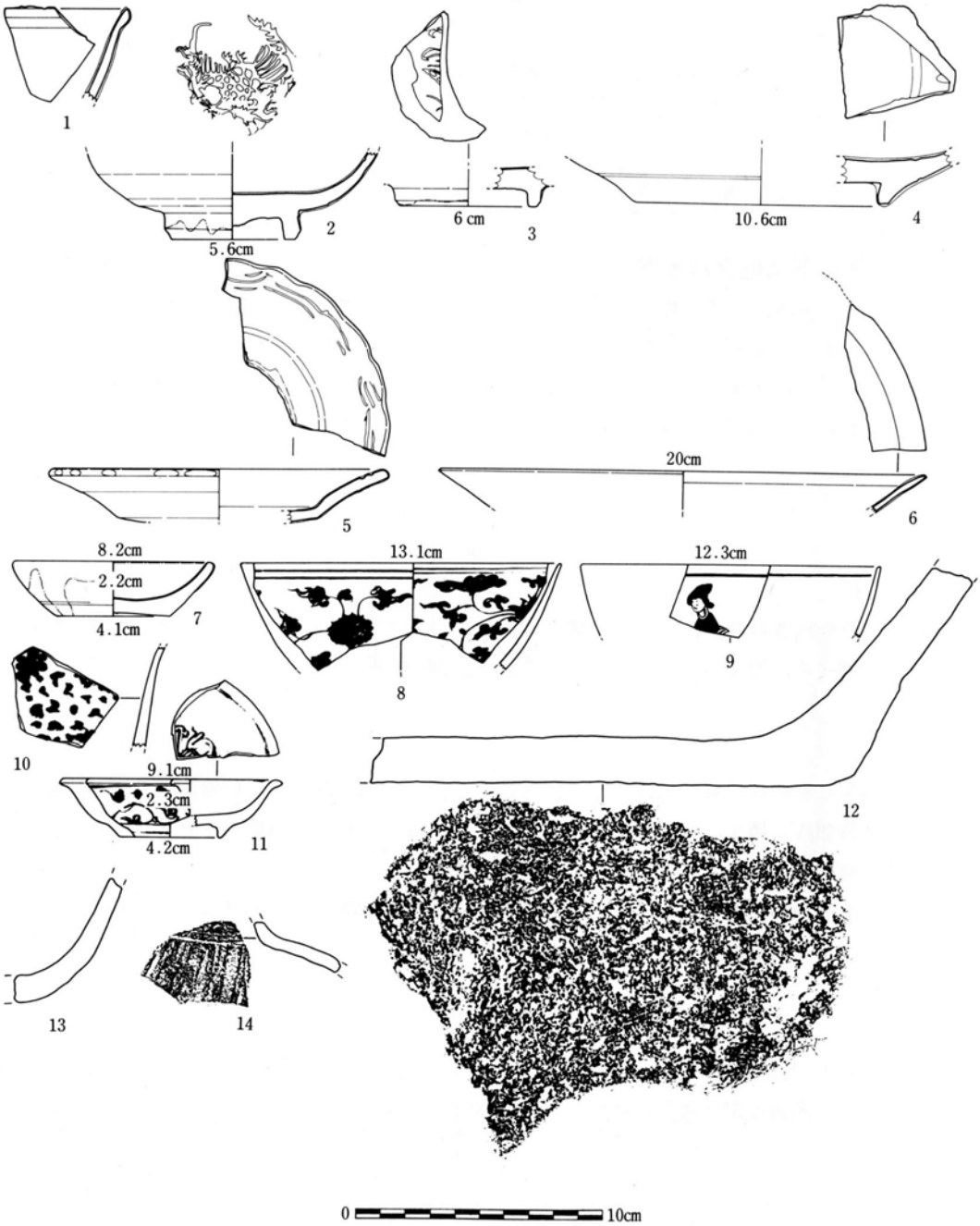
盤に属するものは第37図4に図示した底部の破片が得られた。分類Iの碁筒底で内外面の体部下方には凹線の圏線を配する。釉色は若草色で底径は推算10.4cmを測った。

皿

第37図5・6に検出された2点の皿を図示した。2点とも口縁部の破片で5は分類IVⓐに属する瞭花皿，6は直線的に開く輪花状皿で釉は薄緑色を呈する。口径は前者が約14cm，後者は約20cmを測った。

(2)　白　磁

白磁は4点検出された。これを器種別に見ると碗1点，皿2点，器種不明1点に大別され，碗



第37図版　青磁（1～5）白磁（6、7）染付（8～11）瓦質土器（12）土器（13、14）

は分類Ⅰ－1点，皿は分類Ⅴ－1点と不明1点に属した。

第37図7は分類Ⅴとしたもので口径は約8.3cm，器高は約2.3cm，底径は約4.2cmを測る。口唇部には灯明皿としての用途を推察させるようにチャコールの付着が認められる。

(3) 染　付

青花は11点得られた。これを器種別に見ると碗と皿の二種に大別される。以下，碗と皿に分けて略記する。

第37図8～10は碗形に属するもので8・9は直口口縁，10は端反口縁が想定される。8は口縁外面に界線，胴部には唐草文，内体部に蓮花文を描く。9はシャープな線で口縁内外面に界線，外体部には人物を描く。呉須の発色は濃い。10は米印状の文様と斑点状の文様が認められる。

明らかに皿としておさえられるものは2点得られた。同図11はその中の1点で端反りのタイプである。文様は口縁部と腰部分に界線，体部外面に唐草文，内面では口縁部と内底に界線，内底の中央に十字花文を描く。口径は約9.1cm，器高は約2.4cm，底径は約4.2cmを測った。

残りの1点は腰部分に芭蕉葉文を描く碁筒底の資料であった。図は省略した。

(4) 瓦質土器

瓦質土器は底部1点が得られた。第37図12に図示したもので底の縁部分は曲線を描く。底の部分には中央に近い箇所に貫通する1つの穴が認められる。前記の穴があることから用途は保水する器ではなく，逆に除水を必要とする器であったと思われる。

(5) 陶質土器

陶質土器は胴部破片が1点得られた。内外面にロクロ引きが認められ，色調は灰色と赤褐色が互層をなし器面は灰色であった。以下，図と詳細については省略する。

(6) 土　器

土器は5点得られた。しかし，底部破片1点を除き他は胴部の破片であった。

第●図13は底部破片で分類Ⅲに近似するが，立ち上がりが強く性格をやや異にするものである。同図14は壺形が想定される頸部から肩部にかけての破片で表面には叩き成形痕が認められる。胎土に石英を多量混入し焼成は良い。色調は黄褐色を呈する。この質の土器は量的に少ないが，蓋の場合には他の器種に比較して多いように思われる。

(7) 古　銭

古銭は聖宋元寶のみ1点得られた。

3. 第二次調査

二次調査は城郭の中央部からその以西（とくに北西地域）地域を対象に実施した。地域が広いため地区を設定し，便宜上，展望台広場地区・溜め井戸地区・松林地区・南城門地区の4区に呼

び分けてある。

以下，各地区ごとに説明をおこなう。

A，展望台広場地区

本地区は城郭内のほぼ中央部に位置し，現況面が1.5～2.0°緩やかな傾斜を呈する。比較的平坦なところであるため，現在，公園の最も広い広場にあてられ，その東隅には展望台が設置されている。地区の名称もそれによった。

当地区では調査前に，御殿等の建物遺構が予想されたが，調査の結果，未確認に終わり，主として石塁が存在していることが明らかになった。

層　序

堆積積層は３枚からなり，表土層以下の文化層は全体に薄く，近年の攪乱を受けている。

第Ⅰ層　無遺物層。公園整備工事の際に客土された明褐色のニービ土である。厚さ10～60cmと広く本区を覆っている。遺構の直上に存在することから，ごく近年まで遺構面が地上に露出していたことがうかがわれる。

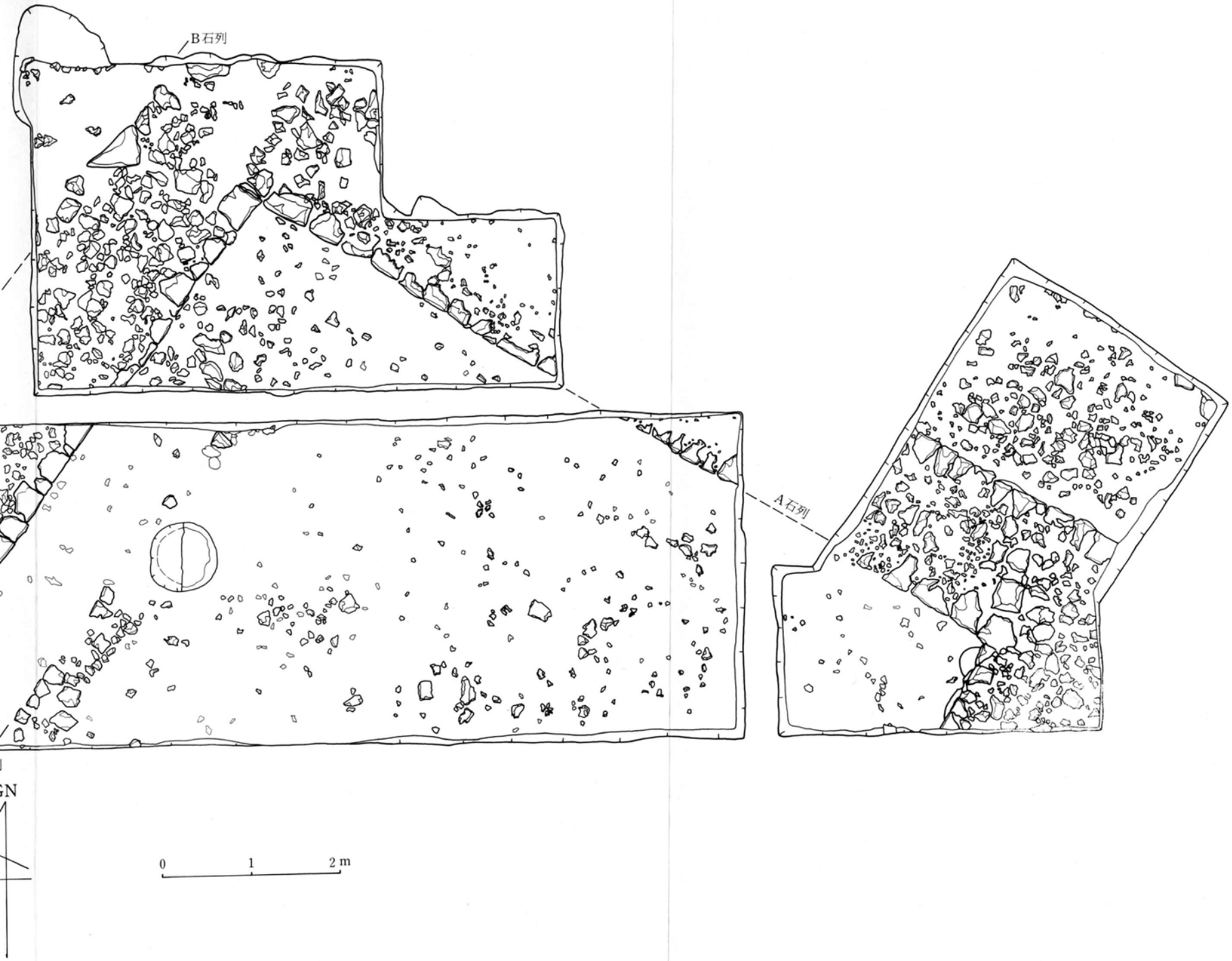
第Ⅱ層　遺物包含層。石灰岩塊混り黒褐色礫層で，基本的には上位の石塁遺構の破壊層と下位の礫層からなるが，両層の攪乱が著しく，発掘時点では両層を分層して調査することが困難であったため一括した。当初，第Ⅱ層面は石灰岩塊及び礫が地区全体に広がるように露れた。そこで，浮き石・非浮き石とを区別しての調査の結果，石塁遺構であることが確認された。本層の下位は前述のとおり１～３cm台の礫層からなり，主として，石塁の西側面に分布している。石塁の東側面では，第Ⅰ層以下はコーラル（黄褐色の粉石）が部分的にみられる。かつては全体に分布していたものと考えられる。

第Ⅲ層　赤褐色の地山。この面には部分的に岩盤が露頭している。地山面は表層と同様に北東方向へ緩やかに傾斜をしている。

イ，ＳＦ０２　石塁（第38図）

石塁は第38図に示すように，丘陵の長軸及びその垂直方向の短軸に沿うようにして直線構成で広場をめぐっている。

石塁は，第Ⅱ層の最下部から構築され，根石のみを残すものが多く，わずかに石積みが３段確認されるところが一部あるのみで，その元の天端高については不明。石積面は，面をある程度合わせた，雑石積みである。石塁の横幅は1.60～1.90m，全長56m（検出された長さ）を測る。その構造は，平行した両側の石積みと，その間の拳大の胴込からなる。特記されるものは平行する石積間に若干の差異がみられる。表示のごとく，A石列がB石列に比較して，石そのものが面取りの丁寧なものが使用され，又，その構築も密に配している。この面側はコーラル敷（黄褐色の石粉）がなされ，一時期地表面であったことが確認される。一方，B列は，若干手を加えたような雑石や，石灰岩以外の石（粗粒砂岩）を用いたり，またその配石も一定せず雑な感をみせている。B列は面側では，コーラル敷は存在せず，本石塁が，両列面側の区切を機能していたことが


B石列
A石列
GN
0
1
2 m

第38図　石塁遺構

第39図　溜め井戸状遺構（溜め井戸地区）

推定される。

石塁より若干後代になるが，C，D石列の遺構がみられる。現在その性格については不明。

C石列は，第II層下面から10～15cmレベルにあり，石は20～30cm大の大きさで粗い面を一面有する。他方，D石列は同階下面から5～10cmレベルで両面を有する石を使用している。一部未発掘になっているが，石塁をとりくんでひとつの囲をつくっている。本遺構内からも多くの遺物が検出されているが，他と異なったものは得られていない。

E石列は保存が悪くプランは明確ではないが，石塁を意識した様に石塁のA面に平行して配されている。当石列は面側が15～20cm，控え15～20cmの小型の石で構成している。石塁間には，1cm前後の石灰岩礫を混ぜた褐色土が広がり，当石列もそれにのっている。当石列の東面は破壊のため知るよしもないが，明式近世の赤色・灰色が瓦が重なるようにまとまって出土し，又，面取りのなされた切り石が多く投入された落ち込みが確認されている。

F石列は，石塁の南西隅に位置し石塁の軸線に沿うように配されている。石列の上面は，平坦に仕上げられ，それのみで天端をなした遺構であることが認められた。垂直に南側方向に展開し，溜め井戸の北辺に接している。

B，溜め井戸地区

展望台広場地区に検出された石塁遺構の南方に隣接するように存在する。本地区は溜井戸を中心とし，その周辺の石積・段石等から構成される。

層は遺構を覆った2枚の層からなる。

I層（ニービ土層）　上部にはデイゴ樹が植えられ赤褐色土が部分的に下部に認められた。

II層（石灰岩魂層）　遺物包含層であるが，戦中遺物（人骨）も混入し，わけても大量の石灰岩魂が周辺及び井戸内を覆いかぶる状態にあった。この状況は石塁遺構の上面にあった第2層と同じ状況である。厚さは約80cmで井戸より西はほとんど深く東に広がっている。

III層　井戸状遺構面及びその周辺のコーラル敷（黄褐色石粉土礫層）一時期の地表面をなした面である。

イ，ＳＥ０１（第39図）

井戸は平面形が四方形を呈する。軸線は，北東－南西を結ぶ線に長軸をあて石塁と同軸に位置する。その規模は，長軸4m・短軸2m・深さ40cmを測る。構造は約50cm台の石灰岩切り石を組んでおり，北辺・東辺・南辺を切り石一段で囲み，西辺のみ二段積をなしている。

当西辺の天端は石塁が広がる西方と同レベルにあり，当辺で西方のアテ（土留）になっている。又，井戸側からすると一面高いため面をもち，東方に向く形態をなしている。井戸の基底は水平になり，その底及び石組のかみ合せ面には，灰色の粘土を張りめぐらし不透水層をつくっている。又，井戸の基底直上には2～10cm台の河原偏平円礫が敷かれていることが確認された。調査期間中に降雨のため雨水が溜まり，充分保水力があることは実証済みである。

当井戸に伴う周辺の石列(段石)，コーラル敷，石積について記す。井戸の西辺側には，図に表

れている様に幾つかの石段が井戸に平行ないし垂直方向に配されている。漸次井戸に近くなるにつれ数cmレベルが低くなり，井戸への導入が認められる。

本地域の下部の状況を観察のため試掘をおこなった。その結果，地表下1.40mの地山面から大形の石灰岩魂を積上げて，現況面にしてある。また，地山面には，柱穴跡が一部みられ一時代の生活面が認められた。

井戸の南側面には，図のA－A′の石段がつくられ，それを境に南側へはレベルがさらに下がる。本遺構には，改修等の跡が認められた。当石段の西側は岩塊からなる造成層にあるが，東辺になると石段の組み合わせが雑なものになり，石段の下層には灰色の明式系瓦やその他の遺物が混入した堆積土層が投入されその上にのっていることから後世の改築である。

井戸の東方及び南側は，井戸の天場と同レベルにおいて，黄褐色石粉混入土（コーラル敷）が広く敷ならされている。

次の遺構は，当コーラル敷の上に載って造られる遺構群で後代のものである。

B－B′石積は，粗面の石灰岩を積み上げ，先述のA－A′石段の東端部に重なって検出された。一時期，その機能を共存していたことがうかがわれる。

D遺構は，円筒状の石積遺構である。調査のため一部をとりはずしたが，基底部直径60cm，上部直径90cmである。石積を構成する石灰岩は10～20cm台の比較的小ぶりの石をもちいている。石自体は粗面のもので，面取りの丁寧なものはみられない(むろん面は，内面している)。石積は階隙があり，粘土張りはない。石自体には火熱による変色及びその他の変化はみられないが，基底に灰が3～5cm堆積がみられ若干のグスク遺物が検出されている。

当D遺構の南に接してE石積みが存在する。一部を残すための全体の広がりは不明であるがコ字状に内面した石積で，先のD石積に比べ比較的大形の石でつくられている。

三次調査で本構の広がりを追求するため，東側地区（井戸東地区）を調査の結果，今次大戦時中の遺構であることが確認された。

C，松林地区（第40図）

本地区は城郭内の西方，北側地域にあたる。同区は慰霊の塔，アスファルト敷道路及び公園の植樹林等があり，遺構調査では，それらをさけてなされたためその範囲も一定の制約があった。

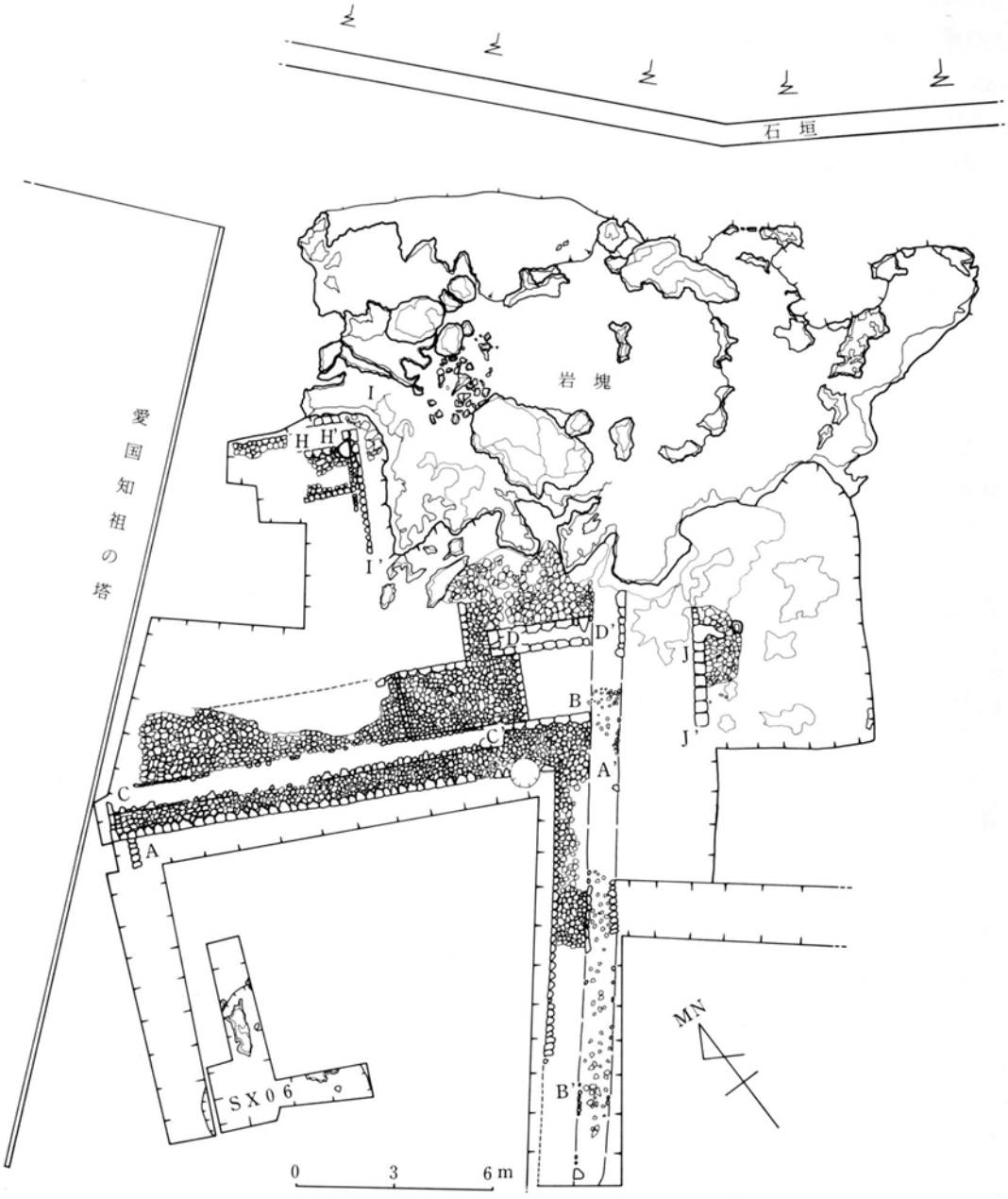
地区の選定理由は，遺構の一部がすでに地上に露出していて作業能率，又，その遺構の性格も早くつかめることが可能であろうということからであった。本地区は，東の展望台広場地区に比べ，レベル上高いためかニービ土の客土は及ばず腐食土が遺構面を薄く覆っていた。

遺構は石畳・石積・礎石等の組み合わさった遺構群からなり，部分的に重複をみせる遺構も認められた。遺物は表層が薄いためきわめて少なく，又，攪乱を受けたものでしめる。(但し落ち込み部分は一次期の一括資料としてあり未攪乱層になる。)

イ，SP01

第40図に現わすごとく城郭の北縁辺部に接して露頭した岩塊の以南に展開している。

規模の大きな遺構はまず石畳と石積である。石畳と石積は調査区中央では，逆L字状にまがっ



第40図　石畳・石積み遺構（松林地区）

ているがその角度は80°と直角にはなされていない。石畳に平行して存在するのがC－C′・D－D′の石積みである。但し上部は破壊され縁石と中込め石が残るのみで，石畳面と同レベルになっている。したがって高さについては明らかではない。石積の根石部分に残された礫は約20cm台のものである。

当石畳で注目すべきは，北側に接してある岩塊の縁にゆるやかに傾斜をつくりきわめて自然になじませてある点である。後述の遺構でも同様にあり，その岩塊は一つの機能を有していたものと推測された。

H－H′I－I′は重複した遺構である。前者が後者の上にのっている。前者は石敷の道になり、岩塊の西辺になじまされるように傾斜をつけて敷かれている。その岩塊面側は，露頭岩の凹部分にあたり，その斜面に階段状の縁石が認められた。なお縁石は動かされ段を形成するまでには残っていない。

後者の遺構は，基石と縁石からなり岩塊をさけて存在する。又，細かく観察すると岩塊面側は，垂直上削離がみられ，かつては建物があったものと推定され，その部分は建物の一つの隅に相当したものと思われる。

J－J′は，四方形の切り石を岩盤まで貼って石敷された遺構である。周辺も調査を広げたが残存が悪く全体の形状は不明である。礎石のあり方から何らかの建物の存在が考えられる。

ロ，ＳＸ０６

A－A′・B－B′の石畳の西側面に遺構の存在の有無を確認するためトレンチ（Hトレンチ）を入れた。トレンチが小範囲なのは一帯が松林のため，それ以上広げることが困難であったからである。

調査の結果，深さが1.10mの土壙であることが確められた。土壙内は三層からなり，瓦や多くの石灰岩礫が投入されていた。以下，略記する。

第１層　表土層，層厚約4.5cm，攪乱層で若干遺物を含む。

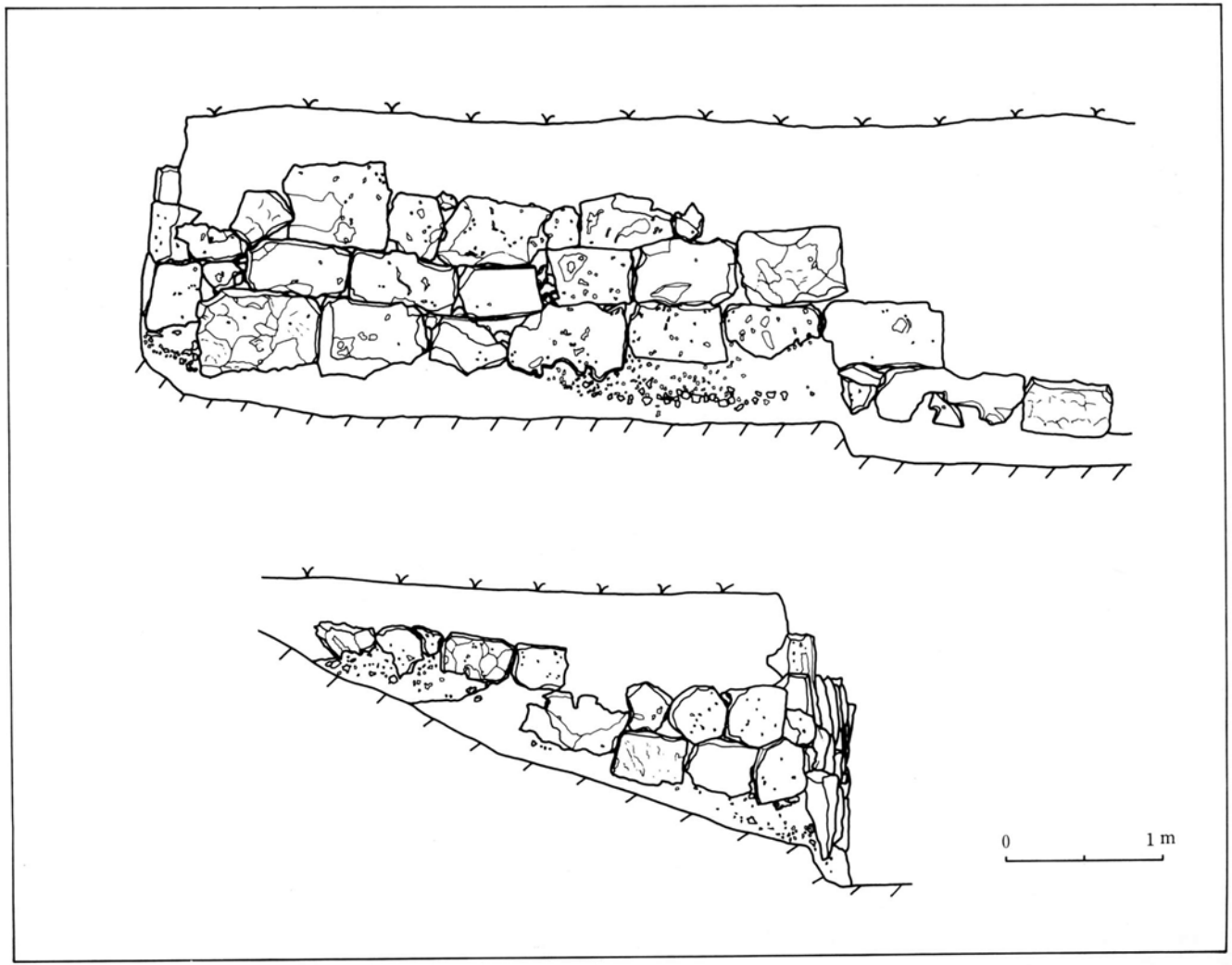
第２層　黒褐色土層で水平堆積はみられず部分的片よりの堆積の任方をしている。赤色・灰色の瓦（明式系）が最も多く出土し，次いで，青磁・陶器・土器・獣骨・貝殻等が得られた。

第３層（礫層）20cm大の平均した石灰岩礫を中心とし，中には面取りのなされた切り石が認められた。なお礫間は空間があり土層の混入はみられなかった。

Ｄ，南側城門地区

イ，ＳＷ０２（第41図）

一次調査で確認された城壁の東のつながりを追求していくなかで発見された新たな城壁で広場の展望台より南へ約30m・城郭のほぼ中央の南辺側に位置する。地形上では中央広場のフラット面が当該地域で傾斜をするところである。本城壁は城門入口の様にみられたが，三次調査で，さらに外郭をめぐる城壁が確認されたため，第一門としての城門ではないことが確定した。第一門に関連する城壁については，三次調査区で述べる。



第41図　南側城門地区の石垣実測図

本城壁は，約50cm程の土砂礫層下から検出された。城門を構成する両石垣は，その形状，石の積み方，展開方向，構築時期に差異がみられる。図に示す東側石積みは，城内に向かってほぼ垂直に折れて東へ発展している。なおコーナー部分は正確には緩やかなカーブを描く，石面はやや粗造で布積みになる。一面積みで胴込め石がなされている。現在，三段目まで確認されるが，根石の直下は黒色土混りの赤色土になる。一方西側面の石積は約1.5mの間隔をおいて存在する。その広がりは東石積と異なり西から南方向へ緩やかなカーブをし，外観が石塁のごとく存する。

当該石積には，明瞭な切り石は無く50cm大の粗割りのものを両側に組み中には同形大の雑石を入れこんでいる。当石積は赤土混じりの黒褐色土層に構築されている。両サイドの石積間の道は地山面まで掘り下げたが，他の遺構はみられなかった。

なお，当掘り面は傾斜角20～30°をなすが，根石は一般に埋もれていることから（図41）のごとく本来はもっとゆるやかな斜面を有したものと考えられる。

遺　物

遺物は第1表に示した種類が検出された。以下，種別に略記する。

(1) 青　磁

青磁は，52点検出された。器種別の出土状況は碗36点，盤8点，皿4点，その他の器種4点で碗が多く得られた。以下，碗から順に略記する。

碗は口縁部破片27点，底部破片9点が得られたが，その中には復元可能の資料はなく全て破片であった。口縁部分類別の出土状況はⅠⓐ－1点，Ⅰⓑ－3点，Ⅱⓐ－1点，Ⅱⓑ＋1点，Ⅲ－3点，Ⅳ－16点，Ⅴ－1点，不明1点に大別された。

第42図1はⅠⓑとしたもので細刻蓮弁文を外体部に配する。しかし，蓮弁の頭部分の文様は認められず口縁に沿う圏線が走る。釉はやや透明な薄い緑色を呈する。同図2は分類Ⅱに属するもので大ぶりの碗が想定される。文様は外体部の中途から下方にかけ瞭を有する蓮弁文，内体部には篦刻文を配する。釉はきれいな若草色で厚く施釉する。口径の推測は前者を含め可能で前者は約14.4cm，後者は約21cmを測った。

同図3～5の3点は分類Ⅳに属するもので，3は一見口縁が肥厚しているように外反する。釉はは淡いオリーブ色，口径は推算18.4cmを測る。4は口径推算15.2cmを測るもので釉色は若草色を呈する。5はやや透明感のある淡いオリーブ色の釉を施釉するもので口径は約14.7cmを測った。

同図6・7は分類Ⅴとして扱った口縁部破片で6は外面口縁に雷文帯，内体部には篦彫り文を配する。釉は若草色，口径は推算14.4cmを測る。7は開き義味の浅い碗形が想定されるもので内体部には篦彫り文が認められる。釉はやや透明なオリーブ色，口径は推算15.3cmを測った。

底部は分類Ⅰ－4点，Ⅱ－1点，Ⅲ－2点，不明2点に大別された。

第42図8・9は分類Ⅰとしたもので，8は内底に篦彫りの花文と圏線を描く。釉は薄いオリーブ色で高台外側中途まで施釉する。9は淡いオリーブの釉を外底まで施釉するが内外底で輪状に釉を掻き取るもので，露胎部分には重ね焼きによると思われる付着痕が認められる。底径は前者

が約6.8cm，後者は約6.6cmを測る。

同図10は分類IIに属すると思われるもので畳付の外側角を雑に削る。内底には菊様の花文と圏様を線刻で描く。釉はやや透明なオリーブ色で高台外側まで施釉する。底径は推算6cmを測る。

同図11・12は底径をやや小さくするもので不明として扱った。11は高台を断面方形状にするが部分的に外側を雑に削る。全体に削りも粗く，器面には瞭が認められる。釉はやや透明なオリーブ色で高台の外側まで施釉する。底径は推算5cmを測った。12は底が厚いものでつくりは緻密である。内底には菊を模したスタンプ文と圏線を配する。釉はやや透明な薄緑で外底まで施釉する。しかし，外底では輪状に掻き取る。底径は推算4.9cmを測った。

盤は口縁部破片5点，底部破片3点が得られた。口縁部は分類I－3点，III－2点，底部は分類Iのみ3点が検出された。

第42図13は分類IIIに属するもので口縁部外面に凸の圏線，内面には丸彫りの蓮弁文を配する。口唇部には刻目も認められる。釉は透明感のある薄緑を呈する。

同図14・15は底部分類Iに属する碁笥底の資料である。14は内体部に丸彫りの蓮弁文と凸の圏線が認められる。釉は若草色で外底まで施釉する。しかし，中央部分は円状の露胎のようである。底径は推算10.8cmを測る。15も内体部に丸彫りの蓮弁文が認められるもので，底径は推算8.5cmを測った。

皿は口縁部破片3点，底部破片1点が検出された。口縁部は分類Iⓑ－1点，IIⓐ－2点に大別され，Iⓑを第42図16，IIⓐを同図17に示した。16は外体部に凸文の蓮弁文，内底に花文(？)と凸の圏線を配するもので口径は約12cm，器高は約4.3cm，底径は約4.9cmを測った。17は内体部に丸彫りの蓮弁を描くものである。同図18は高台を竹節状にする底部破片でやや透明な釉を高台側面まで施釉するが，内底は輪状の露胎である。内底には線彫りの花文を配する。底径は推算5.4cmを測った。

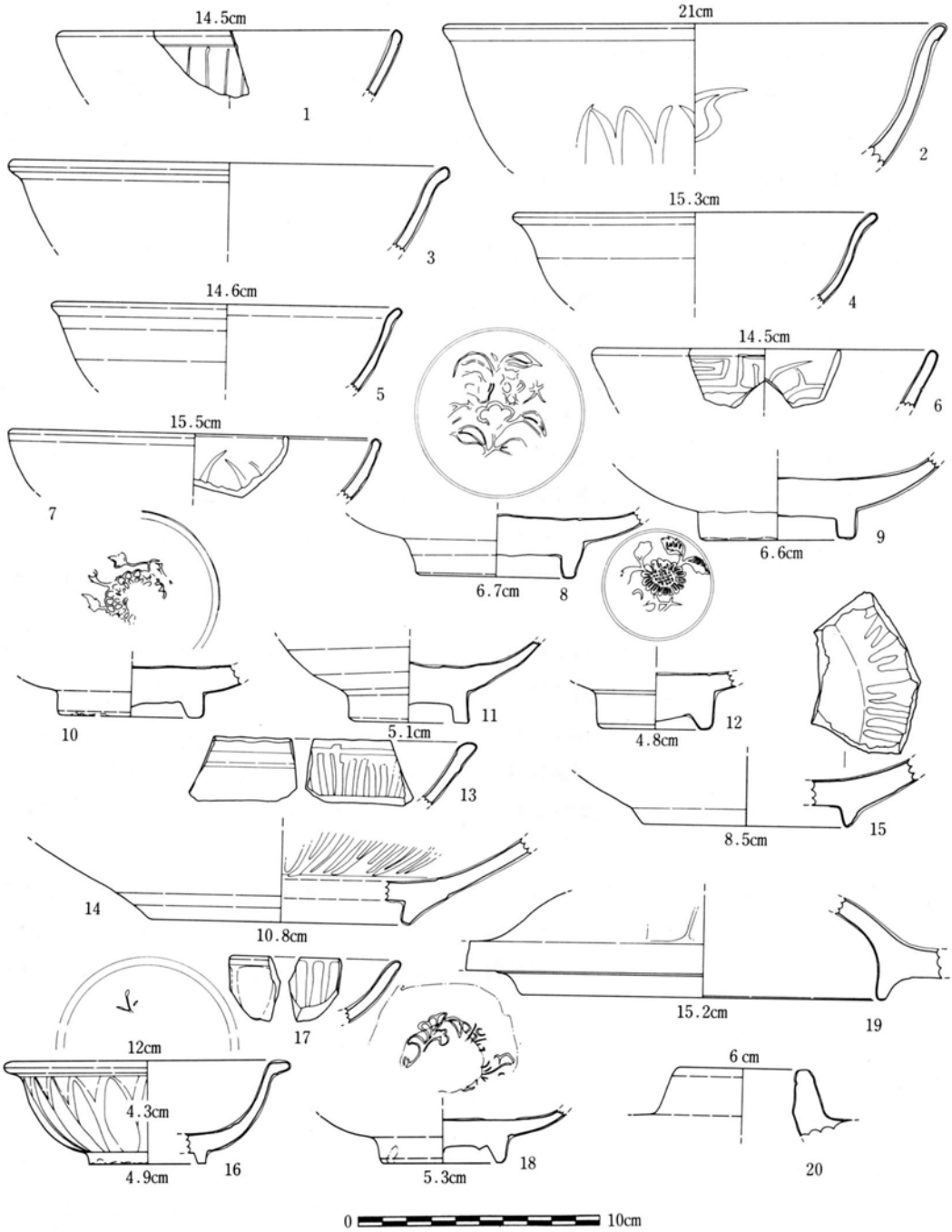
その他の器種は酒会壺の蓋と思われるもの（第42図19）や器種は判然としないが大ぶりの器形が推察されるもの（第42図20）が得られた。後者は実測図の上では口縁のように描いたが底部の資料になることも考えられる。尚，その他に器種の判然としない口縁部破片1点，底部破片1点が得られた。

(2) 白　磁

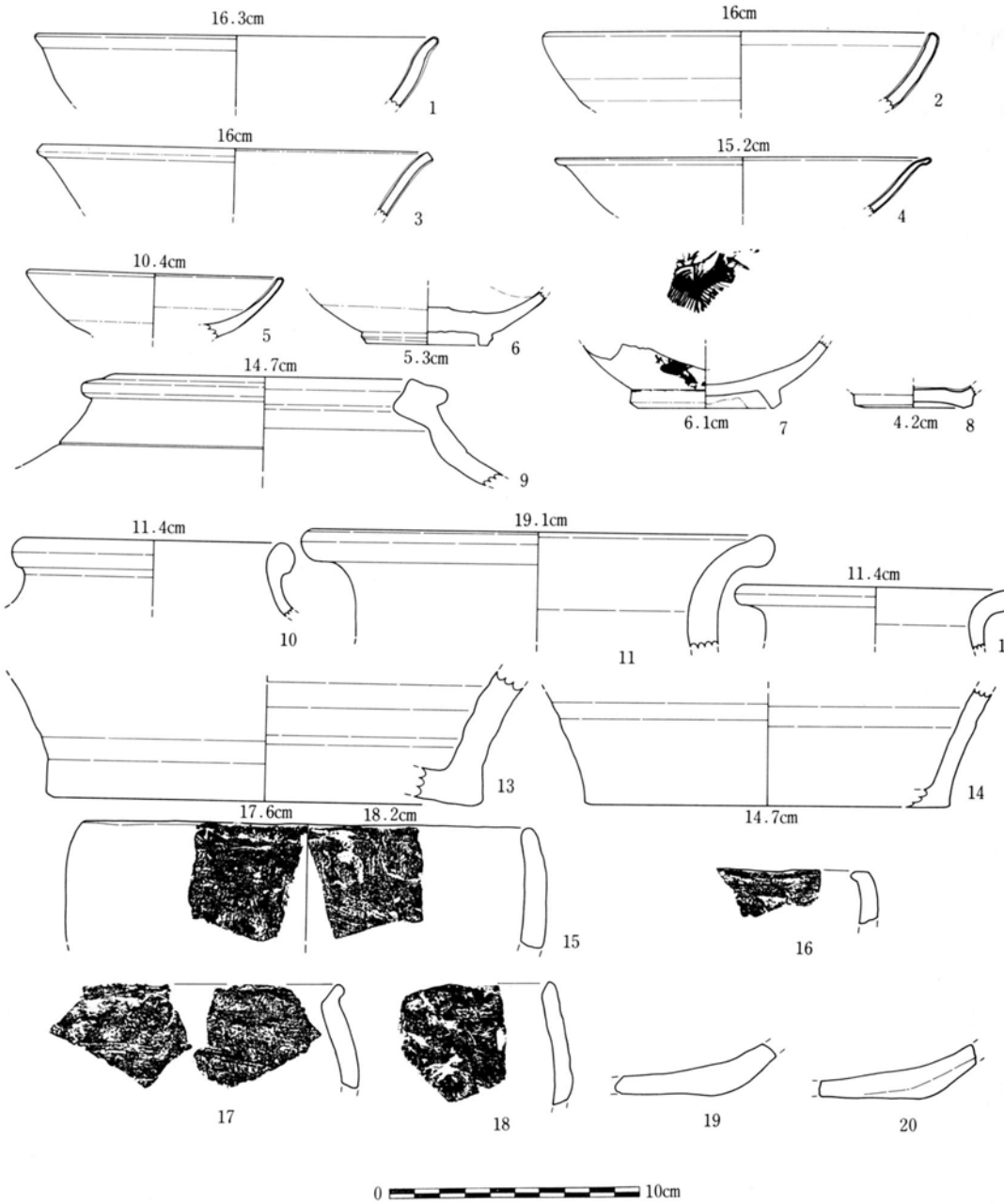
白磁は9点得られたが，いずれも小破片である。これを器種別・分類別に分けると碗I－1点（第43図1），碗II－1点（同図2），皿I－1点（同図3），皿III－1点（同図4），皿V－1点（同図5），碗の底部と思われるもの1点（同図6），その他器種の判然としない胴部の破片に大別された。

(3) 染　付

染付は口縁部破片1点，胴部破片1点，底部破片2点が得られた。第43図7は底部の資料で外体部に樹状の小文様，内底部には観月図状の文様が認められる。釉は外底まで施釉するが畳付では掻き取る。もう1点の底部も前述の底部に類似するもので内底にはねじり花文を配するもので


14.5cm
1
21cm
2
3
15.3cm
4
14.6cm
5
14.5cm
6
15.5cm
7
6.7cm
8
6.6cm
9
10
5.1cm
11
4.8cm
12
13
8.5cm
15
14
10.8cm
15.2cm
19
17
12cm
4.3cm
4.9cm
16
5.3cm
18
6 cm
20
0
10cm

第42図　青　　磁



第43図　白磁（1～6）、染付（7）、黒釉陶器（8）、褐釉陶器（9～14）、土器（15～20）

あった。図及び詳細は省略する。

(4) 黒釉陶器

黒釉陶器は胴部破片7点，底部破片2点が得られた。底部は分類Ⅰ－1点，Ⅱ－1点に大別され，後者に属するものを第43図8に図示した。尚，分類Ⅰの資料と胴部破片については小破片のため図・詳細とも省略する。

(5) 褐釉陶器

褐釉陶器は口縁部破片5点，底部破片5点が検出された。器種は口縁部を観察する限りでは壺形に属するもののみであった。壺形口縁部を分類別に分けるとⅠ－1点，Ⅳ1点，Ⅴ2点，その他1点に大別された。第43図9は分類Ⅰ，同図10はⅣ，同図11はⅤ，同図12はその他としたものである。

同図13・14は底部の破片で前者は分類Ⅰ，後者は分類Ⅱに属すると思われる。

(6) 陶質土器

陶質土器は胴部破片2点と底部破片1点が得られた。3点とも叩き痕は認められずロクロ引きが認められた。尚，図と詳細については省略する。

(7) 土　器

土器は口縁部破片10点，底部破片5点が検出された。これを分類別に分けると口縁部破片は鉢Ⅱⓐ－4点，鉢Ⅱⓑ－1点，鉢Ⅱⓒ－2点，不明3点，底部は分類Ⅲ－3点，不明2点に大別された。

第43図15～18は口縁部の資料で鉢形に属する資料である。15は分類Ⅱⓐ，16はⅡⓑ，17・18はⅡⓒにそれぞれ細分される。

同図19・20は底部の資料で分類Ⅲとして扱った。

4. 第三次調査

第三次調査は一、二次調査の接点にあたる城郭内中央部よりやや南側の地域と城門確認のため城郭内南側地域を対象におこなった。

A，溜め井東地区（第39図）

溜め井戸の東側地域を示す。本地区は，一次調査で一部検出した基壇と二次調査で出土した円筒状遺構，コの字状石積の東側にあたり，それら遺構の広がりを確認するため選定された地区である。

調査の結果，石列遺構，コーラル敷（遺構面）等の遺構が検出され6枚の堆積層が確認された。以下層を基準に遺構を説明する。

第Ⅰ層　ニービ土の客土である。当初マウンドをなしていたところで中心部が最も厚く90cm程あり，南方向（殿地区）へ漸次薄くなっている。無遺物層である。

第Ⅱ層　石灰岩塊層である。グスク遺物が出土するが戦時中の攪乱層である。層厚が１ｍを測り，ほぼ水平にあるが南方向へのみ漸次薄くなっている(第44図)。石灰岩塊は50～40cm大のものを主体に他に25～30cm大のものからなる。岩塊間は，いずれも隙間がある。又わずかではあるがその隙間に顆粒状に乾燥した黒褐色土が全体にみられ当土にグスク遺物が含まれている。しかし，先述した様にガラス，ビニール袋，戦時中の戦争遺物が伴出し，後世の攪乱層であることが判明している。

したがって本地区西側に検出された円筒状遺構，コの字状石積は後世のものであることになった。いかなる機能をもっていたかは，いまのところ明らかではない。

他方，一次調査で検出されたＡ－Ａ′石積は二枚の石積になり南面している(ＳＴ０２)。いずれも岩盤の上にのり，北側の石積（奥側）は60°傾斜をもって本層を留めている。現状の石積はさらに高くなるものと思われ，全体観からすると基壇状を呈するものと思われるが，その機能についても不明である（第45図)。

イ．ＳＲ０２

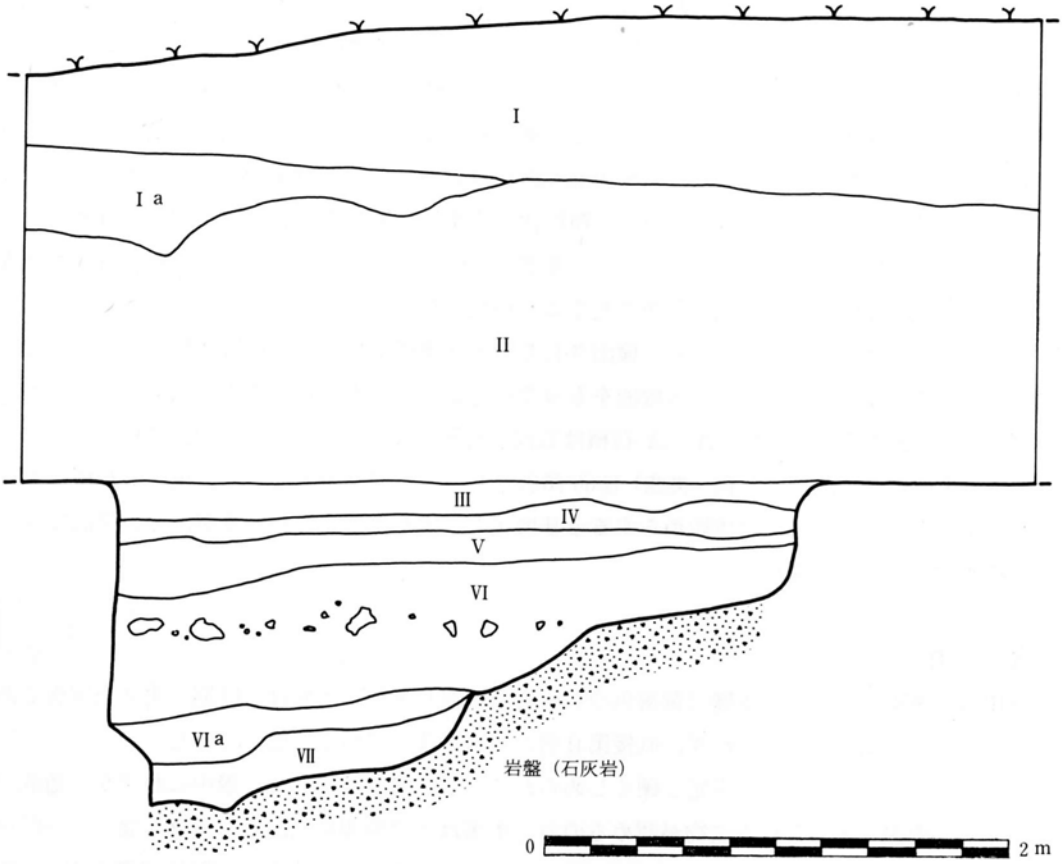
第Ⅲ層　黄褐色のコーラル層（黄褐色の石灰岩石粉混り土層）上面は一時期の生活空間面であるが文化層はみられず，直接第Ⅱ層の岩塊が覆っている状態にあった。

当該層は水平に安定し硬くしめられている。層厚は約20cm，層中にわずかに造成中の混入とみられる遺物が認めるのみ。本層は井戸周辺に広がるコーラル面と同一時期のもので南側Ａ－Ａ′縁石で留められている。縁石は40cm大の大形石灰岩礫を用い，粗割りに面を組み合わせたものである。いずれにしても井戸周辺とくに東側は広場の様な空間地になっていたことが知られる。

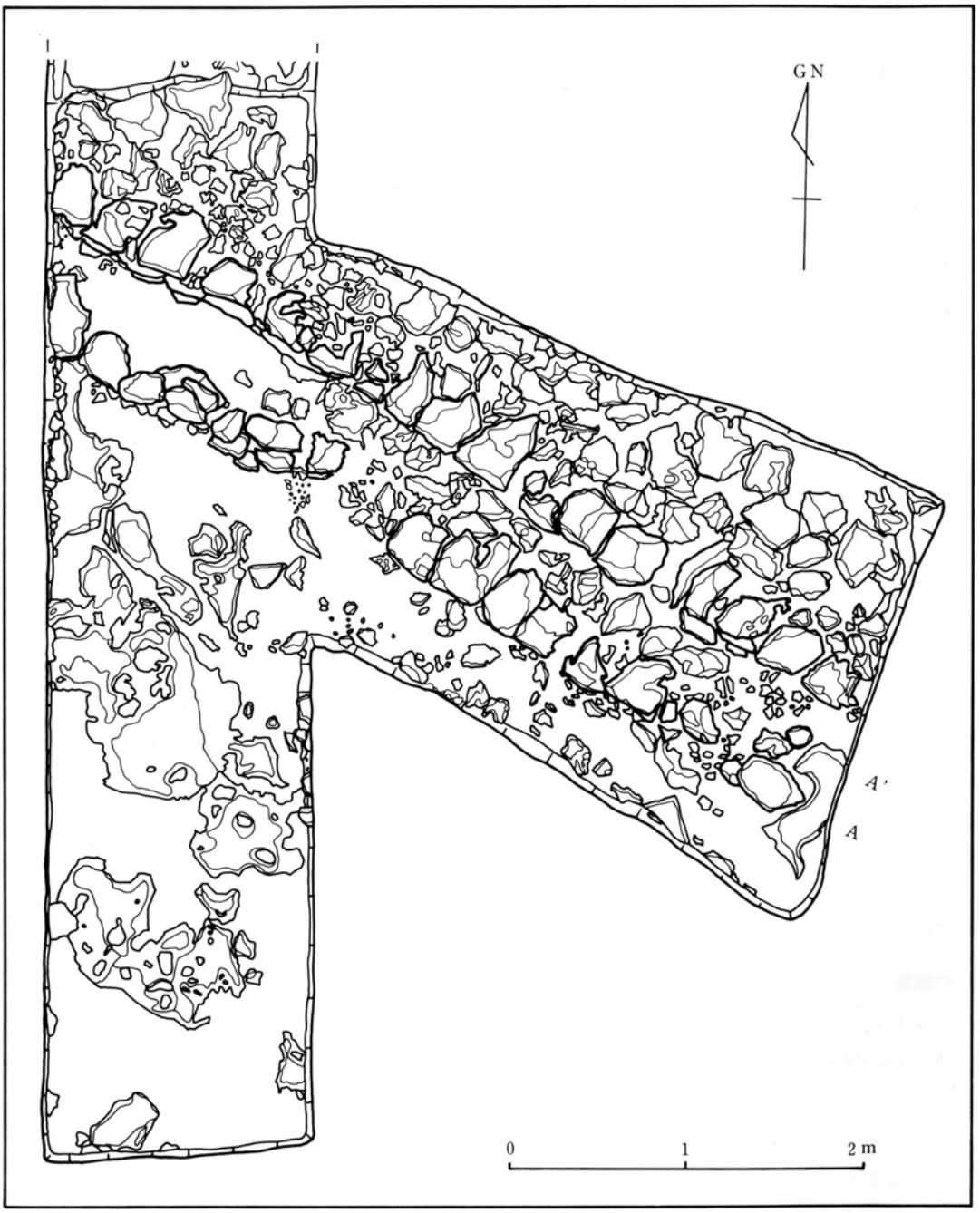
第Ⅳ層　暗褐色混礫土層である。未攪乱の遺物含有層。土質は粘性があるが硬くしまり，ほぼ水平に堆積している。層厚は約15cmある。本層の下位から（第39図）に示す遺構が構築されている。90°に折れまがった石列部分が検出されたため東側にその広がりを追求したが，第Ⅲ層時期に破壊され確認されなかった。当遺構は，25cmの石灰岩を面取り加工しその面をもって並べたもので，上面（天場）も水平に平坦加工されている。石列内側（南側）は大小の石灰岩礫が充てんされ中ごめ状を呈する。上述のとおり，東側はすでに破壊されその形状，規模については不明であるが，現在の状況から推すと，何らかの遺物遺構の存在していたものと考えられる。

第Ⅴ層　黄褐色のコーラル層(黄褐色の石灰岩粉石混じり土層)。造成層で，その層厚は８～10cmと薄い。本層上面が一時の空間を有していたのか，あるいは造成の手順としての堆積層かは明らかではない。この時期の遺構は未発見である。

第Ⅵ層　赤土混りの黒色土層である。遺物包含層である。土質は上層に比べ粘性が少なく，20cm台の岩礫が混入している。本層の上面は第Ⅴ層のため水平にあるが，下層面は地山に接し，その形状に合わせて凹凸が著しい。



第44図　層序（北壁）溜め井東グリッド



第45図　石列平面図

第Ⅶ層　地山の赤土層。J－10，HGrid では，本層に柱穴群が検出されている。深いもので70cm，浅いもので10cmを測り，基底は平坦にある。柱穴のプランについては小範囲のため明らかではない。

遺　物

(1)青　磁

青磁は，136点検出された。これを器種別に分けると碗25点，盤47点，皿12点，杯２点，その他の器種７点には大別された。以下，器種別に略記する。

碗

碗は口縁部破片40点，底破片25点が得られ，第18表に口縁部，層位別の出土状況を示した。以下，口縁部と底部に分けて概述する。

第18表　溜め井東地区　青磁口縁部分別類別出土表

分類／層位	I		II	III	IV		V	計
	a	b			a	b		
第１層						1		1
2					3	1		4
3		2	1		2	1	1	7
4		2	2	1	1	1		7
5		2	1	2	3		5	16
6	3				1	1		2
7					2			2
8					1			1
計	3	6	4	3	13	5	6	40

口縁部

分類Ⅰⓐに属するものは３点得られたが，そのうち１点を第46図１に示した。同図１は箆彫りで大ぶりの蓮弁文を描いたと思われるもので，淡いオリーブ色の釉色を呈する。第５層の出土である。

分類Ⅰⓑは６点得られた。うち４点は箆彫り，２点は細刻の蓮弁文を描くものであった。第47図２は箆彫りの蓮弁文を配するもので釉は若草色を呈する。口径は推算13.7cm，第５層の出土である。同図３は細刻の蓮弁文を描くもので釉色は薄い緑色を呈する。器形は全体に小ぶりが想定され，口径は推算10.8cmを測った。

分類Ⅱⓐは同図４に図示した１点が検出された。外体部に箆彫りの蓮弁文，内体部には草花文を配する。釉色は若草色，口径は推算13.4cmを測る。第５層の出土である。

分類II⓫に属するものは3点検出されたが，うち2点は諸特徴から同一個体と思われるものであった。同図5はこれに属するもので外体部に箆彫り文，内面には草花文と思われる文様を描く。釉は若草色を呈する。口径は推算14.8cmを測った。第4層の出土。6も外体部に箆彫り文，内面には草花文が認められるものである。釉は薄い緑色，口径は推算18.5cmを測った。

分類IIIに属するものは3点得られた。同図7はその中の1点で明確な文様は認められない。しかし，本標品の場合，口縁部が僅かに肥厚するもので釉はやや透明な若草色，口径は推算17cmを測る。第5層の出土である。

分類VIは18点検出され，その名のⓐ・ⓑの細分はⓐ13点，ⓑ5点に分けられた。同図8はⓐに属するもので頸部から折り曲げられるように外反する。内体部下方には圏線が認められる釉色は透明感のあるオリーブ色で口径は推算15cmを測った。同図9はⓑに属するもので内面に箆彫りの文様が僅かに認められる。釉は淡いオリーブ色を呈する。尚，本タイプの口縁外反には幾つかのヴゥリエイションが認められた。又，二次的に火を受けたものも1点得られた。

分類Vはⓐ5点，ⓑ3点が検出された。第46図10はⓐに属するもので口縁外面に雷文帯を配する。釉はやや透明感のある薄い緑色，口径は推算14.4cmを測った。第5層の出土である。同図11はⓑに属する資料で釉色はオリーブ色，口径は推算14.4cmを測る。尚，口縁部には圏線を一条配する。

底部は25点検出された。これを分類別に分けるとII－15点，IV－5点，V－1点，不明1点に大別された。

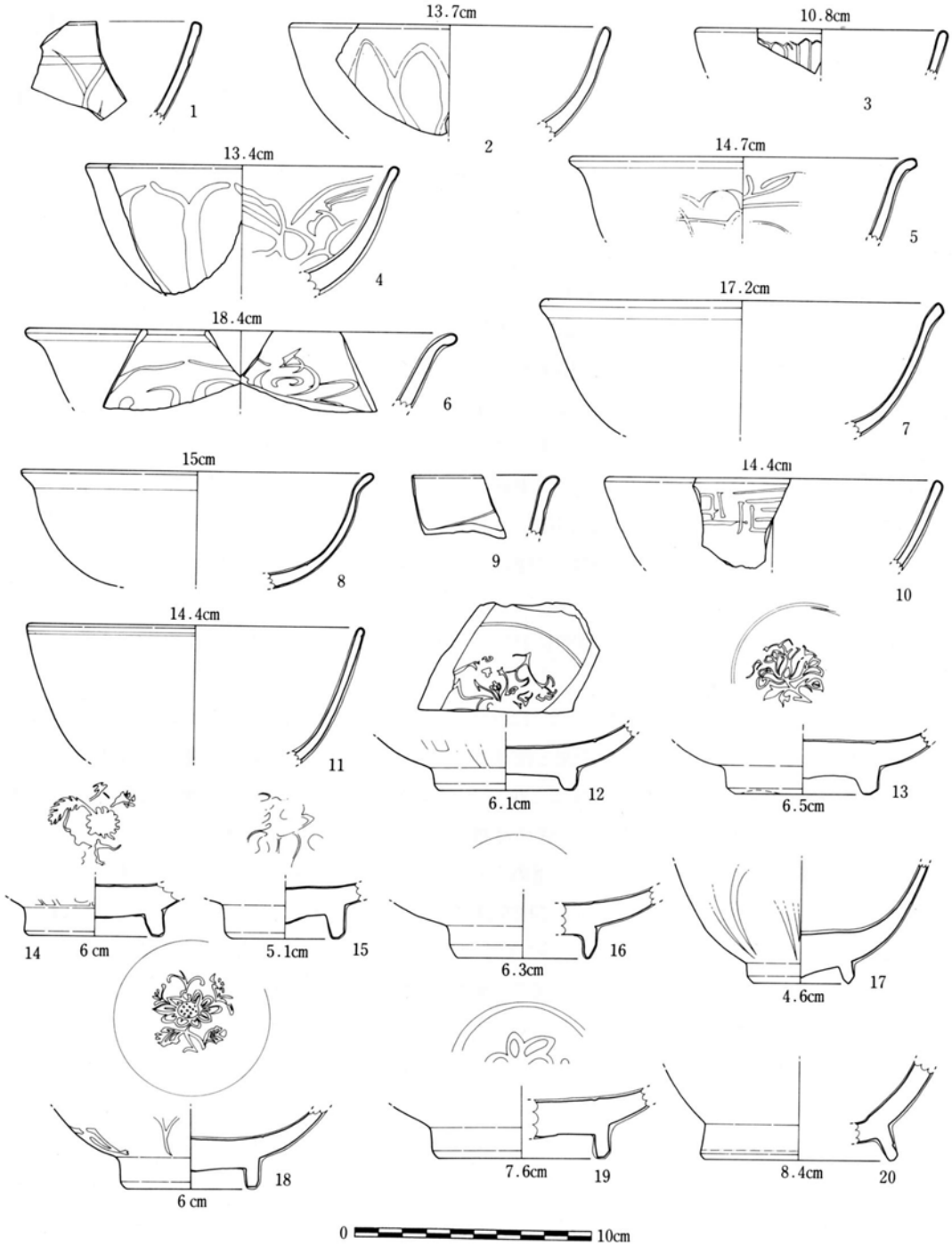
第46図12～15は分類IIに属するもので，12は体部下方に箆彫りの縦位文様が認められるが構図に判然としない。内底には箆彫りの花文と圏線を配する。釉は薄い若草色で高台の外側まで施釉する。底径は推算6.1cmを測る。13も内底に花文と圏線を配するものである。釉は透明感のある薄いオリーブ色で高台外側まで施釉する。底径は推算6.5cmを測る。14は外体部下方に縦位線刻，内底に花文と「天」のスタンプ的な文様が認められるものである。釉は透明感のある薄い緑色で外底まで施釉する。しかし，外底では輪状に釉を掻き取る。又，外底には粗土の付着も認められる。底径は推算5.9cmを測った。15は底の径がやや小さくなるもので底径は約5.1cmを測る。釉色は淡いオリーブ色で外底まで施釉するが，外底では輪状に掻き取る。内底にはスタンプ文を配するが文様構図は判然としない。

同図16は分類IIIに属するもので高台はバランスのとれた竹節状にする。釉は淡いオリーブ色で高台裏側まで施釉する。底径は推算6.3cmを測る。

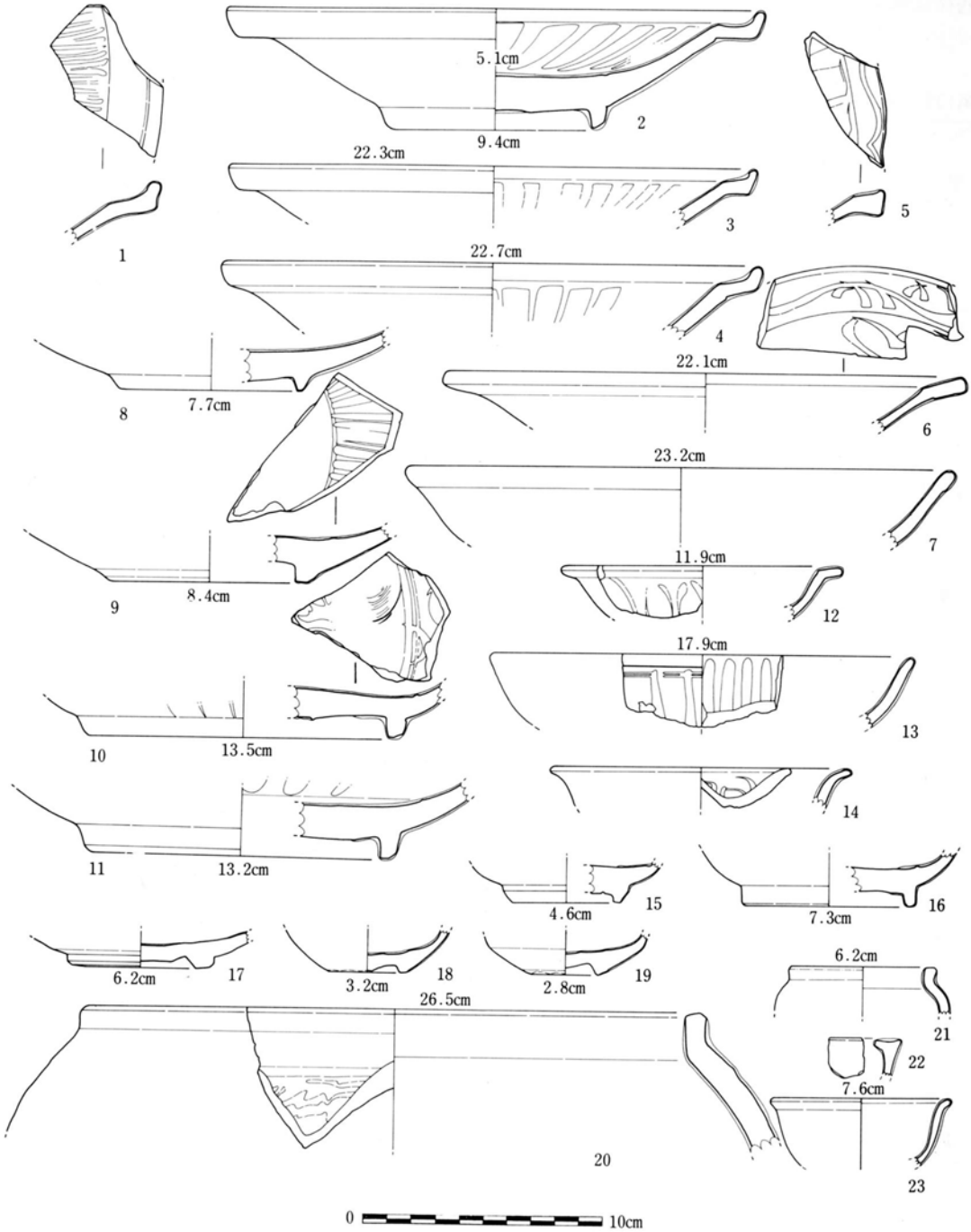
同図17も前者同様，分類IIIに属すると思われるものである。器形は小ぶりで外体部には箆彫りの蓮弁文を配する。釉は淡いオリーブ色で高台の外側中途まで施釉する。露胎などの諸特徴からすると肥前系のようにも見えるが判然としない。

同図18・19は分類IVとしたもので，18は内底に菊花文のスタンプとシャープな圏線を配する。外体部にも箆彫りの文様が認められたが構図は判然としない。釉は若草色で外底まで施釉するが，外底では輪状に掻き取る。底径は推算5.9cmを測った。19も内底に圏線と箆彫り文が認められるものである。釉色は前者同様，若草色を呈する。底径は推算7.6cmを測る。

同図20は分類Vに属すると思われるもので釉を畳付部分まで施釉する。釉色は若草色を呈する。


13.7cm
10.8cm
1
2
3
13.4cm
14.7cm
4
5
17.2cm
18.4cm
6
7
15cm
14.4cm
8
9
10
14.4cm
11
6.1cm
12
6.5cm
13
14
6 cm
5.1cm
15
6.3cm
16
4.6cm
17
18
6 cm
7.6cm
19
8.4cm
20
0
10cm

第46図　青　　磁


5.1cm
9.4cm
2
22.3cm
3
5
1
22.7cm
4
8
7.7cm
22.1cm
6
23.2cm
7
9
8.4cm
11.9cm
12
17.9cm
13
10
13.5cm
14
11
13.2cm
4.6cm
15
7.3cm
16
6.2cm
17
3.2cm
18
2.8cm
19
6.2cm
21
26.5cm
22
7.6cm
20
23
0
10cm

第47図　青　　磁

底径は推算8.4cmを測った。本標品は輪花文碗の底部に属することも考えられるが判然としない。

第19表　留め井東グリッド　青磁盤口縁部分類別出土表

分類 / 層位	I					II		III	計
	ⓐ	ⓑ	ⓑ	ⓒ	不明	*a*	*b*		
第1層					1				1
2		1							1
3	1		1		2				4
4			4		7	2	2	1	16
5	1		1		7	2		1	12
6			1						1
7				1	2		1		4
計	2	1	7	1	19	4	3	2	39

盤

盤は口縁部破片39点，底部破片8点が検出された。口縁部の分類別出土状況は第19表のとおりで，図上復元可能なものが1点あった（第47図2）。以下，口縁部・底部の特徴的なものについて略記する。

口縁部

第47図1は分類Iⓐに属するもので内面に丸彫りを密に描く。釉は淡い薄緑色を呈する。

同図2・3は分類Iⓑに属する。2は図上復元を試みたもので内面に箆彫りの蓮弁文と圏線を描く。内底にも文様が認められるが判然としない。釉色はオリーブ色で外底まで施釉が外底では輪状に掻き取る。口径は約27cm，器高は約5.1cm，底径は約9.3cmを測る。第3層の出土，3は口径推算22.4cmを測るもので，釉色は若草色を呈する。第5層の出土。

同図4は分類Iⓓに属するもので釉はオリーブ色を呈する。口径は推算22.9cmを測る。第7層の出土である。

第47図5は分類IIⓐに属するものである。鍔部分に箆彫り文，内体部には草花文を配し釉色は透明感のあるオリーブ色を呈する。第4層の出土である。

同図6はII *b* に属するもので鍔の部分に箆彫り文，内体部には草花文を配する。釉は薄い緑色，口径は推算22.1cmを測る。第4層の出土。

尚，I不明としたものは分類Iに属するが資料が小さいため細分が困難なものである。中には文様を描かないと思われるものも認められたが便宜上，前述のように扱った。以下，図と詳細については省略する。

分類IIIに属するものは2点検出され，その中に1点を同図7に図示した。釉色はオリーブ褐色で第5層の出土である。

底部は分類Ⅰ－6点，分類Ⅱ－2点に大別された。第47図8・9は分類Ⅰとしたもので，8は碁笥底状を呈するが，底部の外側を「く」の字状して高台状にする。文様は内底に印花文，内体部には蓮弁文と凸の圏線が僅かに認められる。釉は淡いオリーブ色，底径は推算7.7cmを測る。第5層の出土。9は丸彫りの蓮弁文と凸の圏線が認められるものである。釉はやや透明なオリーブ褐色で底径は推算8.4cmを測った。第5層の出土である。

同図10・11は分類Ⅱに含まれると思われるもので，10は内底に櫛状の施文具で描いた文様と凸の圏線が，外体部には蓮弁文の下端と思われるものが見られる。釉は薄い緑色で外底まで施釉するが，外底では輪状に掻き取る。底径は推算13.6cmであった。11は内面に凸の圏線と幅広い蓮弁文，外面には凸の蓮弁状の文様が認められる。釉はオリーブ褐色で外底まで施釉するが，前者10同様掻き取る。底径は推算13.2cmを測った。

皿

皿は口縁部破片7点，底部破片5点が得られた。口縁部を分類別に分けるとⅠⓑ－8点，Ⅱⓐ－6点，Ⅲ－1点，Ⅳⓑ－7点に大別され，Ⅰⓑを第48図12，Ⅲは同図13，Ⅳは同図14に図示した。分類Ⅳに属する他の2点は無文であった。

底部は畳付外側を削り，釉を高台まで施釉するもの2点，畳付部分が円味を呈し，釉は畳付あるいは高台の裏側まで施釉するもの2点，やや幅広の高台で畳付の外側を削り，釉を体部下方まで施釉するもの1点が検出された。第48図15は高台の外側を削り，釉を高台まで施釉するもの，同図16は畳付が円味を呈し，釉は畳付あるいは高台の裏側まで施釉するもの，同図17は幅広の高台で畳付の外側を削り，釉を体部下方まで施釉するものである。

杯

この器種として明確なものは2点検出された。2点とも碁笥底杯の底部の資料である。第48図18は釉色が淡い薄緑，底径は推算3.4cmを測った。同図19は内底に凸の圏線を配するもので釉は淡いオリーブ色を呈する。底径は推算3cmを測る。2点とも第4層の出土。

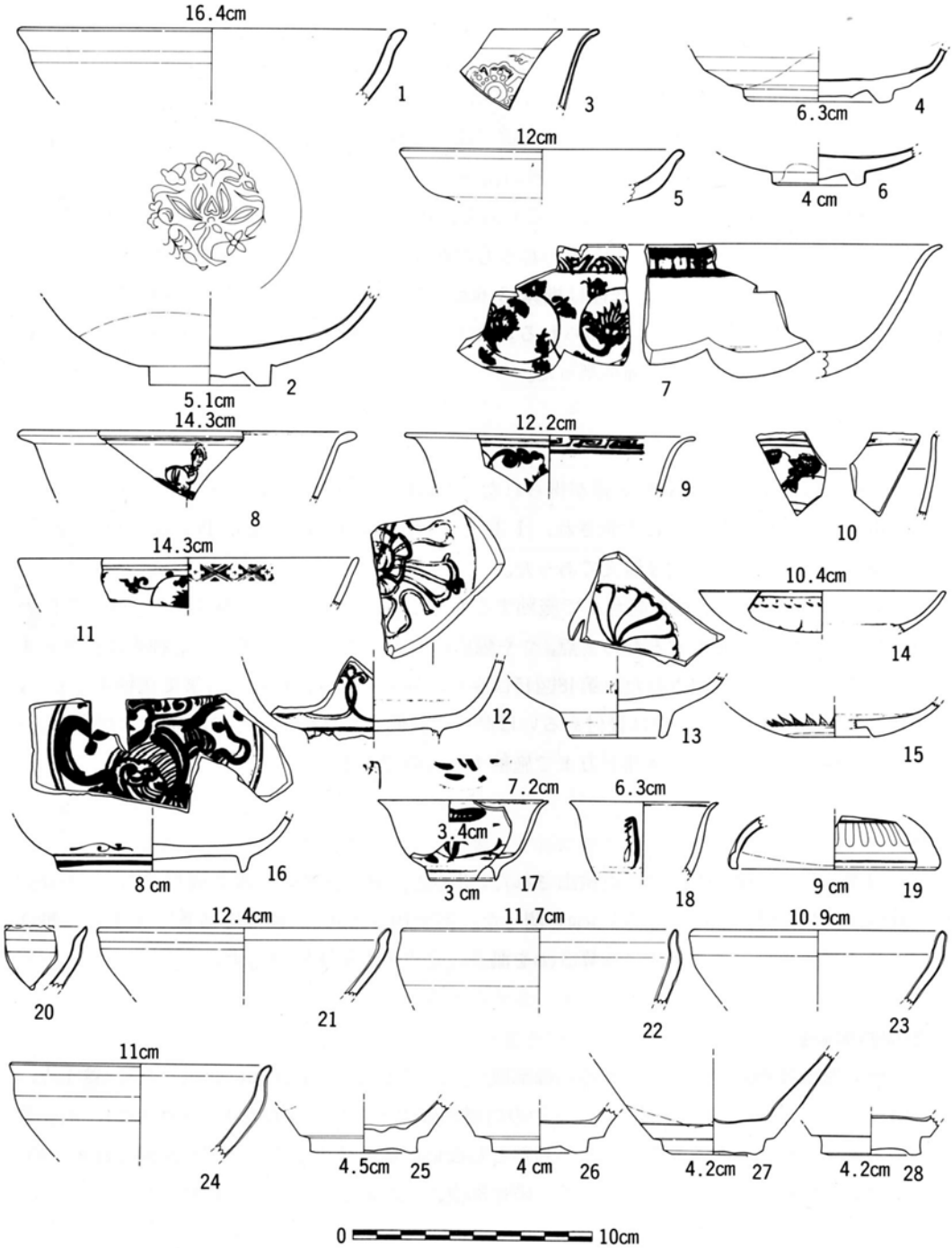
その他の器種

その他の器種は酒会壺が想定される口縁部破片2点（1点を第47図20に図示した），蓋1点，底部破片1点，小型壺1点（同図21），香炉の口縁部破片と思われるもの1点（同図22），前記碗の小型あるいは杯に属すると思われるが判然としない口縁部破片1点（同図23）が得られた。尚，その他にも，器種を推察できない口縁部小破片36点，底部破片7点が得られた。

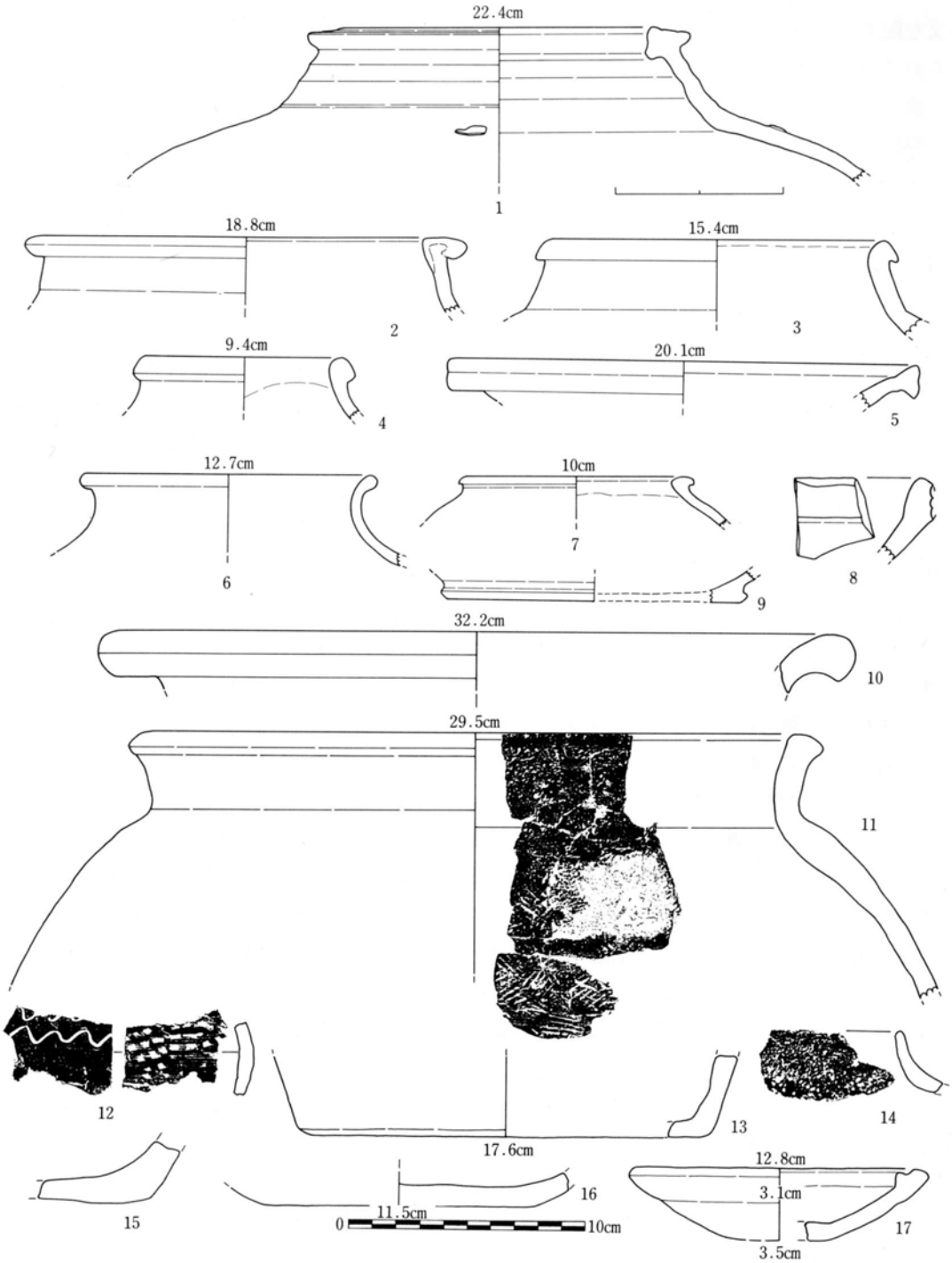
(2) 白　磁

白磁は39点検出された。これを器種別に見ると碗の口縁部破片4点，底部破片3点，皿の口縁部破片4点，底部破片4点，器種不明の口縁部破片5点，底部破片1点に大別された。以下，碗から順に略記する。

碗は口縁部2点，底部3点が分類Ⅱ，残りの口縁部2点は口縁端部が著しく外反し内体部に浮



第48図　白磁（1～6）、染付（7～19）、黒釉陶器（20～28）



第49図　褐釉陶器（1～9）、瓦質土器（10）、陶質土器（11～13）、土器（14～17）

文を配するものであった。第48図1は分類IIの口縁部，同図2は前記1と同類の底部と思われるものである。同図3は口縁端部が著しく外反するもので内体部には花文状の浮文が認められる。

皿は分類II－1点（同図4），III－1点（同図5），IV－3点が得られた。

同図6は皿の底部と思われるもので，高台外側まで施釉する。いずれの種類の底部に属すか判然としない。

(3) 染付

染付は101点得られた。これを器種で大別すると碗，皿，盃，器種不明に分けられた。以下，特徴的なものについて略記する。

第48図7～13は碗形が想定されるもので7～11は口縁部，12・13は底部の資料である。同図7～10は口縁端部が外反するもので，7は端反りの碗と思われる。口縁外面に四方襷，体部には唐草文，腰部に界線，口縁部内面に四方襷状の文様を配する。第3層の出土である。同図8は外体部に馬土，口縁の内外面に界線を描くものである。9は外体部に唐草文，口縁外面に2条の界線，内面には雷文帯を配する。第4層の出土。口径は前記8で約14.3cm，前記9は約12.3cmを測った。10は口縁端部が僅かに外反すると思われるもので口縁の内外面に二条の界線，外体部には牡丹唐草文？を描く。

同図11は直口の口縁になるもので外体部に唐草文と界線，口縁内面は四方襷文を配する。口径は推算14.4cmを測った。

同図12・13は碗の底部が想定されるものである。12は外体部にアラベスク文，内底には十字花文が認められる。又，外底には文字を描くが大半を欠くため判然としない。13は内底にねじ花文を配する。釉は畳付部分で掻き取り露胎にする。底径は推算4.2cmを測った。

同図14～16は皿に属するもので，14・15は碁笥底の小皿が予想される。14は口縁部破片で波濤文帯，胴下部には芭蕉葉文が認められるものである。口径は推算10.5cmを測った。15は碁笥底の資料で胴下部に芭蕉文と界線が認められるものである。底径は推算3.8cmを測る。同図10は皿の底部と思われるもので，内底に玉取り獅子を配する。底径は推算8cmを測った。

同図11・12は小型の盃に属すると思われる資料で11は外体部に草花文，口縁部及び腰部には界線を描く。口径は推算7.2cm，器高は推算3.4cm，底径は推算2.8cmを測った。12は外体部に梵字状の文字が一文字認められるものである。口径は推算6.3cmを測った。

同図19は蓋が想定される青釉との掻け分けの資料である。便宜上ここで扱った。外面には凸の蓮弁文と界線を配する。口径は推算8.9cmを測った。

(4) 黒釉陶器

黒釉陶器は口縁部破片20点，底部破片13点が得られた。これを分類すると口縁部はI－2点，II－15点，その他3点，底部はI－5点，II－7点，不明1点に大別された。

第48図20～24は口縁部の資料で同図20は分類I，同図21・22は分類II，同図23・24はその他に属する。その他とした前記24は分類を広く摑えるとIIに属すると思われるが，口縁の形態が多少異なること，施釉の前に白土を塗っていることからその他とした。

同図25～28は底部の資料で25・26は分類Ⅰ，27・28は分類Ⅱに属する。

(5) 褐釉陶器

褐釉陶器は口縁部破片30点，底部破片19点が検出された。本地区の褐釉陶器も他の地区の例にもれず口縁部破片を観察する限り壺形のみが認められた。壺形口縁部は分類Ⅰ－9点，Ⅱ－4点，Ⅲⓐ－4点，Ⅳⓐ－10点，Ⅴⓐ1点，その他2点に大別された。しかし，分類Ⅳとしたものには分類Ⅰに近似するが，口縁内面が厚さを持たないため口縁断面が偏楕円状になるもの4点も含めた。

第49図1は分類Ⅰ，同図2は分類Ⅱ，同図3は分類Ⅲ，同図4は分類Ⅳ，同図5は分類Ⅴに属する。同図6・7はその他としたもので6は口縁が著しく外反するもの，7は口縁外面が分類Ⅰに近似するものの内側が「く」の字状を呈するものである。

同図8は壺形から外れるもので口縁部は逆の字状に折曲する。外面は露胎，内面は口縁の中途より施釉する。鉢形が想定される。

底部は17点の中に1点（第49図9），くびれ平底が得られた。底径は推算13cmを測った。尚，他の底部については他の地区に類似したので省略した。

(6) 瓦質土器

瓦質土器は第49図10に図示した口縁部破片1点が得られた。口縁部が著しく外反するもので端部は僅かに肥厚する。分類から外れるものである。

(7) 陶質土器

陶質土器は口縁部破片2点と胴部破片2点，底部破片1点が得られた。第49図11は甕形が想定される口縁部破片でほぼ直口口縁の存で肩で胴上部が張る。外面はロクロ引きにより丁寧に成形するが，内面は頸部以下に平行叩きを顕著に残す。色調は灰色が赤褐色をはさむサンドヴッチ状を呈する。口径は推算29.3cmを測った。

同図12は肩部の資料で波状破線文が2条認められる。内面には格子目の叩き痕が認められるが，外面には認められない。色調はサンドヴッチ状を呈する。

同図13は底部の資料で平底である。底径は推算17.9cmを測った。

(8) 土　器

土器は口縁部破片4点，底部破片4点，蓋6点が得られた。口縁部は壺Ⅰ－1点，鉢Ⅱⓐ－2点，不明1点，底部は分類Ⅱ－2点，Ⅲ－1点，不明に大別された。

第49図14は口縁部破片で壺Ⅰ，同図15・16は底部の破片で前者は分類Ⅱ，後者は分類Ⅱに属する。同図17は蓋の資料で口径は約12.7cmを測った。尚，本地区出土の蓋は6点とも前記17のタイプであった。

B，南側城門地区

第二次調査で検出された石垣（ＳＷ０２）よりさらに外をめぐる城壁で，一次調査で検出した城壁（ＳＷ０１）に連続するものである。今後の調査に城門の発見が期待される地区である。

イ，ＳＬ０２

本城壁は先述の石積から南へ約20m離れたところにあり，地形に沿うように大きく外をめぐり郭をつくっている。石積は布積でなされているが，その面はやや粗い。大かたが根石のみを残して破壊が進んでいるが，石積としては本地区が最も高くあったものと推定される。

さて，外郭の第一門を検出するために本城壁を追跡したのであるが，ここでも未発見におわっている。なお，当城壁に垂直に交わるように城壁根石の上にコーラル，赤土等を入れ，若干の道が後代につくられていることが知られ，その破壊も考えられるが，一方，城門の構造的問題も含まれているため，根石のみで城門の有無の判断もむつかしく，今後の詳細な再調査によって確定されるものと思われる。

尚，遺物については内容的に表採に近い資料であることや他の地区と遺物に変化が認められないことから省略した。

又，第三次調査では他に第１表でＪⅣｉ10ｊ1グリッドとしたところの柱穴と思われる穴と方形状を呈すると思われる集石の検出されたグリッドがあるが，紙面の関係から遺構の図のみを図示し，遺構の詳細と遺物の詳細は省略した（第50図）。

5. その他の遺物（１・２・３次）

３次に渡る青磁，白磁，染付，黒釉陶器，褐釉陶器，陶質土器，土器，古銭以外の遺物について略記する。

(1) 象嵌青磁

象嵌青磁は12点得られた。以下，特徴的なものについて略記する。

第51図１は皿が想定されるもので外体部に蓮弁文と界線，内体部には小菊文と界線の象嵌文様が認められる。ＳＷ０２地区の出土である。

同図２は白黒象嵌の文様が認められる胴部破片で袋物が想定される。文様は白象嵌で魚のウロコ状の文様，黒色象嵌で描いた斜位文が認められる。ＪⅣｉ10ｊ1グリッドの出土。

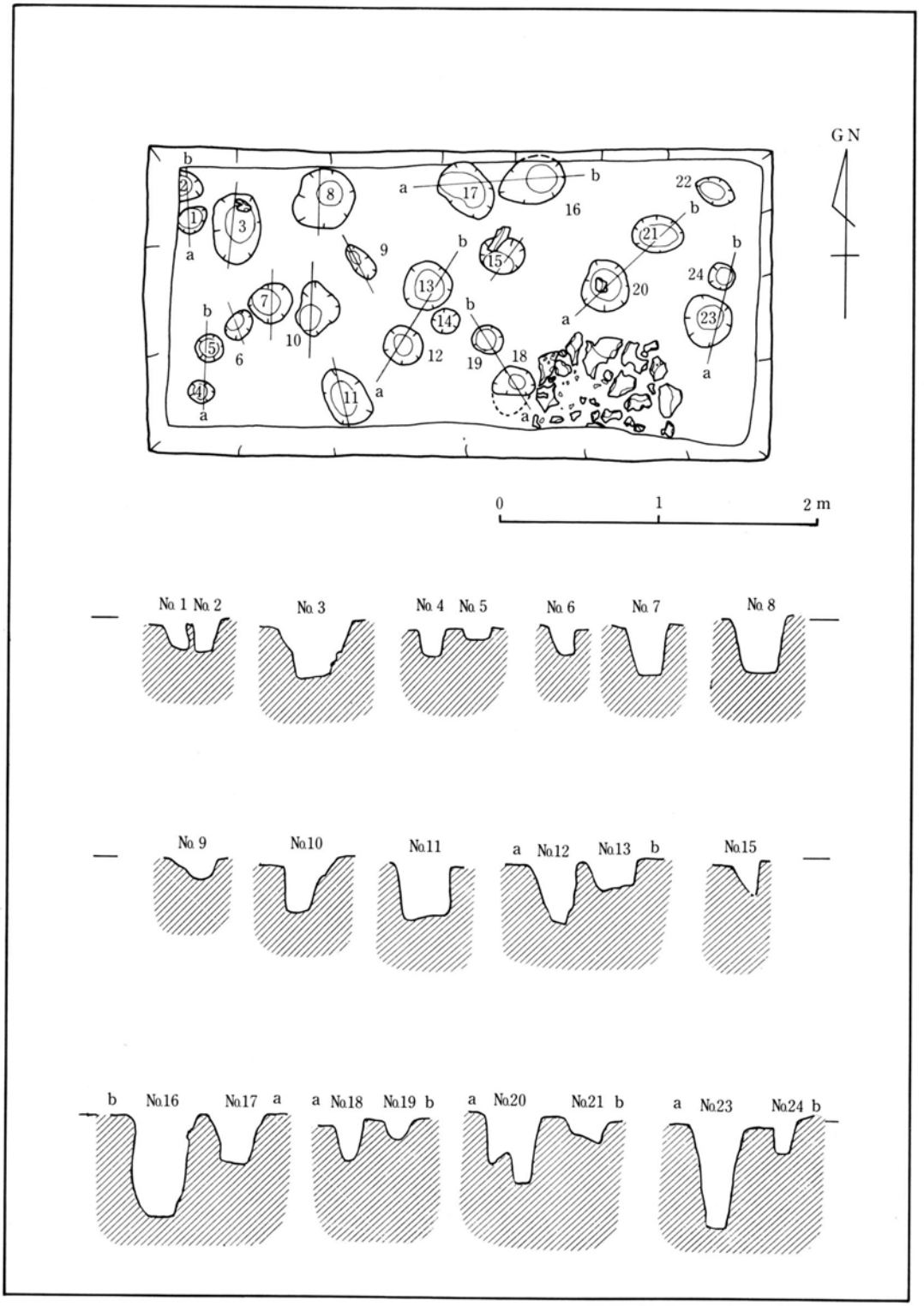
同図３も胴部破片で内面に蓮弁文と小菊文の白象嵌が認められる。ＳＬ０１の出土である。

同図４は碗の底部と思われるもので，内底に白象嵌の界線が僅かに認められる。底径は推算６cmを測った，ＳＬ０２の出土。

(2) 瑠璃釉

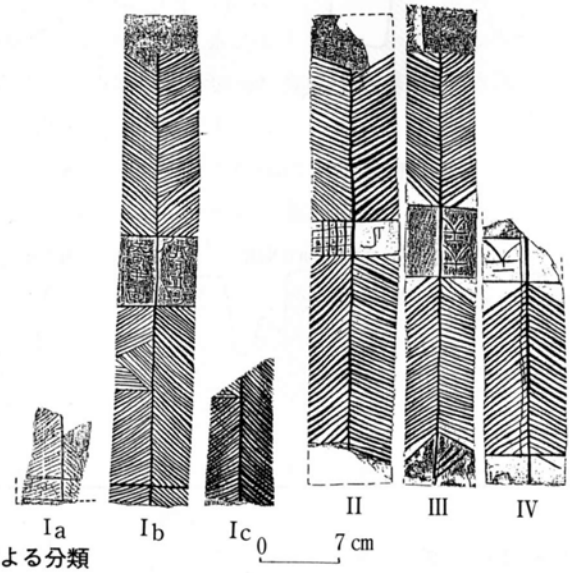
瑠璃釉は13点得られたが，その大半は胴部破片で器種が判るものは少なかった。以下，器種をある程度推察できるものについて略記する。

第51図５は碗が想定される口縁部破片で端部は僅かに外反し先に移行するにつれすぼまる。外



第50図　柱穴群及び集石（ＪⅣｉ10ｊ１グリッド）

第51図　象嵌青磁（1～4）　瑠璃釉（5、6）　緑釉（7）　三彩（8）　サワンカローク（9）
鉄絵（10）　陶器（11～13）　象嵌土器（14）



第52図　古瓦の叩きによる分類

面に瑠璃釉，内面には白磁釉を施釉する。溜め井東地区の出土。

同図6は図上復元を試みたもので，小型の盃である。外面に瑠璃釉，内面には白磁釉を施釉する。口径は約4cm，器高は約2.4cm，底径は約2.3cmを測った。カンジャー地区の出土。

その他，紹介を省略した第二次発掘調査の瓶形の口縁部破片や器種の判然としない底部の資料が得られた。

(3) 緑釉陶器

緑釉陶器は袋物（瓶？）の底部破片1点，頸部破片1点が得られた。いずれも，第3次調査の溜め井東地区の出土で線核の文様が認められる。又，2点とも下地に白の化粧をしてあとに緑釉を施釉する。

第51図7は高台を有する底部の資料で，文様は高台外面に横走する二条の線刻文，体部下方には巻線状の刻文が認められる。釉は外底まで施釉する。底径は推算6.7cmを測る。

(4) 三彩陶器

三彩は4点得られた。その中で器種が判明するものは第51図8に図示した瓶形1であった。同図1は口縁部を欠くため口縁部は判然としないが，ほぼ復元が可能な資料で胴下部から頸部にかけて締る瓶形が想定される。釉は下地に白の化粧をして緑と茶そして透明になる釉を施釉する。底径は約6cmを測った。溜め井東地区の礫層の出土である。尚，同層からは多くの小礼が検出された。

他の3点は小破片のため器形は不明である。しかし，その中の2点は熊本県の浜の館，糸満市の南山城跡で発見されている鳥形水注の羽毛部分に近似するように見えるが判然としない。

(5) タイ陶磁

サワンカローク窯の袋物2点が第一次調査の殿地区と第三次調査の溜め井東地区で各1点得られた。2点とも肩部あるいは胴下半部の資料と思われるもので，外面に同心円状の鉄絵文が認められる。第51図9に第三次発掘調査で出土した1点を図示した。

(6) 鉄絵（タイ陶磁を除く）

鉄絵は口縁部破片1点，胴部破片1点と底部の破片1点が得られた。第51図10は底部破片で碗形の底部と思われるものである。内底には三重の界線が認められる。釉は外体部下方まで施釉し外底は露胎にする。底径は推算5.2cmを測った。集石十柱穴地区の出土である。

残りの2点は口縁部・胴部の小破片のため，文様構図は判然としない。第三次調査溜め井東地区の出土資料である。図と詳細については省略する。

(7) 翡翠釉

胴部破片1点が第一次発掘調査の北側崖下地区より得られた。磁胎に翡翠釉を施釉したもので，釉には瑕点状の水色が濃く発色する。又，釉には細かい貫入が走る。胴部の小破片のため図と詳

細は省略した。

(8) 陶　器

陶器は168点得られた。しかし，その大半は小破片のため特徴的なものについて略記する。

第51図11は口縁部断面がTの字状を呈するもので口唇部を幅広く成形する。口縁外面は間隔をおいて上から下の方向に押し下げるため縁部は波状を呈する。ＳＧ０１の出土。

同図12は胴部破片で縄目状の凸文が横走する。器色は褐色を呈する。ＳＬ０２の出土。

同図13は擂鉢の底部破片で備前系と思われるものである。内面には８本を単位とする凹線が認められる。溜め井東地区の出土。備前系は他にも溜め井地区，ＳＬ０１地区でも得られた。

(9) 象嵌陶質土器

第51図14に図示したものがこれに属する。この種の土器は今帰仁城跡で象嵌陶質土器として扱っていることから本報告もそれに習った。本遺跡ではＪｈ試掘グリッドの第２層から１点のみ検出された。

(10) 古　瓦

古瓦は本城跡の出土遺物の中で多数を占めるもので，土のう袋の約300袋分が検出された。この資料を細かく分類し報告するには紙面の都合もあってできないので，簡単に紹介する。

検出された古瓦は大別すると下記の二種の系統に大別される。

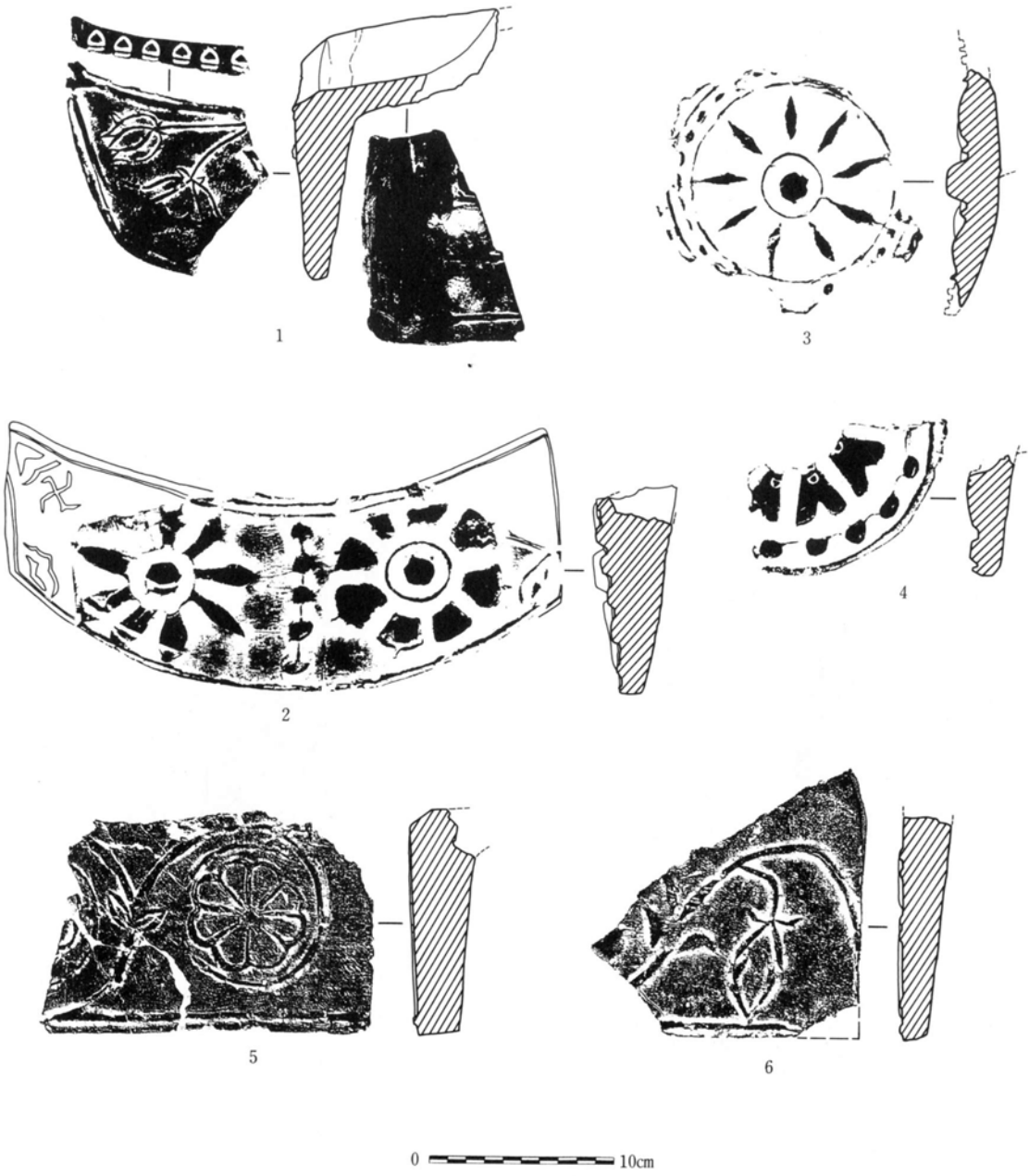
Ｉ類　本類は平瓦の凸面に「关酉年高麗瓦匠造」「大天」「格子目十瓦」「天」のスタンプ文字や羽状の叩きが認められるもので，俗称，高麗瓦と呼ばれたりしているものである。しかし，一般的には高麗系瓦として扱われている。瓦当には丸瓦の場合，蓮弁状の花文と珠を配するもの，平軒も蓮弁状の花文が認められた。

本城跡では広場地区の最も東側に位置するＳＬ０３地区，三次に亘る発掘調査の東端に位置するコーグスク地区，前記，広場地区の南側に位置するＳＨ０１試掘グリッドの第６・７層から主に検出された。前記，発掘区の中でもＳＬ０３地区の出土量は多く，調査中，最も多い日は一日に一輪車の二・三台分出土することもあった。

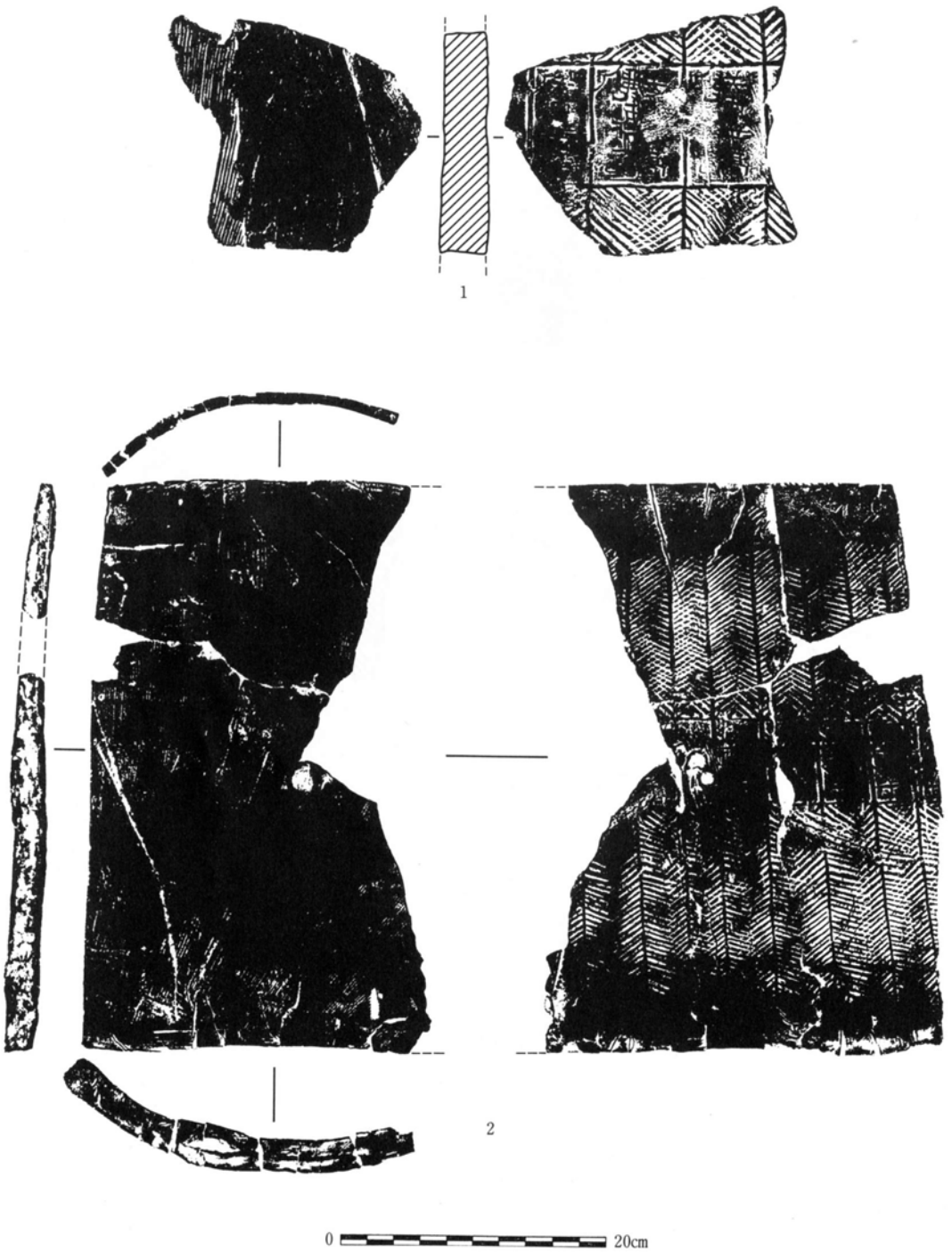
第53図１～６は瓦当の資料で１・２は平軒，３・４は丸軒，５・６は種類は判然としないが飾瓦に属すると思われるものである。平瓦は前述したスタンプ文字から４つに分けられた。第52図に一回の叩き痕の復元を試みた。その中で分類Ｉは下端の横線の有無からさらに３つに細分した。第54図１・２，第55図１は分類のＩ・III・IIにそれぞれ属するものである。平瓦のサイズは現資料(同図２)で縦位44.3cm，横位27.5cm，厚さ3.9～1.1cm，重量4.2ｇ，２は縦43cm，横位28.5cm，厚さ2.3～1.5cm，重さ2.9ｇを測る。尚，分類IVに属する資料は小破片のため省略した。

第55図２は大天のスタンプ文字が認められる丸瓦で縦位46.2cm，横位16.5cm，厚さ1.9cm，重さ3.28ｇを測った。

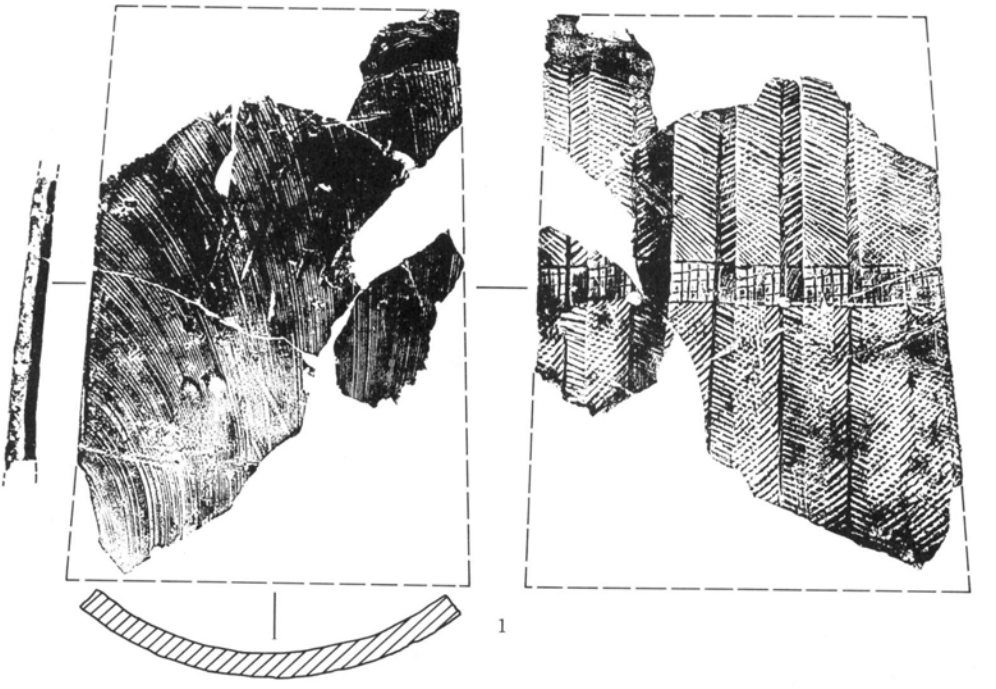
II類　一般に俗称明式瓦と呼ばれたりしているもので灰色を呈する。本類の典型的な資料は本



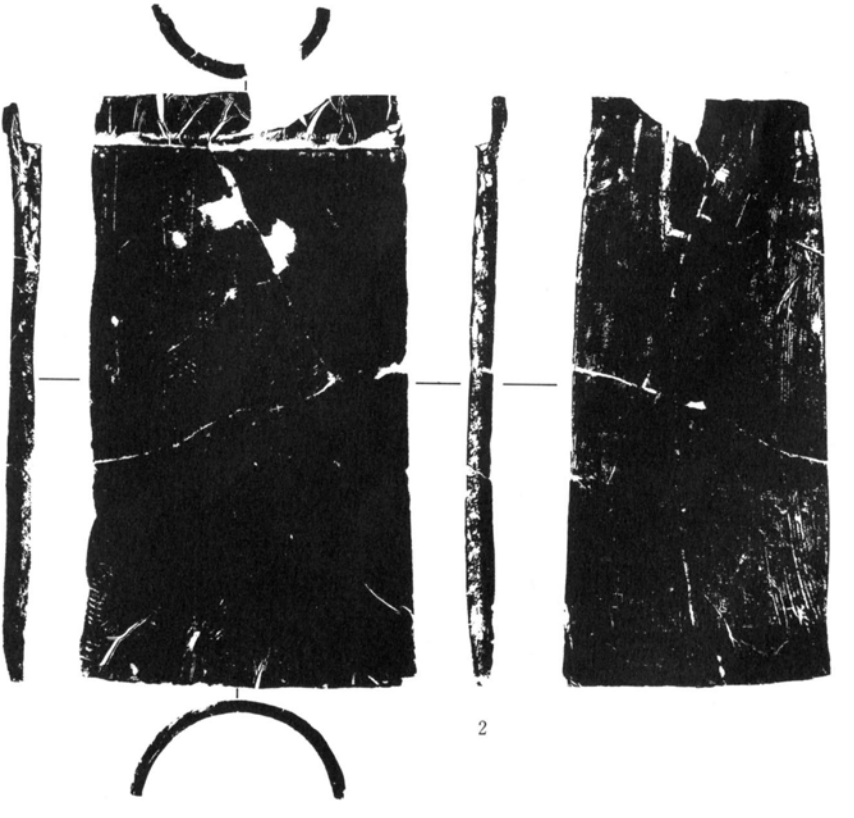
第53図　瓦　当



第54図　瓦



1



2

0 20cm

第55図　瓦

城跡第二次発掘調査概報（註７）で１・２点紹介したので図・詳細は省略する。

本類が多量に出土する地区は松林地区と北側崖下試掘グリッドで，他に広場地区の石塁，溜め井地区から認められた。松林地区では落ち込み部分から本類が土のう袋の20袋分，北側崖下試掘グリッドでは１～1.5mの瓦の層をなすほどの量が確認された。

その他の資料については，次の機会に報告を委ねることにしたい。

⑾　青銅製品

青銅製品は八双鋲，菊座笠鋲，鞐，かんざし，刀の鍔，鏡，種不明等が得られており，なかでも鏡の出土は珍らしい資料と言えるものである。以下，それぞれについて記述する。

イ，鞐

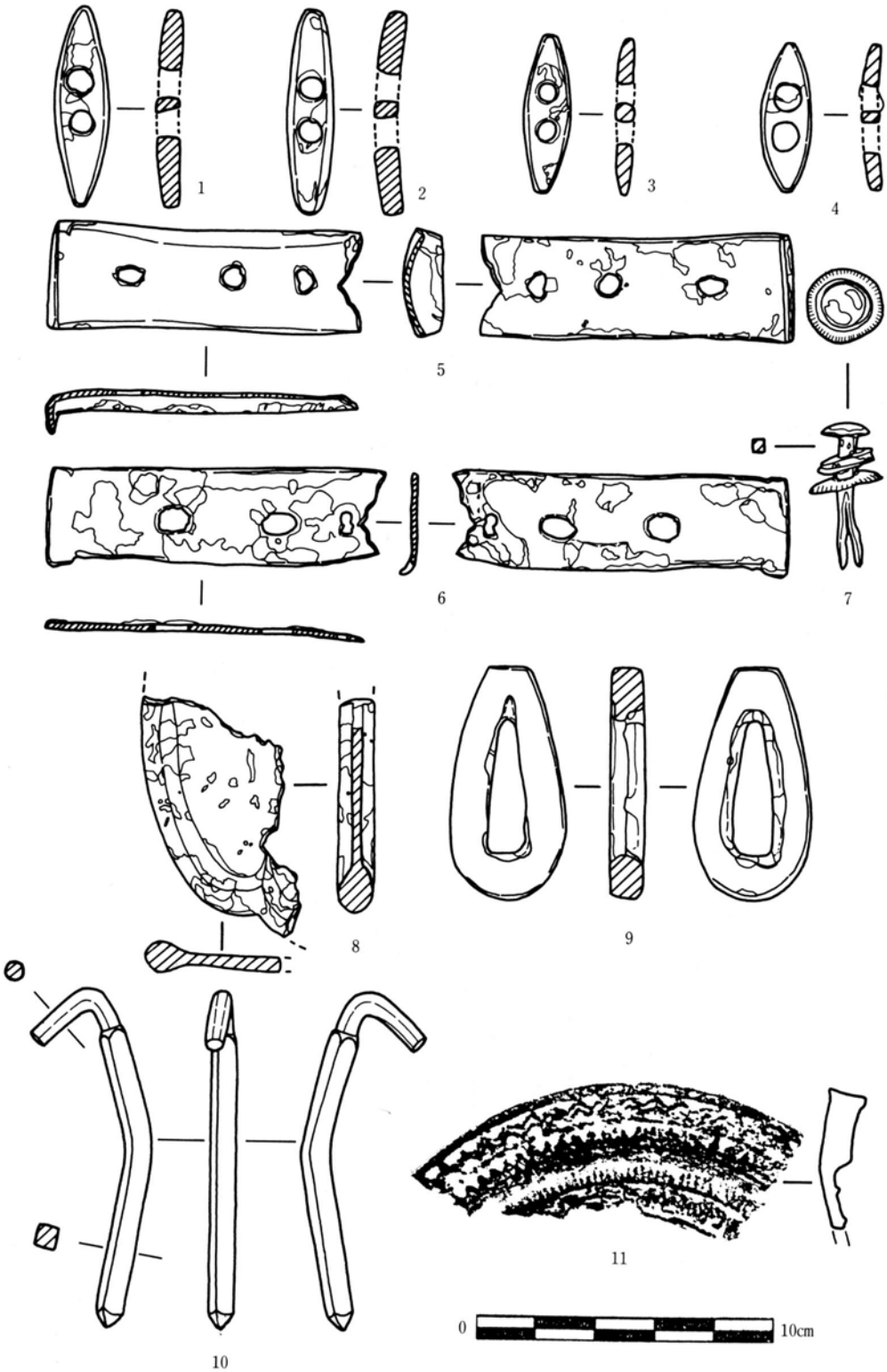
鞐は第56図１～４の４点が得られ，それらは大きさにより２つに分けられた。以下，両者を比較しつつ略記する。１・２はいずれも最大長が3.4cm台であるのに対して，３・４は最大長が2.6cm前後になる。また，１・３は反りが弱く棒状になるが，２・４は僅かながら反りが強い。４を除く３点の表，裏面には部分的に鍍金覆輪が認められることから，本来は全面に施されていたものと思われる。４は銅錆化により鍍金が剝離したと考えられる。各々のサイズは第20表に示した。類例品として今帰仁城跡・佐敷グスク・勝連城跡から出土したのを筆頭にグスク時代の遺跡からの出土が報告されている。

第20表　鞐の大きさ

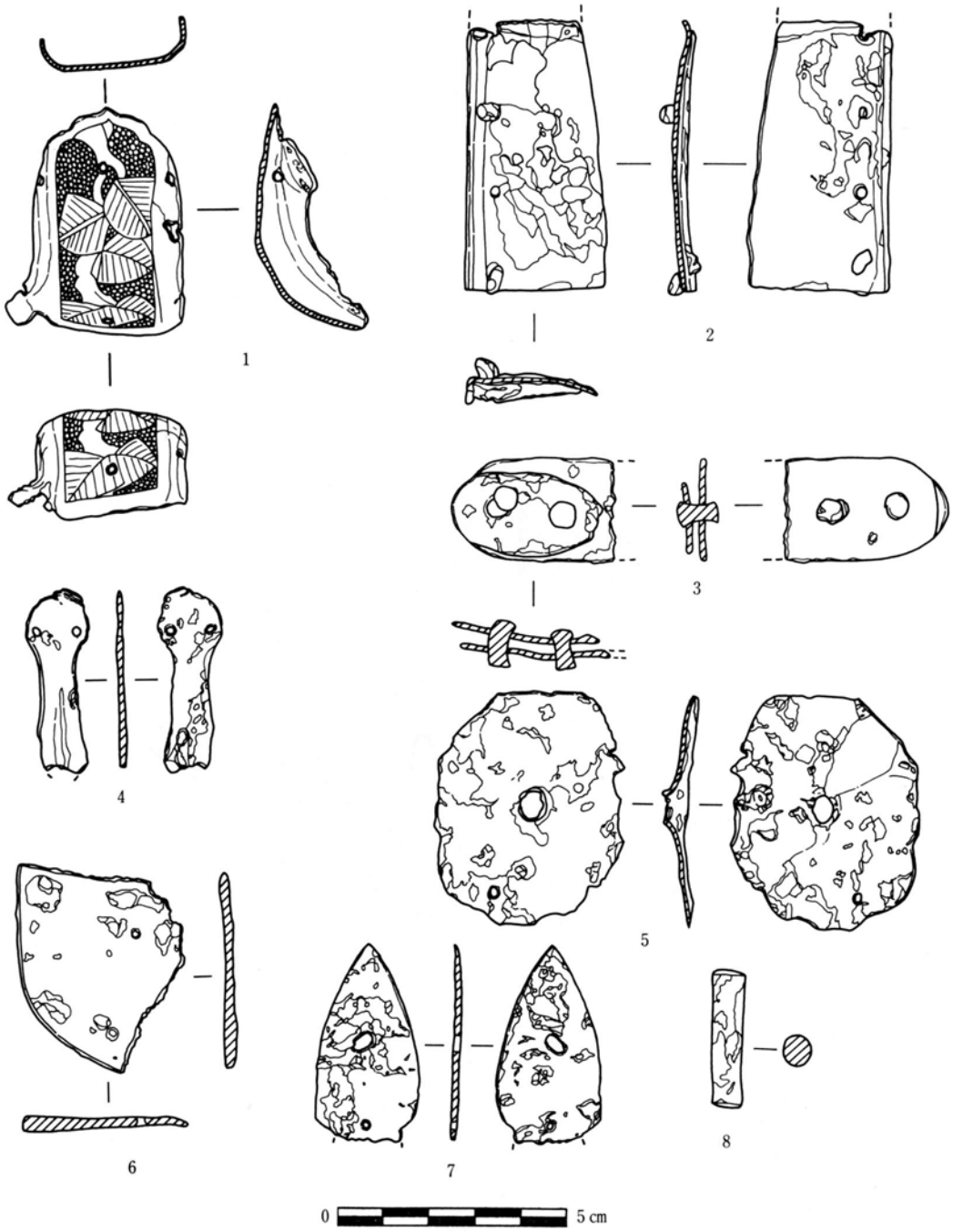
法量 / 挿図番号	最大長 (cm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重　量 (g)	孔　径 縦×横 (mm) 上　位 下　位	出土層
第56図 1	3.4	8.6	4.0	4.4	4.6×4.9 4.5×4.2	ＳＨ０１ 試第３層
2	3.47	7.6	4.0	5.25	4.5×4.1 5.0×4.0	ＳＦ０１ 南拡 表土層下部
3	2.7	7.8	3.5	2.44	3.5×3.1 3.6×3.2	ＳＦ０１ 表土層下部
4	2.53	8.6	3.2	2.46	4.9×4.8 5.0×4.7	ＳＨ０１ 試第２層

ロ，八双座（八双鋲）

第56図５・６は鎧の胸板・逆板・大袖などの境粧板に据えられる八双鋲の鍍金を施した八双座である。同図５は完形で裏面を除くすべてに鍍金覆輪が嵌められており，それが未だ鮮明に残っている。左端の内側に折れ曲った部分は本体に対してほぼ直角で６㎜を測った。本体部分の縦断



第56図　青銅製品



第57図　青銅製品

面は弓状に湾曲している。鋲穴は２穴認められ左方は５㎜×３㎜の長楕円形で右方は４㎜×４㎜のほぼ円形を呈している。一番右方の穴はハート形である。また，右端は魚尾状をなす。全長5.3cm，幅1.8cm，厚さ１㎜，重量6.1ｇを測った。ＳＨ０１地区，試掘，第２層の出土。

同図６は前者と多少形状を異にするが，八双座に含まれるものである。鍍金覆輪の大部分は剝げ落ちていて，わずかに鋲穴の回りに確認できる。左端は前者のように内側に折れ曲がらないが，下方の一部が表面へと折れている。また，本体は前者のように湾曲することなく平坦になっている。最初からこのように平坦に仕上げられていたものと考えられる。本体の下辺は欠損している。鋲穴は２穴認められ，左方の穴は５㎜×４㎜，右方の穴６㎜×４㎜でいずれも長楕円形をなしている。もう一方の穴はハート形がわずかにくずれている。右端は魚尾状をなしている。全長5.7cm，幅1.6cm，厚さ１㎜，重量7.2ｇである。ＳＲ０２・３地区　第３層の出土である。以上，２点の類例品として勝連城跡（註８）のものがある。

ハ，菊座笠鋲（八双鋲）

同図７は頭部に径7.5㎜，厚さ１㎜の円球板をもつ割ピンである。芯は2.3㎜×2.0㎜の正方形で長さ2.5cmを測る。３板の円板をもち上位は径8.5㎜で，厚さ0.5㎜，中位は径9.7㎜に厚さ0.5㎜、下位は径1.25cmに厚さ1.0㎜を測る。下位の円板の外周には刻みが見られる。円板の中央に開いてある穴は芯に合わせて正方形に穿ってある。円球板，円板の表面にはわずかに鍍金覆輪が観察できる。用途は境粧板に八双座を留める鋲か，他の飾鋲と思われる。

重量2.2ｇである。ＳＧ０１地区，西第１層の出土。

ニ，刀類

同図８は刀の鍔の破片で現在品に括れをもつ箇所が見られることから少なくとも４つの括れをもつ花弁状を呈していたと考えられる。右方に僅かに中心孔らしきものが見られるがはっきりしない。縦・横断面とも縁は玉状により，中心にむけて平坦になる。現存品の全長約5.1cm，幅約2.8cm，身の厚さ約２㎜，縁の玉の厚さ約６㎜を測る。重さ約16.2ｇである。ＳＧ０１地区表土層の出土。

同図９は刀の柄にとりつく金物と思われるもので流線形を呈しており上端は水平になる。中央には隅丸の二等辺三角形状の中心孔が穿たれている。中心孔は刀身を固定する為に表面から裏面にむけ段をもっている。最大長3.9cm，最大幅1.9cm，厚さ5.5㎜，重さ15.6ｇである。溜め井東地区　第３層の出土である。

ホ，かんざし

かんざしは３点得られた。それらは形状により頭部に耳かき状の縦長楕円部を作り，竿の部分は六角形に成形するものと前者よりわずかに小さくなり首部は円形で，竿の部分は方形状を呈すものとに大別できる。前者は浦添城跡第２次発掘調査概報（註９）で報告済のため，ここでは後者についてのみ略述する。

第56図10は頭部が欠損しており，首部がくの字状に屈折している。首部は断面が約2.8㎜の円形

をなす。竿の断面は約3.8㎜を測り，方形状を呈して先端は角錐状をなす。全長5.3㎝，重量6.3ｇである。稲福遺跡やヒニ城出土の類例品を参考にすると頭部には花弁状の装飾部があったと思われる。城門付近表土層の出土である。

へ，鏡

同図11は青銅製の鏡の小破片で円鏡になると思われるものである。鏡面は平滑に仕上げられているが，一部凹凸を呈する。鏡背文はいくつかの同心円によって構成されており，円区より一段高くなった外区の最外辺には二重の波状文，その内側には外向の鋸歯文が認められる。外区の横断面は長方形を呈する。内区の同心円は横の刻みで埋めてある。その内側はつぶれているためはっきりしない。鏡径推算は約9.8㎝，外区の幅約1.1㎝，厚さ５～６㎜，内区の厚さ約２㎜を測る。重さは35.3ｇである。コーグスク　第３層の出土である。鏡の出土例としては稲福遺跡（註10）などがある。

ト，青銅製品不明

青銅製品のなかには，小破片，錆や類例品が少ないなどの理由から性格のはっきりしないものが18点得られたが，ここでは特徴的なものを８点図示して略記する。

第57図１は短冊形を呈し下部は大きく内側に湾曲しており上部は両側面からふくらみをもって括れ，その間にある狐状の真中は菱のように尖る。内面を除く全体に鍍金覆輪が施され，それが鮮明に残っている。表面には形状をそのまま形取ったような線刻りで囲われた葉文と小円文が施されている。又，取りつけの為の穴と思われるものが身の中央の縦に２つ，両側面の肩部分にそれぞれ１つ確認できる。鍍金や装飾，小穴等が見られることから据文金物と思われるが，どういったものに取りつくかはっきりしない。全長５㎝，幅3.3㎝，高さ2.4㎝，厚さ１㎜を測り重さ16.14ｇである。Ｊｈ地区　第２層上部の出土である。

同図２は上下関係等は判然としないが，表面に鍍金が認められる短冊形をなすもので下端に比べて上端は幅が狭く欠損している。横断，縦断面とも僅かに湾曲しており左側においては表面に張らみを持たせ裏面にＬ字状折れ曲る。又，左側面に平行して４つの鋲穴が認められ，うち２つの穴には鋲が残っている。鋲は頭部は弾頭形を呈し芯が細くなるもので，下端はＬ字状に折り曲げて固定する。鋲は頭部が径約３㎜，芯が約２㎜，鋲穴が径約２㎜を測った。表面を除くすべてに鍍金が認められことから据文金物の可能性が考えられる。現存品の最大長6.0㎝，最大幅3.1㎝，最大厚約11.0㎜を測り重量15.36ｇである。溜め井東区の出土である。

同図３は２枚の地板が２本のピンでつなぎとめられた破損品である。上位の板は長径3.2㎝，短径1.85㎝，厚さ1.0㎜を測る長楕円形，下位の板は途中から欠損しているため本来の形は判然としないもので現存品は最大長3.35㎝，最大幅2.3㎝，厚さ1.3㎝を測り，下位の板はベルトの先状を呈する。２本のピンのサイズは左側で長さ1.0㎝，径4.5㎜，右側では長さ8.8㎜，径3.5㎜を測った。尚，ピンの上下端部はつぶれており下部においては顕著であった。本品は製品の中で固定する部分に位置していたと思われる。重量は9.86ｇである。溜め井東地区の出土である。

同図４は頭部と下端がわずかに欠損するもので頭部をほぼ丸く造りそこから帯状に下端にのび

る。頭部には並列した２孔が穿ってある。また，本標品は一部に鍍金覆輪が認められることから表面全体に鍍金をした装飾金具の一部と思われる。全長4.7cm，頭部の直径1.39cm，右孔径1.3mm，左孔径2.0mm，重量2.7ｇである。ＳＨ０１地区試掘グリッド第９層の出土。

同図５は現資料の平面が概ね楕円形を呈する板状の製品である。しかし，周縁部の保存が悪く本来の形は判然としない。中央部に一面から穿った縦5.8mm，横5.0mmの孔が，また，その左斜め下にも径1.9mmの孔が１点確認できる。縦断面は中央部が穴を中心に凹面を呈する。長径5.1cm，短径4.8cm，厚さ1.2mm，重量12.7ｇである。溜め井東地区第５層の出土である。

第57図６は欠損品のため本来の形状ははっきりとしない。しかし，現存品にコーナー部分が確認できることから隅丸の方形か，それに近い形が想定される。表裏面に研磨が施されているが，前者の方が顕著である。又，側面にも研磨が見られる。断面は外側が約3.7mmと厚く，中央部にむけ約1.5mmとうすくなる。また，現存品の右方には径約1.7mmの孔が１つ表面から穿たれている。長径4.9cm，短径3.6cm，重量24.52ｇである。ＳＨ０１地区試掘グリッド第11層の出土である。

同図７は二等辺三角形を呈しており頂点から底辺に至る両辺はゆるやかなふくらみを持ち底辺では角をもって括れる。その下端は欠損している。身の中央に崩れた楕円形の孔，その下方には径1.7mmの円形の孔があってそれぞれ表面より穿たれている。縦・横断面はそれぞれ平坦になる。全長4.32cm，幅2.25cm，厚さ1.2mm，中央の孔の長径５mm，短径2.8mm，重量6.2ｇである。コーグスク地区第３層の出土である。

チ，棒状製品

第57図８は小さな棒状製品で図の上位から下位にかけ僅かにすぼまるほぼ円筒状を呈する。上位面にはつぶれが認められることからするとピン的な使用の可能性も考えられる。全長３cm，径6.5mm，重量9.1ｇ，ＳＧ０１地区第１層下部の出土である。類例品としては今帰仁城跡(註11)・佐敷グスク（註12）出土のものがある。

⑿　鉄製品

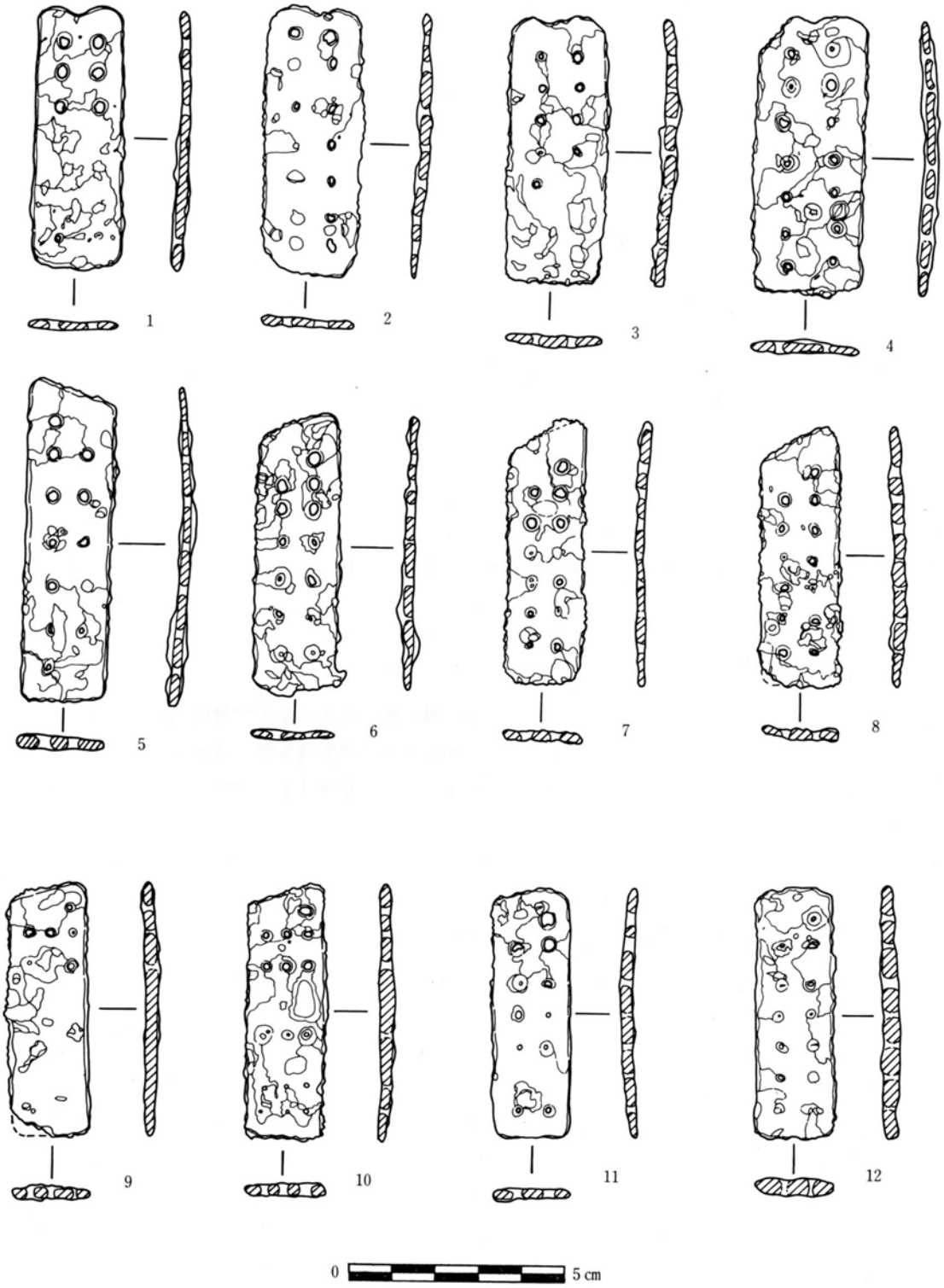
鉄製品は小札，鉄鏃，釘，鉄斧，刀子，釣針等が得られた。なかでも小札等は小破片を含めると597点という未だ本県では例を見ない数の出土であった。以下，種別に略述していく。

イ，小　札

小札は597点得られたが，その大半は破片でサイズを窺えるものはわずかに45点であった。しかし，それも錆が著るしく紐孔の形状などがはっきりするものは少なかったので，原形や紐孔の形状の窺える資料12点を図示した。前記，ピックアップした資料は札頭の形状により３類に分けられた。以下，類別に略記していく。各々の法量及び出土地区は第21表に示した。

第Ｉ類　札頭が二山になるもの。

第Ｉ類に含めることのできる資料は第59図１～４でいずれも紐孔は左右２行で札足は方形を呈する。紐孔の状況がはっきり確認できるものは同図４で縦に７つの孔が表面から穿ってある。他の３点も錆により孔がはっきりしない箇所もあるが縦に７つ穿ってある。紐孔の大きさは一定し



第58図　小　　札

ない。また，いずれも地金はしっかりしている。第Ⅰ類は他のものに比べ平均的に全長，幅ともに大きいが，同図4はそのなかでも大型である。

第Ⅱ類　札頭が斜めになるもので，さらにA・Bに細分した。

A　紐孔が2行のもの。

B　紐孔が3行のもの。

第Ⅱ類－Aに含まれるものは同図5～8の4点で，いずれも左右2行の紐孔を縦に穿っているが，札頭が斜めになるため山の部分では7つ，もう一方では6つになる。いずれの紐孔も表面から穿ってあり，札足は方形を呈する。同図5は，今回得られた小札の中では最長の7.6cmを測る。

第21表　小札の大きさ

特徴 / 挿図	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	重量 (g)	出土地区
第58図1	6.2	2.2	2.1	9.08	SR02・3
2	6.3	2.2	2.5	9.38	〃　〃
3	6.3	2.3	2.7	10.35	〃　〃
4	6.6	2.6	2.0	11.97	〃　〃
5	7.6	2.2	2.0	13.38	SG01　第2層
6	6.65	2.1	2.0	8.74	SR02・3
7	6.2	1.8	2.1	7.00	〃　〃
8	6.1	1.9	2.7	9.02	〃　〃
9	6.0	1.9	2.7	9.48	〃　〃
10	6.1	1.8	2.7	9.76	〃　〃
11	5.85	1.8	3.0	9.46	〃　〃
12	5.95	1.8	4.0	11.96	〃　〃

第Ⅱ類－Bに含まれるものは同図9・10の2点である。Aの紐孔が2行であるのに対してその真中にもう1行を加え計3行の紐孔が穿たれている。孔はAと同様山に近い部分で7つ，他の行で6つになっている。また，縦に数えて3つ，2つ，2つと間隔をおいて穿ってある。小札自体の大きさは紐孔が2行のものとたいして変わらないが，3行も穿ってあるせいか紐孔の大きさは小さい。いずれの札足も方形を呈す。

第Ⅲ類　札頭が方形になるもの。

同図11・12の2点が第Ⅲ類に含まれ，紐孔は2行であるが右方は7つ，左方は6つ穿ってある。いずれも全長，幅とも他のものよりもひと回り小型である。札頭は方形とはいっても札足に比べていくぶん丸みをもっている。しかし，本類は第Ⅱ類Aのくずれたものに属する可能性もある。

ロ，鉄　鏃

鉄鏃は20点得られた。それらは錆ぶくれや破損が著るしいために，身の形状がはっきりしないものが多い。ここでは原形の窺えるもの７点を４つに分けて略記する。尚，各々の特徴は第22表に示した。

第Ⅰ類　鏃身の基部からまっすぐにのびて，刃先が方形になるもの。

第59図１～３の３点がこれに含まれるもので，地金はしっかりしている。１・２は刃先にわずかな刃こぼれが見られるもので，いずれの鏃身の基部も横断面はほぼ円形になると思われる。しかし刃先にむけては平坦になり尖る。刃先部分の横断面は３が楕円形で他の２つは長方形となる。１・２の２点の茎は基部より細くつくられ，括りとなって確認できるが，３は基部から括れることなく先端にむけ細くなる。先端部分は括りをもって小さな突起になる。また，３は他の２つに比べ全長に対して鏃身が幅広い。

第Ⅱ類　鏃身の基部からゆるやかに括れて，刃先が方形になるもの。

同図４・５の２点がこれに属する。４は全体に保存の良いもので，５は鉄鏃のなかでは一番の大型資料である。２点とも刃先の幅はほぼ鏃身の基部の幅と一致する。４の刃先部分の横断面は長方形を呈しており，５は錆ぶくれではっきりしないが同様なものと思われる。前述したように４の茎は保存が良く約3.4cmを測った。茎の横断面は円に近い方形で鏃身の基よりは細く先端にむけて尖る。５の茎は錆ぶくれのためはっきりしないが，鏃身の基部よりは細くなっている。

第Ⅲ類　鏃身の基部からゆるやかに撥状に開き，刃先が方形になるもの。

同図６は刃先の左端と茎の先端がわずかに欠損しているが，錆ぶくれなども少なくほぼ原形の窺える資料である。鏃身の基部はほぼ円形でそこから刃先にむけてまっすぐに平坦になって尖る。刃先の横断面は長方形を呈す。鏃身に綾線が確認できる。茎は鏃身の基部よりも細く先端にむけて尖っていく。横断面はくずれた円形を呈す。

第22表　鉄鏃の大きさ

挿図番号	類別	全長(cm)	身の長さ(cm)	茎の長さ(cm)	重　量(g)	出　土　層
第59図１	Ⅰ	6.25	3.7	2.65	8.14	ＳＧ０１．西．表土層下部
2	Ⅰ	6.5	3.9	2.6	10.94	ＳＨ０１．第２層
3	Ⅰ	5.7			9.24	ＳＨ０１．第３層
4	Ⅱ	6.17	2.7	3.4	7.65	jh地区．第３層
5	Ⅱ	10.55			20.84	ＳＲ２・３．第５層
6	Ⅲ	6.25	3.9	2.35	12.00	jh地区．西側第２層
7	Ⅳ	7.7	4.5	3.2	9.23	ＳＨ０１．試掘第２層

第IV類　鏃身の基部からゆるやかに括れて刃先が菱形になり尖るもの。

同図7は刃先がわずかに欠損するが，ほぼ原形の窺える資料である。鏃身の基部は円形で刃先にむけてまっすぐに矢っていく。刃先の横断面は長楕円形を呈している。茎は鏃身の基部より少し括れて段をもち，まっすぐに先端へと尖る。茎の横断面は少しくずれた円形をなす。

鉄鏃の類例品としては，今帰仁城，勝連城などがある。

ハ，鉄　釘

鉄釘は細片を含めると1698点得られ，それらは形状により4つに分けられた。以下，それぞれの中で残りの良いものを図示して略述する。

第Ⅰ類　頭部を斜めに造るもの

これらに属するものは8点得られたが，錆ぶくれが著しくほぼ原形の窺える2点を図示した。第60図1，2がそれで，いずれも頭部を斜めに造り，身は先端へと尖るものである。横断面は頭部で長方形，身の部分で方形を呈す。頭部は身の部分よりも大きいことから留の機能をはたしたと思われるが，使用する段階で頭部に敲打を加えてL字状に折れ曲り，所謂折頭式釘になると思われるものである。前述の点からすると，折頭式釘に含めてもよいが，頭部の形状，釘として使用する前段階のものとして一応分けてみた。

第II類　折頭式釘

頭部が折れ曲がったもので折頭式釘と呼ばれるもので，それにより留め役目をはたしている。1570点ほど得られたが，錆による腐食が著しくここでは残りの良い15点を図示した。すべて頭部がL字状に折れ曲がっており，横断面は頭部で長方形，身で方形を呈して先端と尖る。最小のものは第60図17の約3.3cmで最大のものは同図3の約9.5cmである。総数1570点のなかで平均は3～5cmのものが541点と最も多い。

第III類　切　釘

両端が尖って頭のない釘で，木材を継ぎ合わせる時に用いたと考えられるものである。(註13)。全長は折頭式釘に比べて小さい。総数121点得られたが，原形のはっきりする5点を図示した。それらは形状により2つに細分した。

A　側面観がレンズ状を呈するもので身の最大厚はほぼ真中になるもの。

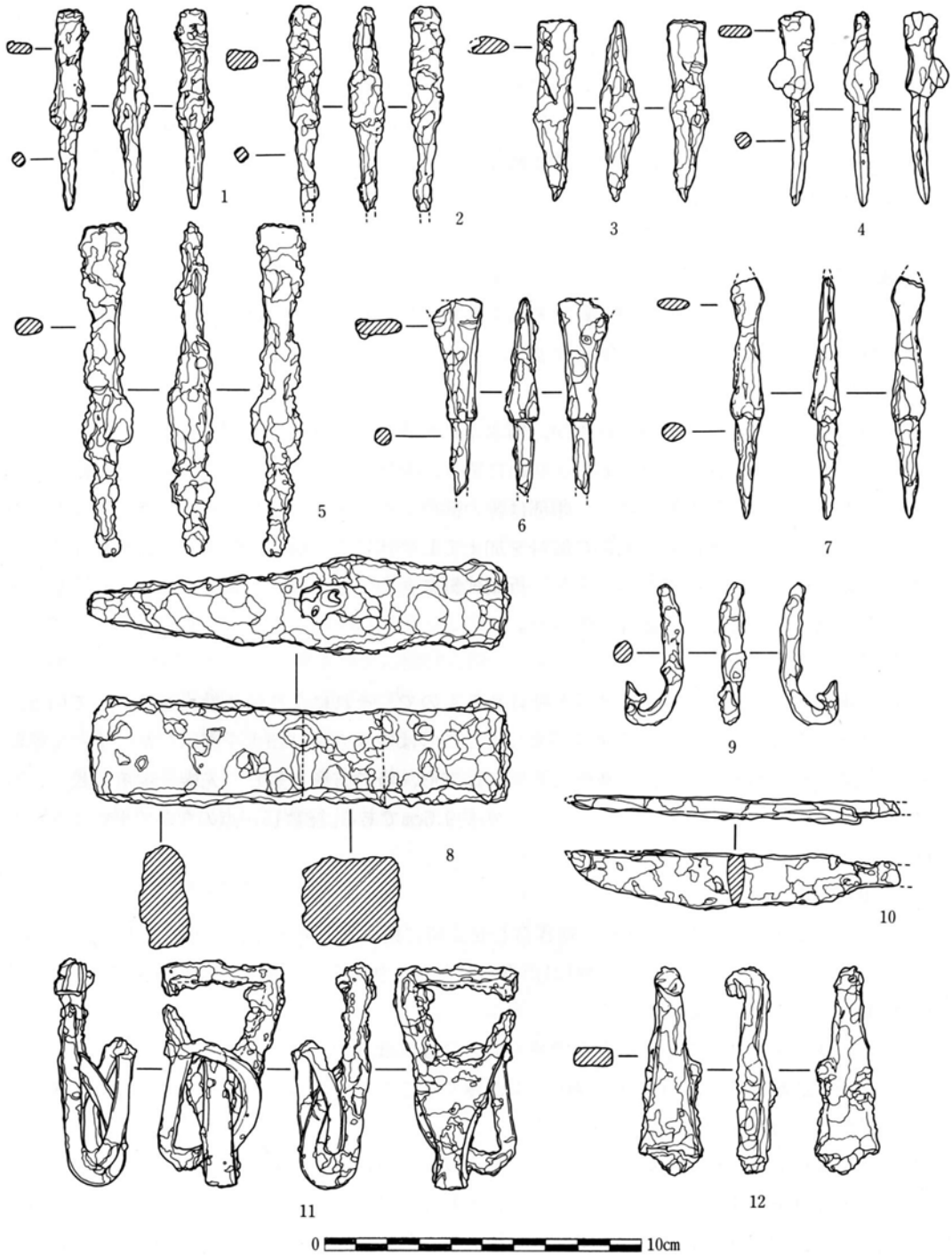
第60図18～20がそれで，いずれも身の真中が厚くそこから両端へと尖る。先はそれほど鋭くはない。横断面は方形をなす。

B　側面観は広義には前者にするが，身の最大厚が片方に寄るもの。

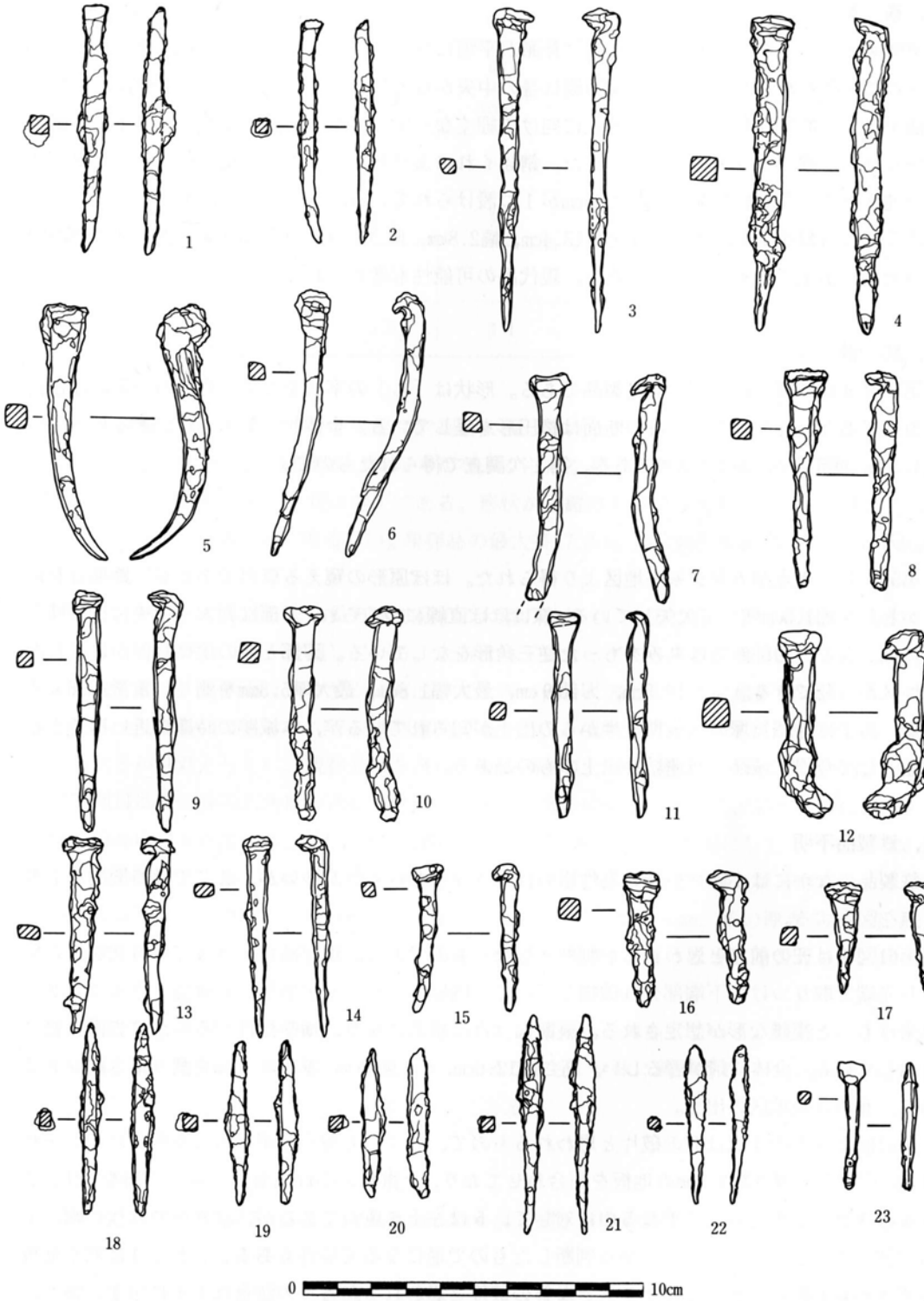
同図21・22は身の中心が一方にずれることにより片方はするどく尖り，もう片方はやや丸みをもって尖るもので，横断面は方形を呈す。本種の長さは，A，Bともに3～5cmが最も多い。

第IV類　不　明

2点得られたが，残りのいいもの1点を同図23に図示する。頭部は両側からつぶしたように見え身よりも幅広くつくる。それが留の役目をなすかどうかは，判然としない。頭部から身にかけて細く，先は尖っているもので，横断面は方形を呈する。



第59図　鉄製品



第60図　鉄　釘

ニ，鉄　斧

第59図８は，手斧としての使用の外に斧頭が平坦に厚く造られていることから，槌としても使用されたと思われるものである。側面観は身の中央から刃先にかけて少し開き，刃縁はわずかに湾曲する。上面観は身の中央から刃先に向けて細くなり両刃となる。刃先は鋭さを欠く。斧頭へは少し括れて厚くなり平坦になる。また，錆ぶくれにより形ははっきりしないが，身の中央には柄を通すための孔縦約1.3cm×横約2.5cmが１つ設けられている。身の縦断面は中央で正方形，刃先近くで長方形を呈す。サイズは全長13.4cm，幅2.8mm，厚さ3.1mm，重量380ｇである。城門西側の表土層の出土であることからすると，現代品の可能性も考えられる。

ホ，釣　針

第59図９は鉄製の釣針でほぼ完製品である。形状は「し」の字状をなす。釣針の内側には逆鉤を設けてあり，先端は鋭い。身の断面は楕円形を呈している。全体的に錆ぶくれが著るしい。全長4.5cm，幅5.5cm，重量4.3ｇである。第１次調査で得られたものである。

へ，刀　子

第59図10の１点がカンジャー地区より得られた。ほぼ原形の窺える資料であるが，鋒部分をわずかと茎を約1.5cm残して欠矢している。棟はほぼ直線につくられ，刃部は両刃で中央付近で棟部分に反り返る。刃部断面は丸みをもった逆三角形をなしている。刃部と茎の境には僅かに括れをもつ区が確認できる。全長10.5cm，刃部９cm，最大幅1.8cm，最大厚5.3mmを測り，重量20.6ｇである。刀子は沖縄貝塚時代後期後半からの出土が知られているが，本城跡の時期に近い遺跡の類例品として今帰仁城跡，勝連城跡出土のものがある。

ト，鉄製品不明

鉄製品のなかには小破片や錆の為性格のはっきりしないものが多いが，ここでは特徴的なもの９点を図示する。

第61図１は兜の前立と思われるが判然としないものである。現存品の形状は三日月状を呈しており先端と取りつけの下端部分は破損している。内縁の中程にも欠損部分が確認できることから本来はもっと複雑な形が想定される。縦断面はほぼ垂直になり，横断面はゆるやかに表面にむけ湾曲している。全体に錆が著るしい。高さ約12.6cm，幅約4.2cm，厚さ約３mmを測り重さ約48ｇである。溜め井東地区の出土。

第61図２～５の４点は兜の破片と思われるもので，いずれも溜め井東地区より得られた。それらは，いずれも厚さ約3.5mmの地板を矧合わせており，上重ねの端は表面に折返して筋をなす，２～４の３点が地板を右上に重ねるのに対して，５は左上を重ねてあるが，縦断面や地板の幅が上方が狭く下方が広いということから判断したもので逆になる可能性もある。しかし４は筋や地板の厚さから判断して他の３点より大きな鉢の破片と思われる。各々の法量は下記に示す。また，２と３には地板の重なった部分に直径約３mmのほぼ円形に近い鋲が確認できる。４点とも横断面はゆるやかに湾曲しており，縦断面は弧状をなしている。

第23表　兜の大きさ

特徴 / 挿図	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	重量 (g)
第61図　2	6.7	9.4	3	50
3	4.1	3.8	3.5	14.54
4	4.2	3.1	3	13.62
5	5.2	3.1	4	9.48

同図6は横に長い長方形をなす製品で両端は欠損している。上から段をもってずれることから上下2段に分けられ上段の縦断面はゆるやかなふくらみをもって湾曲しており、下段にむけて2度折れ曲りL字状をなす。下端は垂平である。形状から鎧の大袖の冠板の部分の可能性があるがはっきりしない。全体に錆が著るしい。現存品の最大長17.2cm，最大幅5.9cm，厚さ約2㎜を測る。重さは70ｇである。

同図7は錆ぶくれの著るしい長方形を呈する大型の製品で，上方に比べ下方が僅かに幅広くなっている。左上隅と下端が欠損している。上端は垂平になっておりそれに沿って径約2㎜の孔が15個確認できる。縦断面はゆるやかに湾曲して上端が僅かに表面にそり，横断面は著るしく湾曲する。本品は鎧製品である小札等の供判遺物であり，又小孔は紐孔とも考えられ鎧製品の一部とも思われるが判然としない。現存品は全長約6.9cm，幅約13.9cm，厚さ約3㎜で重さ90ｇである。

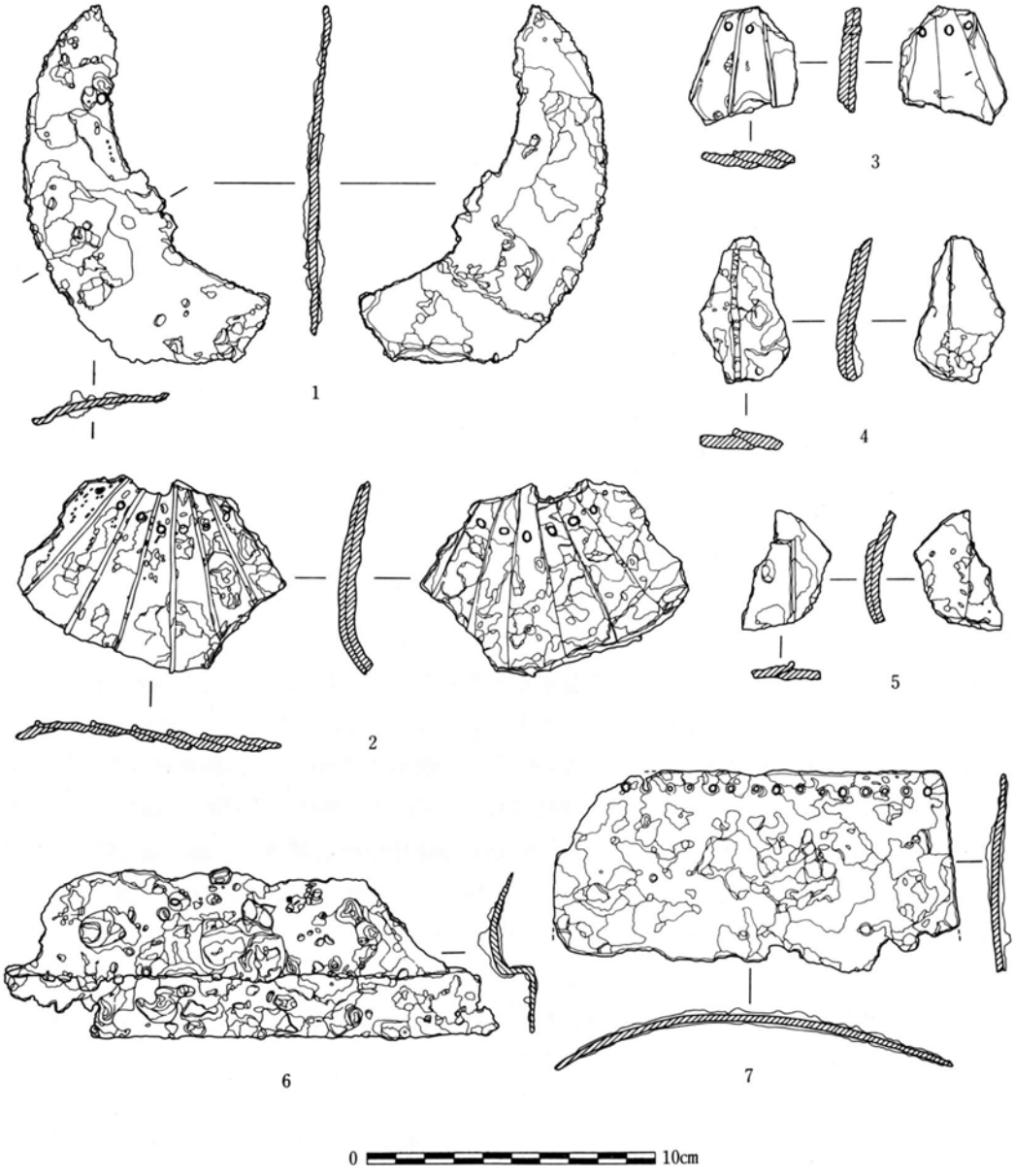
第59図11は長二等辺三角形を逆にした形で，先端を身の中央までまげて流線型の輪に半円形状の輪をつないだものである。また，身の上部は両端が角をもって台形を逆にしたような輪になる。そして長二等辺三角形の先端近くは，ゆるやかな括れをもつ。身の横断面は長方形を呈するが，半円形の輪は楕円形である。全長約5㎝，最大幅3.9cm，身の厚さ6㎜，輪の厚さ5㎜，重量5.5ｇである。カンジャー地区第1層の出土である。形状から取手のような感じを受けるが，はっきりしない。

第59図12は二等辺三角形を呈しており，頂点部分は裏面へと湾曲している。底辺から下は欠損している。身の断面は長方形で表・裏面ともに平坦である。全体に錆が著るしい。全長6.6cm，重量20.37ｇである。溜め井東地区第4層の出土である。

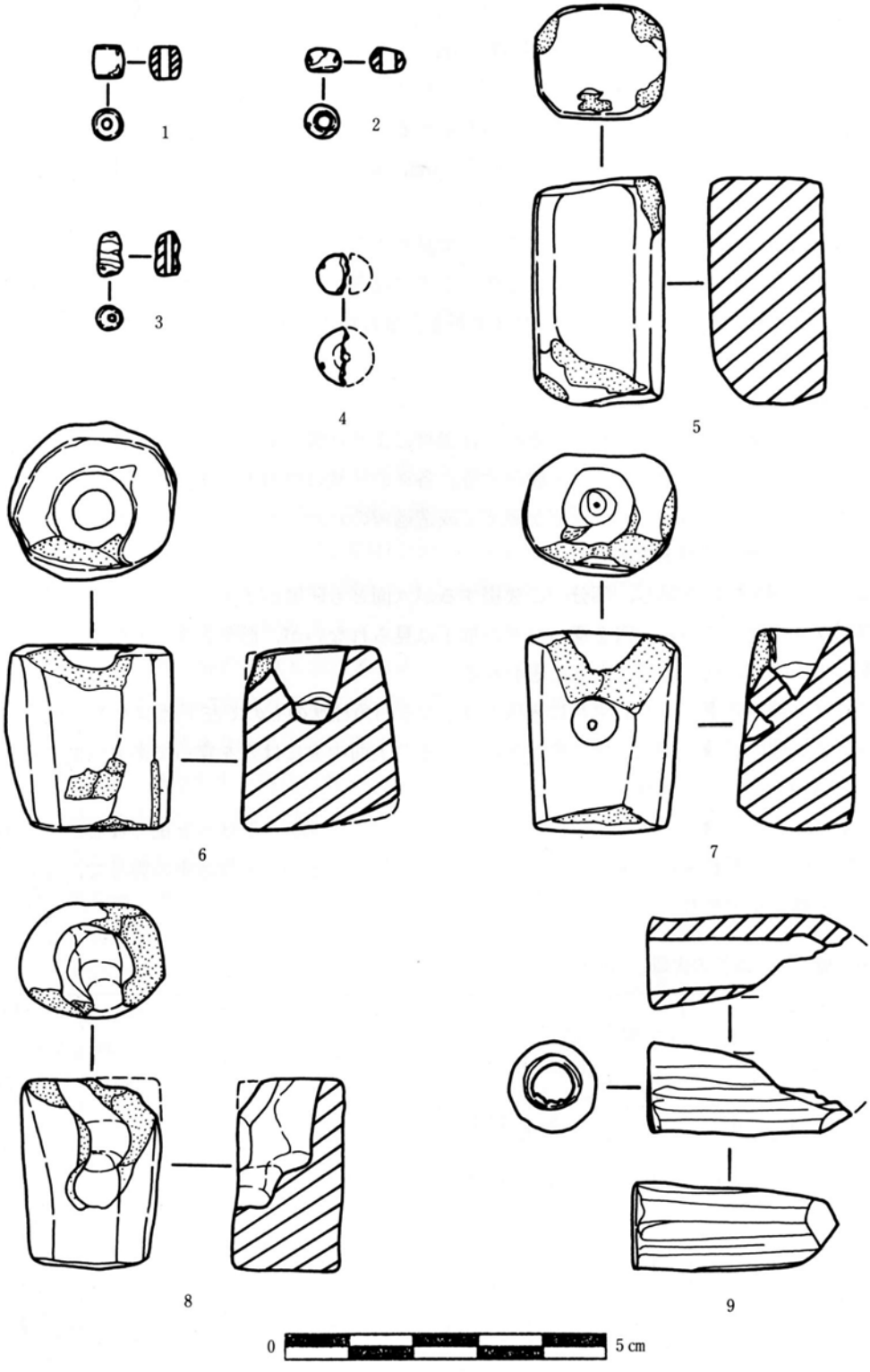
⑬　玉　類

玉類は6点得られたが，ここでは残りのよい4点を図示して略記する。尚，対象とした4点は小玉に含まれるものである。

第62図1では上・下両面とも研磨が丁寧で平坦になり樽状を呈するもので，色調は黄土色であるが一部剝落している。サイズは高さ4.8㎜，径4.5㎜，孔径1.5㎜，重量0.2ｇである。ＳＧＯ１試掘地区の出土である。



第61図　鉄製品



第62図　玉類（1～4）、雁首（5～9）

第62図２は不透明な水色を呈するもので，表面はアバタ状を呈する。しかし一部には光沢も見られる。サイズは高さ3.2㎜，径5.0㎜，孔径2.5㎜，重量0.08ｇである。ＳＧＯ１西地区表土層下の出土である。

同図３は中央部が括れるもので色調は紺色を呈するが，表面の一部欠損面には虹色の光沢が確認できる。サイズは高さ6.7㎜，径3.7㎜，孔径1.1㎜，重量0.12ｇである。ＳＦ０１地区中ごめより出土。

同図４は本種の中では大型の資料であるが半欠品である。残存部から推定すると形状は樽状を呈すると思われるものである。色調は黄緑色，上方には研磨を施してできた稜線が見られる。高さ5.8㎜，径8.9㎜，孔径1.5㎜，重量0.21ｇである。ＳＧＯ１付近の表採品である。

⑭ 雁　首（煙管の火皿）

煙管の火皿が全部で12点得られた。それらは素材により瓦質，陶質土器質，青銅質の３種に分けられるが，ここでは青銅質を除いて説明する。各々の法量は第24表にまとめた。

瓦質は全部で10点得られたが，原形が窺えて成造過程のわかるもの４点を順次略述する。いずれもカンジャー地区の出土である。

第62図５は四角柱状を呈し，部分的に欠損するが六面とも研磨が丁寧で，平坦に仕上げられており四隅は丸くなっている。穴を穿つなどの加工は見られないが，形や表面に研磨を施すことから煙管の火皿成造の初期過程であると思われる。

同図６は上部から下部へとわずかに末広がりになる四角柱状のもので左下部が大きく欠損する。四隅の研磨は他の部分と同様入念で角がとれている。上面中央には穴を穿ってあり内面に螺旋状の削り痕が残る。穴の底は丸くなっている。

同図７は全面に研磨が丁寧で四角柱状を呈するもので，上部から下部へと細くなる。上面中央と正面中央にそれぞれ１孔を穿っているが貫通していないことから製作途中の製品で，それぞれの内面には螺旋状の削り痕が見られる。

第24表　雁　首（煙管の火皿）のサイズ

法量 / 挿図	最大高 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	穴の径 上面 たて×よこ (cm)	穴の径 正面 たて×よこ (㎜)	穴の深さ 上面 正面(cm)
第 62 図　1	3.5	2.0	1.8	17.67			
2	2.9	2.6	2.5	19.38	1.2 ×1.2		1.2
3	3.1	2.4	1.8	15.78	1.2 ×1.1	7.0 ×7.0	1.1 0.6
4	3.0	2.2	1.7	8.92		7.5 ×0.8	1.4 0.6
5	3.2	1.4		3.56	0.8 ×0.8		

同図8はタル状を呈するもので上部から下部へ次第に細くなる。底面は丸くなっている。全体に研磨が施され，作りは丁寧である。又，上部は一部欠損している。上面中央と前面中央から穴を穿って中心部をL字状に貫通するが両者の深さのズレにより段違いになっている。

同図9は陶質土器質に含まれるもので1点得られた。火皿部分は欠損しており煙管部のみが残存している。つくりを見ると首部は厚さの一定しない粘土を片方で繁げて輪にして表面を削りによって円柱状に成形している。先端には火皿部分に移行する斜面がわずかに残っている。

⒂ 骨製品

骨製品は15点得られた。それらは類別すると骨鏃，サメの脊椎骨製品，種類不明に分けられる。以下，種別に概述する。

イ，骨　鏃

骨鏃は4点得られ，鏃身の形状により平形，丸形の2種に大別された。しかし，後者については重要な先端部分を欠くため，分類の根拠を著しくそこなったが身の部分で横断面の楕円形部分が長いことから一様は分類を試みた。素材については加工が丁寧で本来の特徴を残さないため不明である。尚，本製品については形状等からすると鉄鏃を模した可能性が十分に考えられる資料と思われる。以下，分類別に略記する。

イ）平形（平面形が変形菱状を呈するもの）

第63図1～3がこれに含まれるもので，同図1は刃先と茎の先部分を欠損するが，ほぼ原形の窺える資料である。鏃身の先半分の両辺に刃をつくり出し，先に移行するにつれ鋭い先を作ったと思われる。又，身の中央を縦位に鎬が通り，横断面は菱形を呈する。刃から茎にかけては横断面が楕円形に仕上げられ，身と茎の境は段を作って茎を細く形成する。

茎は断面方形状を呈し，先にかけ次第に細くなる状況が窺える。全長3.85cm，鏃身の最大幅1.15cm，最大厚6㎜，重量1.8g，溜め井東地区第7層の出土である。

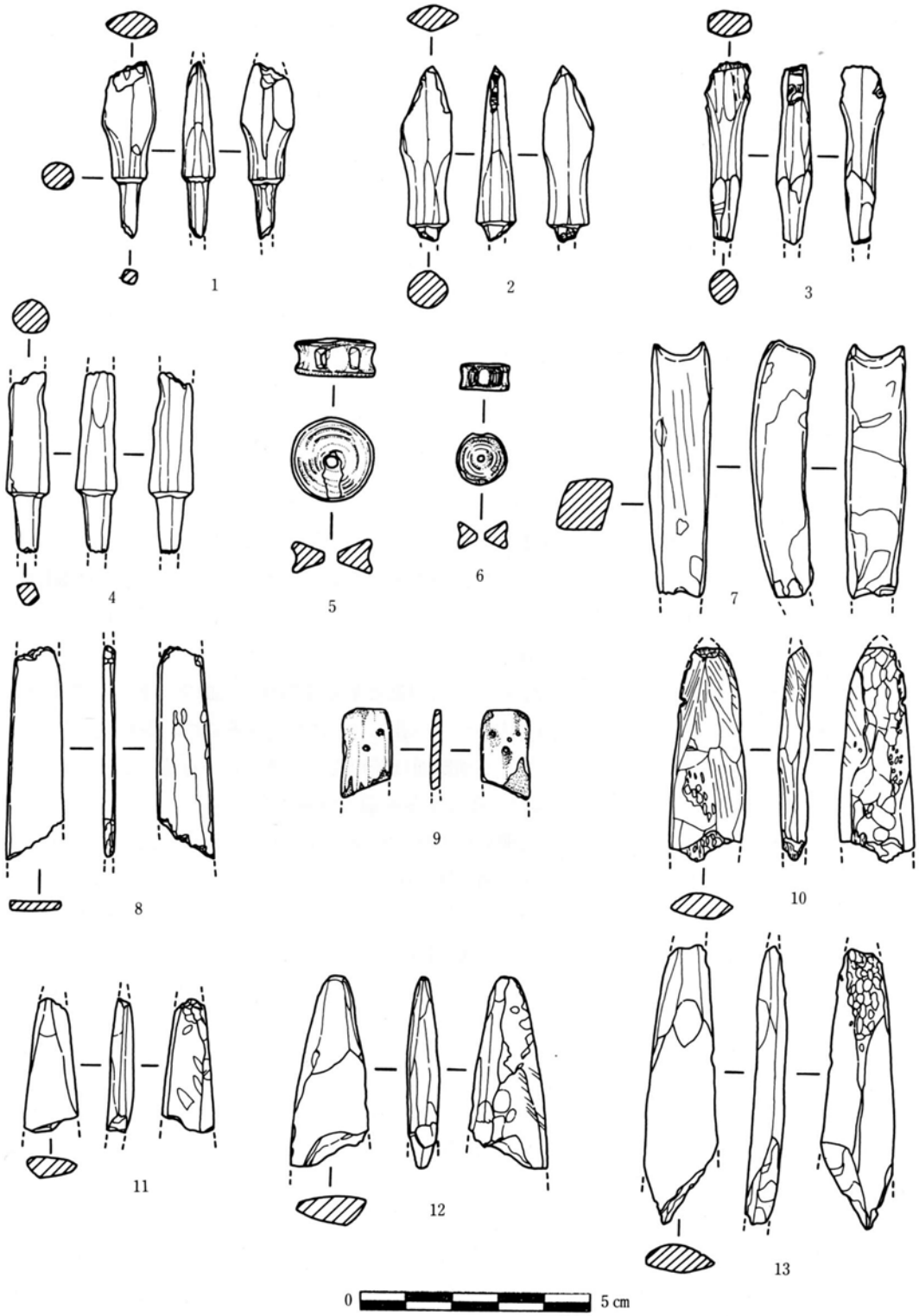
同図2も前者1とほぼ同タイプと思われるもので，先端と茎の部分を欠損する。前者1よりも作りが丁寧で中央を縦走する鎬は明瞭である。横断面は刃で菱形，基部では楕円形，茎は身よりも細く方形状に削っている。大きさは全長3.8cm，鏃身の最大幅1.1cm，最大厚6㎜，重量1.9gを測る表採資料である。

同図3は刃と茎を大分欠損するが，1・2と類似する点が多いことから本種に含めた。鏃身の中央には縦の鎬が確認でき，横断面は菱形状を呈する。基部から茎の部分にかけては作りが雑で削り痕を鮮明に残す。全長3.9cm，重量2.1gを測る。

ロ）丸形（身の横断面が大半，楕円形を呈するもの）

これに属するものは前述したように1点で同図4に図示した。

先端と茎の先を欠損するため本来の形は判然としない。茎の部分は段を持って細くなり，断面は方形状を呈する。全体に研磨を施している。全長4cm，鏃身の径8㎜，重量1.3gを測る表採資料である。



第63図　骨製品

ロ，　サメの脊椎骨製品

第63図５・６の２点はサメの脊椎骨を利用したもので，臼状凹部に孔を穿っている。５は直径1.8cm，厚さ８㎜，孔径３㎜，重量1.5ｇで溜め井東地区第７層の出土である。

６は直径1.1cm，厚さ６㎜，孔径1.5cmを測り重量0.6ｇである。ＳＬ０３地区第１層の出土。

ハ，用途不明

第63図７は獣骨を利用したと思われる下端欠損の製品で側面観弓形，横断面は方形状を呈する。全体に研磨が施されており，右側面では滑沢を呈するほど顕著である。全長5.6cm，幅9.3㎜，厚さ1.15cm，重量10.2ｇ，Ｊｈ地区表土層の出土である。

同図８は平面長方形の板状骨製品で上端と下端が欠損する。全体に入念な研磨が施され平坦に仕上げられている。サイズは横位で1.2～9.8㎜で縦位は4.65cm，厚さ2.3㎜，重さは1.88ｇを測った。コーグスク地区第１層下部の出土。

同図９は下端部の資料で端部は方形状を呈する。残存部から短冊形が想定されるが判然としない。表面から穿ってある孔が４つ確認できるが，貫通しているものは大型のもので２つである。

他の２つは途中で終っている。前記，孔の配列に規則性は見られない。前者８と同じように全体に研磨が丁寧にされていることなどから，同種のものと思われる。サイズは最大長２cm，最大幅1.1cm，最大厚2.3㎜，大型の孔径は両方とも1.2㎜を測り，重量は0.51ｇである。コーグスク地区第３層の出土である。

同図10～13の４点はいずれも破損品であるが，平面形船頭状，横断面はレンズ状を呈するものである。先の部分に粗削り痕を残すことなどからすると，あるいは完成品の破損したものではなく製作途中の製品の可能性も強いと思われる。いずれもＪｈ地区礫層下の出土である。以下，それぞれの法量を記述する。

第25表　用途不明の大きさ

法量 / 挿図	全　長 (cm)	最大幅 (cm)	最小幅 (㎜)	最大厚 (㎜)	重　量
第63図10	4.7	1.6	10.5	6.5	2.3
11	2.95	1.15	7	5	1.1
12	4.2	1.7	5	7.5	2.7
13	6.1	1.6	8	6.5	3.7

⑯　石製品

石製品はすり石１，石斧１点，砥石３点，滑石製品２点などが検出された。

尚，図と詳細については省略した。

6. 自然遺物

自然遺物は食料残滓と石材片が検出された。後者にはチャート片・滑石片のように注目すべき資料が3・4点見られたが，これについては石器の項で補えることから本項では保留し，前者の炭化米・麦，貝類，魚類，獣類について概述する。

(1) 炭化米・麦

第58図版に示したもので，本城跡最下の包含層（黒色土）を質ふるいした察に検出した。検出量は土のう袋8袋分の土に対してシャーレー（径7.5センチ）の底面を埋める程度であるが，発掘区によっては前記包含量は変わる可能性もあると推察する。尚，質ふるいには1ミリ方眼の網を使用した。

(2) 貝　類

貝類は貝塚を形成するといった状況はなく，各地区，各包含層に散見された。しかし，傾向として獣骨を多く出土している。

尚，貝種別の出土一覧を第4～6表に示した。

(3) 魚　類

魚類骨は食料残滓の中で炭化米・麦について量的に劣なく，椎骨，顎骨，歯骨，咽頭骨を数えると僅か80点の出土である。前記，80点の資料について種の同定をここまで報告された伊江島ナガラ原西貝塚（註14）今帰仁城跡調査告Ⅰ（註15）などを参考に試みたところ，フエフキダイ科，ナンヨウブダイ，ミナミクロダイ，ブダイ科，ベラ科，サメ類，イルカ類などが検出されていることが分った。しかし，未だ専門家の同定，精査を終えていないことから紹介に止める（前記，イルカ科は魚類ではなく歯鯨類イルカ科の海獣に属するが，便宜上ここで扱った。）

(4) 獣　骨

浦添城跡出土獣骨を調査・分類した結果，動物類はウシ・ウマ・イノシシ・ヤギ・イヌと海ガメ・数種トリが認められた。骨は頭蓋と脊椎骨・主な前肢帯と後肢帯・手（足）根骨・中手（足）骨・指（趾）骨を分類して出土類・個体数を集計した。肋骨は破損状態がひどかったので集計しなかった。個体数の推定は主に肩甲骨を用いた。ウシに関しては臼歯が62本しかみられなかったので，3頭分にしか相当しないが(ウシの1個体には24本の臼歯がある)，肩甲骨は頚部と関節窩が右：9個，左：9個径18個出土したので「9頭分」と判断した。成獣イノシシの肩甲骨は右：5個，左：4個だったので，「5頭分」と思われ，他に2頭分の幼獣が含まれた。ウマでは肩甲骨は出土せず，臼歯が14本しか出土しなかったので(ウマは1個体で24本の臼歯がある)，「1頭分」とした。ヤギでは2本の臼歯と1個の肩甲骨，イヌは犬歯が3本しなかったので各「1頭分」の推定した。

ウシの骨は黒毛和種（雌・2才半・350kg）とホルスタイン種（雌・4才・500kg）と比較して

図版に示した。図版55・56・57に示したように，出土骨のウシは黒毛和種よりもやや小型のウシのようである。しかし破損の程度が大なので図示しなかったが，黒毛和種（雌）と同程度の体格と思われるウシが2頭分認められたので，出土骨のウシは7頭分の小型ウシと2頭分の大型ウシに分類できた。しかし，大型の2頭分は「雄牛」であり，小型の7頭分は「雌牛」とするのが妥当であり，2種類（品種）のウシとみなすべきではなかろう。雌牛の体重は250～300kg，雄牛は350kg前後ではと思われる。

イノシシは沖縄県産の43kgの成獣（雄）と雌の成獣（体重不明）と比較して図版に示した。全体的にみると，出土イノシシ骨は現生の沖縄島産イノシシとほぼ同程度のサイズであったが，やや大型のものもみられた。図版56の環椎（第一頚類）は破損していない唯一のものであったが，現生イノシシよりもやや大型であることがわかる。また，図版56の上腕骨においても現生のイノシシよりも大型の傾向を示す骨が含まれている。大型のものは2頭分あると思われ，1例には遠位端に「滑車上孔」があり（図版56），もう1例には滑足上孔を欠いている（図版56）。「滑車上孔」はイノシシ・化石イノシシ・イヌ・ウサギにおいて100％出現する。しかし，ブタにおいては図版7のdの如く出現せず，教科書にはこの滑車上孔がブタで時々出現することがあると記載されているが，筆者はブタの数品種においても観察した例がなく，研究室の標本の島ウワー（沖縄在来ブタ）でも滑車上孔が見られていない。つまり，「滑車上孔」の有無はイノシシの家畜化の進行程度と関係すると考えられ家畜化が進むに従って消失する傾向があるという仮説を筆者はもっている。図版の7のd標本はこの点に関して重要であり，出土年代が明確になれば，沖縄におけるブタ飼育の開始年代を推定する重要なヒントを提供してくれるであろうと思われる。この大型のイノシシまたはブタと思われる標本は，例数が少ないのでブタとは断定はできないが体重は50kg前後のものと推定している。

イヌ出土骨は21個の脊椎骨と後肢帯の一部・左の下顎骨・3本の犬歯しかみられなかった。図版56には第一・四前臼歯，第一後臼歯（切断歯，旧名では裂肉歯）の3本の歯しか残っていない左下顎骨を示した。下顎骨のサイズより5～7kgの小型犬と思われる。

ヤギは図版57に示したように，臼歯の一部と左の肩甲骨しか認められなかった。臼歯は「広場地区」より，肩甲骨は「Ｊｈ地区・試」（13末～15ｃ）より別々に出土している。体格は現生の沖縄在来ヤギとほぼ同程度である。

ウマの出土骨は現生の与那国馬（雄）（当教室標本）とほぼ一致する小型ウマであった。

今回の調査において，名護博物館の島袋正敏館長はじめ職員の皆さんに協力いただいたことに対し感謝します。

第26表　貝類出土一覧(1)

科名	種名 ＼ 発掘区及びグリット	第一次調 殿地区	SHO1	SGO1	SXO3	SLO1	SLO2	カンジャー地区	SF01	コーグスク
ニシキウズガイ科	ニシキウズガイ		2	9		1	1	7	57	3
	ギンタカハマ						1	2	7	
	サラサバディ			9		3	1		11	3
	ウズイチモンジ								1	
	オオベソスガイ								2	
	オオアシヤガイ								2	
	イシダタミガイ								1	
リュウテンサザエ科	ヤコウガイ		1	3						
	チョウセンサザエ			4		1	1		2	
	タツマキサザエ								1	
	コシダカサザエ			1					14	
リュウテンガイ科	カンギク	1		2				7	194	32
	アマオブネガイ	1						6	52	2
	ニシキアマオブネ							4	6	
	カノコガイ								2	
ウミニナ科	ウミニナ									7
	イボウミニナ							1	2	
	カワアイ								3	
オニノツノガイ科	クワノミカニモリガイ					1		8	107	35
	コゲツノブエ								1	
	オニノツノガイ		7	9		5	1	22	27	13
スイショウガイ科	マイノソデガイ		1							
ソデガイ科	オハグロガイ			1				5	16	
	マガキガイ	1	32	1	2	6	6	38	49	23
	スイショウガイ									
	ネジマガキガイ							3	22	1
	イボソデガイ									1
	クモガイ					2		1	4	1
	スイジガイ							1		
クマガイ科	クリイロリスガイ							1	5	1
	ヘソアキトミガイ	1						1		
タカラガイ科	ハナビラタカラガイ				1			5	33	2
	ハナマルユキガイ	2	1			1	1	5	7	18
	コモンダカラガイ								2	
	ヤナギシボリタカラガイ									1
	ヤクジマダカラ			3		1		3	8	
	ホシキヌダカラ							1		
フジツガイ科	シオボラ							1	3	
	ホラガイ							1		
	ミツカドボラ								1	1
セコバイ科	セコバイ			2					1	
オキニシキ科	オキニシ								5	

査			第二次調査				第三次調査			計	棲息地
北側崖下	Jh地区	表採	広場地区	溜め井地区	石垣地区	松林地区	溜め井東地区	JIVi10j1	城門地区		
	42		1	1	2		6	1		133	潮間帯下の岩礁
	17		2		1		2	1	2	35	潮間帯付近の岩礁
2	22		6	1	5		5			68	潮間帯下の岩礁
										1	潮間帯付近の岩礁
										2	潮間帯の岩礫底
	1									3	
										1	
			1	2			3			10	浅海の岩礁
	2		1				5		2	18	潮間帯下の岩礁
										1	潮間帯下水深40 m までの岩礁
										14	潮間帯の岩礫底
	146		1	3			23	2		411	潮間帯の岩礁礫底
	8		9		1	1	3	1		84	潮間帯の岩礫底
	2									12	
							2			4	汽水域
										7	潮間帯の砂や小石のところ
							1			4	潮間帯の砂泥底
										3	
	9		4				43	1		208	潮間帯の砂や小石のところ
	1						1			2	潮間帯の砂泥底
1	42	1	17	1	5	2	17	5	3	178	潮間帯下の岩礁
	1								1	3	
	1						4			27	潮間帯の砂礫底
	61		34	10	4	10	51	5	4	337	潮間帯から水深20 m までの砂や小石
	1							1		2	潮間帯下の砂底
	5				2		1	4		38	潮間帯下の岩礫底
										1	潮間帯下
	1		1							10	
									1	2	潮間帯下の岩礫底
										7	
	2									4	
	1		4			1	22	1		70	潮間帯の岩礫底
	18		1				7	1		62	
										2	潮間帯付近の岩礁底
										1	潮間帯の岩礁
	1									16	潮間帯下の岩礁
	1									2	潮間帯下
	1									5	潮間帯下の岩礁
			1	2						4	
							2	2		6	
										3	潮間帯下の岩や小石のところ
	2									7	潮間帯下の岩礁

第27表　貝類出土一覧 (2)

科名	種名 ＼ 発掘区及びグリッド	第一次調																	
		殿地区		SHO1		SGO1		SXO3		SLO1		SLO2		カンジャー地区		SFO1		コーグスク	
フネガイ科	リュウキュウサルボウガイ	1				2				1	3	1		3		12	8	1	3
	リュウキュウマスオガイ					1							2	1		2	2	1	3
	カリガネガイ			1		1	1			1				5		7	10	1	1
	シロアオリガイ																		
ウグイスガイ科	ミドリアオリガイ													1				1	
ミノガイ科	オオノミガイ																		
ウミギク科	オオナデシコ																		1
	ミヒカリメンガイ															1	3		
	メンガイ					1													
シジミガイ科	シナレシジミ	1				2	3		1							6	1	4	1
	ダテオキシジミ									1					1	4	3		
トマヤガイ科	トマヤガイ									1									
シャコガイ科	シラナミ						1			1					1	2		1	2
	ヒメジャコ					1	1								2			1	
	ヒメジヤコ					3	4							1		1			
	シャゴウ																		
キクザル科	キクザルガイ																	1	
ザルガイ科	カワラガイ						2								1	1	5		3
	トリガイ																		
マルスダレガイ科	ヌノメガイ			2	4	6	13			1	3	5	3	4	7	26	17	6	4
	アラスジケマンガイ	2	1	6	8	75	96			7	3	3	2	157	136	394	372	197	212
	ホソスジイナミガイ					6	7			2	2		1	2	5	26	24	6	
	ユウカゲハマグリ															2		10	4
	オイノカガミ															2			
	ハマグリ					2										6	5	3	1
	ヒメアサリ					1												1	1
	アラヌノメガイ															2			
	ウラカガミガイ															1	2	1	
ニッコウガイ科	リュウキュウナミノコガイ						1										6		
	リュウキュウシラトリガイ											2	1	1		4	6		2
	サメザラガイ																		
	アオサギ														1				
	マスオガイ						1						1			1		1	

査						第二次調査								第三次調査						小計		計	棲息地
北側崖下		Jn地区		表採		広場地区		溜め井地区		石垣地区		松林地区		溜め井東地区		JⅣi10j1		城門地区		左	右		
1		2	3											3	2	1		1		29	19	48	浅海の砂底
		1			1	1							1		1	4	1			11	9	20	潮間帯の岩礫地
	1	1	3											1					1	18	17	35	潮間帯の岩礫底
			1																		1	1	潮間帯付近の岩礁
																				2		2	外洋の浅い礁面
																1					1	1	深い海底
			1							1										1	2	3	潮間帯下
																				1	3	4	〃
		1						1	1	1								1		5	1	6	
		3	12								1				2	3	2			19	23	42	マングローブの泥底
						1	2							3	1		1			9	8	17	
			1																	1	1	2	潮間帯の岩や小石地
		3	4				1	1	1				1	1	2	1		1		11	13	24	潮間帯のサンゴ礁
		6	3					1			1									9	6	15	潮間帯下のサンゴ礁
	1	1	1			1		10	9				1	1	1					18	17	35	〃
		1																		1		1	〃
																				1		1	
			3			1								1	3					3	17	20	浅海の砂底
			1																		1	1	内海の水深10～30mの砂泥底
1	2	28	10	1				2	3	5	1		1	5	16	8	7	7	5	108	96	204	浅海の砂底
3	1	29	33	1	1	102	102	13	12	1	2	6	3	78	88	7	6	1		1,082	1,078	2,160	〃
	1	10	14		1	3	9							2	1	1	2			58	67	125	〃
						2	3	1	4					1		1	1			17	13	30	〃
																				2		2	〃
			1			13	9	4	3					7	12		1			35	32	67	浅海の砂泥地
		2													1					4	2	6	潮間帯の小石の海底
						1														3		3	潮間帯
							1													2	3	5	潮間帯下
		1																		1	7	8	浅海の砂底
		1	1																	12	10	22	〃
										1										1		1	〃
																					1	1	浅海の細砂泥底
		2	7																	4	9	13	潮間帯付近内容の泥底

第28表　貝類出土　覧(3)

科名	種名 ＼ 発掘区及びグリット	第一次調 殿地区	SHO1	SGO1	SXO3	SLO1	SLO2	カンジャー	SFO1	コーグスク
アクキガイ科	ツノレイシ		2						4	1
	ガンゼキボラ								1	
	センジュガイモドキ								1	
	ツノテツレイシ								1	
エゾバイ科	シマベコウガイ							1	8	4
イトマキボラ科	イトマキボラ			1		1			4	
	ナガイトマキボラ									
	ツノマタガイモドキ			1				4	17	
	チトセボラ							1	1	
フデガイ科	ニシキノキバフデガイ								1	
	イモフデガイ									1
イモガイ科	サラサミナシガイ								1	
	マダライモガイ	1		2				7	22	9
	サヤガタイモガイ		1	24		5	1	11	28	9
	クロフモドキガイ							1	2	
	ヤナギシンボリイモガイ								1	7
	ハイイロミナシガイ			2			2	2		4
	マンボンクロザメ								1	1
	ニシキミナシガイ							1		
	ソウジュウイモガイ								1	1
	イモシマイボカイ								5	
タケノコガイ科	キバタケガイ								1	
コキノカサガイ科	リュウキュウノアシガイ							2		
カワニナ科	タケノコカワニナ								1	
トゲカワニナ科	タイワンカワニナ									
タニシ科	マルタニシ								4	
	イトマンマイマイ								1	
	シュリマイマイ								7	
ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	1	1	6				10	105	8
キセルガイ科	ツヤギセル								2	

査			第二次調査				第三次調査			計	棲息地
北側崖下	Jh地区	表採	広場地区	溜め井地区	石垣地区	松林地区	溜め井東地区	Jj IV 1 i 10	城門地区		
	4									11	潮間帯の岩礁
										1	岩礁
										1	〃
										1	浅い岩礁上
	1						5	2		21	潮間帯の岩礫地
					1					7	潮間帯の岩礁
	1									1	〃
	2									24	〃
							1			3	潮間帯付近の岩礁
			1							2	浅間の砂底
										1	潮間帯の岩や小石の間の砂底
										1	浅い岩礁
	5		1				2	1		50	潮間帯の岩礁
	14				1			1		95	〃
	1									4	〃
	3			1	1				1	14	〃
	1									11	〃
										2	〃
										1	潮間帯より水深、10mの浅海
										2	潮間帯より水深、20mの浅海
			1			1	5		1	13	潮間帯下
										1	
			1							3	
										1	淡水貝
	1						1			2	〃
	4									8	〃
										1	陸産マイマイ
										7	
	11		9	4			6			161	
			1	7			2			12	

第29表　獣類骨出土一覧

発掘区及び種名 / 骨格部位	第一次発掘																										
	殿地区			SHO1				SGO1				SXO3	SLO1			SLO2			カンジャー地区			SFO1			コーグスク地区			
	牛	猪	馬	牛	猪	馬	犬	牛	猪	馬	犬	犬	牛	猪	馬	牛	猪	馬	牛	猪	馬	牛	猪	馬	牛	猪	馬	犬
頚推				7	6	1	3													1		3			2			
胸推			1	6	13			1							1		1					21	8		1			
腰推	1				1		1		1							2						2	2		1			
不明推骨					9																	7			2			
肩甲骨				3	1	2		1	2							1	1					2	2		2	1		
上腕骨				4	6	2	1	2	1				1									5				1	1	1
前腕骨 橈骨		1		5	9	1		1	1							1					1	5	1	4				
前腕骨 尺骨				3	3		2	1	1						1		3					2						
寛骨臼				6	3			1	1										3		1	7						
大腿骨				4	4	2	4	1	1													2						
下腿骨 脛骨		2		2	4	2	2	1	2								1					3	3	2				
下腿骨 腓骨		2			2																							
中手(足)骨				4	23	1			8				1	1		2	6					3						
指(趾)骨	2	3		12	18	1		5	3	1						1			4	1		19	5					
上顎(部分)					1																							
下顎(部分)		1		2	5				3													1						
切歯					1																		1					
犬歯									1		1	1											3					
臼歯	1			4	2	2		7								4		3	2		1	7	8	1				
手(足)根骨								1														1						
踵骨					3							1		1			1					1	3					
距骨		1		1	1										1			1		1			1					
膝蓋骨				1	1	1														1			1					
計	4	9	1	64	116	15	13	22	25	1	1	2	2	2	3	11	13	4	9	4	3	91	38	7	8	2	1	1

第二次発掘																				第三次発掘									小計					計
北側崖下	Jh地区					表採		広場地区			溜め川地区		石垣地区				松林地区			溜め井東地区			JIVi10j1			城門地区								
牛	牛	猪	馬	犬	山羊	牛	猪	牛	猪	馬	牛	猪	牛	猪	馬	山羊	牛	猪	馬	牛	猪	馬	牛	猪	馬	牛	猪	馬	牛	猪	馬	山羊	犬	
	1		2	2				2									1			1	1					1			18	8	3		5	34
1	4	1	2	3				1													1			1	1			1	35	25	6		3	69
	2		1	3				1									1												10	4	1		4	19
				9								1																	9	10			9	28
	6				1				2		1	1	2				1				1					1			20	11	2	1		34
	4							1	3								5	1	1	2	6			1		3			27	19	4		2	52
	3	2	1			1	1						3	1	1		1		1		1								20	17	9			46
	2			1			1						1							1	1								10	9			4	23
	2			2					1				2				1			2	1								24	6	1		2	33
	5	1						1				1	1				3	1			3								17	11	4		4	36
	3	3						1	1									1		1	1				2				11	18	4		2	35
																					2			1		4		1	4	7	1			12
	7	7	1	7				7	3	2							1			2	7	1				2	2		29	57	5		7	98
	10	2		2				4	4		2	1	1				1	4		2	4		1	1					64	46	2		2	114
		1																												2				2
		1	1					1									7			2									13	10	1			24
	1	2				1		1		6			1																4	4	6			14
				1										1																5			3	8
	6							9	4	4	1					2	24		2				1	1		1		2	67	15	15	2		99
	4	3						1												2		2							9	3	2			14
	1	2	1						1									1											2	12	1		1	16
		3		1													2									1			4	7	2		1	14
																	1												2	3	1			6
1	61	28	9	31	1	2	2	30	19	12	4	4	11	2	1	2	49	8	4	15	29	3	2	5	3	13	2	4	399	309	70	3	49	830

第Ⅳ章　まとめ

この報告書は，文化庁補助による浦添城跡範囲確認調査の成果とまとめたものである。

調査期間は，一次調査が昭和57年6月から約3ヵ月間，二次調査が昭和58年6月から約3ヵ月間，三次調査が昭和59年6月から約2ヵ月間であった。

浦添城跡は，略東西に走る標高130m～140mの琉球石灰岩からなる丘陵の東側先端部に築かれたグスクである。グスクの規模は，城壁内に限っても東西380m，南北60～80mに及び，県下に広く分布するグスクの中では比較的大きく，首里城以前の王宮跡に比定されるなど著名なグスクとして知られている所である。

城の郭配置は諸郭とも明瞭に区分できるわけではないが，形状や高低関係及び平場の広さなどを考慮に入れて考えると総じて東西方向を軸とする連郭式の城として理解することができる。

グスクの立地する丘陵台地は西側で低く，且つ平坦で幅員が広い。東側の方は丘陵の頂部を形成して比高が高く眺望はよいが平坦地は少なく面積が狭い。地元では東側の高い所をコーグスク，西側の低い所をミーグスクと称し，コーグスクからミーグスクへの移動展開が伝承されている。

地形的にはグスクの北と東が急峻な崖を形成し，南と西は比較的緩い斜面となっている。そのためか石垣は南と西側で顕著であり，北と東では石垣が見られない。

城の歴史的展開については第II章第2節で述べたとおりで，創建年代，城の変遷，廃城にいたった由来等については文献も皆無で定かでない。

浦添城跡の調査については，これまで伊東忠太，鎌倉芳太郎の両氏による試掘調査，大川清氏による出土瓦の調査，旧琉球政府文化財保護委員会による城門跡確認調査等が知られている，ところがこれらの調査はいずれも短期に限られたため浦添城の姿を浮き彫りにするまでにはいたらなかった。計画的且つ長期的に取り組まれる調査は今度の調査がはじめてであり，その成果については研究者をはじめ各方面から期待されることになった。

3次にわたる調査によって遺構では，石塁，石列，石段，掘立柱建物，溜め井，城壁，平場造成の跡が検出され，遺物では輸入陶器磁器，土器，瓦器，瓦，金属製品，玉，古銭，食料の残滓等が多量に出土した。

これらの遺構・遺物の詳細についてはすでに述べたとおりであるが，ここではその所見と遺構の変遷時期について述べることにする。

遺構について

検出された遺構の大部分は石造構築物であった。グスク時代における石造技術の発達はめざましく，わが沖縄においては，すでに14世紀の前半から中葉にかけて切石積みによる城郭建築が出現する。本城跡から検出された遺構群によってもグスク時代における石造技術の粋をうかがうことができる。

検出された遺構群は次のように大別される。①城壁の一部をなす石積，②建造物に伴う石塁や石列，③平場造成，④石の階段，⑤方形石組みの溜め井

①の城壁の一部をなす石積は，主として南側城門地区と仮称した発掘区で検出された。この地区は，鎌倉芳太郎氏が作成した図面に「入口」と記されている付近であり，地元の古老たちの間でもそこは城門があった場所として伝承されているところである。調査の結果，琉球石灰岩切石積みの城壁が検出され，城門でないことが判明した。この城壁の石積みは布積み工法によって築かれており，城壁にふさわしいしっかりした石積みである。現高は高い所で2mを測り石の数は最高4段まで残っているところもあるが，ほとんどは上部が破壊され根石のみとなっている。石積みは城内の縁端部をほぼ地形に沿って南にまわり，神道と称される古道をこえてカカンガーの上部あたりまで伸びている。城門はこの城壁ライン上のどこかにあったものと思われるが確認することはできなかった。おそらく神道と称される古道敷設工事の際破壊された可能性が高い。

その他，この城壁よりおよそ20m程内側に入ったところでも切石積による石積が検出された。前者の石積を外郭とすれば，内側のこの石積はおそらく内郭に相当する城壁であったかも知れない。構造は，地形に沿うようにフラット面の縁端に積まれ，城内北側へ向かって矩尺状に曲がっている（第41図）。

②の建造物に伴う石塁や石列は発掘地区の随所で検出されている。展望台広場地区で検出された石塁や石列は，幅160～190cmもあり，大きな建物に伴う石塁の一部かそれともその附属施設の一部である可能性が高い。上部構造がことごとく破壊され現在根石部分しか残されてないのが残念である。

松林地区で検出された遺構の性格については，石塁，石敷，石列の三遺構がセットで検出されていることや，周辺から多量の瓦が出土する事実などから瓦葺建物に伴う附属施設の可能性が高い。ところでこれらの遺構群の北には10.5m×15mの大きさの岩山が存在する。この岩山には石列がとりついたり，あるいは隙間部に琉球石灰岩塊が飛石風に塡め込まれているなどなんとなく庭園のような趣が感じられる。グスクの中に庭園が存在するという報告はこれまでの例がないので断言するわけにはいかないが，この岩山が本地区に存在していた建物に伴う庭園であった可能性はかなり高いといえよう。

殿地区と仮称した発掘区では，二条の石列が検出された。この地区と展望台広場地区との境は自然地形を整形してできた石灰岩切石積の壇になっている。切石積の上部は破壊されていて実際の高さは知り得ないが，現状から推量する限り1m前後はあったものと思われる。おそらく建物の基壇として築かれたものであろう。切石積をもって画される壇の下方は，フラットな広場をつくっている。この広場は『琉球国由来記』に記されている「殿」であり，ウマチー（御祭り）などの村共同体の祭祀が行なわれる場所である。上記『由来記』には「5月・6月ウマチーの稲二祭の時は，浦添按司・惣地頭・前田地頭の三者と仲間村百姓・前田村百姓等がそれぞれ供物を献じた」と記されている。

広場の発掘調査では，第Ⅴ層赤褐色土壌中に掘り込まれた掘立柱建物が検出された。数度にわたる立直しがあったために建物のプランをおさえることはできなかったが，柱穴群の広がりからみると規模の小さい建物であった可能性が高い。

なお，当該広場は厚い客土によって造成されている。原地形は南に向かって傾斜を示し縁端部には野面積みの土留壁が築かれている。12枚の造成層によって築成されていて，その最下層では

浦添グスク最古の時期に属するとみられる柱穴群が検出された。出土する遺物は13世紀の末頃に相当する輸入陶磁器が主体を占める。

カンジャー地区の西約35mの発掘地区では幅1.20～1.40mを測る石塁遺構が検出されている（ＳＦ０１）。この地区の南側縁端部では厚い瓦の堆積層が認められる。石塁が検出された所には現在約20m²程の平場が存在しておりこの広場はさらに北に展開していたとみられる。ところが，不幸なことにそこは採石のために大きく削られ，原地形が損なわれている。そのため石塁の性格は知り得ないが，石灰岩塊やコーラル層による平場造成や瓦が多量に出土することからみると近くに瓦葺建物が建っていた可能性は極めて高い。

なお，コーグスク地区でも建物跡を想定し得る石列や石塁の一部が検出されたが，試掘調査の範囲にとどまったため全容を窺うには至らなかった。

③平場造成

平場造成の痕跡は各発掘地区で確認された。とくに顕著な地区は，展望台広場地区と殿地区であり，殿地区の場合では厚い所で２ｍにも及ぶ造成層が確認されている。造成には，琉球石灰岩塊とコーラル礫が主として用いられ，僅かにニービや赤土等もみられた。城門地区の造成層最下層から出土した埋葬人骨はその異常な葬法から造成事業と関連する「人柱」とみられるむきもあるが，類例がなく速断するわけにはいかない。興味をひく事例であり，今後注意していきたいと思っている。

④石　段

展望台広場地区の西側で石の階段が検出された。この石段は南側下方に開いたと見られる城門からの導線上にあり，上段の展望台広場で検判された建物群に至る石段の可能性が高い。推定四段の石階段である。

④溜め井

展望台広場地区で検出された石塁遺構の南に隣接して検出された遺構である。長軸４ｍ，短軸２ｍ，深さ40cmを測り，長軸の方位はN60°Wを示す。構造は長手に加工した琉球石灰岩を一段づつ組み長方形の平面形態をとる石組み溜め井である。継ぎ目は青い粘土によって目貼りされ，底面にも粘土層を敷いて不透水層をつくるなど漏水防止の工夫がなされている。

なお，この溜め井の周辺では面の揃った石列や上面が平らになった石敷等の遺構が密集して検出された。溜め井に附属する施設の一部であった可能性が高い。

遺物について

出土遺物には飲食器，食料残滓，武器と武具，遊具と装身具，鉄製実用品，古銭，建物に関連する遺物などいろいろな種類のものがあった。中でも飲食器のうち輸入陶磁の出土は特筆され，全出土遺物の約61.4％を占めていた。報告では青磁碗の口縁部と底部を各３類，皿を４類に分類して記述した。時代を知り得る特徴的な製品としては鎬蓮弁文碗，同安窯系櫛描文皿，篦彫り蓮弁文碗，端反碗，細刻蓮弁文碗等が含まれている。

なお，白磁については，碗４類，皿５類に分類して記述し，黒釉陶器については口縁部３類，

底部２類，褐釉陶器は５類にそれぞれ分類記述した。

瓦質土器はⅠ類とⅡ類に分類したが，とくにⅠ類は端反青磁碗と，Ⅱ類は明代の染付と共伴する傾向にあった。

須恵器と呼ばれる陶質土器は，最下層の包含層から主として出土し，中には玉縁の白磁碗を模したと思われる玉縁口縁の碗も含まれている。

土器は陶質土器同様，本グスク最下層から多く出土し，上層にいくにつれ減少する傾向にあった。

金属製品は鉄釘が圧倒的に多く全個数1,698点，鎧の小札も597点一括して出土した。カンジャー地区では757点の鉄滓が得られ，鍛冶炉の存在が期待されたが，攪乱がひどく炉址遺構を検出することはできなかった。

古瓦は高麗系瓦をⅠ類とし，近世の瓦をⅡ類として分類した。Ⅰ類はコーグスク地区とＳＬ０３石塁周辺で多量に出土した。このⅠ類古瓦には主として端反青磁碗と所謂ビロースクタイプと呼ばれる白磁碗が共伴していたのが注意をひいた。

Ⅱ類の瓦は松林地区と北側崖下試掘グリット及び展望台広場地区で多く出土し，いずれの地区でも明代の染付と共伴していた。

食料残滓である炭火米・麦は各発掘地区で顕著に出土するが，最下層の包含層を１㎜方眼のふるいにかけて検出したところ，土のう袋８袋分から径5.7cmのシャーレの底面を埋める程度の量を採取することができた。以上のことからすると米・麦作を伴う農業はグスク時代初期の段階でかなり普及していたことがわかる。

獣，魚骨の遺存骨には，ウシ・ウマ・イノシシ・ヤギ・イヌ・海ガメ・トリ・フエフキダイ科・ナンヨウブダイ・ミナミクロダイ・ベラ科・サメ類・イルカ類等が検出されている。層中からヤギの遺存骨が出土したことと，イノシシともブタとも判断できない上腕骨の一部が下層の包含層中から出土したことは，ブタの出現時期を考える上できわめて重要な発見となった。

各遺構の時期について

以上の成果を基に当城跡から出土する遺構群の時期について考察すると概して第一期から第五期に区分できる。以下各時期の状況について述べることにする。

第一期は，城内を覆う最下層に伴う遺構や遺物構である。その顕著なものは，ＳＨ０１試掘区においてコーラル下成層の下位層から検出される掘立柱建物に伴う柱穴群である。この第一期の範囲は，現在の展望台を中心とする広場の西側にあたる城門地区と呼ぶ調査区の最下層に限られるようである。出土遺物からこの時期は，ほぼ13世紀の末から14世紀初頭にあたり，グスクの初期の段階にあたる。

この時期の城普請をみると本格的な土木造成工事が行なわれていないようにみえる。構築物としては野面積みの低い石垣，掘立柱の建物群がつくられる時期である。

第二期は，グスクの縄張りがいわゆるコーグスク地区にも拡大され，城の規模が大きくなると同時に構築物の一部に瓦葺きの建物が登場する時期である。年代としてはおよそ14世紀から15世

紀初頭に相当する。瓦葺き建物を普請するために，城内に石灰岩塊やコーラルを大量に搬入して整地造成を行なっていることがわかる。この造成層は厚い所で約２m，薄いところでも50cm以上の層厚を有している。以上のことから推察すれば，第二期の浦添城は，土木工事による城普請が大がかりに行なわれたことになる。おそらく「癸酉年高麗瓦匠造」や「大天」の在銘瓦が城内建造物の屋根を飾ったのもこの時期であろう。

第三期は城の規模が急激に小さくなり，その中心が現展望台周辺の平場に集約される時期である。第二次調査によって検出された石塁遺構や溜め井等の構築物は，この時期に属する遺構群については城内堆積層のうちで比較的上層に集中するため後世の削平や攪乱を著しく受ける結果になっている。たとえば広場地区に露出した幅160～190cmの石塁等は，上部構造が著しく破壊され，根石の部分がかろうじて残っているという状態であった。

第三期の時代については16世紀から17世紀が想定される。

第四期は，第三期の時期にほぼ重なる時期であり，両時期は極めて時代差の少ないことがわかった。第四期としてとらえることの出来る明確な遺構はまだ確定されてないが，しいて挙げれば溜め井の周辺で検出された遺構群，および松林地区の下層で確認された遺構群等が該当する。

第五期は，松林地区の瓦溜りの中から一括して出土した瓦が使用された時期である。瓦が明式製法に係る赤色瓦が多いこと，また瓦表面に添喰が付着していることからすると，比較的新しい時期，18世紀頃に相当するかも知れない。前述した石塁や石敷，石列などが赤瓦葺の建物の一部だったとすれば，これらの遺構群の時期は第五期ということになる，とすれば古老の幾人かが伝承している番所の建物がこの松林地区にあった蓋然性はきわめて高いといわなければならない。

以上，第三次にわたる発掘調査によって浦添グスクの内容もしだいにわかってきた。しかし浦添城跡の数万平方メートルに及ぶ広大な面積からすれば，今回発掘された面積は浦添城跡全面積の僅か数パーセントにしかすぎないものであった。まだまだ解明されなければならない課題も多く残されており，継続的な発掘調査がまたれる。今後，浦添グスクが学問的に究明される中でその重要さが認識され，文化財としての適切な保存の活用が図られていくことを願うものである。

註

1，今姿を見せる古琉球の浦添城跡　浦添市教育委員会　1983年1月
2，浦添城跡第二次発掘調査概報　浦添市教育委員会　1984年3月
3，我謝遺跡　西原町教育委員会
4，沖縄考古展―掘り出された沖縄の歴史―(発掘調査10年の成果) 久米島下地原洞穴遺跡より　沖縄県教育委員会　1982年2月
5，佐敷グスク発掘調査報告書　佐敷村教育委員会　1980年3月
6，来沖の際，大橋康二氏より御教示を賜った。
7，註2に同じ
8，勝連城跡―昭和56年度本丸南側城壁修復に伴う遺構発掘調査報告　勝連町教育委員会　1983年3月
9，註2に同じ
10，稲福遺跡発掘調査報告―上御願地区―　沖縄県教育委員会　1983年3月
11，今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ　今帰仁村教育委員会　1983年3月
12，註5に同じ
13，国語大辞典　小学館　1981年
14，伊江島ナガラ原西貝塚発掘調査報告書　伊江村教育委員会　1979年3月
15，註11に同じ